

風呂桶に乗って

茅々斎かちかち 著

昔々の中国で女性がどのような生涯を送ったのか残された記録は多くない。

中国の歴史を知る一番の基本資料は王朝ごとにまとめられた「正史」といわれる史書で、宋の時代には極めて大部の『宋史』がある。そのなかで個人の伝記を集めた「列伝」の部は二百四十三巻を数える。しかし、女性となると、皇帝の妻の後妃に二巻、皇帝の娘の公主に一巻があてられているほかは、「列女」の一巻があるだけだ。列女とは烈女とも書き、固い節操を有し手本とするに足ると見なされた女性だ。『宋史』の「列女」の巻には三十九人の女性の事績が短く記述されている。一例を挙げる。

栄氏は榮蕤えいぎよくの妹である。幼いころから成人のようえいぎよくで、『論語』や『孝経』を学んでその本質を掴み、親孝行であった。役人である馬元穎ばげんえいの妻になった。

けんえん
建炎二年、町が賊に襲われ、栄氏は姑と二人の娘を連れて逃げた。姑は病弱で、栄氏は背負って走った。にわかには賊が来た。栄氏は姑を置き去りにせず、賊に追い付かれた。「言うことをきけ」。賊は栄氏に迫った。栄氏が拒むと、賊は娘を殺し、さらに厳しく脅した。栄氏は賊を激しく罵った。そのため栄氏は殺された。

中国は夫婦別姓であるから、栄の家の娘は馬元穎の妻になっても栄の姓のままだ。女性の名は記録されることが稀で、馬元穎の妻は栄氏とのみ記される。

けんいこく
建炎二（一一二八）年といえ、その前の年に宋の都の開封が、北方から攻めて来た金国軍の攻撃によって陥落していることから、ここにある「賊」は金国の兵であるのかも知れない。宋は金国によって領土の北半分を奪われ、それ以前を北宋、それ以降を南宋という。

榮氏は、当時の価値観に照らして列女として顕彰するに足るいくつかの要素を具えている。『論語』や『孝経』の経典を学んで身に付けたこと。父母に孝行であったこと。役人の妻になったこと。姑に孝を尽したこと。操を守ったこと。つまり、いわゆる女の徳の全てが榮氏にはあった。皇族の関係者でなければ、このような列女だけが史書に書き残すに値するということであったのだろう。

女性について知るのに「正史」があまり頼りにならなければ随筆の類がある。

例えば張舜民ちやうしゆんみんという人の随筆『画墁録』がまんろくに次のような記述がある。

唐とうの時代には、黄河こうががよく決壊し、その害が洛陽らくように及ぶこともたびたびであった。宋の時代になって最初の五年間は黄河は決壊せず、洛陽の水害も稀となった。洛陽の老人達によると、六十年に一度ずつ伊水いすい、洛水らくすいが氾濫らんをおこして害を及ぼすという。祥符年間しやうふに水害があり、それから約六十年後の熙寧年きねい

間に、福善坡ふくぜんはより北で水の害があつて、公私の建物が水没した。このとき富公ふこう晏夫人あんふじんは無事ではあつたが、あわただしく風呂桶に乗って水を渡ろうとして沈んでしまった。水が退いた後にたくさんの遺骸があつた。女性の遺骸からは簪かんざしや珥みみかざりが失われていた。それらが取れてしまうほどに苦しみもがいたのであろう。

富公晏夫人とあるのは、富公すなわち富弼ふひつの妻だ。それが晏殊あんしゆの娘であることから晏夫人という。富弼も晏殊も宰相の経験者で、富弼はこのころ政争によつて洛陽に退隠することを余儀なくされていた。

この随筆の主題は洛陽の水害だ。元の宰相の妻が風呂桶に乗って逃げようとしたというのは、当時の人々の関心をひく事柄であつたのだらう。富公晏夫人の平生について後世に伝えられたのはわずかにこの一事だけであつた。

二〇〇八年、洛陽郊外の住宅地開発に伴う発掘調査によって富弼とその家族の墓が発見された。富弼の墓は、底面が約十メートル、高さが約六メートル、墓に通じる道が三十度の傾きで二十メートル続くといいなかなかに立派なものだ。富公晏夫人の墓碑も見つかり、そこには「幼いころから賢く、七歳で女の仕事に巧みとなり、女性としてまことに優れ、十八歳で富弼の妻になった云々」と記され、知れるところは格段に多くなった。

とはいっても、墓誌は、文に巧みな者が遺族に頼まれて遺族の提供する資料に基づいて書くものであるから、基本的に、良き娘、良き妻、良き母であったと讃える以外になく、この墓碑が出土していなくても、かく記されていたであろうと想像できる範囲をさほど超えるものではない。富公晏夫人の肉声を聞き取るのは依然として難しい。よってこの小説は富公晏夫人を主人公とするのである。

第一章 どうとう、これは来てしまったの？

夢から起こされる。

てんせい

天聖八（二〇三〇）年七月の早朝。

夢は突如として終わり、私は現実という桎梏の内に閉じ込められた。それがむしろ望ましいと、私自身は早くから知っていた。

その日、実際に夢を見ていたのではなかった。ただ、まだ夢を見ていたい気分はあった。それはすでに許されないとわかっていた。

父に呼ばれる。

書院の隣の部屋に行くと、戸が開け放たれ、せかせかと動きまわる父のほっそりとした影が、小さな灯りの前で伸びたり縮んだりしている。

私が戸口に立ったそのとき、父は小卓から焼いた餅ひをつまみ上げて口に放り込んだ。小麦粉を練って平たく伸ばしたものを軽くあぶり、箸にくるりと巻き頭を捻ひねって箸から抜く。それだけのものを、身支度をしながら三つ四つ食べるのが父の朝食だ。

父は餅を噛みながら、

「おお、来たか。入るがいい。そこに掛けるがいい。話しておきたいことがある。

他でもないのだが、これは前から考えていたのだ。だから急というわけではない。

要するに、そなたの婿を決めた。昨日決めた。いや、ずっと前から考えていた。

向こうにはまだ何も言っていない。まさか断るようなことはあるまい。姓は富ふ、

名は彌ひだ。このたび制科せいの試験に合格し、お上に用いられることになった。昨日、

それが発表された。それで決めた。いや、富君のことは前から考えていて、検

討を重ね重ねて、その上で最終的に決めたのが昨日ということだ。富君が最もよい。間違いない。それでだ、これはたったいまなのだが、富君のところに、今日のうちに人をやろうと思ひ立った。誰かに先を越されてはまずい。だから、いまそなたを呼んで話すのだ。まあそういうことだ。わしも初めて娘を嫁に出すので、勝手というものがよくわからぬ。いずれ富君の職務が定まれば、たぶんどこか地方に出るだろうから、そのときにそなたも一緒に行くということになるだろう。

富君が都にいる間に、いろいろ終えておくべきものは終えてしまいたい。どの町に行くかはわからない。遙か遠くの片田舎かも知れない。そのときに、そなたも一人で富君に付いて行くのでは心細かろうから、もしも我が家から誰か一人を連れていたいと思うのなら、富君も恐らく否とは言わぬであろう。誰を選ぶかあらかじめ考えておくといひであらうな。まあ、そのようなことだ」。

早口で言いつつ、その間に、餅をもう一つほおばり、差し出された一椀の水を飲み干し、皇城に登るための官服をあらかた身に付け終わる。父が腰を屈めると、後ろからさつと上衣が掛けられる。父は一刻もじつとしていない。手伝う人々は馴れているとはいえ、なかなか大変だ。

かつては尋常でない痩せ方で、「削るが如き」と評された父だが、このごろは少しは肉が付いて来たようで、しつくりと上衣に身が包まれるようになった。上衣が肩に載ると、それが整えられるのを待つのもどかしく、床几に腰掛け、首を前に傾ける。頭に幞頭ぼくとうが載せられる。固定し終わらないうちに、指先でちよいと触れ、

「よろしい」。

と、立ち上がる。

父はちらりと私を見る。

そこをとらえて、「承知しました」とか「有難いお話で幸せに存じます」とか言うべきなのだろうと思う。

私は視線を下げる。

父が婿選びをしているらしいとは薄々勘付いていた。私も十八歳だ。そういうことがあつて当たり前前の年齢だ。遠からず話があるだろうと思つてもいた。だから、ついに来たというだけのことなのだが、それにしても、朝のいつもの慌ただしい仕度の最中にこのように言い渡されるとは想像もしていなかった。

父に言われたらその通りにする。父が選んだ婿のところへ嫁ぐ。娘としてはそれしかない。わかりきったことだ。それにしても、いくら何でもいまこのときにと思わずにはいられない。

父はあたふたといくつかの小物を身に付け、

「そうだ、もう一つ言っておこう。いろいろとわからぬことがあるだろう。呉婆こばあやに教わるといい。しかるべき日までに何をしておくのか、万事、呉婆やが教えてくれる。そうだそうだ、呉婆やだ。これからすぐに聞きに行ったらよい。それに、これから先だって、呉婆やがいてくれたらそなたもいっだって安心というものだ。よし、これでよろしい。わしは行くぞ。話は終わりだ」。

父は体をぼんぼんと叩いて自分のなりを点検し、部屋を出て行くこうとする。

先ほどは言いそびれたけれど、ここでこそ言わなければならぬのだろうと思う。「承知しました」とか「有難いお話で幸せに存じます」とかの言葉が浮かんで来る。しかし、私は床に目を落としたまま口を開かない。

あえてかたくなになっているのではない。父の娘として生まれ育ち、いずれこ

のようなことになるかと思っていた。むしろ、この日の来るのを待ち望んでいたはずだ。父が選ぶ人に間違いのあろうはずがなく、娘として幸せであり、父への孝行でもある。

声が出ない。父に向かって言うのは「承知」を意味する言葉の他にはない。だつたら黙っていても変わらない。

父の踵に視線を向け、

——何も気付いていないの。

ここに居る娘は一言も発していないのに。

父が決めたことに不服などない。父は立派な人だ。父は家においても、国家においても、よいことばかりをする。その父が決めてくれたのだから、感謝しなければいけない。

——私はどうしてしまったの。

娘としてどのようにしたらいいのか重々承知しているはずだった。それなのに、何も言わせなかったものがある。それを消し去らなければと思いつつ、すぐにはそうしたくない気分がある。

いつもの場所で母を先頭に一同が整列する中に加わる。夜がほんのり明け始めている。

門に篝かがりを焚いて父を送り出す。我が父、晏殊あんしゅは宋朝そうちやうの大官だ。地位にふさわしい隊列を組んで皇城に登る。父は抑制の効いた華やかさを好む。「わしの登城姿を見たくて待っておる者も随分といる」と自慢する。娘が見ても父の姿格好はなかなか素敵である。

父は田舎町の獄吏の子として生まれ、若くして一躍高い地位に就き、富貴になった。都に立派な屋敷を構えている。ただし、日頃は質素儉約を旨としている。とりわけ食べる物は一般庶民より貧弱なくらいだろう。それでも、飾るべきところは飾り、奢るべきところは奢って、賓客を迎えるためとあれば財を惜しまない。父は馬に跨り、その細身の体を真直ぐに伸ばし、いかにも気高く、かつ澁刺とした態を、出発の最初から演出する。供人も父に合わせて颯颯と歩み出る。

この父に、何も返答しなかったのを重く思わずにはいられない。父は私に目を与えることなく門を後にする。見送りの者を見ないのはいつものことだ。すでに心は朝廷におけるこれからの一日にあるのだろう。

隊列が遠く去ると、篝の火が消され、一同は彼方に去った父に向かって深々と頭を下げる。門が閉ざされ、見送りの列が崩れる。

「お待ちなさい」。

母に呼び止められる。

私は妹達に続いて足早に立ち去ろうと、すでに一人を追い抜いていた。あえて母から逃げようと意識していたのではないのだけれど、実際にはそうしていたのだろう。

声をかけられては止まるしかない。妹達も立ち止まる。初めから動かずにいた弟達の前を通って母のもとへと歩み寄る。

頭を垂れて母の傍らに立つ。

「お父様にお呼ばれになったようですね、何かおっしゃっておられましたか」。

母の足元をじっと見る。答える気になれない。

「大切なお話がありましたか」。

母の声が厳しくなる。

無言を押し通すほどの強い気持ちがあるわけではない。

「はい、ごさいました」。

短く答える。

「お聞きになったのですね。よろしゅうございました。お父様はとてもよいお方をお探しになりました。あなたは、お父様の娘として世間に対して恥ずかしくない立派な嫁になるのです。よろしいですか」。

うつむいたまま口を開く気になれない。

「いまお聞きになったばかりで、まだよくおわかりではないのでしょうか。これはまたとないよいお話です。気にかかることがあったら、呉婆やによく教わりなさい。あの人は何でもよく承知していますから。よろしいですか」。

「お父様もそのようにおっしゃいました」。

微妙に言葉を選ぶ。

「たぶんいまはまだ驚きの方が大きいのでありましょう。あなたにとって、これはまことに喜ばしいことなのです。今日からは、もうあちらさまの家の女だというくらいの覚悟を持つようになさい。すぐには難しいでしょうけれども、心をはつきりと定めるのです。よろしいですか」。

ここで「はい」と返事をすればぎりぎりのところで母を満足させられるだろうと思う。しかし、声が出て来ない。

母は少し間を置き、

「顔をお上げなさい」。

強く叱責するような声に従うしかない。ただ母の顔は見まいとする。

「よろしいですか、これはまことに喜ばしいことなのです。そして、あなたは、御立派だったあなたのお母様のようにおなりになるのです。お父様もそれをお望みです」。

心がずしんと重くなる。身を翻して逃げてしまいたくなる。

——私はどうなってしまったのだろう。

ここで逃げられるはずがない。弟や妹が見ている。長女として手本となるべくそれ相応に務めて来た。ここでこそ長女らしい振る舞いをしなければいけない。

母は少しばかり声を和らげ、

「按ずることはないのです。あなたなら何も難しくはないはずです。お父様とあのお方のお子様なのですから」。

私は泣き出しそうになる。それを隠そうと、わずかに声を出し、

「はい」。

ようやく小さく返事をする。

この母は父の二番目の妻、私にとつては継母である。孟虚舟もうきよしゆうの娘だ。私の生母は李虚己りきよけの娘で、その我が母は兄の居厚きこうと私を生んでくれた。兄は四年前に死んだ。

これまでいつも継母に素直に従つて来た。それなのに、いまは明らかに怪しい雰囲気だ。

それに気付いてのことであろう、母の脇に立つ弟の承裕しょうゆうが、

「姉上、御心配には及びません。とてもよいお方だと伺っています。そのようなお方がお義兄様にいさまになつて下さったら、僕等としても大変心強いです」。

私は急にむっとなる。

——心強い、何が。

いきなり承裕の顔をひっぱたきたくなる。ついぞ抱いたことのない感情に驚く。三歳下の承裕を日ころは可愛く思っていた。何かにつけて、死んだ兄と比べられる承裕を気の毒にも思っていた。兄は父の期待を一身に負って、それに十分に応えられるはずだった。弟は兄に及ばない。

——私はどうなってしまったの。

自分で自分の顔色が変わったことに気付く。

——弟は知っていた。自分はいま初めて聞かされたばかりなのに。

母は言う。

「いろいろ気がかりもあるでしょうけれど、ともかくも呉婆やによく教わることです。よろしいですか」。

無理やり笑みをつくり、

「ありがとございます。さっそく参ろうと思います」。

馬鹿丁寧に会釈をして、皆の前から離れる。

やはり呉婆やか。誰か一人を選べと言いながら、父はすぐに呉婆やだと自分で決めた。確かに呉婆やだと思う。父が決めるのは正しい。

呉婆やのところに、いま行きたいとは思わない。しかし、この場から逃れるにはこのように言うのが一番簡単だ。

そそくさと歩む。いかにもぎこちないと自分でもわかる。

読経の声が聞こえる。

ここには成り行きで来ただけだ。足が止まる。

呉婆やは観音経を唱誦している。尼僧としての大事なお勤めの邪魔をしてはいけないと、自分に言い訳をして、庵の横を素通りして庭の方に行く。

この妙な心持ちのままに呉婆やに会うのはよろしくないに違いない。

呉婆やがずっと乳母のままだったならば、この訳のわからない気持ちをそっくりぶつけてしまうということももしかしてできるのかも知れない。だけど、そうではない。

母は私が生まれて半年もしないうちに亡くなり、呉婆やが乳母として雇われた。そのころのことは憶えていない。一年ほどでしていまの母が来て、さらに一年余りで呉婆やは家を去った。呉婆やは、その後、尼僧としての修行を積み、私が六歳のころに、蓮妙尼れんみょうにとお呼びする先生として戻って来た。蓮妙先生は、諸事万端、ありとあらゆることをまことに厳しく教える師匠になった。先生のお蔭で、一年

もしないうちに女性としての仕事に巧みになったとか、十歳で兄より上手に『孝経』を読めるようになったとか、親類間でかなり大袈裟に喧伝され、父を大いに喜ばせた。

父に何の返答もしなかったなどと、厳しい先生に言えるはずがない。

このおかしな気分も、しばらくあたりを歩けば、たぶん落ち着いて来るであろう。だって、こうなるはずがなかったのだから。

細い道をたどって池に出る。

二年ほど前に、父はこの土地を得て、西園と称する庭を築き始めた。賓客を迎えるために様々な意匠を凝らし、いまもって造りかけだ。池も、あちらを掘ってみたりこちらを埋めてみたりと、形すらまだ定まっていけない。思い付くとすぐ実行し、次に別のことを思い付くと、正反対のことだっけしてしまう。

あたりはすっかり明るくなった。よく晴れ上がった空を映して池の水が青い。水辺に立つと、さすがに秋だと感じられる。

——この池はどのように完成するのだろうか。

汀の草はまだ定着していないし、ぐるりを囲む木々も互いに馴染んでいない。庭がこれからどのように趣を深めて行くのか見続けたい気持ちがある。父が好ましいとするものを、やはり好ましいとする感覚が少なからず私にもある。朝夕にここを歩き、西園に愛着を持ち始めている。

嫁に行くということは、間もなくここから出て行くということ、それを父に宣告された。西園から離れるのがどうしても嫌だというほどの強い感情はない。先ほどのおかしな気分のもとがそこにあるのではない。

もしもこれが昨日のことだったら、何でもなかったような気がする。すんなり

「承知しました」と言えて、いつも通りの時刻に庵を訪れて、蓮妙先生にいろいろと教わり、しかるべき日に向けての準備を始めていたであろう。いつかそのようになると思っていたのだし、父に逆らう気など、いまだって少しもない。今朝ばかりは、何かしら寝起きが悪くて五臓の納まりが妙な具合にでもなっているのだろう。

——とにかく、今朝だけが妙なのだ。

池がいつもの朝と少しばかり違って、どことなく味気なく見える。

——まだ夢を見ていたかった。

ふと、そう思う。

——夢って、何のこと。

ゆつくりと池をひと巡りする。日が昇って一段と明るくなる。

まだ気分が治ったとは感じられない。

もう一度回ってみる。前よりもさらに歩みを遅くし、うつむいて一步一步自分の足元を見て歩く。

ごそりと音がし、顔を上げると、向こう岸で木が揺れている。

はつと息を呑む。

向こう岸に、私が立っている。

——ああ、そうだった。私は、馬鹿みたいにあんなことを夢見ていた。

向こう岸の私は、かつて誰も成し遂げたことのない快拳に胸を張っている。あの夢のあの私が、あるうことかあちらの木立から現れ出たのだ。

——どうして。私はここにいるのに。

「お兄様は、お笑いになりましたけれど、私は御覧の通りこうして女子状元じょうげんにな

りましたのよ」。

向こう岸の私は亡き兄に誇らしげに言う。兄は、早くも九品官きゅうひんかんの官服を身に付けた私をしげしげと見つめ、

「まさかと思っていたけれど、おまえはやってくれたのか。もう安心だ。こうなれば、僕はいなくても構わないわけだ」。

兄は微笑み、そして悲しげに嘆息する。

「待って」。

私は叫ぶのだけれども、兄はふっとかき消え、向こう岸の私もいなくなる。

——兄さん、御免なさい。

私はこちらの岸边で小さくつぶやく。

兄は苦しんでいた。

「おまえはいいよなあ、女だから、お父様がお選び下さる人のところに嫁に行けばいいだけだろう。皆が言う通り、おまえの方が僕より何でもできるのだから、おまえが兄で、僕が妹だったらどれほどよかったですか？」

亡くなる少し前にそのようなことを言った。

「だったら、代わりに私が科挙かきよを受けてさしあげましょうか。女だって試験を受けて悪いってことはないでしょう」。

兄は甲高い声で笑った。

「女が科挙を受けるのか。悪いかどうか知らないけれど、聞いたことがない」。

「学問に優れる者が科挙で選ばれるでしょう。一生懸命勉強すれば私だって合格できると思うのです。女が受けてはいけないという決まりがあるのですか。もしあるのだったら、男に化けて受けたらいいではないですか。私が受けたら、も

しかして、状元を勝ち取ったりなんかして」。

今度は私が高笑いをすると、兄は悲しげな眼を向け、

「うるさい」。

と、怒鳴り、すぐに、

「ごめん、僕のことを心配してくれているのだよね。それなのに」。

と、しおしおとうなだれた。

兄は、官員登用試験の科挙に必ず合格しなければと懸命に勉強していた。兄は賢かったけれども、生来の病弱で、根を詰めて勉強をするとよく体を壊した。

父はわずか十四歳のときに皇帝に才能を認められ、特別に官員として採用された。兄はその年齢にすでになっても、父のように人を驚かすに足る才能のきらめきがないのを自覚して苦しんでいた。兄が父の才能の多くを受け継いでいたのは

間違いなかった。父があまりにも飛び抜けていたのだ。

私は小さいころから兄と比べられて、兄より優れるとか言われていた。本当にそうだったのかはわからない。女だから甘やかして褒めてくれただけなのだろう。私はいささか調子に乗って、兄に代わって科挙を受けて、しかも首席合格の状元を勝ち取ったりしたら、兄も楽になるのではと単純に思ってしまった。世間も兄の気持ちも知らぬ少女の思い上がりだった。

兄の苦しい形相に、私はあわてて言った。

「いまは皇太后様が立派に世を治めておられますよ。だったら、女である私が科挙を受け、宰相になってお手伝いしたら、皇太后様もお喜びになるのではと思っただけです」。

私は無邪気そうにそう言った。

兄は腹を抱えて笑った。

「宰相とはよく言ったものだ。科挙を受けた女はいないって言っただろう。それでも、もしも科挙を受けて、万一合格したとしても、宰相になるのは大変なことなんだ。男だって何百人か何千人に一人だ。お父様だってまだ宰相は遠いのだから」。

そのように兄に言われても、そのときの私は自分の思い付きについて心を弾ませ、皇太后の前に立って国の将来について堂々と意見を述べる女宰相である自分の姿を想像し、

「誰もいないのだったら、私が最初になってみせます。だって、唐の世には女で皇帝になった人がいたのでしよう。だったら、宋の世に女で宰相になった人がいていいではありませんか」。

「好きに駄法螺を吹けばいいさ」。

私は浮かれた気分のまま、

「女で科挙を受けた人は本当にまだいないのですか。そんなはずはないような気がします。男も女も同じ人間なのですから」。

兄は少し考え、

「そういえば、こんな話なら聞いたことがある」。

と、こうすうか黄崇嘏のことを教えてくれた。

唐と宋の間の時代に、おうけん王建が興した蜀しよくという小さな国があった。その宰相に周庠しゅうしやうがいた。周庠があるとき地方の巡視に出ると、公正な裁きを願って獄中より詩を差し出した者があった。優れた詩であったので、周庠はその者を獄より呼び出した。黄崇嘏と名乗る三十ばかりの男は立派な受け答えをし、かつて科挙の

地方試験に合格したと言った。周庠が事件を調べ直すと無実であることが判明した。黄崇嘏は釈放され、周庠のもとで働くことになった。官員として有能であるばかりでなく、琴棋書画の全てに優れ、姿も優美であることから、周庠は黄崇嘏に惚れ込み、娘の婿にしようとした。黄崇嘏は辞退した。周庠はどうあっても婿にすると強く迫った。黄崇嘏は詩を差し出し、実は自分は女であると明かした。唐末期の戦乱で幼いころに家族を全て失い、身を立て家を興すために男になりすましていたという。周庠は驚いたものの、いたく感心して黄崇嘏を褒めた。しかし、女であることを明かした黄崇嘏は官を辞して姿を消してしまった。

兄は言った。

「地方試験だけど、科挙を受けたらしいといわれているのはこの黄崇嘏がいるだけだ。これだって本当にあった話かどうか分からない。たぶん作り話なのだろう。」

「いいえ、きっと本当だと思います。女だって優れた人がいるはずですよ」。

「おまえもそうだと言いたいのだろう。だったら聞くけれど、女がもし宰相になったら、男と違って何か特別なことができると言っても言うのかい」。

そのように問われて、咄嗟には答えられなかった。冷水を浴びせられたような気がし、女だてらに少しくらい本が読めたりするくらいでちやほやされていていい気になっている自分が恥ずかしくなった。

兄に謝ってその日は終わったのだけれど、そのときから、私の頭の中に黄崇嘏が棲みついて離れなくなり、ときどきは女子状元となった私を想像しては、一人でにんまりしたりしていた。女の宰相は何をするのか、あれこれ数え上げたりもした。それがなぜか蓮妙先生に知れて、ひどく叱られた。

「あなたさまが幸いにもいま学問を習っていられますのは、お父様の御心による

のです。女が学問をするなど、昔々の大貴族でもなければまずなかつたことです。女も学問をとというのはお父様方の新しいお考えです。これからの世の中で、立派に内を治めるには学問が必要だからです。男のように科擧を受けるとか、そんなことのためではないのです」。

そして、女の徳を懇々と説いて聞かされた。それ以前からも、その後も、繰り返し繰り返し教えられた女の徳だ。

実にあさはかな空想だったのだけれども、いま思うと、もともと私が男に生まれていたら、兄もあれほど早くに死なずにすんだのかも知れない。弟の承裕だって、「心強い」とか要らぬ言葉を吐かずいるだろう。だって、この私がいるのだから。そして、父からあのように言い渡されることもなかった。

しかし、私は女。だから、女の徳を教え込まれた。

池を半周し、女子状元になった私がいるはずはないのだけれど、一応のところ木立の間を覗いて確認する。

夢は夢、幻は幻。それが消えてしまったことに私は悲しくなり、さらに二度、三度と池を巡る。

日がじわじわと昇って、夏の暑さが戻る。

いつまでもここでこうしてばかりもいられまいと、庵の様子を見に行く。

読経の声はもう聞こえない。柴の戸の脇に寄る。

このままではまだ会えそうにないとためらいが生じる。妙な気分は、悲しさで覆い隠されただけで、まだくつきりと残っている。

——先生ともおかしなことになってしまふ。

引き返そうとすると、

「おや、今朝は随分と早いお越しではございませんか。」

中から先生の声。

それで歩み去るわけにいかなくなる。かといって進むことにもできずにいると、先生が出て来る。

その姿に、これがもしも乳母の呉婆やだったなら、その胸に飛び込んで、今朝のこの感情をそっくりぶちまけてしまうことだってできるのかも知れないと、また思う。

師匠である蓮妙先生には、弟子としての作法できちんと挨拶しなければいけない。

「どうされましたか、その御様子は」。

いつもと変わらずに振る舞ったつもりだったが、先生には見抜かれてしまったのか。身を縮める。

何かに紛らわす知恵もなく、

「父上からお話がありまして、先生によく教わるようにとのことでしたので、失礼ながらまだ早いとは思いましたが、こうして伺わせていただきました」。

頭を下げたまま、たどたどしく言う。

「とてもよいお話でございましたでしょう」。

むっと嫌な気分になる。

——私はどうしてしまったのか。

蓮妙先生も知っていたのだ。それは意外でも何でもない。だから、父も母も先生に聞くように言ったのだ。しかし、私だけが知らずにいて、あのようにして言

い渡された。

ここで上目づかいにちらりと先生の顔をのぞく。先生と目が合いそうになつて、すぐに視線を落とす。

——嫌だ。

ここからいなくなりたいくなる。

——今朝はもう気持ちが無茶苦茶だ。

私はただ、

「はい」。

と、のみ答える。妙に上ずった声だ。

いま見た先生はいつも以上に険しい顔。それが、私の目の動きに応じてであるう、瞬時に笑みを作った。それで私の気分はさらに損なわれた。先生の微笑みが

冷たく感じられてしまうのはいつものことであるのだが、とりわけいまはよそよそしい。

胸がざわつく。

——やはり、ここに来るにはまだ早かった。

「おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。本当によろしゅうございました」。

先生は調子をがらりと変える。優しげに作られた声に私は悲しくなる。

——先生に余計な気遣いをさせてしまっている。

「ただ、突然のお話で、何もわからなくて」。

そう言うと、また別の感情が湧いてくる。

——突然だったのは、結局、私だけだ。

「大層御立派なお方にございます」。

「はい」。

聞こえないくらいに小さく言う。

どうすることもできない嫌な気分だ。先生に悪態を付きたくなる。

——大層御立派とかおっしゃいましたけれど、それを御自分の目で確かめたのですか。

——ああ、もういけない。

先生の手が伸びて来て、

「さあ、中へお入りなさい」。

それを避けるようにして半歩下がる。

先生の手は小さく半円を描き、その動きのまま先生は向きを変えて庵へと戻っ

て行く。

——このまま逃げてしまおうか。だって、中で先生と向き合おうのはきつとよくな
いから。

その一方でもっともつとひどい悪態を付きたくなっている。

——その人だって大層御立派とか言われていたのではないのですか。

うっかり口から出かかり、私は愕然としてうなだれる。

白く塗って隠そうとはしているけれど、蓮妙先生の頬と顎のあたりには大きな
傷痕がある。そのため自然な微笑みができない。傷は地方官であったという夫に
負わされたものだ。体の他の箇所にも醜い痕がある。先生は乳呑児を夫のもとに
残して逃げた。父や兄は家の恥だとして受け入れようとしなかった。紆余曲折あ
って先生は我が家に乳母として来た。

しおしおと先生の後ろに従う。

——今朝はどうしてこうなのか。

これが昨日だったら、いままで通り先生を尊敬する気持ちのままにいろいろ教
わることができたに違いない。

庵の内で向かい合う。

自分のどのような気持ちがどのようにしてここで噴出してしまいか全くわから
ず、懸命に抑揚なしに言う。

「制科とやらに合格されたばかりのお方と伺いました」。

とりあえず、最も無難そうなことを言い、上目遣いにまた見る。先生は私にじ
つと目を注いでいる、私はすぐに目を伏せる。

「ええ、制科でございます。そこがあのお方の第一に御立派なところです。この

たびお上が制科の試験を実施するようお仰せになったのは、あのお方のためだと伺っております」。

「そうなのですか。制科とはそのようなものなのですか」。

制科について聞きたいわけではない。先生ととにかく無難に話をしようとするだけだ。

「科挙の通常の試験では測れない特別な才能を持った人を採用するために、お上が臨時に実施されるのが制科です。あのお方が先の進士科の礼部れいぶでの試験に落ちてしまわれて、すぐに制科をせよとお命じになったそうです。制科の試験の方がずっと難しいとわれているのに、なぜあのお方が礼部での試験に落ちたのかといえますと、詩賦がたいそう苦手だからなのです」。

「まあ、詩賦がですか」。

ここで初めて富弼とかいう人にほんの少しだけ関心が湧く。

詩賦が苦手というのは、科挙を受けようとする者にはまずありえない。武将になるのに剣が握れないようなものだ。

皇帝に奉仕する人間の能力を測るのに詩賦を重視するのは古くからの伝統で、科挙でもとりわけ優秀な受験生が挑む進士科の試験では詩賦が大きな比率を占めている。朝廷の高官に昇るのはほとんどが進士科出身だ。

「詩賦が苦手とは恥ずべき弱点でございますから普通は隠しますでしょう。あのお方は平然と『科挙に落ちるとすれば他ならぬ詩賦のせいである』とか『詩賦などできなくても、天下のために立派に仕事ができることを示したい』とかおっしゃっておられるそうです」。

「大層珍しいお方ですこと」。

「お上は、かねてから『人にはいろいろな才能があるのだから試験もいろいろあつていい』とおっしゃっておられ、富弼様のことをお聞き及びになったのでありましよう、詩賦の出題のない制科の試験をするようお命じになったのでございませう」。

「まあ、そうなのですか」。

父の晏殊とは随分と違う。

父こそは詩賦の名手だ。十四歳のときに、皇帝の前でみごとな詩賦を作ったことで、いきなり官員として採用された。立派に詩賦を作れることがすなわち官員として立派に務めが果たせることに等しいと、父はその後の履歴で証明し、今年には科挙の総責任者も務めた。

科挙の総責任者というのははなはだ名誉な役回りだ。その年の合格者からは終

生師として仰がれる。試験は極めて厳正に行われ、総責任者といえども、情実をもつて合否を左右することはできない。問題や採点基準に自分の嗜好を反映させることは可能で、合格者の全般的な傾向を自分の考えで変えることがある程度まで是可以する。今年の進士科の礼部試験で首席で合格したのは欧陽脩で、まさしく父好みの人物だ。科挙は、地方で行われる一次試験、都の礼部において実際される二次試験、そして皇帝が行う三次試験に分かれている。三次試験の殿試でんしは最終順位を皇帝が決めるためのもので、基本的に落第はない。

欧陽脩は四歳で父親を喪い、母親によって女手一つで育てられた。貧乏のために母は草の茎で地面に画いて字を教えたという。十歳のころから早くも詩賦をよくするとして名が知られ、このたびの科挙では成績優秀で合格すると期待され、もののみごことに果たした。欧陽脩の母のようになるために、女も学問を習うべき

だというのがいまの新しい潮流で、それでも私も蓮妙先生に付いて学んで来たのだ。「これでもしお上の有難い思し召しがなかったならば、あのお方は、詩賦のために、何度も何度も落第を繰り返さなければならなかったことでしょう」。

「そのようなお方を、どうして、父上はよいと思われたのでしょうか」。

父に似たところのある欧陽脩のような人ならよくわかる。

「それは、かねてからはんちゆうえん范仲淹様のお勧めがあつたからです」。

「まあ、あの一徹居士の」。

言いかけて口を塞ぐ。「一徹居士」とは私が付けた仇名で、弟妹の間でこっそり言い合っているものだ。

先生は私を軽く睨む。

——どういふことか。

一徹居士の范仲淹がなぜ私の縁談に関わりがあるのか。私の知らないところであれこれされていて、とても気持ちが悪い。

范仲淹といえど天下第一の頑固者だ。一度口から出したら絶対に引つ込めない。それが災いして出世が遅れ、地方の職を転々とするうちに母親が亡くなり、喪に服すために一時的に官職から離れておうてんか応天府に逼塞して貧乏暮らしをしていた。たまたまそこに我が父の晏殊が知事として赴任し、当地にある学校の教師として范仲淹を招いた。三年前のことだ。

その学校は応天府に古くからある有名なところで、私達にもそれを見せてもらうというのであったのだろう、弟とともに一度だけ父に連れられた。そのときに間近に范仲淹を見て、恐ろしいばかりの眼差しに、なるほどこれが噂に聞く頑固者かと納得した。その風貌に怖気づき、父に押し出されて范仲淹の前に進んだも

のどののような挨拶をしたのか覚えていない。このような怖い先生に教わる学生が気の毒だと思ったものだが、学生の評判は目を追ってよくなる一方だと聞いて不思議な感じがした。蓮妙先生は傷痕のために怖く見えるとはいっても、范仲淹の比ではない。

「范仲淹様がお認めになるくらいですから、あのお方も実はなかなかのお方なのでございましょう、きつと」。

先生は何やら脅すような口調で言う。

「それはつまり怖いお方ということでしょうか」。

富弼という人への興味が消える。「二徹居士」と同じではかなわない。

「こうと決めたら何があっても変えないようなお強いお方だからこそ、詩賦が苦手と自分の弱点を堂々と公言できるのであります。ですから、ここでお父様

からのお話がありましたも、もしもあちらにお気に召さないようなところがありましたならば、断固としてお断りになられるかも知れません。そうなたら、どうなさいますか」。

くくつと、蓮妙先生としては珍しく声に出して笑う。

——断ってくれたらそれで話は終わりだ。

ほつとする一方で、何となく詰まらないような気もする。

今朝は気分が妙に上下する。

私もいずれはどこかに嫁ぐ。それはわかりきったことだ。必ずそうなるのなら、どのような人がよいだろうか。いろいろ想像はできるにしても、現実的に考えて、第一に、先生のように傷を負わされてはかなわない。それは当然だ。第二に、凡庸な人というのも味気ないだろう。可もなく不可もないという人のもとで、嫁し

てはかくあるべしと教えられた通りのことをして終える一生というのはどのようなものだろうか。

——女子状元だったら全く別の人生があるのに。

私はまた馬鹿馬鹿しいことを思う。

「別にどうもしません」。

ちよつとつんとしてみせる。

「またとない特別なお方でございます。よろしいのですか」。

またしてもむっとなる。

——もうこの気分はどうすることもできない。

先生は私を納得させようとしている。私だって初めからわかっている、いま許されるのは父の言う通りにすることだけだ。もともと逆らう気などは持っていない

い。それを持つことは許されていない。それが嫌だったわけではない。すんなり納得するのが私にとっては最もいい。

——どうにでしてくれたりいいのだ。

私は開き直って、

「特別なお方かどうか、私は何も知りません。さつき聞かされたばかりです。制科を合格されたということだけです。先様が断って下さって、それで話が消えるのなら、私としては、制科を合格された人だったというたった一つのことのみ忘れればいいのです。特別だとか、そんなのはどうだっていいのです。父上は何もおっしゃらないのですから」。

先生は身を乗り出し、

「すねておられるのですか」。

「そんなことはありません」。

ちよつとむきになって言う。

「すねるなんて、そんな子供みたいなことはしない。駄々っ子などではない。私はものの筋道がわかる娘だ。女子状元にだってなるのだから」。

「では、一つではないいくつかのことを教えてさしあげましょうか。洛陽らくようの御出身でございます。お父上を富言様ふげんとおっしゃって、いまは耀州ようしゅうでお上の御用をなさっています。お年を申せば二十七歳。お父様よりは十三歳下でございます」。

「別に詳しく聞きたくなどありません。私が聞こうが聞くまいが、決まるものは決まるし、断られるのなら断られるだけですから」。

先生はお構いなしに、

「制科に合格されるまでかなりの御苦勞をなさったそうです。お父様の富言様も

かつては科挙を目指しておられ、しかし、地方の試験にも合格できませんで、日々の糧にもこと欠く暮らしを続けておられたそうです。あるとき、りよもうせい呂蒙正様のお屋敷に食客としてお世話になっていて、呂蒙正様におっしゃったそうです。『倅はこれで十歳になりましたが、まともに食わしてやることができません。どうか、お屋敷で使っていたくわけにはいかないでしょうか。何でもやらせて下さい。寝て食うことさえお許しただければ、倅も幸せでありますよう。』呂蒙正様は気の毒がられ、十歳で何の仕事ができようかと思いつながらもお屋敷に置くようにいたしました。お父様は富弼様を残して、幼い弟や妹を連れてまた浪々の旅に出て行かれました。それから間もないある日のこと、呂蒙正様は庭でちよこまか雑用をしている痩せ細った子供を見て不審に思い、『あのような小児に何をさせているのか』とお尋ねになりました。それが富弼様だと知って呂蒙正様は大層驚かれました。

実はそのときあのお方はまだ七歳で、いくら何でも七歳ではと、並みの子よりは丈が高いのをいいことにお父様は年齢を偽ったのでした。呂蒙正様がその子を呼び寄せて問いますと、持って生まれた聡明さは隠しようもなく、二三話しただけで、『そなたは詰まらぬ仕事はしないがいい。うちの倅どもと一緒に勉強なさい』と言い渡したのだそうです。あのお方は大変な幸せを得たのでございます。ただ残念ながらそれは長くは続きませんでした。呂蒙正様はすぐに亡くなられ、それから、一人であちらこちらを転々としながらひたすら学問に励まれたのだそうです。

「父上とは随分と違う少年時代ですこと」。

富弼への関心が少し戻る。

「それはそうですとも。お父様のようなお方は天下にお一人でございますから」。

「そのお方と范仲淹様とは古くからのお知り合いなのではないですか。」

「怖い一徹居士が気になる。」

「范仲淹様が応天府の学校の先生になられるよりも数年前のこと、泰州たいにいらした時分にあのお方が訪ねて行かれたのが初めての出会いと伺っています。」

「泰州といいますが、塩で知られるあの海沿いの町ですか。」

「ええ、余程、范仲淹様にお会いしたかったです。洛陽からはるばる出かけて行かれたのです。范仲淹様は応天府の学校でもそうでしたけれども、お若い方の天分を見抜くのがお上手でございましょう、ひと目で並みの青年とは違つと御覧になって、『そなたは必ず大成する』と励まされた上で、お父様や都の方々に、前途有望の青年がいるとあのお方のことを記したお手紙を出されたのでございませう。」

「まあ、もうそのころからだったのですか」。

「まだ当時はお嬢様にとかということではございませんでした。お父様が本気になつてお嬢様を探し始められたのは一年ほど前です。ほら、王実頭おうじつとうがあんなことを申してからです」。

「王実頭つて。まあ、あれが申したのを、まさか父上は本気にされたのですか」。
私は怒つたように言う。

——こんなことだから、今日は初めから気分が悪かつたのだ。

「ええ、王実頭でございます。それをそのままその通りだとお考えになつたのは、
はございませんでしょうけれど、あれがきっかけとなつたのは間違ひありません。
天下第一のお嬢様を探さなければいけないとお父様は動き出されて、『まだ早
過ぎるだろうか』と私にお尋ねになりました。私は『たった一人のよろしいお方

をもしも他所に取られてしまつてからでは後悔しても及びません』と申し上げたのでございます。

「そう」。

本格的に怒りが湧いて来るのをぐっと抑えて短く言う。

——ひどすぎる。

先生には一年も前に相談があつたのだ。私は何も知らずに放つておかれた。しかも事は王実頭から始まつた。先生と話をする気が失せる。

王実頭は屋敷に出入りする商人だ。おもに豆やら野菜やらを持って来る。口がうまいので、王実頭が来ると、家の使用人が集まつて話の輪ができる。王実頭は手相やら人相やらをみるのが上手でいろいろと言ひ当てる。それで、同じものなら王実頭から買おうということになつて、頻繁にやつて来る。ある日、王実頭が

荷を運び入れているところに、偶然私が行き合わせた。あわてて互いに避けたのだが、王実頭はその後で「いまのお方はこちらのお嬢様でございましたでしょうか。そうでありませうとも、一目で、他の方々とはまるで違うとわかりました。ほんのちらりと拝見しただけでも、格別の相というものは表れるものでございませなあ、お嬢様は将来必ず国夫人こくかみじんになられませう」と言った。

夫人というのは古くは諸侯の正妻の称号だ。現在では、宰相にまで昇った者の妻は国夫人の称号が皇帝から頂戴し、その次の地位だと郡夫人の称号を頂戴する。国夫人になるのは女としてこれ以上はない荣誉とされている。

王実頭が相をみると言っているのは、商売の種に適當にうまいことを並べるだけのまやかしだ。それを真に受け、父は娘を国夫人にするための婿選びしたのか。馬鹿馬鹿しいにも程がある。父は父でいつかは宰相になりたいと努力している。

それはそれでいい。だけど、娘を宰相の妻にしようなどと考えてくれなくていい。私は、夢の中では、女子状元となつて自分が宰相になる気でいたのだ。

——どうにでもしてくれ。

私が何をどう思ったところで、父が決めたのだから、その通りに必ず事は進んで行く。それしかない。

一刻も早くこの庵から出たくて、うつむきがちに左右を見て、口実を探す。

——どのような不作法でもしれやれ。

思わず舌打ちをする。

どんと大きな音に、びっくりと身が縮む。

先生が目の中の卓を激しく叩いた。滅多にないことだ。

「よろしいですか、天下第一のお婿様にございます」。

それでも、私はぶつきらぼうに、

「王実頭のおべんちゃらに。馬鹿らしい」。

「馬鹿らしくなどありません。おべんちゃらだってよろしいのです。おべんちゃらがあるうがなかるうが、あなたさまがこれからなさることに何ら変わりはないのです」。

——また始まった。

言葉を唇の端に載せ、わざとらしく尋ねる。

「何を私はするのでしようか」。

——どうせ例の話だ。

「おわかりでないのですか」。

先生もわざとらしく訊いてくる。

「わかっていますとも。女の徳。女として最も大切なことでありましょう。つまり、家を治めることです」。

もういい加減にしてくれという感情をあからさまにする。

先生はまた卓を叩き、

「さあ、ここを御覧なさい」。

先生はふだんは隠そうとしている傷痕を指で示し、

「私はそれができなくて飛び出したのです」。

——それは先生のこと。自分の失敗を弟子に取り戻させようというのか。

これは口にしていいことではない。

「わかっております。女は内を治め、男は外を治める。十二分に存じ上げております」。

「本当にわかっておられるのですか」。

「ええ、わかっていますとも」。

もう喧嘩腰だ。

先生はじつと私を見る。私は首を斜めに傾け壁の床際に目を向ける。先生は後ろに身を引いて嘆息する。

私は悲しくなる。

これが昨日だったら、このようにはならなかっただろう。素直な娘であろうとし、素直な弟子であろうとしていた。いまだってそうだ。なのにこのようになつてしまった。

——どうして今朝は。

しばらくして、先生は静かに口を開く。

「あなたさまのお心の内を推し量りますに、あなたさまはご不満なのであります。それもはなはだしく」。

私は小さく、

「いいえ、そのようなことは、決して」。

「私は嘆かわしいと、いまさつきまで思っておりまして。あれだけお教え申し上げましたのに」。

私は深くうなだれる。

——私だって嘆かわしく思う。

先生を困らせて何をしているのだろう。

「この身に傷を受けましたのを、父母は、私の落ち度であるとして断じて許してくれませんでした。私自身許すことができませんでした。あなたさまは聡明なお

方です。全てを理解なさっていて、それなのにどうしてそれほどまでにご不満なのでしょうか。それを私はしばし考えておりました」。

「私がいけないのです。それだけのことです。私が我が儘なのです」。考えるまでもない。我が儘です。ねているだけなのだ。

「女の徳は何千年来変わらぬものと私は考えていました。本当にそうなのでしょうか。あなたさまは何年か前に、女子状元を夢見ておられました。私は一笑に付き、あなたさまをお叱りしました。思うに、あなたさまは新しい時代を生きて行くこうとされています。確かにこれは新しい世なのです。新しい世には以前とは異なる新しい女の徳のあり方があつてしかるべきでしょう。聡明なあなたさまは、そのようにお考えです。違いまししょうか」。

先生をちらりと見て、

「いいえ、そのようなことは考えていません」。

全く考えていなかったのではないにしても、考えていたとは言い難い。

「新しい女の徳のあり方を求めているのに、いきなり頭から全部否定されてしまったように感じて、はなはだ不満なのでありますよう」。

「いいえ、そのようなことはありません」。

もう一度言いつつ、自分の心の奥を覗き見せられたような気にもなっている。

兄に、女が宰相になったら何ができると問われて答えられなかった。それは新しい女の徳を知らなかったからだろう。そのようなものがあるとは聞いていなかった。

「あなたさまはとまどっておられます。私もとまどいました。今朝このようにあなたさまと向かい合っていることに。このようになるであろうことに、いまのい

ままで思い至らなかったのは、お教えする立場にある私の落ち度でございます。お詫びいたします」。

先生は頭を下げる。

「私がいけないだけです。本当に今朝ばかりはどうかしてしまっているのです」。
「あなたさまには求めていらっしやるものがあります。ただし、それがまだわかっておられない。そのようなときに、何千年となく変わらない女の徳を無闇と押し付けられたら、どうかなってしまつて当然です」。

私は不思議な気分になる。

——先生はわかつてくれている。自分ではわかつていなかったのに。

「私は何を求めているのでしょうか」。

「ですから新しい時代の新しい女の徳です」。

「果たしてそのようなものがあるのでしょうか。」

先生はうなずき、

「きつとあるのでしょう。でも、私もいままで一度も考えたことがありませんでした。だから、それがどのようなものであるのか、いまあなたさまの前で、初めて考えてみたいと思っています。」

「どうかお願いします。」

蓮妙先生こそはやはり私の先生であると思う。

「まず、時代は明らかに変わって来ています。それはお父様を御覧になればわかりであります。あるいは范仲淹様もそうです。特別な家柄など一切何もなくても、学問がおありになれば、国の大事なお仕事をお上からお任せいただけるのです。そのようなことがかつてあったのでしょうか。あなたさまが学んだ歴史を

思い起こして下さい。この大宋の御代になって初めて始まったことではないですか。しかも、いまは范仲淹様のように、何も恐れることなく御自分の考えを大っぴらに言うことができます。確かに、范仲淹様はそのために昇進が遅れておられます。しかし、これが昔の時代だったら、范仲淹様のようなお方はとつとくに罷免ならまだしも、獄に置かれて死を宣告されていたでありましょう。それがどうでしょう、いまや朝廷の重い位におられるのです。范仲淹様こそがこれからの時代の手本だと、仰ぎ見る若い方々が大勢おられます。富弼様がそのお一人です。では、女はどうなのでしょう。女の徳は不変と私は思っていました。きつとそれも見直すべきなのでしょう。私は古い考えに染まっています。あなたさまはきつとこれまでになかった女の生き方をして新しい時代を切り開いて行かれるではありません。あなたさまがどのように生きるかでこれからの新しい時代は変わっ

て行きます。そのような重大な使命をあなたさまは帯びているのです」。

「まさか、私にそのようなことが」。

「よろしいですか、天下第一のお婿様と申しました。そうでなければならぬ理由があります。いまからそれを申し上げます。お聞きになって、それでもまだご不満が消えなくて、あなたさまのお気持ち成程その通りだと私にも納得できませんでしたならば、このたびの御縁談は私が壊してさしあげます。そのようなことをす当にそれがよいのなら何の躊躇もしません。このような傷をまた負ってもよろしいのです」。

先生は顎に手を当てる。

「それはいけません。先生に御迷惑をおかけすることはできません。私には初め

から父上のおっしゃる通りにする以外の考えはありません。新しい生き方など求めてもいません。ただ何となく今朝は気分が優れなくて、おかしなことになってしまっているだけなのです」。

「まずは私の申すことをお聞きになって下さい。よろしいですか、『女は内を治め、男は外を治める』と昔から言われて来ました。その意味合いも大きく変わって行きます。かつては何をすべきか、ほとんど家柄によって定まっていました。

この家に生まれたらこのようなことをすると先祖代々決まっていました。いまは違います。ひどく貧乏な家に生まれても、才能があれば宰相になって、国家を動かすような大きな仕事だってできます。『外を治める』の意味するところはすでに大きく変わっています。『内を治める』とは、かつては、その家に旧くから伝わる家風を守るということ以外にはありませんでした。これからは、天下をよりよく

するために女も働けるようになりましょう。夫が持てる才能を遺憾なく發揮できるように、あるいは子が持てる才能を遺憾なく發揮できるように、天下を治める仕事に十全に携われるように仕向けるのが女の重要な仕事となつて来たのです。逆に言えば、女が内を治めることができなければ、夫や子は才能を發揮できず、天下を治めることにも従事できずに終わってしまいます。女こそが天下を治める要と言つてもいいくらいでありますよ」。

先生は熱を込める。

「そのようなことには思い及びませんでした」。

小さく答える。

「私も今まで気付いていませんでした。これはこれまでの時代だったら、たとえ願つてもできることはありませんでした。女として初めてこのようなことをで

きる時代にあなたさまは生まれ合わせたのです。もつとはつきり申せば、あなたさまこそは、まさに初めてそれをするために生まれて来たのではないでしようか」。

「私などが」。

口ごもりつつ、先生の言うことを信じたい気になって来ている。

「あなたさまでなくてはならないのです。一度は女子状元を夢見たあなたさまではありませんか。そして、天下第一のお婿様として富弼様があなたさまの目の前に現れたではありませんか。范仲淹様によると、富弼様は将来必ず宰相になられるようなお方です。富弼様が真に偉大なお方になるかどうか、それはあなたさまにかかっているのです。言ってみれば、国の将来があなたさまにかかっているのです。あなたさまが立派に果たされたならば、それに続くこうとする者が後から大勢出て来ることでしよう。そうなれば、あなたさまは時代を大きく動かすことに

もなるのです」。

「まさか、そのようなことが」。

「富弼様が詩賦は苦手だと公言されているのも、考えてみれば、意味深いものがあるように思います。詩賦はこれまで大切なものと思われて来ました。新しい時代はこれまでとは異なるところから生まれ出て来るものでありましょう。お父様はよくよく思案されて、富弼様だとお決めになったのでありましょう」。

「父上と違うところがあるのがよいと思われたのでしょうか」。

不意に、私はあるときから詩賦を作るのを父に禁じられたのを思い起こす。その理由を父は言わなかったけれど、女子状元を夢見たことと関係があると思つて父に従った。

富弼という人は新しい時代を拓く人であるのかも知れない。

「お父様は最終的に、富弼様と張安道様のお二人に候補を絞られて、范仲淹様ちようあんどうに御意見を聞かれました。范仲淹様は短く、富弼様は修謹、張安道様は疎俊と評されました。よろしいですか、修、謹、疎、俊です」。

私はその四文字を順に頭に思い浮かべ、

「つまりは富弼様の方が温厚ということになるのでしょうか」。

「お父様はあなたさまとは富弼様が合うに相違ないとお心を決められ、范仲淹様に返答されました。范仲淹様は大いに満足され、富弼様の方が器が遥かに大きいと付け加えられたそうです」。

「それを最初にはおっしゃらなかったのですか」。

「深謀遠慮でございましょう」。

「詩賦が苦手なのを父上はよいと御覧になっているのでしょうか」。

「終生、あなたさまを大切にして下さいましょう」。

「はあ、そういうことになりますか」。

詩賦を得意とする父が歌妓を愛したりすることがままあるのを思うと、先生が言うのももつともであるのかも知れない。

「さあ、これでもまだ御不満でございましょうか」。

「不満などは初めから」。

「いいえ、わかっております。お父様の言いなりになどなりたくない、あるいはこの私の言いなりになどなりたくない、そのくらいの思いがなければいけません。世の中にこれまでなかった女の生き方をして行こうというのですから。私から申し上げるのはこれで全てです。後はあなたさまのお気持ち次第です」。

私は目を閉ざす。

いろいろなことが頭を巡る。

結局のところ、先生は巧みに説得しようとしただけなのかも知れない。たとえそうであっても、ここで納得するのが最もいい。初めからそれしかなかったのだから。先生は師として、十年以上にわたって私に全てを注いでくれた。先生にここまで言ってもらって納得しない弟子はいない。

私は頭を下げ、

「ここを出て嫁ぐまでの間に何をすべきなのかどうかお教え下さい」。

昨日だったら、初めからこのように言っていたに違いない。

先生は静かに微笑む。

そのとき、私はまた違うことを思う。

——これが昨日でもなく今日でもなくて、もしも明日だったら。あるいは明後日

だったら。

女子状元となった私を思い描く。女子状元の私なら、自分の婿となる男性は自分で選ぶであろう。

——虚しい夢。夢はもう終わったのだ。

夢から醒まされた私は、女としての現実に向き合わなければならぬ。

言い古された女の徳に従うしかない、何の疑いも持たずにいられたら、それがきつと最もよかったのだろう。

第二の注（外を治める男の世界に関わるいくつかの事柄）。

天聖八（二〇三〇）年七月、富弼ふひは制科あんしやに合格すると、晏殊あんしやからの縁談がすぐに舞い込んだ。

富弼は離れて暮らす両親に知らせた。父の富言ふげんは大いに喜んだ。富言は地位の低い地方官で、親戚縁者の中にも晏殊ほどの地位の者は誰一人としていなかった。母は「もつと良い相手がまだいくらだって見つかるだろう」と首をかしげた。母は、晏殊がいわゆる南人なんじんであるのが気に入らなかった。

宋そうの朝廷では、長らく北人ほくじんと南人の対立が続いた。宋の都は黄河中流かうがの開封かいほうに置かれ、その西の洛陽らくよう、さらにその西の長安ちやうあんのあたりを中心とする地域が宋国の最初の版図だった。その後、西の蜀地方しやくや長江以南ちやうの地域を征服して全国統一を果たした。元来の宋国を出身地とする北人は支配者側に、後から征服された地域を出身地とする南人は被支配側に立って、北人が南人に優越するのは自然の勢いであつた。北人は質実剛健、南人は軽佻浮薄とされ、南人は宰相にしてはならないとの不文律があるとされた。南人が軟弱と見られたのは南の方が文化の先進地

だったからだ。武力による統一過程では北が南に優っても、科擧の試験となると南人が北人に優る成績を常に挙げた。その傾向のままでは朝廷は自ずと南人で占められてしまうので、北人は有形無形の抵抗をした。

富弼の時代までには、すでに南人の宰相も幾人か出て、南北の対立はかなり緩和されていたのだが、なお気位の高い北人は少なくなかった。富弼の母はそのような家で育ち、洛陽を父祖の地とする純然たる北人の富言に嫁いだ。だから、息子も北人との縁組を期待した。

苦勞して制科に合格した息子にかける母の思いは特別なものがあつた。「急がなくても」と母は渋り、堂々たる北人の家からの縁談が来るのを待とうとした。父は「これ以上を望んではばちが当たる」と縁談を進め、富弼が最初の任地である長水県ちやうすいに赴くまでの短期間に、ばたばたと婚儀が執り行われた。富弼自身には北

人、南人の意識はほとんどなかった。師と仰ぐ范仲淹はそれこそ南人である。

富弼の母は不承不承従ったものの、息子の嫁に晏殊の娘が来ることに納得していなかった。嫁が最初の挨拶を型通りに行ったときにも、あからさまに不機嫌そうな顔をして、一言も言葉を発しなかった。

富言は息子の任官を機に引退した。富言は科挙に合格できずに不本意ながら低い地位の地方官を勤めていたので、役人暮らしに見切りを付けるのは早かった。

富言はその地位にしては驚くほどの財産を携えて長水県に來た。浪人時代にさんざん貧乏に苦しまれたことから、蓄財に非常に熱心だった。特に妻にはその方面の才能があり、夫婦でかなりの財産を築き、富弼を除く息子や娘はそれぞれ身の振り分けを終わっていた。当時、子を結婚させるにはそれ相応の資金を要した。

富言は身を引いたけれども、妻はまだ蓄財に未練を残していた。

富弼は長らく父母と離れて一人で勉強していたので、長水県で同居することになって初めて間近で親孝行ができるようになった。大いに張り切り、新妻にも孝養を尽すことを強く望んだ。もとより嫁というものは舅姑には実の両親以上に尽さなければならないとされていた。富弼は何事も根本から深く考え、かくあるべしと考え至ったことは必ずそのまま実践せずにはいられない性質だった。それで、我が嫁はいかにあるべきかということについても深く思いを巡らせ、新妻に向かつて、「婚礼は、二姓の好を合わせ、上は宗廟に事え、下は後世に継ぐものなり」という『礼記』の文言から始めて、己の考えを諄々と説いて聞かせた。晏殊の娘ならば必ず理解してくれるとの確信のもと、夜の深々と更けるまで話し続けた。

第一の注に対する補注。

富弼は一つの目標に向かって歩み、概ね順調に進むことができた。それは、理想の士大夫像したいふを描き、自分自身がその通りになるということだった。士大夫とは、宋代になって勃興した新しい勢力で、ごく単純に言えば、科挙に合格して官僚になった人達だ。

士大夫は、身を削る努力の末に科挙の難関を突破して官員の仲間入りを果たしたことから、己の力で己の人生を切り開き、己の力で世の中をより良くして行くとの気概に溢れた。個人の可能性がこれほどまでに大きく開かれたことはかつてなく、従って士大夫は高い志を抱いた。全ての者がそうだったとは言い切れずとも、数多の士大夫が己を高める努力をし、富弼は幸いにも理想の士大夫にかなりの程度まで接近できた。さらに後輩が自分を超えて、士大夫の可能性をより大きく広げて行くことを富弼は期待したのだが、残念ながらそうはならなかった。

富弼が晏殊の長女を妻に迎えたのは二十八歳のとき、当時としてはかなり遅い結婚だった。

遙か後の晩年に、富弼は洛陽に隠棲して書物を友とする日々を送った。かつての名声を慕って訪ね来る者がいても病気を理由に会わなかった。宝月大師ほうげつと邵雍しょうようの二人は例外で、門を叩けば富弼が読書に勤しむ還政堂に通された。時に富公晏夫人も交えて親しく話をすることもあった。

宝月大師は富弼とほぼ同年齢で最も気の置けない友だった。富弼は少年のころに洛陽の天宮寺に寄寓して勉強に励んだことがあり、そのときに宝月大師も小坊主として修行をしていた。互いに目指すものは異なっているけれども、苦楽を共にし互いに認め合う仲だった。

邵雍は富弼より数歳下の学者で、いくら人から勧められても官界には出ずに、

ひたすら学問に打ち込んだ。富弼は邵雍の純粋なところを愛して学友として遇し、貧乏暮らしの邵雍にあらゆる援助を惜しまなかった。

その邵雍が死ぬと、富弼は葬儀に関わる費用一切を出した。遺された息子の邵伯温はくおんは、喪が明けると富弼を訪ねて生前の厚意に礼を述べた。富弼は邵伯温がまだ若いのを見て惻然とし、父の名に恥じぬよう学問に励めと言い、年齢と結婚しているか否かを尋ねた。邵伯温は父が四十七歳のときに初めてできた子で、恥じらいつつ、

「私は二十四歳で、いまだ娶っておりません」。

と答えた。結婚しようにも資力はなく、父亡き後の家を興す見通しは全くなかった。

富弼は言った。

「未婚であるのははなはだよろしい。血気を保養し、学問に専念できます。私は二十八歳で科擧に合格して後によく結婚しました。母には、合格しない限りは決して結婚しませんと告げ、妹を先に嫁がせ、弟を先に娶らせたのです」。

寿命が短い時代であったから、一般的には、早く子を得て早く育てることが望ましいとされた。万一にも子孫が絶えると先祖を祀った宗廟を守る者がいなくなり、子を得ないのは親不孝の第一とされた。その一方で、男女ともにあまり若いと、体内に宿る子になる元が十分に熟成していないために、優秀な子が生まれなともいわれていた。あるいは、夫婦の交わりは生命力の源である血気を溢流させ、事業を成就させる活力を減じて寿命を縮めるとの見方もあった。

富弼は、邵伯温に向かって、父と同様いつでも屋敷を訪ねて来るよう言った。

邵伯温は富弼の門下生となり、後に学者として大成した。

邵雍より数年早くに、富弼の門下生の趙宗道ちゆうそうどうが死んだ。趙宗道は富弼が四十代のころに遠方より教えを請いに訪ねて来た者だ。自分より若い弟子が先に死んだのを憐れみ、富弼はこのときも葬儀の費用を出すなどして遺族に手厚くした。やがて喪が明けると、趙宗道の息子が揃って礼を言いに来た。富公晏夫人は、その一番後ろに、末っ子の趙済ちゆうせいがいるのを物蔭かげより見て、胸を撫で下ろした。

趙済は兄達と一緒に来るのを最後までためらっていた。富弼が官界から完全に退いて洛陽に引込まなければならなくなった直接の原因を作ったのが他ならぬこの趙済だったからだ。

そのころ、神宗皇帝しんそうのもと、王安石おうあんせきによる国政の大改革が進められていた。富弼は王安石の才能を高く買って神宗皇帝に推挙した一人であったが、王安石が数々と打ち出す新法に対して、激烈な反対の声があがったことから、次第に改革

に対して消極的になって行った。富弼は病気を理由に宰相の地位を辞し、地方に転出した。その一年余り後に、法規違反の嫌疑で富弼は告発された。地方官としては国の定めた新法の実施に当然努めなければならぬのに、富弼は意図的に怠惰を決め込んでいると告発されたのだ。告発人が趙済だった。富弼は「老いて新しい法に習熟する力がもはやありません」と皇帝に謝って政界から引退した。時に六十八歳だった。

趙済は改革の流れに乗って出世の糸口を掴もうとしたのだが、父は師を窮地に陥れるとは何事かと激怒した。その父が死んで喪に服すために趙済が洛陽に来てみると、そこは他所と雰囲気がるで違っていた。新法に反対して退いた大物政治家が洛陽に集まり独自の文化を形成していた。

趙済は、兄達とともに富弼のところに行くべきかどうか大いに悩んだ。富弼は極

めて厳格な人として知られていた。高名な富弼に面罵されでもしたならば洛陽の町を日中歩くことはもうできなくなるだろう。かといって、行かずにいれば恩知らずと人々に罵られる。思案の末に、当時まだ健在であった邵雍に泣き付いた。邵雍は「必ず勇氣を持ってお兄様方と行きなさい。心配はありません」と趙済に言った。

邵雍はすぐに富公晏夫人を訪ねた。富公晏夫人は屋敷の北端に念誦堂を設けて暮らしていた。邵雍は学問の師として、宝月大師は仏道の師として、その念誦堂に行くのを許されていた。富公晏夫人は邵雍から趙済のことを聞くと、「趙済様にお越しいただいて間違いの生じる気遣いはございません。近頃の夫は『能容於物、物亦容矣』の八文字を唱えることしばしばでございますから」。富公晏夫人の微笑みに邵雍は深くうなずいた。

「能く物に容るは、物また容らるる」とは、富公晏夫人の父の晏殊が王安石に語ったとされる言葉だ。それは慶暦二（一〇四二）年のことというから、晏殊が五十二歳、王安石二十二歳、富弼二十八歳のときであった。この年に王安石は第四位の成績で科挙に合格した。晏殊は出身地が同じであることから王安石を呼んで食事を馳走し親しく語り合った。そして王安石の人となりを見て、晏殊は「能容於物、物亦容矣」の八文字を与えた。王安石の才気が鋭く尖っていることから、寛容であれと説いたのだった。

趙宗道の息子達が富弼の前に並んで礼を言うと、富弼は一人一人に名を問い、それぞれの顔を見て父に似たところを挙げ、父の名を高めるべく励むよう言った。最後に趙済の番になった。趙済は震えながら富弼を拝し、かつての自分の罪を謝ろうとした。富弼は遮り、

「それは昔のこと、ここで言うべきではありません。いまは亡き友の子として君と会っているのです。友の子はすなわち我が子にも等しい。君に亡き友の面影があるのを見て、友を思い起こして悲しむとともに、心強く感じもします。君もまた必ずお父上の名を高めるに違いなかろうと思います。よく励みなさい」。

富弼は趙濟を他の息子達と同じように遇して、寛容の徳の美を見せたのだが、このころ時代は寛容を受け入れられないところにまですでに進んでいた。改革に邁進する新法党とそれに反対する旧法党が激しく対立して融和する余地はほぼなくなっていた。そのような伏線は数十年前にすでにあり、富弼自身にも罪があった。

士大夫は難しい科挙に合格しただけあつていずれも優秀な頭脳を具えていた。政界で事があつたとき、過去の王朝においては武力で決着を付けることが少なく

なかった。宋朝においては知恵の限りを尽くして論が戦わされた。議論によって黒白がはつきり付くのならそれでよい。優秀な頭脳から繰り出される論はいかようにも補強され、負けを自ら認めなければ議論はいつまでも終息しない。論は論を呼んで対立は先鋭化する。富弼は断じて持論を曲げることのない代表的人物とされ、皇帝の面前で義父の晏殊を罵ったことさえあった。

晏殊は早くから寛容の重要性に気付いていたのだが、富弼はかなり遅れ、他の多くの士大夫はついに気付こうとしなかった。

富弼の後半生は持病の足疾に苦しみながらも、若いころに道士に教わった養生の法を用いた甲斐があったからなのか、八十歳の長寿を全うした。富公晏夫人は四年後れて死んだ。

その後、新法党と旧法党の抗争はますます激化し、さらには新法党内、旧法党

内の内部抗争も生じるといふ醜悪なものとなり、宋朝は次第に基礎体力を失って行った。富弼の死から四十年ほど後、新たに勃興した金国によって宋は国土の半分を奪われ、都も洛陽も敵地に没した。

邵伯温は南方に逃れ、かつての洛陽での日々を回顧し、「悲しいことに、いま海内の士でかつて富公のお声に接したことのある者は私一人になってしまった。富公の英偉のお姿を想うと、凜然といまも世にあるかのようなのである」と記した。富弼のように理想の士大夫像そのままのような人物が朝廷に並びながら、宋国はなぜかくも衰えなければならなかったのかと邵伯温は慨嘆した。

宋のこの失敗は後の歴史に甚大な影響を与え、富弼が求めた理想像は現実の生命力を喪失し、昔語りと化した。

第一の注に対する補注のさらなる補注。

富弼は景德元（一〇〇四）年に生まれた。後に蘇軾が「天命則ち然る」と神道碑に記したように、この年に生まれたのは天の定めるところであつたのだろうか。神道碑とは墓所に至る道に建てられる碑だ。その文面を宋一代を代表する文人である蘇軾が書いたのもまた天の配剤の一つであつたのかも知れない。富弼の政治上の最も大きな功績は、蘇軾がその神道碑で特筆したように、必至と思われた戦争を止めたことだ。それを厳しい条件下でほぼ一人で成し遂げた。

富弼が生きたのは、世界の歴史のなかでも異彩を放つ時代だつた。かつてプラトンは、ギリシアの民主政治が衆愚に陥つたのを見て、哲学王による政治を夢想した。真理、すなわち善を知る哲人による独裁が最も優れた政治形態だと考え、哲人王を育成する教育システムを思い描いた。後に若干の修正を加え、哲人王と

同等の知性の持ち主が複数で協議する統治法を考えました。

その哲人政治に非常に接近した政治形態が宋の前半期に実現しかけた。中国では哲人とはいわず君子くんしという。理想の士大夫とは、すなわち最高の知性と最高の倫理性を兼ね備えた君子だ。国家の最終的な意思決定は皇帝に委ねられていたから、哲人政治そのままというわけではなかったけれど、范仲淹はんちゆうえん（九八九～一〇五二年）、富弼（一〇〇四～一〇八二年）、欧陽脩おうようしゆう（一〇〇七～一〇七二年）、韓琦かんき（一〇〇八～一〇七五年）、司馬光しばこう（一〇一九～一〇八六年）、王安石（一〇二一～一〇八六年）、蘇軾（一〇三七～一一〇二年）といった名を挙げるだけでも、これほどの人々が国家の主要な地位にあったのはまことに壮観と言わねばならない。

七歳の富弼少年の才能を見抜いた呂蒙正りよもうせい（九四四～一〇二二年）は、そうした新しい宋代士大夫の先鞭となった。

呂蒙正は地方の役人の家に生まれ、父は大した色好みで幾人もの妾を抱えていた。俸給は全て女のために消え、妻と喧嘩が絶えなかった。妻は我慢がならず家を飛び出した。母思いの呂蒙正も一緒に出た。呂蒙正は母のために科挙を目指し、竜門山の寺院に寄宿して勉強に励んだ。ひどい貧乏でいつもひもじかった。あるとき瓜売りが川のほとりで荷を置いて休んでいるのを見て、その瓜が欲しくて欲しくてたまらなかった。瓜売りが立ち去ると、一つだけ瓜が残されていた。呂蒙正は飛びついてむさぼり食べた。我に返ると、悲しさに涙がとめどなく溢れた。

一 呂蒙正は、宋の第二代皇帝（太宗、趙光義）が即位して最初に実施した科挙を受験し、首席で合格した。

科挙は高級官僚を採用するための試験で、隋の時代に始まり、唐の時代にある程度整備され、宋の時代になって成熟した制度となった。公正な試験で官僚を採

用するということは当時の世界で宋以外では行われていなかった。

科挙の目的は、国家の用をするに足る人材を集め、私心なく皇帝に奉仕させることにある。人の能力を客観的に評価するには試験をするのがよく、人が有する種々の能力を評価するには試験はいろいろな種類があるべきだ。幾つもの科目に分かれて試験が行われるので科挙という。最も難しいとされたのが詩賦を特に重視する進士科だ。科挙の最終試験（三次試験）は皇帝自身が実施し、皇帝が合格順位を決定した。進士科の首席合格者は状元じょうげんといわれ、それを成し遂げた者は最高の榮譽を得て、科挙を志す人々の憧れの的となった。科挙がなかった時代、あつてもまだ制度として未熟だった時代には、人生は才能よりも家柄によって大きく左右された。宋の時代の科挙の合格者は、皇帝によって選ばれた恩義を深く感じ、皇帝に奉仕する気持ちを強くしたのは当然の理であった。

太宗皇帝は、科挙が今後の国家の発展の要になると考え、呂蒙正を科挙出身者の手本たらしめるべく大いに抜擢した。呂蒙正はよくその期待に応え、合格からわずか十一年、端拱元（九八八）年に宰相になった。ときに四十五歳だった。宋の時代に入って実施された科挙の合格者で宰相になったのは呂蒙正が最初で、名宰相の名をほしいままにしたことから、以後は、宰相のほとんどを科挙出身者が占めるようになった。

宰相とは中書門省の長官である。宋は、皇帝のもとに、行政、財政、軍事の三権が分立する仕組みを作り、行政を中書門下省が、財政を三司が、軍事を樞密院が担当した。三つの組織の長のうちで宰相が最も重んじられ、皇帝は宰相の同意なしに政治を行うことができなかつた。宰相は一人とは限らず、二ないし三人であることが多かった。宰相の下に二名の参知政事がいいて、これは執政と呼ばれた。

宰相と執政を合わせた宰相が皇帝とともに国家の最高意思を決定した。

呂蒙正は二度宰相の地位に就き、太宗の子の三代皇帝（しんせう真宗、ちやうこう趙恒）にも重ん

ぜられた。真宗皇帝は老いた呂蒙正の後をその息子に継がせたいと考え、誰を用いるのがよいかと呂蒙正本人に尋ねた。呂蒙正は息子ではなく甥の呂夷簡りよいかんの名を挙げた。

呂夷簡（九七九〜一〇四四）も科挙に合格し、呂蒙正の見込んだ通りの才覚を發揮し、真宗皇帝によって執政として用いられ、四代皇帝（じんせう仁宗、ちやうてい趙禎）のときに宰相になった。

こうして科挙が人材登用の極めて優れた仕組みであることを呂蒙正が実証したのだが、個人の才能が第一であるとする趨勢をより強めたのが晏殊あんしゆだった。

晏殊（九九一〜一〇五五年）は、ぶしゅうりんせん撫州臨川の獄吏の子として生まれた。臨川は都か

ら南に遠く離れた田舎町、獄吏は下級役人である。

国家に奉仕する役人を官吏と一語でいうが、元来は、官と吏には厳然たる区分があつた。科挙の合格者は官員となつて、いずれは宰相になる可能性もあつた。吏人は官員の下で働き、その境遇から抜け出ることはまずなかつた。晏殊も通常であれば、父と同様に吏人になればまずまずというところで、才能があれば科挙の難関に挑んで将来を切り拓くということであつたのだが、七歳にして詩文をよくするとの評判をとり、十二歳のときに、州知事として赴任して来た李虚己りきよきを、才能のきらめきで驚かせた。李虚己は晏殊少年に惚れ込み、すぐに娘の許嫁とした。

このころから、前途有望な若者に目を付けて婿にするということが目立つようになつた。婚姻とは家と家を結び付けるもの、何よりも家柄が重視されるという

のが何千年来の定めであった。科挙は家柄ではなく才能で決まる。科挙に合格して、例えば宰相にまで昇り詰めた者が、我が一家を今後も長く繁栄させたいと願うのはごく当たり前の心情である。国としてその思いに応えるため、ある程度以上の地位にまで至ると、子や孫、弟や甥は科挙を受けずとも官員になれるという恩蔭おんいんの制度を設けていた。ただし、恩蔭で官員になった者は出世が遅れた。恩蔭の資格があつても志ある者は科挙を目指した。しかし、親が優秀でも子が優秀とは限らない。子にあまり期待できなければ、より手っ取り早いのは、科挙に合格しそうな者、あるいは合格した者を婿として取り込んで、一門を発展させることだ。婿になる側からすると官界の先輩である義父の助力が期待でき、双方にとって利点がある。晏殊少年にとって李虚己からの話は有難いものだった。

晏殊が十四歳のとき、もとの宰相の張知白ちようちはくがこの地方に来てやはりその才能に

驚き、朝廷に報告した。翌春、晏殊は張知白の導きで上京し、科挙を受ける千人の大人に交じって試験を受けた。晏殊は張り詰めた試験場の雰囲気に臆することなく答案を書いた。真宗皇帝は、特別に「進士出身」の資格を晏殊に与えようとした。進士科の上位合格者を「進士及第」、それに次ぐ成績の者を「進士出身」という。特例で十五歳の少年を優遇することに異論が出た。ならばと、皇帝は晏殊に詩、賦、論の三つの試験を改めて課した。晏殊は賦の題を見ると、「私はかつてこれと同じ題で賦を作る練習をしたことがあります。どうか別の題でお試し下さい」と申し出た。皇帝はその正直な態度に感心し、できあがった賦を見てさらに感心した。晏殊は直ちに官員として採用され、真宗皇帝の覚え目出度く出世の階段を駆け昇った。

富弼が生まれたのは晏殊が試験を受けた前の年で、七歳で呂蒙正に出合ったこ

とで勉強する機会を得た。洛陽には功成り名遂げて引退した人が多く住み、私財をもつて後進を育てようとするよき文化があり、呂蒙正亡き後も、富弼は転々と居場所を変えながら勉強を続けることができた。

科挙は競争率が極めて高く、受験を志しても合格者はほんのひと握りで、大半は挫折せざるを得なかった。富弼の父の富言は科挙をあきらめ、知人の助力で地方に微官を得た。富弼は父のもとには行かず、一人洛陽で頑張った。天宮寺に寄寓したのはそのころのことだ。

受験の勉強ははなはだ厳しく、激的な勉強法で当時からすでに伝説的であったのが范仲淹だ。范仲淹は二歳のときに父を喪い、母の李氏りしは息子を連れて朱氏しゅと再婚した。范仲淹は朱家の子として育てられ、二十歳を過ぎて初めて自分の本来の姓が范であると知った。范の姓に戻って家を再興するには科挙に合格するしか

ないと、おうてんか 応天府にある学校に入って我武者羅に勉強した。五年の間、衣を脱いで枕に就いて寝るといふことはなく、眠くなると冷水を浴び、眠気を防ぐために食べるものといえばわずかな粥だけだった。

二十七歳で范仲淹は進士科に合格した。成績は中位で、呂蒙正や晏殊のように目立つ存在ではなかった。范姓に復帰する願いを叶え、孝子であることがいささか評判になった。

范仲淹が科挙に合格した年に王欽若おうきんじやく（九六二—一〇二五年）が宰相になった。王欽若も科挙の合格者で、真宗皇帝にはなほだ気に入られ、宰相にまで昇り詰めた。

王欽若は長江の南岸の金陵きんりやう（南京なんきん）の出身で、南人として初めての宰相だった。宰相になったばかりの王欽若は皇帝の御用で洛陽に赴いた。車騎を列ねて宰相が入城する様子を見ようと、朝早くから人々が大通りに押し寄せた。

富弼はこのとき十二歳で、三人の友と宰相の行列を見ようとした。道はどこもすでに人で埋まっていて、近付けそうになかった。福先寺の門に上ったら見えるのではないか誰かが言った。一番背の高い富弼が最初に上り、あとの三人を引っ張り上げた。旗を靡かせて進む長い行列が遠望された。富弼は深い溜め息をついた。友が言った。「君は何だってそうやって嘆くんない」。富弼は生まれてからずっと居候として転々とする己の境遇を思つてうなだれた。友はさらに言った。「あの人だって科擧をお受けになったのだ。いつか我等もあのように隊列を作つて洛陽に帰つて来ないとも限らないだろう」。富弼はこのときいつか必ず宰相になると心に決めた。富弼は強情な少年だった。思いが定まると迷うことはなかった。

王欽若は、泰平の時代の新しい国家のあり方、新しい宰相のあり方を天下に示していた。

宋の建国当初の課題は全土の統一だった。初代皇帝（太祖、趙匡胤）がそれを成し遂げると、次の課題が国家の基盤整備で、二代皇帝が成し遂げた。呂蒙正はその時期の宰相だ。第三の課題が対外関係だった。

宋の北には契丹族きつたんの国家、遼国りょうがあった。遼国は軍事力で宋を凌駕し、歴史的にみて宋の土地であるべき広大な地域（燕雲十六州）えんうんが遼国の支配下にあった。それを取り戻そうと、初代皇帝と二代皇帝は遼国に挑み、一部を奪還したものの手痛い敗北を喫した。

遼国と戦うには強い軍隊を必要とする。しかし、宋は国内の統治を安定させるために、一貫して武を抑制する政策を採っていた。それは、唐代後半以降長く続いた混乱から得た教訓だった。

唐は玄宗皇帝げんそうの時代に最盛期を迎え、その絶頂のときに、安祿山あんろくざんが反乱を起こ

した。それを機に唐は長い衰退期に入った。安祿山は漢民族ではないいくつかの部族の混血児で、侮蔑的に雜胡ざつこといわれた。安祿山は武に優れ、諸族の複数の言語を操り、国外の事情に通じていたことから、国境を守る將軍として重用され、玄宗皇帝によって節度使せつとせしに任命された。節度使には、辺縁の地において外からの侵入者にすばやく対処できるよう、軍事と民政の両面で強い権限が与えられていた。安祿山は玄宗皇帝に可愛がられ、いくつもの節度使を兼任するようになった。その強大な権限をもって大軍を動かす、唐を倒して雜胡による国家を樹立しようとした。唐は危うく滅ぼされかねないところであったが、どうにか持ちこたえ、反徒の切り崩しをはかり、唐朝に靡いた者を次々に節度使にして優遇した。結果として安祿山の乱は終結したものの、節度使は自前の軍事力を背景に半独立国家の様相を呈するようになり、唐朝は弱体化した。最後には黄巢こうせうの大乱をきっかけ

として唐は滅亡し、その後は、大小様々な国が入り乱れて争う五代十国の時代となった。いずれも唐代の節度使から発展した国であった。

宋朝は、節度使が跋扈するような時代と決別するために、軍事と民政を分離し、民政を担う文臣を、軍事を担う武臣の上に置いた。これによって国は安定したものの、武臣が文臣に頭が上まらない状況では、軍が弱くなるのは避けられなかった。

遼国は文弱化した宋国に対して北から圧力をかけ、真宗皇帝の景德元(一〇〇四)年十一月、二十万の大軍をもって南進して来た。まさにこの年に富弼が生まれた。

此彼の軍事力を比較すれば、宋軍は遼軍に勝てるはずもなく、王欽若は都を棄てて金陵に避難すべきだと皇帝に進言した。あるいは安祿山の反乱のときに玄宗皇帝がそうしたように西の成都せいとへの避難を言う者もあった。南人は軟弱であると

評された通りの逃げ腰であった。ときの宰相は寇準こうじゆん（九六一〜一〇二三年）で、こちらは北人の典型だった。寇準は呂蒙正より十七歳若く、しかし呂蒙正より遅れることわずか一年で科挙に合格した秀才で、極めて豪胆な性格で国家を担う人物として早くから囑望され、この年に宰相になったばかりだった。寇準は都から逃げる気になっていた皇帝を励まし、敵と直接対峙する黄河のほとりの澶州せんしゆにまで連れて出た。皇帝自らの出陣に宋軍の戦意は大いに上がり、遼軍とほぼ互角に戦った。その一方で、和平交渉を裏で進め、遠征が長引くのを嫌う遼国側の思惑もあって、二条件をもって合意に達し、遼軍は引き揚げた。

第一に国境はこれまで通りとした。宋は元来の領土であるはずの燕雲十六州を取り戻すことを国是とし、かつてごく一部だけは奪還していた。遼国側はそれを宋に不当に奪われたとして今回の軍事行動に出る一つの理由としていた。国境を

変更しないとするのは、双方ともに譲歩して現状を認め合うということだった。

第二の条件は、宋が兄、遼が弟という関係で国家間の付き合いをする、第三の条件は、宋は兄として弟に毎年の贈り物、歳幣さいへいを与える。歳幣は銀十万両、絹二十万匹である。領土的妥協の見返りとして、宋は兄であるとの名目を取り、遼は歳幣という実質を取った。澶州で結ばれたこの和平条約を澶淵せんえんの盟めいといい、これがその後の両国関係の基盤となった。

歳幣は決して安くはなかったが、宋の国力からすれば法外なものではなかった。澶淵の盟以降は、宋と遼の間を友好の使節が往来し、両国間の交易が盛んに行われ、戦争がなくなつたことで、両国はともに経済発展を遂げた。

寇準は国家の危機にはいなければならぬ宰相であったが、その剛直さは泰平の時代には不向きであった。皇帝は寇準の存在を煙たがり、その隙に入って頭角

を現したのが王欽若で、南人の経済官僚として国家の中枢に初めて進出することに成功した。澶淵の盟以降、宋国の経済は飛躍的に発展し、国庫には溢れるばかりの富が集中した。それを溜め込んでしまったのでは継続的な発展は期待できない。経済にとって重要なのは富の循環だ。何に使うのか。王欽若は皇帝の権威を高める宗教行事を大々的に挙げて富をばら撒いた。皇帝は喜び、宋は空前の繁栄に湧いた。王欽若は宋の建国以来、最も文弱な宰相だった。

富弼少年の前には、呂蒙正、寇準、王欽若と、遥か高くに仰ぎ見る科挙出身の宰相がいた。いつしか自分もと堅い決意で勉学に励みながらも、富弼を大いに苦しめたものがあつた。それが詩賦だった。詩賦にはやかましい規則があり、努力をすればそれは習得可能で、詩賦の体裁を具えたものを富弼も一応は作れた。しかし、練習で題を与えられて詩賦を作ろうとして心に浮かぶものはなく、先人

の詩賦を学んで感動することもなかった。要するに詩賦の心なるものが富弼には全くなかったのである。よい詩賦が作れなければ進士科には合格できない。宰相を目指しているのに、どうやっても詩賦が上達しないことにしばしば絶望的になった。

そのようなときに、もしかすると我が行く手を照らしてくれるのではないかと富弼が感じるようになったのが、范仲淹の存在だった。范仲淹も進士科に合格していたから立派な詩賦を作る。富弼が惹かれたのは范仲淹の行動だった。

范仲淹は官員になるとすぐに王欽若と正反対の振る舞いをした。王欽若は上に立つ者の意をいち早く汲み、それに己を合わせるのを得手とし、皇帝の心を誰よりもよく掴んだ。范仲淹は上官の意を汲むなどということは一切しなかった。官員となって最初に与えられたのは地方の町で罪人を裁く仕事だった。范仲淹は己

の信念に従って上官としばしば衝突した。

范仲淹の次の仕事は泰州たいたいにある塩倉庫の管理だった。現地たいたいに赴任すると、海岸を守る堤防が古くなり、秋の高潮で何度も大きな被害が出ているのを知り、職掌外のことであつたが、新たな堤防の建設を提起した。難工事が予想され、反対する者が多いなかで、范仲淹の提案は採用され、工事が始められた。折悪しく突然の水害が発生し、現場での不手際も重なつて、工事に携わる百人余りが命を失つた。民衆はこの工事はできっこないと噂し合い、朝廷は中止を命じた。范仲淹は堤防の必要性を断固として主張した。范仲淹が泰州にいる間には間に合わなかつたが、後に工事は再開されて百五十里にわたる堤防が完成し、広大な土地を長く潮の害から守つた。

富弼は、そのような范仲淹に心惹かれ、どうしても会つてみたくなり、泰州に

旅した。富弼は自分の悩みの全てを范仲淹に打ち明けた。范仲淹は己のこれまでの生き方を語り、そして国政改革の必要性を説き、いつか必ずともに手を携えて取り組もうと熱く激励した。富弼は范仲淹を生涯の師と定めた。十九歳のときである。

このころ、王欽若による経済政策は行き詰まりを見せ始め、朝廷内の権力争いに敗れて王欽若は地方への転出を余儀なくされた。

乾興けんこう元年（一〇二二）年、真宗皇帝が死に、その子（仁宗じんそう、趙禎ちやうてい）が皇帝になった。

新皇帝はまだ十三歳と若く、そのような場合の常套手段として、母の劉皇太后りゅうが摂政として政治を見ることになった。劉皇太后は聡明な女性で、出だしばかりは少々混乱があったものの、それを巧みに乗り切ると、夫の真宗皇帝の政治を継承することを旨として、夫とつながりが深かった人々を重用して政治を安定させた。

王欽若が宰相として返り咲き、間もなく栄光に包まれて生涯を終えた。

このころ晏殊は、真宗皇帝に見出された人間であったから、劉皇太后のもとで順当に昇進して行った。

劉皇太后の信頼を誰よりも克ち得たのが呂夷簡だった。呂夷簡は一言で表せば老獪な政治家だ。呂夷簡の政治力によって、劉皇太后の時代は、朝廷内に波風が立つことなく、まことに平穩に推移した。そのために、王欽若の時代にすでに行き詰まり見せていた国政上の根本問題は検討されないまま放置されてしまった。

それではならじと、范仲淹は、皇太后と皇帝に向かって、国が直面する真の問題は何であるかを書いて提出した。それは単に受納されただけで終わった。富弼はすぐにそれを読み、泰州で受けた感銘を新たにした。

范仲淹に会って以来、富弼は、詩賦が苦手であることを平然と人に言えるよう

になっていた。国家にとって必要とされる才能を自分が持っているならば、詩賦が作れようが作れまいが、いずれ用いられるに違いないと考えられるようになった。その自信は、范仲淹を師とし、己も范仲淹になるとの思いから来ていた。富弼は何かというと范仲淹を持ち出したので、洛陽の友人は富弼を「范仲淹狂い」と評した。

それから間もなく、范仲淹は母が亡くなり、喪に服すために秦州を離れ、おうてん 応天府に逼塞した。そこに晏殊が赴任して来た。

晏殊は十四歳で先の皇帝に見出されて出世の階段を一気に駆け上ったことから、怖い者知らずで、劉皇太后にもあることで逆らった。劉皇太后はいわゆる卑賤の出で苦勞人であったことから、人から受けた恩を忘れずに必ず厚く酬いた。ある恩人を高い地位に引っ張り上げようとした。それに対して、官員として実績のな

い者にいきなりその任を授けるのは不適切であると晏殊が反対した。筋の通った意見に、劉皇太后はそれを受け入れたものの、次第に関係がぎくしゃくし出した。

そして、てんせい天聖五（一〇二七）年正月のこと、見栄えを大切にする晏殊は、皇帝の行列のなかで己の美々しい姿を衆人に印象付けることを目論んでいた。一人の従者が計画通りに動かずそれを台無しにした。晏殊は腹を立て、手にしていた笏でその従者の顔を突いた。従者の齒が折れ、血しぶきが飛んだ。皇帝の行列を汚したと劉皇太后は怒り、晏殊は都から出された。

晏殊は浪々の身の范仲淹を応天府の学校に招いた。そこは、かつて范仲淹自身も身を置いて寝ずに勉強したところであったから、自身の経験も踏まえて学生を熱心に指導した。厳しいことは厳しかったが、賦の題を出して作らせるときには、自分でも手本を作ってどこに力点を置くべきかを懇切丁寧に教えるなど、その指

導は行き届いたものだった。

范仲淹は学校に寝泊まりして学生を教えつつ、再び国の改革を求める長文の意見書を書いて宰執に提出した。字数が万に及ぶことから「まんげんしよ万言書」という。それは前回よりも具体的に詳細であった。改革すべき重点は六つあり、とくに優秀な人材を適切に用いるべきだとした。富弼はその文章を繰り返し読んで暗唱できるまでになった。この改革案も受納されただけで終わったが、范仲淹の名は宰執の頭に刻まれた。

劉皇太后には一度斥けた人間でももう一度用いてみるだけの度量があり、晏殊は中央への復帰を果たした。晏殊は、「万言書」を読んだ宰相に促される形で范仲淹を中央で用いるよう推薦し、天聖六（一〇二八）年、范仲淹は都に呼ばれた。すでに四十歳になっていた。

ようやく念願叶って朝廷の一員になったのだから、しばらくは無難に過ごそうと考えるのが普通であるのに、一年も経たないうちに、范仲淹は皇帝の振る舞いについて意見書を提出して物議をかもした。皇帝は冬至の日に行う重要な祭祀に際して、百官を率いてまず劉皇太后にお祝いの挨拶をし、それから百官の祝賀を受けた。范仲淹は、皇帝は臣下として人に仕えることはなく、百官を率いて劉皇太后にお祝いを申し上げるのは元来の礼に反すると言った。

この意見書に仰天したのが晏殊だった。范仲淹を推薦した晏殊には、ある一定期間、范仲淹の言動に関して連帯責任があった。皇帝の振る舞いをあからさまに批判するなどとんでもないと、范仲淹を説教した。一徹居士の范仲淹は「お上から俸禄を戴きながら、正しいことを言わずにいるのはすなわち只飯を食うということです。天下には、直言する者と、黙っている者とがいます。前者は泰平の世

をもたららし、後者は天下に大乱をもたらします」と言い、その舌鋒に晏殊はたじたじとなった。

范仲淹はこれで終わらなかつた。劉皇太后に向かつて、大権を皇帝に還すべきだと上疏した。これこそは当時最大の禁忌であつた

皇太后による政治は、皇帝が幼少のときにだけやむをえず採用される例外的な政治形態である。唐の時代に、皇帝の母として武皇太后ぶが国家に君臨し、大権を皇帝に還すどころか、自らが皇帝となつて国号を周と改めたことがあつた。これは極めて悪しき前例であるとされた。武皇太后は唐の三代皇帝の妻であり、劉皇太后も宋の三代皇帝の妻である。皇太后による政治が長くなるにつれて、不気味なものを感じる人々が少なからずいた。それを言い出すのは勇氣のいることで、これまで口にした者は例外なく都から追い払われていた。

それがわかっていても范仲淹は黙ってはいなかった。劉皇太后は怒り、范仲淹は自ら求める形で地方に出て行った。

晏殊は劉皇太后の信頼を保ち得て、天聖八（一〇三〇）年の科挙では総監督の役を授かった。このときに合格した欧陽脩は、晏殊によって高く評価され、次の時代を切り拓く人物となった。

新しい時代には、その時代の精神を反映した文学がなければならない。欧陽脩は科挙に合格した後、文学の革新運動を本格的に展開した。一つが文章の改革だ。文章は内容本位で、不要な修辭を排して、簡易明瞭であるのをよしとした。また、詞の变革にも努めた。詞は唐の後半期に始まった詩に類似した韻文で、音律に合わせて歌うところが詩と異なった。「詩余」という異称があったように、詩が本流で、詞は余りものといった感覚があった。欧陽脩は詞に新しい息吹を吹き込み、宋の

時代精神を強く反映する文学形式へと育てて行った。晏殊もそれに同調した。

富弼は、欧陽脩が首席で通過した礼部の試験に落ちて、三次試験に進めなかった。詩賦が苦手と言ってはばからない富弼にとってそれは予期した結果であったとはいえ、実際に落ちればやはり落胆は隠せない。しばらくは地方にいる父母のもとで孝養を尽そうと都を発った。旅する富弼を追いかけて一通の手紙が届けられた。范仲淹からのもので、「君の才能が認められるときが来た」と、近く制科が実施されるから必ず受けるようにと記されていた。

天聖八（一〇三〇）年七月、富弼は制科に合格し、すぐに晏殊からの縁談が舞い込み、士大夫としての新たな人生が始まった。

第二章 おやおや、これはどういうこと？

夫に呼ばれる。

めいどう

明道二（一〇三三）年十二月の夕刻。

逃れ得ぬものを呪縛としてではなくて、自らの事として引き受けられるかどうかの瀬戸際に立たされていると感じているまさにそのときに、思いもよらぬところから一つの扉が開かれた。

「少しの間でよろしいので、こちらに来てほしいのですが」。

しゃがむようにして厨に顔をのぞかせた夫が言う。

「はい、かしこまりました。すぐに参ります」。

腰を上げて答えると、夫はすつと背を伸ばして立ち去る。

嫁となつて三年、住む場所は二度変わったが、嫁としてしなければならぬことは何も変わらない。最初の日^に夫から言い渡されたことをひたすら守る歲月だつた。

夫は、言葉遣いは常に丁寧で顔は常に厳しい。いまもそうだった。

焼き始めていた焼餅しやおびんを火から遠ざけ、

「すみませんが、手があいたら、こちらもみていただけませんかでしょうか」。

蓮妙れんみょう先生に声をかける。

熱く焼き上がったら、先生が用意してくれている羹あつものと合わせて義母ははのもとに届ける。必ず決まった刻限でないとならない。

——何もいまでなくていいのに。

細心の注意を払ってここまで進めて来たのにこれでは遅れてしまう。夫に呼ば

れたのが恨めしく、嘆息する。

義母には、自分達のものとは別にきちんとした食事を用意する。焼餅一つをとつても気を遣う。我が父のように軽く炙ってくるつとひねっただけというわけにはいかない。大きさ、形、焼き具合、堅さ、全てにこだわりがある。毎回仔細に吟味し、必ず一言ある。胡麻の加減が特に難しい。適度にすって適量を入れて香ばしく焼かなければいけない。胡麻が少ないと「何の香りもしないこんな物を」と食べないし、胡麻を多くすると「こんなに贅沢な物を」とやはり食べない。「よろしゅうございます、後はお任せ下さいませ」。

先生は膳を布で入念に磨いている。義母を満足させるにはそれも欠かせない。わずかでも汚れが残っていようものなら大変だ。

「では、どうかくれぐれもお頼みします」。

三年をどうにか過ごして来られたのは先生がいたからだ。先生を連れて行くようにと父が決めたのだが、先生以外の人はあり得なかったのは明らかだ。先生は私にとっては師として敬うべき人でありながら、この家に来てからは婢はしためと何ら変わらない。義母は、私には口で叱るだけだが、先生には手を挙げることもある。

あの日、先生の言葉に納得したことにし、嫁になった。もとより父の決めたことに逆らえるはずもなかったし、その気もなかった。先生は自分で言ったことを気に掛けているからなのだろう、私のために何でもしてくれる。私とともにここに来たために先生が打たれているのを見れば、先生のためにも完璧な嫁にならなければいけないと思わずにはいられない。

我が生母のようになれと、母には言われた。それは私には重過ぎた。生母は女の徳を十全に具えていたとずっと聞かされていた。私は生母の顔を知らない。ど

れほど努めたら生母のようになれるのか私にはわからない。

生母について父が話してくれたことはほとんどない。父は別の士大夫の家のことをよく聞かせてくれた。士大夫の家の女はいかにあるべきかをわからせようとしたのだろう。婚家よりも実家の方が格が上であるのを鼻に掛け、嫁が舅姑に従わなかったために、両家が仇敵のようになってしまったという類の話もあった。父に恥をかかせたり落胆させたりするようなことは絶対にしたくない。

いまになって西園の日々を思い起こして悲しみに沈むことがある。あの日に戻って、嫁になど絶対に行ってはならないと、あのときの自分に言ってやりたいと思ったりもする。

しかし、この夫でなければ三年間の辛抱はできなかつただろうとの思いもある。天下第一の婿と先生が言ったのが本当であればと、希望を抱くこともある。

夫が最初の任地である長水県ちやうすいに赴くのに合わせて、義父ちちは仕事を辞め、一緒に暮らすようになった。嫁がなすべき最も大切なことは舅姑への孝だ。実の父母以上上に尽さなければならぬ。

義父は地方の微官であったが、かなりの財産を溜め込んでいて、幾人もの使用人を連れた。義父のお蔭で、新たな住まいは官員になったばかりの者にしては立派だった。義父は、私が晏殊あんしゆの娘であるからか、何かと優しくしてくれた。義母にはそれも気に入らなかつたのだろう、最初からとにかく叱られ通しで、義父が少しでもかばおうものなら、余計に容赦のない言葉を執拗に浴びせられた。

義父は隠居の身となり、次の来たるべき日のために、故郷洛陽らくようの地に墓所を用意し、立派な棺もこしらえた。それですっかり安心したからなのか、ふとした病で死んでしまった。義母は夫のために豪華な副葬品をあつらえ、自慢げに並べて

弔問客に見せた。義父のかつての地位からすれば分不相応の品々であったが、義母としては、科擧に合格さえしていればこれで当たり前ということであつたのだらうし、向こうの世において副葬品に見合つた地位に夫が就くと願つてのことであつたのだらう。

夫は、足掛け三年の喪に服すという儒教の原則を厳密に守つた。その間は仕事に就けず収入が途絶えた。義父の蓄えは葬儀であらかた使つてしまつたので、暮らし向きは次第に厳しくなり、夫は友人達に助力を仰いだ。私は父の屋敷で金金の苦勞というものをまるつきりしたことがなかつたので、やりくり算段は蓮妙先生にしてもらうしかなかつた。我が父晏殊に援助を頼むことはしなかつた。夫も父も喜ばないと思つたからだ。生活を切り詰めるにつれ、「こんな惨めな暮らしをするくらいなら、もう早く死んで夫のところに行きたい」と、義母は愚痴をこぼ

していつも機嫌が悪かった。大勢いた使用人は次第にいなくなり、最後に残ったのは包ほう十五という四十余りの男と孔六こうという少年の二人だった。

喪が明けると、夫はここ河陽かように職を得て、借銭を返すまではと、暮らしぶりは相変わらずで、当面は狭い住いに甘んじるしかなく、父の屋敷とはもちろん雲泥の差で、蓮妙先生一人のためのかつての庵くらいの広さしかない。使用人は二人だけのままで、全部で六人で生活している。

厨のすぐ横の小部屋が夫の居室だ。西日の当たる窓の下に机を置き、書物を読んだり、ものを書いたりする。厨では、夫の邪魔にならないよう、先生とごく小さな声で話すよう心掛けている。

夫に呼ばれたのは義母のことであろうかと思う。義母には家で最もよい部屋を使っていたき、特別な食事を用意している。それでも愚痴を並べ、怒鳴り続け

るかと思うと、急に口をきかなくなったりもする。包十五を呼び付けては何やかやと私や先生のことを言っているらしい。包十五はよくできた人間で、ただうなずいて聞いてくれてるので助かる。義母の怒りがあまりにひどいと、夫は私を呼び、例によって孝を説き、実際の揉め事については何も言わない。

厨との境からのぞくと、夫はいつも通りの位置に端坐している。明り取りの窓からは、机の上に広げられた紙の端がめくれあがるほどの風が入って来ている。いままで火のすぐそばにいた私には、冬の夕方の風が冷たく感じられるのだが、夫は気にする様子がない。

「ああ、来て下さいましたか。実はいまこれを書いていて、筆が止まってしまったのです。このまま筆を執らずにおくのか、それとも書き上げるのか、あなたに相談しようと思って、来ていただきました」。――

夫はゆっくりと振り返り、

「どうぞ、そこに座って下さい」。

扉の脇の小さな腰掛を指差す。

言われた通りにすると、夫は一度立ってこちら向きに直ってから改めて座る。

私は身を斜めにして足を縮める。

部屋がごく狭いの、夫は並みの人よりも背が高く、うつかりすると二人の膝と膝が当たってしまう。この家で夫婦で話をするときは大概このような具合で、私は足だけでなく体全体を縮めて夫の前で畏まらなければならぬ。

父の屋敷で、父と母が対座して話をするのを見たことがない。父は外に出ていることが多かったし、家にいるときはいつもせかせか動き回り、ものを書いたりするときは奥の書院に籠って人を寄せ付けなかった。屋敷にはのべつ来客があり、

その応接のために母は家人を指揮して忙しくしていた。

私は、自分の膝と夫の膝の間に作ることできたわずかな距離を保ちながら、

「何か御用でございましたか」。

義母のことではないらしいとわかり、少しだけ安堵する。

「いま申した通りの御相談です」。

夫は何やら不服そうに言う。

——それは、何のこと。

夫は何か書いていたと言っていたが、それは私が知っていなければいけないことなのだろうか。思い当たることはない。

私は余計に身を縮め、普段ならば、夫は堰を切ったように話し出すので、私はひたすらじっと聞いているということになる。全てが終わったところで、言われ

た通りにする旨の返事をする。そのようなことに慣れていたので、夫の次の言葉を待つ。

ところが、夫は何も言ってくれない。恐る恐る、いかにも間の抜けた感じで、「はい、そのようにいまお伺いしました」。

夫は、はっと気付いたように、

「ええ、そうです、そうなのです。あなたの考え次第で決めようと思っているのです」。

「私のでございますか」。

「ええ、あなたのです」。

そつと目を上げて夫を見る。細く切れ上がった夫の目が動く。いつも以上に厳しい顔だ。

私はすぐにまた膝の間に視線を落とす。

——私の考え。それは何。

全く見当も付かない。

夫は常に筋道立った話をする。それはそれでよく理解でき、言われた通りにするとの返事も、一応は納得した上でのことだ。夫はなかなか多弁で、これまでにたくさんのかたまりを聞かされた。しかし、どういうわけか、夫の心に触れたような気持ちになつたことはない。話が明快過ぎるからなのだろうか。

今日はいつもと様子が違い、不安になつて、思い切つて尋ねる。

「お伺いしてもよろしいでしょうか。いま何をお書きなのでしょうか。」

夫はきよとんとした顔になり、

「ああ、そうでした、そうでした。あなたにはまだ申しておりませんでした。私

の頭の中はそれで一杯になっていて、すでに話したような気になっていました。あれはお上に差し出す意見書、つまり上疏じょうそです」。

夫は上疏の二文字に力を込める。

「そのような大切なものを」。

私はとまどう。

父が大事な仕事に関する相談を母にしたのを見たことがない。男は外を治め、女は内を治める。それは、夫のもとに來た最初の日に聞かされたことでもある。

——これはどうしたことなのか。

上疏に限らず、夫からものを尋ねられたこともほとんどない。

夫は後ろ向きに首をひねり、

「あれが何の上疏であるかと申しますと、あなたもお聞き及びでありましょう、

皇后様がその御位みくらいを失われる事態が生じ、それをお止めしようとした我が師が都から追放されました。それに対して、大勢の方々が意見書を出しています。お上は一切お耳に入れようとされません。私は居ても立つてもいられず、あれを書き始めました。しかし、筆が止まってしまいました。それであなたに来ていただいたのです」。

夫が「我が師」と言うのは范仲淹はんちゆうえんのこと。一徹居士の仇名を私が献上したその人だ。

「まさに朝廷の大事に関わることではございませんか。それは御容赦願えませんでしょうか」。

私は腰を浮かしかける。

「いけません。そこにいて下さい」。

「大切な上疏に、女の私などが」。

そう言うと、ぽっと火が付いたかのように腹の底が熱くなる。

——どうして急に。私は内を治める女なのに。

夫は私の膝をぐいと抑え、

「そこにいていただかなければなりません」。

夫の声の調子が変わる。

「よろしいですか、この機会に申しておきます。いつかは申さねばと思っておりました。いまがそのときです」。

怒っているような様子に、今度は苦いようなものが腹中に広がる。

——これは何。

夫の心はわからず、自分の心もわからない。私はどうかしてしまったのか。

「よろしいですか、よく聞いて下さい。あなたに一つはなはだと言ってよいくらいの不満があります」。

夫の声は震えを帯びる。

夫の手は私の膝を抑えたままだ。その重みは耐えられないほどだ。

——この人は何を言っているのだろう。

「はい、申し訳ございません。何でございましょうか」。

私の声も震える。

——これ以上のことはできない。

熱さと苦さが混じりあつた腹の内を自分で見るかのように深くうなだれる。

夫は膝の上の手を放し、

「ああ、どうして、あなたは。いまのそれがよろしくないのです。どうして、そ

のように下を向いているのですか。どうして私の顔を見て話をして下さらないのですか。私が怖いのですか。これまで私があなを叱り付けたことが一度だってありましたか。もしもあつたのなら、遠慮なく、いついかなるようにならぬのかおっしゃって下さい」。

「はあ」。

私は喉の奥を鳴らす。

——何を言っているのだろう。いままさに叱られているのではないのか。

そうとは言えずに、黙ったままで顔を少しばかり上げる。夫が睨んでいるようで確かに怖い。また顔を伏せかける。

その瞬間に、夫の目が悲しげに変わる。

「不満があると申したのは、まさにいまのことなのです」。

夫は首を大きく左右に振り、

「私が怖いのなら、そうおっしゃって下さい。私の顔は見るからに怖いでしょう。

私はこの通り背が高いです。大きくていかつい顔の男は、女の人にとって恐ろしいに違いありません。背が高いのも顔がいかついのも生まれ付きです。それが嫌だとあなたが感じているのなら、思っている通りになぜおっしゃって下さらないのですか。いまあなたは叱られていると感じているのでしょうか。そうに違いありません。私は叱ってはいません。でも、あなたは嫌なんでしょう。だったら、どうして嫌だとありのままにおっしゃって下さらないのですか」。

夫の声は愁いを帯びる。

「いえ、私は」。

その後が継げない。

——この人はどういふ人なのだろう。

腹の熱さは引いて行く。

夫は今度は大きく嘆息し、私の膝にそっと触れ、

「申し訳ありません。ずっと私が怖かったのでしょうか。私が叱ってばかりいるとずっと思っておられたのでしょうか」。

「いえ、そのようなことは」。

小さく声を出す。

夫は手を離し、斜め上を見るようにし、少し間を置いてから、

「呂蒙正様は、私の大恩人です。七歳のときに、お屋敷のお坊ちやま方と一緒に勉強するようおっしゃって下さいました。あなたもそれは御存知でありましょう」。

「はい」。

私は相槌を打つ。

——どうしてその話になるのだろう。

夫はいつもの口調にほぼ戻って続ける。

「呂蒙正様はお若いころに大変な御苦労をなさいました。お父様とお母様の仲が悪く、お母様とともに家を出て、ひどい貧乏の中で勉強に励まれました。呂蒙正様は科挙に首席で合格され、お上より官職を授かりますと、お父様とお母様をお家にお迎えしました。御両親に孝行なさろうということであったのです。しかし、お父様とお母様はお二人とも互いに顔を合わせることを拒否されました。同じ敷地の中であつても、別々の建物に住み、生涯口をきくことがなかったと聞きます。それで夫婦と言えましようか。どう思われますか」。

「悲しいことと思います」。

小さく短く答える。

夫はまた話を交える。

「世の中には君子くんしと小人しょうじんがいます。君子は仁じんを知って実践する者、小人は仁を知っているか知らずにいるか、仁を実践しない者、実践しようとしなない者です。君子と小人の関係はあたかも氷と炭の関係に似て、同じ器の中にあつてはいけないものです。氷と炭は、氷が融けるか、火が消えるかして、両者はともに己を全うすることができません。君子と小人が同じ器にある場合には、残念ながら、小人が君子に必ず勝ちます。佳き香りのする花と、悪しき臭いのする糞尿を同じ器に盛ったなら、悪しき臭いだけになってしまうのと同じです。遙か昔からの治乱興亡を顧みて、平和に治まっていた時代がわずかしかなく、絶えず戦乱ばかりであったのはこの理由によります。いまの世において、君子と小人はいかなることに

なっているのでしょうか。どう思われますか。

夫に問われたのだけれど、話の脈絡がまるで見えていない。とりあえず無難そうに、

「いまの世には、科挙の試験が、君子と小人を選り分けるものとしてあるのではないのでしょうか」。

夫はうなずき、

「呂蒙正様のお父様とお母様の仲が悪かったのは、どちらかが君子でどちらかが小人であったのでしょうか。それともお二人とも小人だったのでしょうか。どう思われますか」。

私は応答に困り、

「夫婦の間にも、君子と小人というようなものがあるのでしょうか」。

「ありましよう。君子同士の夫婦は、例えば、その昔の襄陽じょうやうの龐徳公夫婦ほうとくこうがありました。御存知でありましようか。当時、天下を狙って野心満々であつた劉表りゅうひょうは、賢人として名高い龐徳公を自分のところに招こうとしました。劉表は龐徳公を訪ね、『天下を保つためにあなたが必要です』と言いました。傍らでは、龐徳公の妻が息子とともに畑の草むしりをしていました。劉表は言いました。『先生はこのように畑で御苦労されて、それで子孫のために一体何を遺されるのですか』。龐徳公は答えました。『世の中の人が遺そうとするものは危うく、私が遺そうとするものは安らかであります』。龐徳公は劉表に全く取り合わず、劉表はあきらめて立ち去りました。その後、龐徳公は妻とともに山中に入り、それっきり戻つて来ませんでした。龐徳公とその妻は、互いに友人に對するように礼儀正しく接し合つていたといひます。まさに君子の交わりです。私はいま深く龐徳公夫婦を思います。

私は龐徳公と違って、お上にお仕えする身です。私には詩賦が作れないという欠点がありながら、お上は私を拾って下さいました。お上には大きな御恩があります。しかし、だからといって、理非を曲げることはできません。お上に申し上げるべきことは申し上げなくてはなりません。それがお上のお気に召されずに免官となるのならば、龐徳公のように躬耕まごうして世を送るつもりでいます。父上の喪が明けて再び職に就いたばかりでそのようにする夫を、妻であるあなたは、龐徳公の妻のようにわかって下さるものと私は願っています。違いますか」。

「私は」。

その後の言葉が継げない。夫が何を言っているのか呑み込めずにいる。

「ああ、いけません、これは唐突でした。私の頭の中は一杯になっていて、あなたがすでにすっかりわかっておられるような気になっていました。私も驚いてい

ます、このように唐突に申し上げたのが。あなたをお呼びしたときに、このよう
なことを申し上げようとは考えていませんでした。いつもは、あなたにお話しす
べきことをよくよく考えて、順序立てて申し上げていました。そうするのが礼儀
だと思っからです。あなたに不満があったのは確かでも、何が不満であるのか、
訝しく思いつつもわかっていませんでした。それを突然、いまはどうしたこと
でしょう、考えたこともないようなことを申ししてしまいました。しかし、言ってみ
てわかりました。これこそが間違いなく私の言いたいことだったのです」。

いつもとは様子の違う夫にとまどいは大きくとも、腹中の苦いものはすでに消
えている。夫の言っていることが少しわかって来る。

「申し訳ありません。至らぬ妻で」。

言葉としては謝ることしか思い浮かばない。

「あなたが謝ることではありません。私がより多くいけなかったのです。龐徳公夫婦は互いに友人のようであったと申しました。友人とは何でありましょうか。どちらかが上に立ち、どちらかが従うというのでは友人ではありません。互いに忌憚なく言い合って、互いに高め合って行くことができるというのが真の友人、君子の交わりでありましょう。私の不満というのは、そのような友人にいつまでもなれないでいることであつたのです。私は最初の日に、妻としての心得を説きました。あのとき、君子の交わりということには思いが至りませんでした。人は身勝手なものです。私はあなたに対して不満を抱いていました。いまわかつてみたら、私の方にこそいけないところがあつたのでした。もう遅すぎましたか。申し訳ないとの私の思いを受け止めてはいただけないのでしょうか」。

夫は、私の膝に付くくらいにまで頭を下げる。

——この人は一体。

にわかに関自分が恥ずかしくなる。

嫁としての努めを果たすこと、耐えることばかりを考えて、夫の心の内をどれだけ知ろうとして来ただろうか。夫を怖いと感じ、夫をわからないと感じ、夫に言われる通りにしているのが嫁であると、そこで止まっていた。

我が身を奮い立たせるように言う。

「二つお尋ねしてもよろしいでしょうか。友人とおっしゃっていただけになるには、どのようにしたらよろしいのでしょうか。私なぞにそのようなことができるのでしょうか」

夫は顔を上げ、

「あなたならできます。ただ、私が思いますに、友としての交わりはいかにある

べきかと一方が尋ねて、一方が答えを示すというのでは、やはり真の友とはいえないのではないのでしょうか。自ずと心が合致してこそ友なのではありませんか。

これまでは私が一方的に申し上げて、あなたは常に『承知しました』と答えて来られました。それを他ならぬこの私が求めていたのは間違いありません。私達はいまが始まりです。ともに歩み出したいと思います。どうかそうして下さい」。

夫は私を見つめる。

「私にできるのでしたら」。

そう答えて、夫の膝と当たらぬ距離を保とうとしていた身の緊張がほどける。

「ありがとうございます。では、第一歩です。始めに戻って、あなたにここに来ていただいた御相談です。友人として御意見をお聞かせ下さい」。

「はい」。

返事はしたものの、朝廷の事件について私の知るところはほとんど何も無い。

「あなたの思うところを率直におっしゃって下さい。私の気に入るようなことを言おうとか、変に気をまわさないで下さい」。

「わかりました」。

「もう一度申し上げます。私はお上をお諫めする文章を書き始めました。お上には深い御恩があります。お上は遥か天上のお方で、私は駆け出しの地方官です。

それでも、お上に過ちがあられたならば、臣下として見て見ぬふりをしてはならないと思うのです。高位に名を列ねながら、明らかな過ちにも、お上に阿おもねって

お先棒を担ぐ者もいれば、じつと口をつぐむ者もいます。私にはそのようなことはできません。天下のために言うべきことは言わずにはいられません。まさに我が師がその範を示されています。是を是とし、非を非とすることについて、君臣

の間に少しの遠慮もあつてはならないのです。そのような思いから、私は筆を執り始め、しかしすぐに止まってしまいました」。

夫はここで一拍置き、

「いま君臣の間に遠慮はあつてはならないと申しました。省みて、この家においてはどうかだつたでしょうか。家の中でできていないことが、外においてできません。矛盾ではないでしょうか。私はお上にお仕えする身です。いまの宋の世の臣下は、昔の奴婢ぬひのようにお上の御命令にただ従うだけのものではありません。あなたはこの家を買われた奴婢ではありません。宋の世の我等士大夫は、新しい臣下のあり方を示すべきだと私は考え、まさにそれを実践している我が師を見習つて来ました。君臣の間が新しく変わって行くのなら、夫婦の間だって新しく変わっていいのでしょうか。どうか、友人として、あの上疏を書き進めるべきか否か、

あなたの考えをお聞きかせ下さい」。

とまどいはまた大きくなり、

「そのようにおっしゃって下さるのを大変嬉しく存じます。そうさせていただけうと思います。ただ、正直に申して、怖い気がいたします」。

「何が怖いのですか。私がですか」。

「いえ、私の考えを申し上げるのがです」。

夫はうなずき、

「私もお上にものを申すのを怖いと感じます。しかし、それ以上に天を畏れ、民を畏れます。言うべきことを言わねばなりません。あなたもどうか言つて下さい」。

いえ、これはあなたに強要しているではありません。私に言われたから、仕方なくものを言うというのでは友人とはいえませぬ。言いたくなければ、言いたく

ないとおっしゃって下さい。それでいいのです。あなたの思いを私は尊重いたします」。

「そのお言葉をまことに有難く思います。ただ女の身でありますから、お師匠様の身に何が起こったのかをほとんど存じ上げません。何もわからないでは何も申し上げられません」。

「確かにそうでありましょう。このたびの件で私が知っていることをまず申し上げておかなければいけません。それをどのように受け止めたか、くどいようですが、どうか率直におっしゃって下さい。私に左右されることなくあなた御自身のお考えを聞かせて下さい」。

「はい、そのように努めてみます」。

私は身構える。

内を治めるといふ女の徳に閉じ込められていた私に、外に出てもよいと夫が言う。しかし、本当にそうしていいのか、強いためらいがある。

——だって、この人からも何度となく女の徳を聞かされたのだから。

にわかには私の脳裡に女子状元の幻想がちらつき出す。嫁に来てからはそれを想わぬように努めていた。嫁の身の現実と女子状元の夢とでは違いが大き過ぎる。

——私だって、宰相になるはずだった。

急に気持ちちはじける。

——だったら、私だって上疏を書いたのだ。

不意に可笑しくなる。

——この夫を驚かせてやる。

そう思い付くと、すぐにも駆け出したくなる。そうしていいのか、いまよりも

かえって妙なことになるはしないかと、一方で気持ち揺れるのだが、すでに自制は利きそうにない。

夫は制科に合格したところにさかのぼって話を始める。

第二の注。

士大夫の仲間入りを果たした富弼は范仲淹を手本とした。その当の范仲淹が「修謹」と評した通り、上役といきなり衝突するようなことはなく、官員としてまづは穏やかに歩み出した。しかし、すぐに父が死に、足掛け三年の間、官職から離れなければならなかった。

天聖八てんせい（一〇三〇）年十二月、范仲淹は大政を皇帝に還すべきとの意見書を再び

劉皇太后りゅうわうに提出した。このために中央から追ひ払われたのに、全く懲りない一徹

居士の面目躍如たるもので、当然のことながら一顧だにされなかった。

めいじどう

明道元（一〇三三）年二月、宮中の片隅で李宸妃りしんひが亡くなった。李宸妃は仁宗皇

じんそう

帝の実の母で、そのことを知るのはごく少数で、皇帝は劉皇太后の子だとされていた。劉皇太后は、李宸妃が子を生むとすぐに手元に引き取って自分の子とし、楊妃ようひに子育てを委ねた。李宸妃は我が子との接触を禁じられ、宮中の奥でひっそりと生きることだけが許された。その秘密を知る宰相りよいかんの呂夷簡は、李宸妃を皇帝の生母にふさわしく、皇后並みに手厚く葬るよう劉皇太后に勧めた。劉皇太后は遠い将来を見越した呂夷簡の提言に従った。晏殊あんしゅが李宸妃の墓誌を書いた。

その年の八月、晏殊は執政になった。五年前に不祥事で都から出されたのを教訓として、劉皇太后と呂夷簡の信頼を獲得するよう努め、そのかいあつて宰相に次ぐ地位に昇ったのである。

明道二（一〇三三）年三月、劉皇太后が死んだ。仁宗皇帝は初めて己の出生の秘密を知り、生母が生きている間に母と子として会えなかったのを深く悲しんだ。ある者が、李宸妃は普通ではない死に方をしたと皇帝に告げた。皇帝は劉皇太后を疑った。李宸妃の弟の李用和りようわを李宸妃の陵に派遣し、生母の亡骸を検分させた。皇后と同様の扱いで手厚く葬られているとの李用和の報告に、皇帝は劉皇太后への恨みを一応のところは解いた。しかし、晏殊が書いた墓誌に、李宸妃が皇帝の生母であるとの記述がないことには憤りを隠さず、晏殊は都から追放された。

晏殊ほどの大官が左遷になると、その影響は多数の親類縁者に及ぶ。科挙に一人合格すると一族が潤うといわれ、逆に一人が失脚すると一族全体が沈む。晏殊が愛してやまない西園をどうするかというのも大問題で、妻の孟氏もうはしばらくの間都に残って後始末に東奔西走した。孟氏は何事も完璧にせずにはいられない

性格で、事を終えて夫の任地に着いたときには疲労困憊の態で、すぐに病の床に伏せ、そのまま世を去った。

仁宗皇帝の親政が始まり、晏殊のみならず、劉皇太后の腹心だった者が朝廷から一掃された。当初、呂夷簡だけは宰相のまま手元に残しておくつもりでいて、誰を罷免し誰を新たに用いるかということを経帝は呂夷簡と相談した。郭皇后が「機をみて最も巧みに皇太后様に応じていたのは誰だったでしょうか」と呂夷簡を手厳しく批判し、皇帝はまことにもっともと考え、最終段階で呂夷簡も追放者の名簿に加えた。朝廷においてその名簿が順に読み上げられると、呂夷簡は初めて自分も追放されると知って驚愕した。為すすべなく都から出て行った後で、郭皇后の一言が己の命運を左右したと聞いて大いに恨んだ。

皇帝は、劉皇太后のために地方に遠ざけられていた者を次々に召し寄せた。范

仲淹もその一人だった。このような趨勢に乗って、劉皇太后の時代にあったことを全て否定的に言って、皇帝の歡心を買おうとする者が多数現われた。劉皇太后の功績は大きく、軽々な言説は控えるべきだと強く主張したのが、劉皇太后に最も批判的だった范仲淹だった。そのような范仲淹の姿勢を皇帝は高く評価した。

呂夷簡に代わって張士遜ちやうしそんが宰相の筆頭になった。張士遜はかねてから皇帝と近しく気心が知れていた。皇帝としては、張士遜がいてくれると安心と思ったのだろうが、実際には全く頼りがいがなく、仁宗皇帝の親政はうまい具合には動き出さなかった。皇帝は半年間で張士遜を見限り、呂夷簡を呼び戻した。呂夷簡が宰相に復帰すると物事はきれいにさばかれ、仁宗皇帝による政治はようやく安定した。晏殊は亳州はくしゅうに左遷されたままで、西園も妻も失って悲嘆の度を強めた。

呂夷簡が皇帝の心を掴むと、先にその追放を勧めた郭皇后は皇帝の信頼を失っ

た。もともと郭皇后は皇帝にとって煙たい存在だった。郭氏は劉皇太后によって選ばれて皇后になったのだが、そのころ皇帝は張氏ちやうという別の女性を寵愛していた。できれば皇后にしたいと望んでいた。劉皇太后はそれを許さなかった。郭皇后は勲臣の孫娘で、聡明かつ強い性格で、劉皇太后が後ろについていることもあって、皇帝にずばずばものを言った。

劉皇太后は亡くなるに際し、仁宗皇帝を育てた楊妃に後を託し、楊妃は皇帝の母、つまり皇太后ということになった。ただ楊皇太后は温厚な性格で、仁宗皇帝に対してものを言うようなことはなく、皇帝はすっかり羽を伸ばし、尚氏しやう、楊氏という二人の女性を特別に寵愛するようになった。二人を常に近くに置き、二人は連携して郭皇后の悪口を皇帝の耳に注ぎ込んだ。ある日、皇帝の前に郭皇后、尚氏、楊氏の三人が顔を揃え、尚氏はいつものように郭皇后をけなす言葉を吐い

た。郭皇后は日頃の鬱憤を爆発させ、立って尚氏に歩み寄り、その頬を叩いた。皇帝は尚氏をかばおうとした。郭皇后の爪が誤って皇帝の首を傷つけ、鮮血が飛んだ。皇帝は激怒した。

皇帝の体を傷つけるのは大変な犯罪だ。呂夷簡はここぞとばかりに、郭皇后を追い払う工作を進め、皇后となってすでに九年にもなるのにまだ子がいないのは廃してしかるべきだと、ある大臣に言わせた。

皇后の命運を巡って朝廷の内外で様々な憶測が飛び交った。范仲淹は、このよ
うなことは外聞がはなはだよろしくなく、とやかくあげつらうのを禁ずべきだと
主張した。その本旨は、廃后そのものがよろしくないというところにあった。

呂夷簡はそれを無視し、廃后を強く皇帝に勧めた。郭皇后が自ら道教の寺院に
入りたいと願い出て、それを皇帝が許可するという形で廃后が進められることに

なった。呂夷簡は、范仲淹等が反対するのを警戒し、この件に関する意見書は一切受け付けないという決定を朝廷であらかじめしてから、皇后の願いを許可する旨の詔を出した。范仲淹は意見書が出せないで、考えを同じくする人々とともに、皇帝が臣下を謁見する御殿の門の前にひれ伏し、皇帝に申し上げたいことがあると叫んだ。門は鎖されたまま開かれなかった。人々は門を叩き、大声で叫んだ。その騒ぎが皇帝の耳に達し、皇帝は、廢后の理由をきちんと人々に説明して引き下がらせよと呂夷簡に命じた。呂夷簡は門の前に立ち、人々を説得しようとしたが、人々が次々に浴びせかける質問にかえって窮してしまった。呂夷簡もさる者で、別の技を繰り出した。明日皇帝の前で改めて議論しようとなんに提案した。范仲淹は、皇帝の前で意見を戦わすのは望むところと退去した。呂夷簡は人々がいなくなると、すばやく、宮中で騒ぎを起こした罪で范仲淹ともう一人の首謀

者を都から追放するための手続きを進め、翌朝、范仲淹等が参内して来たところで命令書突き付け、そのまま都の外に放り出した。

この強引な措置に意見が噴出した。特に若手官僚には富弼のように范仲淹を手本と仰ぐ者が数多くいて、廃后に反対し、范仲淹に罪はないとする意見書を相次いで上呈した。呂夷簡は全て黙殺した。

ここまで話すと、夫は拳を震わせ、

「我が師は、我等士大夫が進むべき道を指し示されています。我が師に続く者がここにものゝけることを天下に示さずにはいられません」。

夫は興奮を隠さず、

「皇后様に廃されねばならないほどの過ちがあったとは聞きません。理不尽です。

このようなことは、太祖皇帝、太宗皇帝、真宗皇帝の三代にわたっていまだかつてありませんでした。お上の御親政が始まってまだ日も浅いというのに、祖法に背違するようなことがあつては、我が宋朝はいかなることになつてしまふのでしようか。憂えずにはいられません。何としてでもお上をお諫めしなければなりません」。

夫は睨むようにして天井を見上げる。

それ見て、先ほどの夫の言葉を疑い始める。

——何のために呼ばれたのだろう。

夫の気持ちは決まつている。走り出していた私は失望と反省で立ち止まる。夫を驚かせようとの企みはたちまちしぼむ。

——女は内を治める。それでいい。それ以外はあつてはならない。

夫は声の調子を少しだけ戻し、

「私は一気呵成に上疏を書き上げようとして、しかし、筆が止まってしまいました。書き進めて行くうちに、何をお上に申し上げようとしているのか、よくわからなくなってしまうのです。書きかけていたのは、范仲淹殿がすでにおっしゃったのをなぞるものであり、あるいは他の方々がすでに書かれたのと同じです。それをまた繰り返してどうなるのでしょうか。皆に遅れつつも、ここで敢えてお上の非を唱え、我が名をいくらかでも天下に知らしめようというのでしょうか。それは私の望むものではありません。しかし、何と少しでもお上をお諫めせずにはいられない気持ちがあります。それはどうしてなのでしょうか。」

夫は胸を抑え、小さく嘆息し、

「私が上疏すれば宰相殿はきつとお怒りになり、お上の逆鱗に触れるかも知れま

せん。官に就いてまだ間のない私でありますから、免官もあり得るでしょう。そうなればあなたにも影響します。龐徳公夫婦を理想とすると申しました。龐徳公の妻は夫の傍らで黙々と草をむしっていました。妻の意思はそこに示されています。龐徳公は劉表の誘いを断り、妻とともに山中に隠れました。あなたはどのようなのでしょう。何を申さずとも、妻は夫の考えに従うのがいいとの独善を私はよしとしません。あなたの考えをお聞かせいただきたいのです」。

——ああ、そういうことなのか。

先ほども、龐徳公夫婦について夫は同じことを言っていた。そのときとは聞く私の気持ちが変わっている。

これは要するに私に覚悟を求めているのだ。免官となれば暮らしは厳しくなる。私も相談ずくで決めたのなら、何があっても耐え忍べということになる、そ

うことに違いない。つまり、私の考えを聞きたいわけではないのだ。

そこまで思つて、私は唇を噛む。

——愚かな邪推だ。

顔を伏せる。

夫は天下のことばかりを思っている。理非を明確にせずにはいられない夫は、もつてまわつた考え方はしない。

私は混乱し、

「どのようなことを申し上げたらよろしいのでしょうか」。

夫は私に目を向け、

「あなたはまたそのようにお尋ねになるのですか。答えを私が申して、その通りにあなたが繰り返したのなら、あなたの考えを聞かせていただいたことには少し

もなりません。違いますか」。

「はい、おっしゃる通りです」。

「どうぞ、あなたの思うことを率直に聞かせて下さい」。

「はあ」。

同じやりとりの繰り返しに、私はある種の覚悟を決める。邪推も混乱もなくす。

——率直にと夫は言っている。だったら文字通りそれに従えばいい。妻は夫に従うものなのだから。

改めて走り出そうとする。

「では、思うことをありのままに申し上げます。廃后についてでございますが、正直に申して、とりたてて何も思うところはありません」。

夫は虚を突かれたように、

「それはまことですか」。

「ええ、何もありません」。

きつぱりと言いつ切る。

「廃后がよろしいのかよろしくないのか、何も思ったりしないのですか」。

「廃后がどうしてよろしくないのかが私にはわかりません」。

「どうしてですか」。

畳かけて来る夫に何やら腹立たしくなる。

——内を治める女にとって、廃后など知るところではない。

それでも困った風を装い、

「わからないところだらけなのです。申し訳ありませんが、一つ二つお尋ねしてもよろしいでしょうか」。

「どうぞ」。

「そもそも皇后様を廃される理由としてはどのようなことがあるのでしょうか」。

「すでにお話した通りです。第一にお上のお体を傷付けられました。第二にいまだに子がありません。詰まるところはこの二点でありましょう。第一の理由だけでも十分とされますし、天下の跡取りの有り無しは極めて重大です」。

私はぼそりと、

「この私にもまだお子はありません」。

夫は少々ぎくつとしたような顔で私を見てすぐに目を逸らす。

義母は、子のないことを時折非難がましく口にする。それを理由に離縁を迫られたならば、それならそれで開き直ればいいだけだと思ってしまう。これまで怖いとばかり感じていた夫であるから、いわゆる琴瑟相和するというわけに

はいかない。服喪中は夫はひたすら身を慎んでいた。子のできようはずがない。

夫は少々慌て気味に、

「ですから、皇后様を廃される理由とされているものは十分に正当であるとい言
い難いのです。それで、廃后は非であると人々も申しているのです。宰相殿は人々
を十分に納得させられなかったので、我が師を強引に追放してしまったのです」。

夫を驚かせてやろうとの思い付きがはつきりと戻って来てたちまち膨れ上がり、
「思う通りのことを本当に率直に申し上げてよろしいのでしょうか」。

「ええ、何度も申していますように、どうかそうして下さい」。

「私の思いますところ、皇后様を廃される真の理由は別にあつて、もしそうなら
ば、お止めするのははなはだよろしくないのではないかと思ひます」。

「廃后を是とするのですか。それはどういうことですか」。

「ここから先は、お上にいささか不敬を申し上げることにあります。ここにはあなたさましかおられませんので、思うままに申し上げます」。

「あなたのいかなる考えも尊重します。友としてそうでなければいけません」。

「真の理由とは別に難しいことはありません。ごく単純に考えて、好きでもない人と夫婦になっているよう周りから強制されているのがはや我慢がならなくなつたというだけのことではないのでしょうか」。

夫は目を丸くし、

「はあ、そうなのですか」。

「聞くところでは、かつてお上には意中の方がおられたそうです。そしていまはまた別の女性を愛されているとか。お上がお気付きであるかどうかは別にして、偽りにはもう耐えられないということでありましょう。それが一番の理由である

のなら、お止めするのはよろしくないと思います」。

「偽りと申されますか。お上が多くを女性を愛されるのは特殊なことではありません。ただし、皇后様は天下の母であります。それにふさわしいお方でなくてはなりません。お亡くなりになった皇太后様が最もよいお方をとお選びになったのがいまの皇后様です。好きであるとか、好きでないとか、そのようなことで簡単に変えていいとは思えません」。

「夫婦であることに、好きであるのか、好きでないのか、それはさほど重要ではないのでしょうか」。

「もちろん深い愛情があるのが望ましいでしょう。しかし、皇帝と皇后は国家の頂点に立って、国の形そのものを定めるわけですから、個人的な感情でどうこうしていいものではありません。個人の情が国家を揺らがすようなことがあっては

ならないと思うのです」。

「皇帝と皇后は天下の民のお手本なのではありませんか。御夫婦睦まじくあるのが家を定め、国を定める基本となるのではありませんか」。

「そうではありませんが」。

夫は腕を組んで考え込む。

お上を手本とするのなら、我々夫婦はどうなのか。この夫が好きであるのか、好きでないのかと問われたならば、返答は少なからず困る。そのようなことは一度も考えたことがない。父の定めに従って妻になった。最初の日には嫁はこうあるべきだと夫に教えられた。それ以外に何があっただろうか。

夫は何やら気まずそうに、

「先ほど申した通り、私は龐徳公夫婦のようになりたいと望んでいます。龐徳公

夫婦は夫婦であり友人でもありません。それで思いますに、夫婦というものは少々の事情でどうかしていいようなものではなくて、つまり、それで廃后には反対なのです。お手本でありますから」。

夫は急に話の筋道を変え、そのことにほんのり温もりのようなものを感じ、

「私ども夫婦のことは、あなたさまのおっしゃる通り、龐徳公に習うといたしましょう。お上について申せば、皇后様を廢される真の理由が私が申したようなことであるのなら、お止めするのがいいと思いません。お止めしようとすればするほど、お上はますます頑なになられて、人の言うことに耳をお貸しにならなくなりましょう。好きとか嫌いとかいう情はたぶんそのようなものでありましょうから」。

夫は額に手を当て、

「わかりました。あなたの考えを尊重します。廃后についてお諫めするのはやめましょう」。

「では、その上疏は取り止められるのですか」。

「ああ、それです。いま思いますに、筆が止まったのは、廃后についてお諫めするのはどこかに無理があると私も感じていたからであるのかも知れません。あなたがそれについて正しい判断をして下さって、それで上疏はしないでよいかという、そうではないようです。私の胸には出さずにはいられない何かはまだあります」。

「それはお師匠様のことなのではありませんか」。

「その通りです。まさにそうです。これで問題がはっきりしました。廃后と師のこととを分けて整理しなければいけなかったのです。混然と考えていたために、

何を書いたらいいのかわからなくなってしまったのです。

夫は得心した顔付きで、

「あなたのお蔭で事柄が見えて来ました」。

私はうなずきつつ、一度だけ会ったことのある一徹居士を思い起こし、端的に夫に訊いてみる。

「お尋ねしますが、お師匠様のどこが最もすばらしいのでしょうか」。

「全てが御立派です。最もすばらしいのは何かと、敢えて一つを挙げるとすれば、いついかなるときにも堂々と御自身の意見を言われることでありましょう。私もそのようになりたいと思っています」。

「でしたら、そのことをお上におっしゃったらよろしいのではないのでしょうか」。

「私も師のようになりたいということをお上に申し上げるのですか」。

「いえ、あなたさまだけでなく、誰もがお師匠様のようになれるようにと申し上げるのです」。

「どういふことですか」。

「あなたさまは君臣の間に遠慮があつてはならないとおっしゃいました。それをそのままお上におっしゃったらよろしいのではないのでしょうか。思いますに、それをお書きになることが、いまのこの時代を生きているあなたさまの責務なのではありませんでしょうか」。

夫を驚かせたいとの思いはさらに高まつていて、「いまのこの時代」というところに力を込める。これは蓮妙先生に聞かされたあの話のままだ。

「いまのこの時代とはどういう意味ですか」。

夫はすぐに聞き返して来る。

「私たちは、昔の例えば唐の時代ではなくて、ほかならぬいまのこの時代を生きています。いまでなければできないようなことをするのが、いまの時代を生きる者の努めなのではありませんか」。

蓮妙先生の言い回しのままだ。

自分がいま昂揚している理由がはつきりとわかって来る。国の将来を私が変えるようなことがあるかも知れないと蓮妙先生が言った。いままさにそのことが起ころうとしているのではなからうか。

いまの時代に女子状元はまだいない。君臣の間でも、夫婦の間でも、遠慮なく自由にものが言えるようにと、いまの時代を生きる者がその努めを果たして行くのなら、いつしか女子状元が生まれるときが来るのではないだろうか。

夫は膝を打ち、

「わかりました。廢后は遠い昔からあり、廢后を諫めた人々は遠い昔から大勢いました。いまの時代だからこそ言うべきことが確かにありましよう。宋の世の臣下は昔の奴婢ではありません。我が師のような人は、いまも稀であり、過去の王朝においてはなおのこと稀でありました。昔の王朝であれば、我が師はとつくに獄中で亡くなっていたでしょう。臣下が己の意見をお上に述べるのがこれほど活発であるのはかつてなかったことです。それを切り拓いて来られたのが我が師です。我が師一人でもって終わらせてはなりません。はっきりわかりました。ここで我が師を救えなくては、遠い将来にわたって禍根を残します。いままさに正念場であるでしょう。あなたおっしゃる通り、いまのこの時代を生きる者の責務です。我が師を救い、将来の士大夫を救うのです。我が意ははっきりと定まりました。この思いを書くならば、いかなることになっても、私は後悔せずすみ

ます。後世に恥じることもありません。後は龐徳公夫婦のように貧苦に甘んじて生きて行けばいいのです」。

夫は顔を上気させ、私の手を取り、

「そなたを妻に迎えてよかったと、いましみじみと思います」。

「女の身でありながら、率直過ぎるばかりにものを申してしまいました。どうかお許し下さい」。

夫ははにかんだような笑みを見せ、

「では、これより筆を執って書いてみます」。

夫は机の方に向き直ろうと立ちかけてよろける。膝と膝とがぴったりくっついていて、夫の足の伸びる余地がなかったのだ。距離を保つことにあれほど意識していたのいつの間にかこうなっていた。

夫は窓側に向かって座る。

その窓からずっと入り続けていた夕暮れ時の風を冷たいと感じることはなかった。

私は灯の仕度をして夫の手元を明るくしてから厨に戻る。

蓮妙先生は自分達の食事の支度をしている。

「あちらにはお運びいたしました。旦那様の御用でと申し上げましたところ、何も御返事はございませんでした。後でお膳を下げるときにお顔をお出しすればよろしいかと思えます」。

「ありがとうございます。そうさせていただきます」。

昂揚していた気分がすつと冷めて行く。

——この現実が変わらない。

「何かこみいったことだったのでしょか。大層長いことをお話しされてしましたけれど」。

先生は心配そうに言う。

——あれは現実だったのだろうか。

いま夫と話をしたことが不意に疑わしくなる。

——あの人はどういう人なのだろう。

私は先生を安心させようと、

「よいお話でした。これで私もこれから先もやって行けそうな気になりましたから」。

自然と口から出た言葉に驚く。

——これから先もとは。

もうこれで限界というところにあつたと改めて知る。

「それはよろしゅうございました」。

先生のしんみりとした声に私の目が潤む。

——ぎりぎりで救われたのか、それとも。

あれは一度だけの幸運であつたかも知れない。事がたまたま范仲淹に関わつていたので夫は聞いてくれたのではなからうか。

私は目頭を拭い、

「さあ、私は何をしたらよろしいのでしょうか」。

直ちに目の前の現実に戻ろうとする。嫁としてすべきことだけをして来たからこそこれまで耐えていられたのに違いなのだから。

第三章 まあまあ、それもわかりますけれど

父こうていに呼ばれる。

康定元（二〇四〇）年三月。

思いがけず生じた希望が少しでも確からしくなつて来ると、たとえわずかでも不安を抱かせるようなものがあると、かえつて敏感になつてしまうようだ。

都は春の真盛り、それを西園でこそ味わうべしとの父の招きに応えて息子を連れ
れた。

長らく地方に出されていた父は二年前に都に帰還し、現在は知枢密院事ちすうみつゐんじという、
軍事方面を担当する重職にある。

夫は父よりも先に、三年前、深い学識をもつて皇帝の近くに仕える館職かんしょくという

任を授かるための試験を受けて合格し、いまは知諫院ちかんいんの任にある。諫院は官僚の不正を糾す機関で、知諫院はその長だ。先の上疏以来、正しいことは正しい、正しくないことは正しくないと、夫はきつぱりともものを言つて来た。そのことが知諫院の職にふさわしいと認められたのだろう。

舅と婿が揃つて朝廷の要職にあるのは、人から見ればまことに羨むべきことであるのだろうが、二人の関係は次第に微妙になりつつある。

「おお、よく来た、よく来た。ほほう、ちよつと見ぬ間に、また随分と大きくなつたではないか」。

父は中堂の外に床几を置いて待ち受けていた。日覆いの傘の下から飛び出て来たのを見ると、また少しばかり太つたようだ。「削るが如き」と言われた若いころの面影はすでない。

思えば父も五十歳だ。朝廷での地位からしてもこれくらいの貫禄がついてしかるべきだろう。せつかちであるのは変わらない。ばたばたとやって来るなり、両腕を伸ばし、いきなり孫を抱え上げようとする。そこではたと手を止めて首をかしげ、

「ああ、いや、よそう、よそう。また腰を痛めてもいけないからな。これだけ大きいと、きつと目方もかなりあるのだろうな」。

孫の肩をぽんと叩き、

「子供というものはすぐに成長する。これで幾つなんだい」。

私は息子の背を軽く押し、

「ぼかんと突っ立っていないで、お祖父様にきちんと御挨拶なさい」。

紹庭は、

「はい」。

やや上ずった声で、いささかぎこちなく頭を垂れ、家で練習した通りに言葉を並べる。すぐに振り返って、「どうだった」という顔をする。

父は相好を崩し、

「いやあ、上手にできた。これなら宮中に出たって、立派な御挨拶ができるだろう。さぞかし勉強もよくしているのだろう」。

そして、孫の仕草に似せて馬鹿丁寧な挨拶を返す。

紹庭はどきまぎして、私の方を見る。

「お祖父様は、幾つになったのかとお尋ねでしたよ。それから、お勉強のことも。ちゃんと御返事なさい」。

紹庭は顔をあからめ、

「はい。七歳になりました。それから、毎日、字を習っています。たくさん、たくさん、字を書いています」。

筆を使うように腕を振る。

「そうか、そうか、字をたくさんたくさん習っているのか」。

父も同じように腕を動かす。

「母上に教わっています」。

「ほう、お母さんにか。それはいい」。

父は私に目を向ける。

「ええ、この子の勉強くらいなら、私でも教えられますから」。

かつて蓮妙先生から教わったように紹庭に教えている。義母はははそれを見て、「近

頃の女はまことに大したものだ。あたしらと違って、学問も教えられるのだから、

全く見上げたものだ」と、どこか棘を含んだように言う。欧陽脩おうようしゅうの母の例を引くまでもなく、幼いうちは母親が学問の手ほどきをするのはいまではさほど珍しくない。そのために士大夫の家庭では娘にもある程度の教育を受けさせるのが普通だ。義母はまだそのような環境に恵まれなかった。

私はすでに四人の子を得て、息子や娘をきちんと育てるのが大きな役目となつて来た。それもまた大切な女の徳の一つだ。

「七歳か。もうそんなになつたのか。道理で大きいはずだ。君は、確かここに来るのは二度目だったかな。そうだろう。違つたかい」。

紹庭は振り返つて私を見る。

「どうぞ、お答えなさい」。

紹庭はうなずくと、前に向き直つて、

「三回目です」。

「ほう、三回。そうなるのかい」。

父がいぶかしげに言うので、紹庭はまたどぎまぎして、振り返る。

「ええ、三回目です。ほら、一昨年、お父様が西園にお帰りになったすぐのときに連れて参りました。それから昨年のお正月です」。

「ああ、そうか、そうであった。最初のときをすっかり忘れていた。あのとき、この子も来てくれたのか。いやあ、この子はわしよりもよく覚えてる。いいぞ、いいぞ、かしこそうな顔をしている」。

父は屈んで紹庭の顔をじっと見て、

「なるほど七歳か。ということは」。

父はかぶりを振って大きな笑顔を作り、何かものを言いたそうに口を動かした

つ私を見て、しかしまだ言わずにいる。

それで、

「ええ、ええ、わかっておりますとも。七歳といえ、お父様がみごとな詩をお書きになって、郷里の村で大評判をとったのが、七歳のときだったのでございましょう」。

父は大笑いし、

「こら、こら。孫の前で臆面もなく自慢するほどわしは間抜けではない。そうか、言われてみれば、勿論あれもわしが七歳のときであったのだが、そうではなくて、わしが言おうとしたのは、この子の父上、富弼殿ふひつのことだ。呂蒙正様りよもっせいに、お家のお子様方よりも将来有望であると認められたのは、富弼殿が七歳のときであったのではないのかい。そうだろう」。

私は笑いをこらえながら、

「はい、そうであったと聞いております」。

父は本当は孫の前で自分のことを言いたいに違いない。

父は紹庭の肩に手を乗せ、

「君はそのことを聞いているのだろうか」。

「はい」。

紹庭は小さくうなずく。

「呂蒙正様はさすがであった。見込まれた通り、富弼殿はまこと御立派になられた。いやあ、大したものであるぞ」。

父は大袈裟に何度もうなずいて私に目を向ける。そしてちよつと口をすぼめたのは、また何か言いたいことがあるのだろうか。

——やはり、そうか。

私は表情を変えない。

今日呼ばれたのがもしも夫に関わりがあるのなら、できれば何も聞かずにすまそうと心に決めていた。父は、まだ直接ではないけれども、夫から批判を受ける側にいる。そのようなことには立ち入らぬのが、妻として娘として賢明であろう。

義母^はは南人である我が父を最初から嫌っている。義母は用人相手に、諫院にいる息子が舅の鼻を明かすようなことをしてやったらいくらいのことを言ったりしている。父は都に戻るとすぐに西園を取り戻し、しばしば遊宴を開いている。その費用がどこから出て来るのかと義母は疑っている。父ほどの高官になればいくらでも甘い汁が吸えろと義母は思っている。父が財産稼ぎをしているのか、親族に利に敏い者がいるのか、そのあたりのことは私は知らない。

我が夫は蓄財には一切見向きもしない。知諫院の任にあればなおさらだ。義母は、都に来て暮らして余裕がないのを不満とし、弟や親類に何かやらせたらどうかと息子に勧めたりしている。かつてある高官が皇帝に貧苦を訴えたことがあり、そのころよりは待遇は改善されたけれども、お上から頂戴する俸禄だけではさほど楽ができるわけではない。夫は義母の言うことを耳に入れはしても、お上から授かった使命を果たす以外のことは何もしようとしない。義母はいくら言っても駄目なのは私が邪魔をしているからだと見ているようだ。

父はまた孫の方を見て、

「わしには呂蒙正様ほどの眼力はない。それでも、わしの見たところ、この子は、富弼殿の子、そしてわしの孫として、世間に胸を張れる立派な人間になるであろう。わしはしかとそう思う。何しろ、この子は両家の太い絆のあかしであるのだ

からな」。

父は「絆」という語に力を込めた後で、すぐに話を転じ、

「それにしても、子供の成長は速い。去年の正月に来てくれたのだから、一年と少ししか経っていないのに、まるで見違えるばかりではないか。で、どうだい、あそこから先もやはり見違えるばかりと、驚いてくれるのではないかな」。

西園の扁額を掲げた小さな門を指差しながらばたと歩み、その下で振り返り、にんまりと笑う。

私は紹庭とともに歩み寄り、

「今日はこれが楽しみでやって参りました。またいろいろとお庭に手をお入れになつたのでしよう」。

「今度こそはこれでもう完成だと思っている」。

「まあ、そうなのですか。いつでもお父様は何かしら新しいことを思い付くと、もうじつとしていられなくなるではありませんか」。

「わしだってもう年だ。いつまでも庭を未完成のままにはしておけない。これでもう十分と思えるところまで、今回は一つやってみた」。

「そういえば、ここに来るまでの間も、花を咲かせる木を随分と増やしたのではありませんか」。

「おお、そこに気付いてくれたか」。

「あれだけ咲いていて気の付かない人がいましたようか」。

「花の咲く時期、色の組み合わせ、あれこれ考えて配置した。去年のうちに植え終えたのが思った通りに花を咲かせてくれたので、花が終わらぬいまのうちにと、そなたに来てもらった。今日呼んだのは、つまりはそういうことだ。花だ、花だ、

花を見せたかったのだ」。

「それは、それは、ありがとうございます」。

父に笑みを向ける。

「まあ入るがいい。門から先はもともともと変わった。わしが長らく留守をしていた間にここは随分と荒れてしまったが、これでようやくわしが思い描いていたような具合にほぼなった。いや、以前からこの通りに思い描いていたのかどうか、実のところはわしにもわからない。とにかく、西園はこうあるべきという姿にほぼなったと思っている」。

「拝見するのが楽しみです」。

「そなたが嫁に行ったのは、まだ庭を造り始めたばかりであつたらう。あのころとはもうまるで違ふと言つていい。別物だ。さあ、見てくれ」。

父は孫の手を取る。

紹庭はびっくりしたように私を見返る。「行きなさい」と顎で合図する。紹庭は祖父にぐいぐいと腕を曳かれ、つんのめるようにして付いて行く。

二人の後ろ姿に、父と夫では、何もかも違つたと改めて感じる。夫は息子の手を取つて歩いたりしない。そもそも子供と関わる事がほとんどない。いつであつたか、夫は紹庭を前に座らせ、学問の何たるかを延々と説いて聞かせたことがあつた。子供に長々話してわかるような内容ではなく、紹庭はじつとうなだれて耐えていた。その後、紹庭の教育は私と蓮妙先生に託された。夫は父のようにせかせか動きまわらない。庭を造るような趣味もない。もしも造るとしたら、最初に綿密に計画して必ずその通りに仕上げるだろう。

父が言う通り、かつてここ住んでいたころの面影はいまや全くない。門をくぐ

つて小径を歩むと奇怪な形状の岩に出合う。そこで道が大きく曲がる。また小径を歩むと別の形状の岩に出合う。道を曲がるたびに木の種類、花の種類、草の種類が変わる。私はそのつど感嘆の声を挙げて父を喜ばす。父は、この小径にはいかなる名があり、何を植え、ここで誰それがどのような詩句を作ったと、事細かに説明してくれる。

いまや西園での遊宴はよく知られ、都の名士と自認するような者は、父に招かれずにいるのを恥とするまでになっている。宴は一夕も欠かさないと、いささか誇張して噂される。宴の始まりに、客人の前には盃が一つだけ載せられた案あんが置かれる。盃に酒が注がれると、歌樂が庭の片隅より起こる。宴が盛り上がって来ると、案上に忽然と料理が現れ出る。客人に気付かれぬようにして出すのが父の趣向だ。筆札が用意され、詩の応酬がなされる。詩に興味を添えるのが庭だ。で

きあがった詩は音楽を背景に朗唱される。詩に自信がないと西園の客にはなれない。夫は一度も呼ばれていない。

父は言う。

「春の終わりのいまはどうしても花に目が行く。花の盛りのいまはこれでいいけれど、他の季節になったら寂しいのではないかとそなたは思っているかも知れない。それは余計な心配というものだ。どの季節であっても、それぞれに十分に楽しめるようになっておる」。

「でしたら、四季のそれぞれを見に来なくてはなりませんね」。

「なんの、なんの、四季だけではない。毎日来たつて常に同じではない。朝と夕とでも違う。どうだ、明日から日参してみるかい。昔は、毎日ここを巡り歩いてきたのだから。おまえが頼めば富弼殿も許してくれるのではないかい。何しろ、

両家の絆は太いのだから。そうだろう、君もそう思うな」。

父は握っている紹庭の手を上を振り上げ、孫の顔をのぞき込む。

「はい」。

紹庭は声高く返事する。父は大きく笑い、私は紹庭が上手に振る舞ってくれたので安堵する。

何個目かの奇岩の次に、思いがけず池の岸边に出る。次々に現れる小径の面白さに池の存在を忘れかけていた私は、真正銘の驚きの声を挙げる。

池は以前と全く違っている。西園の広さ自体は昔と同じはずなのに、池は何倍も大きくなったかのようだ。岸边が複雑に入り組んだ形状になっていて、そこに立つ木々が重なり合って、深い奥行きをかもし出している。池の最も奥に、彼方の山がわずかにのぞき、あたかもそこにまで庭が続いているかのようだ。

「どうだい。驚いてくれたかな。よくできているだろう。」

父は胸を張る。

「あの山は昔からあそこにありましたでしょうか。」

「あれかい。木や草なら植えて増やすことができるけれど、遠くの山を都合よく置くことはできない。とすると、たぶん昔からあったのだろうな。」

「でも、池から見えていたでしょうか。」

「このあたりに少し土を盛って嵩上げしてみたら、どうだい、このように遠景がすばらしいことになった。ほんのちよっと手を加えただけだ。」

「ああ、それですか、池の水が足元よりも結構下になっています。ということ、門からここまでの間にどこかで坂を上ったのでしょうか。」

「わからなかっただろう。道が曲がりくねって、趣きが次々に変わるから、緩や

かな上りに気付く人はいない」。

父は嬉しそうに言う。

義母ではないけれど、これだけの西園を所有して頻繁に遊宴を開いていれば何かあると思われても仕方のないところだが、そのようなことが父と夫の関係に影響しているのではない。夫はもっぱら国家のことだけを考えている。それだけに事柄は難しい。

水辺を巡りつつ、奥へ奥へと進む。かつて、婿に富弼を選んだといきなり告げられた朝に、私は父に反発し、苛立ちながらこの池を巡った。いまとなれば夫を選んできたことに感謝している。耐えられる限度と思ったこともあった。それでも相手があの夫だったから今日があるに違いない。あの朝に天下第一の婿と蓮妙先生が言ったのは、あながち私を納得させるためだけのものではなくて、真実

に近いところがあつたのかも知れない。先生も大変な苦勞をしてくれたお蔭で今日がある。

父が自分で選んだ婿に手を焼いて、私に何かさせようとしているのは少しばかり皮肉なことだ。もしも父と夫の間に立つてどちらかを選べと問われたならば、それは夫でなければならぬだろう。女は嫁いだ先の家の人間になると、父からも母からも蓮妙先生からも夫からも教わつた。だからそれを守ろうというだけではなくて、自分の意志で夫の側に立つたろうと思つている。

父をこうして間近に見て、まことに愛すべき人だと思ふ。父は歩みながら、紹庭やあるいは私にひっきりなしに話しかけてくる。客人に対しても、やはり氣を逸らせることなく楽しませているのだろう。夫にはそのようなことはできない。父といふと氣が休まる。父が情熱を傾けるこの西園をすばらしいと感じる。父と

私の間には共通するものが多くあるのだろう。

夫が友人として話したいと言ったのは、偽りのない考えであつたのだろう。夫は考え抜いたことしか言わない。しかし、それがそのまま本心なのかというと、よくわからない。あれは一度切りの幸いだつたのではなく、夫と話す機会は格段に多くなり、夫が言うことを一方的に聞くだけでなく、私も言うことを言えるようになった。夫の言うことはいつもよく理解でき、立派な考えだと思ふことが多いい。夫は私の言うことに耳を傾けてくれる。話は十分に通じ合っているようである、しかし、依然として夫の本当の心に触れたような気がさほどしないのはどうしてだろう。夫の心との距離はこれ以上には縮まらないと感ずることもある。

義母は私達が話をするのを好まず、「どこの世界に夫の仕事に口出しする嫁がいればいいものか」と嫌味を言う。仕事に口出ししようとは思っていない。女の徳を

きちんとわきままえているつもりだ。夫に問われたことには、妻として答えなければいけない。それだけのことだ。自分の考えに夫を従わせようなどという気は毛頭ない。そもそもそれはあり得ない。

夫は何事も是非を明確にせずにはいられない。是は是、非は非で、それは万人に等しく通用すると考え、自分の思うところと同じに人も考えて、自分が正しいと考えるのと同じ行動を人もすると思いがちだ。いつだったか、夫が怖くてその言い付けを守らなければならないと必死になっていたところに、蓮妙先生が「是非か必ず明らかにできるとお考えになりますように、実のところはまことに単純なお方なのでございましょう」と言ってくれて、少しばかり気が楽になったことがあった。物事を曖昧なままにしておくことのできない性分であるから、是非かすぐには見定められないような事態を前にするととまどいが生じ、それで私に尋

ねたりする。とまどっている夫を前にすると、ついつい悪戯心が頭をもたげて来て、夫が驚くようなことを言ってみたくなる。

父と夫が対立して、その間に立たなければならぬということにはなつてほしくない。夫の側といまは考えてはいても、いざとなつたら心情的にどうなるのか自信のないところもある。

父を喜ばせるのは難しくない。行く先々に何かしら父が自慢したいものがあり、素直に驚いてみせる。

「ここからは見ての通りの上り坂だ。ただの坂ではない。さつきとは逆に、実際の勾配よりも急峻に感じられるよう工夫してある。よいか、ここでは、泰山たいざんか崑山かざんか廬山ろざんか、天下の名山を登る気になつて歩んでほしい」。

「それはそれは大層な坂ですこと。でも、さすがに泰山とか言うのは大袈裟すぎ

るではありませんか」。

「いやいや、そのようなことはない。気持ちの問題だ。よいか、気持ちを体で表して、このようにするのだ」。

父は足を左右に開いて身構え、

「よっこらしよ、よっこらしよ」。

一歩ずつ踏みしめるようにして上り始める。

その横で紹庭は何を思ったか、ぴよんぴよん跳ねるようにして前に出て、さつと祖父を追い抜いて行ってしまふ。

「ああ、これ、これ、ここは天下の名山だと言っておるに」。

父は孫の背を見送り、私は笑いをこらえる。

坂を上り切った先に小さな亭がある。

亭の手前で紹庭が困ったように足を止めている。見れば、屋根の下に、美しい錦繡をまとった小児がいる。

父は高い山を本当に登り終えたかのように大きく息をしてから私の方を顧み、それから小児を指さし、満面の笑みを作る。私は、「はい。わかっています」と、口には出さずにうなずく。

私は紹庭の脇から屋根の下に入り、小児の前に立つ。小児は大きな瞳を見開いたまま動かない。膝を折って、その子と顔の高さを同じにし、

「こんにちは。知っているわよ。あなた、八郎ちゃんでしょう」。

私を見つめる子を両手で抱え上げる。小児はものも言わずじっとしている。

父の方に、

「わかりました。お父様、本当に見せたかったのは、お庭よりも、この子だった

のでしょう。まあ、こんなすてきなお着物を作ってもらって」。

父は嬉しくてならないといった様子を隠さずに、

「そういうことでもないのだが。ここで会わせたいと思つてな。どうだい、ちよつと女の子みたいだけど、悪くはないだろう」。

「とつてもよく似合っています。なんて可愛い子なのでしょう」。

私はぎゅつと抱いてから、地面に下ろす。

小児は肩に力を入れてちよこんと置かれる。

「しかしな、孫よりも年が下の息子というのもどうもな」。

父は照れたように笑う。

「それがまた愛おしくてならないのでしょう。幾つになつたのですか」。

父に尋ねると、

「その子にきいてみてくれないかい」。

私はまた身を屈め、

「お幾つですか」。

ずっと結んでいた口を開き、

「みつつです」。

はにかんだように言う。

父の末の息子、幾道きどうだ。父ならずとも、心をとろかすばかりの子だ。紹庭とは随分と違う。母の目からしても、紹庭は可愛いらしい子というわけではない。

幾道は左右を見上げ、ちよこちよこ父の方へと歩いて行こうとする。紹庭は半歩下がって道を譲る。

「そなたの前だから、何も隠すこともあるまい。正直言って、可愛くて仕方ない」。

父は両手を広げて我が子を待ち受け、一瞬ためらってから、えいっと抱き上げる。

「この子がいると、わしはまた若くなつたような気がする」。

父は息子を上下に揺する。

「お父様、そんなことをして、大丈夫なのですか」。

近くに寄つて幾道を背中から支える。

「わしだって、まだまだだ。何しろ、この子がちゃんと立派になるまで見届けてやらねばならないのだからな。少なくともこれから十五年くらいは頑張らないと」。

幾道の両脇を抱えて父から受け取る。

父は腰のあたりをさすりながら、

「この子がいると、わしの願いが叶うような気がする。これは特別な子だ。本当

に特別だと思う」。

父が屈託なく言うので、ふっと悲しみを覚える。

父は地方にいる間に三人目の妻を迎えた。私よりも若く、その妻から幾道が生まれ、その直後に父は都に召還された。それで父は幾道が希望を与えてくれると感ずるのである。

父が先の妻、私にとっての継母について語ったのを聞いたことがない。私の生母についてもそうだった。生母について私が知っているのはほぼ全ては、父からではなく継母から聞かされた。継母は生母のようになりなさいと常に言い、自身も見習わなければいけないと言っていた。

自分の思いを隠し、ゆっくりと幾道を下ろし、

「お父様もご苦労されましたから、これからは十五年などと言わず、二十年でも

三十年でも、このお庭の四季を愛でながら、悠々とお暮しになって下さい。」

「そうありたいものだ。」

「願いとおっしゃったのは、そういうことなのでしょう。」

父はすぐには答えず、幾道の手を取り、亭に設けてある椅子に腰を下ろす。私は紹庭とその脇に立つ。

父は目の前の景色をよく見るよう手で促し、

「ここからのこの眺めは、わしがもう手を加えずにいても、これでこのまま固定されるわけではなくて、年々変わって行くであろう。それを先々までもずっと見ていたいと思う。だから、そなたの言う通り、それがわしの願いでもあるのだが、もう一つ、叶えたいと思うものがある。」

父ははにかんだように笑う。

「何でございましょうか」。

父はまことに正直だ。

「俗物だと笑わないでほしい。そなただから、何も隠さずに言う。わしも一度は宰相になってみたい。十四歳でお上に拾っていただいてからすでに三十五年。我が名が世に知れるのがとにかく早かった。それでいながら、とうとう宰相にはなれなかったと、人に言われるようでは口悔しいではないか」。

己を美々しく見せたいと、立ち居振る舞いに気を遣う父であるから、宰相にとの思いも強いのだろう。夫にしても、少年のころに宰相の行列を見て、自分も宰相になろうと誓った。

「御立派な願いだと思えます」。

ふと王実頭おうじつとうのことを思い出す。王実頭はいかさまな予言で私がいずれ国夫人こくふじんに

なると言った。それを聞いた父が婿探しを本格化させて富弼と見定めた。夫が宰相になれば妻は国夫人の称号をお上から頂戴する。

父が宰相になれば幾道の母は国夫人になる。先の二人の妻が得られなかった栄誉を得る。それはそれでいいとは思っても、先ほどの悲しみが深くなるのは止められない。

思えば、父が宰相になれば、いずれは「正史」せいしに父の伝記が収められるようになるかも知れない。父はそれも望んでいるのだろう。そうはならなくても、誰かしら優れた文章家が墓誌を書いてくれるのは間違いない。その墓誌の末尾に、李虚りきよ己きの娘、孟虚舟もうきよしゆうの娘、そして王超おうちゆうの娘が順に妻になったと記されるだろう。それが墓誌の決まった形式だ。三人の母は後世に生きた証を残すことができる。晏殊の妻になったからこそ得られた幸いだ。

この西園で、私はかつて女子状元を夢見た。もしも本当に女子状元を果たしたならば、それは必ず後世に語り継がれるであろう。我が名を敢えて残したいと願っているのではない。外を治める男は「正史」に記録されて顕彰されることがあるのに、内を治める女は、せいぜい妻としての存在が記されるだけだ。その思いが悲しみをさらに深くさせる。

はんちゆうえん

夫は范仲淹を手本として理想の士大夫像を思い描き、自分自身がそのようになろうとしている。女である私は、言い古された女の徳を守るよう教わり、女子状元は幻でしかなかった。蓮妙先生は新たな女性の生き方があると言ってくれはしたが、現実はそうではない。あるいは、世の中がこれから先もよりよくなって行くのならば変わりもするのだろうか。

—— だけど、自分には。

夫は友人として遇してくれている。極めて稀有な人であるのは間違いない。私ほど恵まれている者はいないだろう。それでいながら、自分にはこの悲しみがあり、漠然とした不安がある。

父は言う。

「わしは単に高い地位に昇りたいのではない。宰相たる者はかくあらねばならな
いと、わしにはわしなりの考えがある。三十五年を無駄に過ごして来たのではない」。

「お父様が宰相として活躍されるのを是非拝見したいものです」。

「都から離れている間は、宰相などもはや叶わぬものと思っていた。この西園を見ることさえできまいと、絶望に沈んだこともたびたびだった。まことに苦しい日々であった」。

父は深く嘆息し、

「この子を得てすぐに、忝くも、再びここに帰って来ることができた。そのとき、ここは以前とはまるで違っていた。草木が勝手に生い茂り、池は干上がる寸前だった。わしはまさにこの場に立ち、一つの詞を詠んだ。それを聞いてくれまいか」。父は立ち、静かに歌う。

芙蓉金菊鬪声香

木芙蓉と菊があでやかさを競う。

天気欲重陽

時あたかも重陽ちゅうようになろうとするころ。

遠村秋色如画

遠くの村の秋景色は画のようで、

紅樹間疏黄

紅の樹木の間まに黄がまばらにのぞく。

流水淡

流れる水は淡く、

碧天長

青い空は遠い。

路茫茫

路はみち茫茫と続く。

憑高目断

高きに立って見やるその先に、

鴻雁来時

鴻雁がやって来るこのときに、

無限思量

限らない思いがある。

父は歌い終わると、一息置き、そつとつぶやく。

「まさしく無限の思量であった」。

私の胸は塞がる。

「五年ぶりでしたから、さぞ思いも深いものがあったのでしよう」。

父の心の奥に触れた気がする。

これまで詞というものは、男女間の情愛を音律に乗せて歌うのがほとんどだった。父は詞に新たな情趣を盛り込もうとしている。

父自身の口から父の詞を聞いて、私はにわかを知る。

——これだから、父は私に詩を作るのを禁じたのか。

父と似るところのある私に詩は危険であると父は勘付いていたのだろう。嫁いだ初めのころに、もしかするといまも、父のように自分の感情を詩や詞に託すことができたならば、果たして自分は穏やかでいられるだろうか。

私の胸は訳もなく高鳴っている。

「思えば、いまここでこのようにしていただけるのも、ひとえにお上の有難い申し召しによるものだ」。

「ええ、その通りでありますよ。」

「昔むかしの王朝であれば、お上に一度見放された者は、千秋万歳の後でなければ呼び戻されることはなかった。お上の御恩をまことに有難いと思う。」

「このよい時代に巡り合いましたのはまことに幸運なことでございます。」

「そもそも、一介の獄吏の子に過ぎなかったわしが、都にこのような立派な庭を持つてるなど、昔むかしの王朝では考えられもしなかった。このようなよい時代が、これからも続いていくことを願わずにはいられない。それは何も自分のためだけに思うのではない。誰にとってもそうであろう。」

「ええ、おっしゃる通りです。」

「願うだけはいけない。お上にお仕えする我等は、よい時代が永續するよう、そしてさらによくやるよう務めなければいけない。そうであろう。」

顔を下の池の方に向け、せつかちな父は、一気に話を本題に持って行こうとする。

「わしはこのたび三司から枢密院に移り、国家の財政を預かる仕事から軍事を統率する仕事に変わった。身の引き締まる思いで新しい職務に毎日励んでいる。よい時代が永續するかどうか、我が宋朝はいま重大な岐路に立っている。我が朝廷にとつて、目下の最大の難事は、いうまでもなく西辺せいへんにある。三司においてわしが最も心を砕いたのは、西辺で必要とする軍費をいかに賄うかだった。一時のぎで捻り出すだけならさほど難しくない。今後長きにわたることがあっても支障がないようにしなければいけない。その目途がどうやら立ったとお上は見て下さったのか、わしはその任務から離れ、枢密院で軍事に直接関わるようになった。そもそも戦というものを考えると、第一に、戦はないに越したことはない。しか

し、戦は相手次第のところがある。理不尽にも相手がかかって来たならば、第二に、受けて立って撃退しなければならない。平和を永続させるに必要とあれば、第三に、決然と攻めて出て勝利しなくてはならないこともある。戦になったときに、百戦百勝を期すのははなはだ難しい。歴史を顧みて、負けるはずのない戦に敗れた例はいくらでもある。不運にもそのようになってしまったときに最もまずいのは、想定外の敗北に驚き、慌てふためいて要らぬ失敗を重ねてしまうことだ。急いで負けを取り戻そうと分別なく走り、王朝があえなく瓦解してしまった例もある。どつしりと腰を低く構える必要がある。そうであろう」。

「ええ、そのように思います」。

しみじみとした情趣はすっかり吹き飛ばされ、私は警戒し、ただ相槌を打つ。

「いま我等が堂々と不動の姿勢を保つならば、何の危うきところがあるろうか。わ

しはそのような考えに立って務め果たして行く考えでいる。それで、そなたに言っておきたいことがある。事の大小を誤ってはならない。いま肝要なのは、相手に立ち向かう我が姿勢である。それ以外のことではない」。

父はそこで言葉を切る。

私がおかを言うのを待っているとわかりはしても、私は黙っている。

父は紹庭と幾道の手を左右に取り、

「この二人は、幼い方が叔父、年上の方が甥だ。今日が二人の初めての出会いだ。これから終生二人が仲良くしてくれることをわしは心から願う。わが一族だけではない、わが朝廷においても、広くこの天下において、皆が心一つに合わせるのをわしは願っている。そなたはそれをわかってくれるだろう」。

父はぎろりと目を動かす。

私は言葉を出さずに小さくうなづく。

「事は西方にある。朝廷は一つでなければいけない」。

このたび宋は西辺において戦を仕掛けられ、手痛い敗北を喫した。数十年にわたって続いて来た平和が重大な脅威にさらされている。朝廷は一丸となつて立ち向かわなければならぬと父が言うのは至極当然のことだ。

その一方で、朝廷内部に看過しがたい問題が潜んでいて、先に内側を正さなければ外の難事に立ち向かえないとする考え方もある。それもまた当然の理で、夫はその考えを取る。

戦争になる少し前に、私は杜甫とほの『新婚の別れ』の詩を夫に示し、このような悲しい目に宋の女性達が遭うことがないようにと言った。杜甫の詩は、安禄山あんろくざんの反乱の余波で戦争が続いていた時期に、結婚してすぐに夫を兵士に取られてしま

った妻の嘆きを歌ったものだ。夫は、杜甫の詩を挙げたことに感心してみせてくれはしたものの、さほど共感する様子はなかった。もともと詩への感受性は夫には乏しい。

西辺の緊急事態に、『新婚の別れ』のようなことがすでに起こっていると聞こえて来る。

父はもう一度目をぎろりと動かし、

「そなたのことだから、あれこれ言わずとも、このわしの思いはよくわかってくれているのであろう。だから、これ以上はもう言うまい」。

父は私に何かを感じたのであろう、ふっと息を漏らすと、息子と孫の手を取ったまま坂を下り始める。

すぐには後を追わない。

——父か夫かで悩みたくない。

父と夫は互いに遠ざかって行くようだ。二人を近づけるのは難しい。そして、私と夫とは。

私は、はつきりとした不安を覚える。

夫の方を選ぶと、先ほど思っただけのことが、確信ではなくなっている。

——なぜなのか。

父を追いたい衝動を抑え、父の背中が坂の曲がりの先に消え、それからしばらくしてからおもむろに歩み始める。

第三の注。

富弼ふひつは是非かを明確に区分けし、人というものも二分して捉えがちで、それ

が君子と小人だ。しよじん君子の代表が師と仰ぐ范仲淹で、はんちゆうあんそうであるなら、范仲淹と対立する側の人々がすなわち全て小人であるとまでは単純に考えなくても、官員としての経験を積むうちに、君子と思える人が少ないのを富弼は非常に残念に思っていた。

科挙を受ける者は必ず孔子こうしの教えを学ぶ。孔子の教えは君子たらしとする実践を説くものだ。富弼は学んだことはそのまま踏み行うべきだと考えるが、そうではない人もいて、科挙に合格すると、官界の空気に馴染んで早く昇進することに励み、あるいは蓄財に精を出す者さえもいる。

范仲淹は早くから国政の改革を主張し、改めるべき一つに官員の質の低下があった。范仲淹が郭皇后かくの廢位を止めようとしたのに対して、宰相の呂夷簡りよいかんが強硬な姿勢で臨んで鋭く対立した背景には、改革への姿勢の際立った違いがあった。

現在の官僚制度の中で心地よく過ごしている者にとって改革は避けたいからだ。

郭皇后は廢位となって道教の寺院に入れられ、煙たい存在がいなくなった皇帝はすっかり羽を伸ばし、来る日も来る日も尚氏しょうし、楊氏ようしの二人の女性とべったりとなった。淫樂に耽り過ぎて健康を損ね、宮中の人々は苦り切り、母親の立場にある楊皇太后もこれではいけないと、宦官えんがんおうの閻文応を使って、二人の女をどうにかして皇帝から引き離そうとした。閻文応は、「少しはお二人からお離れあそばせ」と、皇帝にまとわりついて朝から晩まで言い続けた。あまりに煩わしいので、「好きにしろ」とつい皇帝は言ってしまった。閻文応はここぞとばかりに、二人を無理やり車に乗せ、宮中から追い出しにかかった。二人は泣いて助けを請うたが、閻文応は二人の頬をひっぱたいて黙らせ、車を走らせて道教の寺院に押し込めた。

皇帝はこれで懲りるところか、健康を回復すると、今度は茶商人ちんの陳氏の娘を

愛するようになった。その一方で、郭氏を廃したのを悔やむようになり、道観で幽閉状態にある郭氏に詩を贈るなどした。いつまでも皇后の位を空けおいてはいけないと言われ、皇帝は陳氏を立てたいと考えた。宮中の保守派はしかるべき家柄の娘でなければいけないと反対した。皇帝は呂夷簡に説得され、名門の娘である曹氏そうを皇后とした。

新たな皇后が立ったことで、一連の廃后問題が終結し、左遷されていた范仲淹等が順次中央に復帰した。

皇帝は郭氏との詩の往復を続け、孤愁を訴える郭氏の詩に涙を流し、郭氏を還俗させて再び召そうと考えるようになった。宦官の閻文応は恐怖を覚えた。郭氏を廃后に追い込んだのは呂夷簡で、その呂夷簡に郭氏のことを告げ口したのが閻文応であった。もしも郭氏が宮中に復帰するようなことになったら身の一大事だ。

折しも、郭氏がちよつとした病氣になり、郭氏のもとに医者連れて行けと皇帝は閻文応に命じた。郭氏は医者の診察を受け、その数日後に死んだ。人々は閻文応が毒殺したのではないかと囁きあつた。

宦官が暗躍して国を乱した例は過去の王朝に数え切れない。宋朝においては大事に至つたことはまだないが、危険な芽は早くに摘んでおかなければならない。

閻文応は呂夷簡と親密な関係にあつて手強すぎると、誰もが見て見ぬふりをした。黙つていられたなかつたのが范仲淹だ。范仲淹はある朝、登城前に長男を呼び、「もし勝てなければ必ず死がある」と後事を託して、閻文応の告発に踏み切つた。范仲淹は諸々の悪事を白日のもとにさらし、閻文応は遠く流罪となり、道の途中で死んだ。

もともと范仲淹を嫌っていた呂夷簡はこの一件でさらに憎しみを強め、しかし

あからさまに排除する口実がなく、一計を案じて首都開封かいほうの知事に任命した。地位としてまことに立派なものだが、都であるだけになかなか多忙な職務で、その上、当時の都の行政組織は綱紀が緩んで問題が山積みとなっていた。煩雑な仕事に埋没させて黙らせ、もしも何か落ち度があればそれで都から追い出そうというのが呂夷簡の腹であった。

案に相違し、范仲淹は知事の仕事をやすやすとさばいてみせ、黙るところか舌鋒は鋭さを増した。范仲淹は、朝廷の人事がすこぶる公正さを欠くと、呂夷簡を激しく批判した。呂夷簡が己に都合がいいよう人事を左右していることがひと目でわかる一覧表、「百官図」を作成して公表した。呂夷簡は怒ったが、「百官図」は事実で反駁しようがなく、別の筋より攻撃の手を繰り出した。

中国の皇帝政治において、臣下が横に繋がって徒党を組むのは極めて悪しき行

為とされた。臣下に許されるのは皇帝に忠誠を尽くす縦の関係だけだ。横に繋がった朋党ほうとうが実際に国政を乱した例が過去に幾つかあり、孔子も、君子は一人一人が道德規範に従って行動するから、決して徒党を組まないと言った。だから、対立する相手を、朋党を成す不届き者と公の場で認定すればそれだけで完全に封殺できた。

呂夷簡は、范仲淹は徒党を組んで国政を乱そうとしていると大々的に批判し出した。もとより范仲淹を快く思っていなかった人々が一斉に同調して、朋党批判に一気に火が付いた。朋党と見なされるのは官員として致命傷で、范仲淹は地方に飛ばされた。ここに廃后のとときと同じく、范仲淹を弁護する声が次々に挙がった。それこそが朋党の証であると、声を挙げた者は軒並み追放となった。当時地方官であった欧陽脩おうようしゅうもわざわざ火中の栗を拾いに出て、さらに遠くに飛ばされた。

富弼はこのときはまだ地方にいて、妻の助言もあつてはやる気持ちを抑え、職務に専念した。それから一年ほど後に館官になるための試験を受けて都での仕事を授かった。

富弼が都に来ると、意外なことに、入れ違いのように呂夷簡が宰相を辞めさせられて地方に出て行った。これは内輪揉めの結果だった。朋党騒動で邪魔者が消え、呂夷簡は宰相の地位を不動にしたかのように見えたのが、外敵がいなくなるのと内側に敵が出てくるのが常であるらしく、宰相と執政の間がぎくしゃくし、収拾がつかない大喧嘩を仕出かし、皇帝は喧嘩両成敗とばかりに関係者をごっそり辞めさせた。その結果、朝廷にはしかるべき人物がいなくなり、皇帝は張士遜ちようしせんを再び宰相に据えた。張士遜といえ、劉皇太后りゆうが死んで仁宗が親政を始めてすぐに宰相として用いられたものの、頼り甲斐がなくて短期間で辞めさせられた人物

だ。一度は無能と認定された張士遜をまた用いるのはどうかと皇帝を諫めた者に韓琦かんきがいた。韓琦は明道元めいどう（一〇三二）年に、一番の成績で科擧の進士科を及第し、富弼の四歳下であるが、次代を担う人物として富弼よりも早くから注目を集めていた。

韓琦は言った。国が用いるべきは、第一には、范仲淹のような忠正の士である。諸般の事情でそれが叶わないのなら、第二には、呂夷簡のように政治術に長けた者を用いるのがよい。いずれであっても国のためになり、人々も納得するが、張士遜では何も期待できない。

まことにもつともなこの韓琦の意見を皇帝は聞かず、個人的に親しい張士遜に名誉挽回の機会を与えた。張士遜の復活に伴って、もう一人、再度の機会を与えられた人物がいた。それが晏殊あんしゆだった。墓誌の一件はそろそろ許して、人材が払

底してしまった朝廷の顔ぶれを補おうというのだった。かくて晏殊は都に復帰した。

折しも、宝元元ほうげん（二〇三八）年十月、西辺の地で宋朝を大きく揺るがす事件が起こった。宋朝の保護下にあつた李元昊りげんこうが勝手に皇帝の位に就いて独立し、国号を夏とし、宋に対等の関係を結ぶよう求めた。李元昊はかねてから周辺に向けて軍事行動に出るなど危険な兆候は多々あつたのだが、宋朝側は大事に至るまいと輕視していた。

中国の西方に古くから羌きやうと呼ばれる人々がいて、その一支に党項族タングートがあつた。唐の時代に、党項は長安北方の夏州かを根拠地として力を蓄え、唐末の大反乱である黄巢こうせうの乱に際して、党項の首領の拓跋思恭たくはつしきやうは、乱を鎮圧するのに功績があつて、唐の皇帝と同じ李姓りを与えられた。李思恭の子孫は、時々の情勢に応じて中国に

従順であつたり、そうでなかつたりしながら、代々その地に勢力を張り続けた。

宋が中国内を統一し、さらに宋と遼国りょうこくが条約を結んで戦争状態を終結させると、党項が生き延びるには、宋と遼の二つの大国と良好な関係を保つことが重要となり、特に李徳明りとくめいは宋に従順な路線を採用し、宋に対して臣下を称した。

李元昊は李徳明の子だ。李徳明は死を前にして、「我等一族の繁栄はひとえに宋の天子様のお蔭だ。この御恩に決して背いてはならない」と言い遺した。ところが、李元昊は民族の自立を目指し、父の死から六年後に、興慶こうけいを都とする独立国家を樹立した。

このときに張士遜が宰相であつたのは宋朝にとって不幸であつた。李元昊への対応を最初に朝廷で検討したときに、ある者が、李元昊はあらぬ妄想に駆られて身の程知らずの企てをしているだけだから、しばらく当たらず障らずで放ってお

けば必ず自壊すると言った。張士遜は、臆病風に吹かれた情けない考えだと冷笑し、李元昊ごとき「小醜」はひとひねり、断固とした姿勢で臨むべしと、はなはだ威勢よく朝廷の方針を決めた。李元昊をお尋ね者扱いし、捕えた者に銭十万の賞を与えるとの詔を出し、前線りゅうぐわいで軍を指揮する者として劉平等を、その上に立つて大局を見定める者として范雍等はんようを西方に投入した。

劉平は将士の息子ながら科挙に合格し、学問のある武人として知られ、呂夷簡が朋党批判をしたときには、武人の見地から朋党の非を明らかにする論考を書いて朝廷に出した。劉平は西辺の事情について、我が方は精兵二十万を有し、李元昊の有する兵力の三倍に当たるから、李元昊を討つて滅ぼすのは難しくないと言った。

富弼も西辺事情に関する意見書をまとめて提出した。事がここに至るまで何ら

対策を取って来なかった大臣を批判し、いま取るべき八つの対策を並べた。二点を記せば、急な用兵は天下を騒がすので十分な準備をしてからでなくてはならない、事に当たるに足る人物をよく吟味し前線の将の意見をよく聞く必要がある。

こうてい

康定元（一〇四〇）年の一月、つまり、晏殊が娘を西園に呼んだ二ヶ月ほど前に、宋の強硬姿勢に反発して李元昊が戦端を開いた。李元昊は、宋が西边防備の要としている延州えんを攻撃するとかねてから予告していた。西辺に赴任して延州に入っていた范雍は、李元昊の来襲に備えるべく、劉平等を呼び集めようとした。李元昊は国境まで来ると、不思議なことに戦はやめたと宣言して引き揚げた。范雍は安堵し、劉平等に来るには及ばないと告げた。

すると、李元昊がにわかどもんに土門から侵入して保安ほうあんを目標に進んでいるとの火急の報に范雍は驚き、慶州けいに戻ったばかりの劉平に、保安ほうあんに行つて石元孫せきげんそんの軍と合

流し、そこから土門へと進んで戦えと命じた。劉平が三千を率いて動き出すと、范雍からまた別の司令が来た。李元昊は、実は土門ではなく金明寨きんめいざくを破つて延州に向かっているので、急いで来てくれというのだった。

劉平は二転三転する范雍の命令にとまどいながらも延州へと急いだ。もともと李元昊などはひと握りに潰せる劉平は考えていて、早く戦って決着を付けてやろうと昼夜兼行で進んだ。三つの川が集まる三川口さんせんこうの西十里に到達すると、そこを宿营地として定め、先発隊を延州に派遣した。

范雍は黄徳和等こうとくわ三人の將軍にも延州に来るよう命令を出していて、劉平の宿营地で將軍全員が合流し、総勢は一万余になった。宋軍は東に進み、三川口で敵軍と遭遇した。このとき平地は数寸の雪におおわれていた。戦闘が始まると、宋側が優勢で、敵の騎兵数百を倒した。敵は盾で陣を覆って守勢に立った。宋軍は盾

を奪い、敵の千人近くを川に落した。先頭に立って戦った劉平の左耳と右脛に矢が当たった。

日暮れに至り、今日の戦いはここまでと宋側は判断して戦闘を止めた。宋側はすでに勝った気で、戦士がおのおのの手柄を報告して功を論じ始めた。すると夕闇の中から敵が突如として襲いかかって来た。態勢を取っていないかった宋軍は総崩れとなり、かろうじて黄徳和だけが脱出できて延州に敗報をもたらした。

延州は敵に囲まれ、意気阻喪した范雍は降伏もやむなしと覚悟した。たまたま大雪があつて、敵は七日間の囲みを解いて退いた。

三川口の大敗に朝廷は動揺した。皇帝は、敗因と今後の策を宰相の張士遜に尋ねた。張士遜は「軍旅のことは枢密院がその任に当たっております」と、逃げ口上を言うばかりで要領を得なかった。宋の朝廷は皇帝の下に行政、財政、軍事の

三権が分立する仕組みであるから、張士遜の言い分も筋が通らないものではなかった。結局のところ、敗北の責任は枢密院の顔ぶれが負うことになり、その主だった者が罷免となった。そして晏殊が三司から枢密院に移った。

富弼は、この事態は枢密院だけに任せておけるようなことではなく、宰相も加わって国を挙げて当たるべきだと主張した。張士遜は「枢密院は自分達の権限が脅かされることに同意しないだろう」と消極的姿勢を示した。富弼は、宰相は事を避けているだけだと批判した。皇帝は富弼の提案を採用した。

また、韓琦は、范雍は無能であるから、代わりに地方暮らしをしている范仲淹を用いるよう主張した。

若手官僚が種々の意見を表明する中で、晏殊は特段の対策を打ち出すことなく、三川口での敗因は黄徳和の報告に基づき、劉平の不屈きな裏切りによるものだと

結論付けた。張士遜は劉平を重罪人と認定し、その一族を連座させて獄に入れようとした。

富弼はもともとは劉平には批判的だった。劉平は己の力を過信して李元昊を軽視し、朋党批判にも与していた。しかし、敗卒の証言を集めると、劉平に裏切りはなく、むしろ黄徳和に敵前逃亡の大罪が疑われた。黄徳和には宮中との太いつながりがあり、擁護する者が多くいた。張士遜は事を荒立てまいとし、晏殊が同調した。富弼は決然と劉平を弁護し、三川口での敗戦は以下のようなようであったと公的に認めさせた。

夕闇の中から不意に襲いかかって来た敵に対して、劉平は少しばかり退いて態勢を立て直そうとした。最も後方にいた黄徳和は動転して走って逃げ、その動きにつられて宋軍全体が浮き足立った。劉平は我が子を黄徳和のもとに走らせ、息

子は馬の轡を取って、黄徳和に引き返すよう言った。黄徳和は耳を貸さず、ますます馬を速く走らせた。宋軍は我も我もと走った。

劉平はやむをえず、近くにとどまっていた千人余りを指揮して敵と戦った。奮闘の結果、かろうじて敵を退けることに成功して、夜に入った。敵は一里先に軍を置き、劉平は夜襲を警戒して陣を固めた。敵は闇の向こうから「投降せよ」としきりに叫んだ。劉平は拒絶した。翌朝、戦いが再開した。兵力の差はいかんともできず、劉平は戦死した。

富弼の弁護で、劉平は無罪となり、遺族には褒賞として皇帝より絹五百匹、錢五百貫、布五百端が贈られた。一方で、黄徳和は斬罪となった。

余談ながら、かなり経ってからのこと、劉平が勇敢に戦ったのは事実であったが、死んではおらず敵の捕虜になっていたことが判明した。

この一件で富弼は、師と仰ぐ范仲淹に一步近づけたと、大きな手ごたえを感じた。「修謹」と評された富弼にとって、舅との対立も辞さぬというのはかなりの覚悟を要した。富弼は是非を明確にせずにはいられないのだが、それはたやすくできるようなものではなかった。

第四章 でもでも、これはどうにも

夫に呼ばれる。

けいれき

慶曆二（一〇四二）年一月の凍てつく早朝。

小さな切れ目が生じただけでも簡単に布が裂けてしまうように、知と情のわずかな齟齬が取り返しのつかないくらいにまで広がって行くのを、しばらくの間は気付かぬようにしているしかなかった。

夫は引き続き朝廷の要職にあつて、舅との関係が難しくなるのも、宰相に嫌われるのも意に介さない。それ故に、蓮妙先生れんみんしょうが言っていたように、天下のために大きな仕事をするのではないかと思えるようになり、尋ねられたときには少しでも夫のためになるよう、友人としてものを言うようにして来た。そのときにも、

女の徳を逸脱しないだけの節度を保つよう心がけ、夫もまた国家の機微に関わることを直接に尋ねるのは稀である。

夫には気付かれにくい弱点がある。背が抜きん出て高く、はなはだ厳めしい風貌で、理非の区分を必ず明確にして、その主張を断固として譲らない。人は夫を強靱であると見て恐れもする。私もそうだった。強さはもろさに通じるのだらう。理非を明確にせずにはいられないのは、逆にいうと、理非が明確に見定められない間は無防備ということだ。詩賦が苦手なのと通じるところがありそうだ。当意即妙の機知に欠け、身動きが取れなくなることがあるようだ。

そのような弱点に対処しようというのであろう、早々に官服を着していつでも出発できるようにしてから書院に籠り、その日に備えて一人静かに思い巡らせるという習慣を都に来て始め、その時間が次第に長くなっている。それだけ仕事か

重くなっているのだろう。この時間は夫にとって極めて大切であるから、呼ばれたとはいえ、思索の腰を折ってしまわぬよう足を僣ばせて部屋の入口に立つ。

夜明けに向かつて冷え込みが強まっている。夫は淡い灯の脇に座り、目を細く開けている。その目はたぶん何も見ていないのだろう。ゆつくりと呼吸をしている。他は体の動きはない。

しばらくして、夫は顎を引き、ぐつと歯を噛みしめる。こめかみがぴくりぴくりと動く。

——あのことに違いない。

夫が心を定めたと見て、私も心を定める。夫の心がいくらか読めるになったと感じている。

夫の目がこちらに向き、ほっとしたような顔に変わる。

「ああ、来て下さいましたか」。

「お呼びと伺いましたので」。

「どうぞそこに」。

私は戸口の脇に置かれた床几に腰かける。夫婦が向き合つて座しても、膝と膝が当たるようなことはもうない。

夫の昇進に伴つて家が広くなつた。夫は独立した書院を持ち、義母ははは中庭に面した明るい別棟を使っている。そこには、小机にしても簾や屏風にしても、義母が満足行くよう立派な調度品を揃えてある。

使用人は包ほう十五と孔六こうの二人から徐々に増えてすでに十人を超える。義母には身の回りの手伝いをする女を付けるようにしているのだが定着しない。短いと数日で辞めさせて下さいと女が泣いて訴えに来るし、義母からは、あんな女は要ら

ないと言われる。雇ってすぐに放り出すのでは外聞が悪いので、他の仕事に回すと、「自分達ばかりが楽をしよう」と無駄に人を増やしている」と義母は言う。元通り義母のお世話を私と蓮妙先生ですると、「この家には十人だかの手があるのに、あたしだけは不自由をしなければならぬのかい」と嫌味を言われる。

夫は表情を厳しく改め、

「あなたに大事なことを告げておかねばなりません」。

いつもの妙な癖で、夫を驚かせようという気持ち湧いて来る。夫の心を読めると思ったのを確かめたくもあり、

「承知いたしております」。

「ほう、わかりますか」。

私は深くうなずき、心に定めたことを告げる。

「この家の内のことで、お心を乱すようなことは一切なきようにいたします。それが妻としての役目です。どうぞ心おきなくこのたびの大事を成し遂げて下さいませ」。

「大事とは何であるのか、心得ておられるのですか」。

「ええ、りよう遼国からのお使者の御接伴役でございましょう」。

「ああ、おわかりでしたか。そうでしたか。その通りです。いまそのことをずっと考えていて、御接伴役には私以外に誰もいないと思ひ至りました。恐らく今日のうちにも、お上よりお話があるでしょう。それをお受けします。あなたにどうしてそれがわかったのでしょうか」。

私は身を少しばかり前に進め、

「あなたさま以外にはあり得ないからです。だって、宰相様がそれをお選びにな

るのですから」。

思わず棘を含んだような声になったのを夫は聞き咎め、

「宰相殿におかれては、何か思うところがあつて私をお選びなるものではありません。まい。お役に最もふさわしいのが私であるとお認めていただけるのなら名誉ではありませんか」。

「はい、その通りでございますよう」。

節度ある妻としての矩のりを超えてはいけない。

遼国からの使者が我が宋国へと向かっているという。その使者を国境で出迎え、我が都へと案内する接伴役となるのを志願する者は一人もいない。皆が尻込みするるのは、使者を都へ連れるだけなら何でもないことではあつても、その後、必ず極めて難しいことが続くのがわかっているからだ。その役に宰相は誰を指名す

るのか。夫はある事件の処理を巡って宰相の気を大きく損ねている。

「私には遼国に一度行った経験があります。適役でありましょう。」

「はい、御接伴役はいずれは遼国に行くお役目も授かるのでありましょう。そのことも思ひまして、この家の内のことはお任せ下さいと申し上げたのです。」

「あなたは私が言うよりも前にそこまで思いを定めて下さいましたか。でしたら、一つ聞いておきたいことがあります。」

「何でございましょうか。」

私は身を引き締める。

「遼国からのお使者が来られましたら、我が都に留めて帰還させてはならないと言う者もいます。あなたはどうか思われますか。」

夫にしては珍しく国家の大事について直接的に訊いて来る。

「私の考えを申してよろしいのですか」。

「どうぞお聞かせ下さい」。

内を治める妻としては本来は遠慮すべき事柄でもあろうが、夫がすでに言ったことに符合するので、

「お使者を拘留するようなことがあつてはいけないと思います。それであなたさまが遼国に行くお役目も授かることになるかと私も申し上げたのです」。

夫はうなずき、

「私も同じ考えです」。

遼国の使者は何のために来るのか。いまはまだ憶測であつても間違いないだろう。宋はいま西の夏国かからの攻撃に連戦連敗で、遼国は卑劣にもそこに付け込んで来るのだ。宋と遼は約四十年前に澶淵せんえんの盟を結び、領土問題を棚上げにした。

宋が苦しいのを狙ってこの問題を蒸し返して漁夫の利を得ようというのだ。遼国は国境付近に大軍を集めてもいるらしい。遼国の使者が理不尽な要求を突き付けて来たならば、断固とした姿勢で臨み、事と次第では拘留して帰国させてはならないと主張する者がいる。欧陽脩おうようしゅうが急先鋒の一人だ。

「あちらは拳を振り上げたくてうずうずしてありますから、お使者を留めたら大変なことになるかねません」。

「そこです。我々が危惧しているような要求を遼国がして来た場合に、どのように対処するのが最もよいのか、根元になるべき考えを定めなければなりません。それがなくてはお使者に接する態度も定まりません。あなたはどうか思われますか」。

「それを私にお尋ねになるのでしょうか」。

さすがにこれにはいささか驚かされる。そこまで答えてよいのだろうか。

「ええ、お聞かせ下さい。」

「思う通りを申し上げてよろしいのでしょうか。」

「そうでなければお尋ねしません。」

私は迷う。是か非かを言えば、理不尽な要求に屈服するいわれはない。理非を通せば欧陽脩の言うようになる。

ふつつつと心に湧き上がって来ているものがある。夏国との戦が始まる前に、杜甫の『新婚の別れ』の詩を持ち出したときに夫の反応は鈍かった。

——女達をこれ以上悲しませたくない。

そして、夫に大事な仕事をしてもらいたい。

口をついて言葉が出る。

「私が考えるのは一つだけです。戦をしてはいけません。」

夫はすつと立ち上がり、ゆつくりと手を挙げて私の肩に置き、

「そうですか、あなたはどのように考えますか」。

夫は嘆息し、横を向きながら手を放す。そのときに、少し押しやられたように感じる。

不意に今朝の寒さに襲われる。

夫の心がなお読めると思え、

——今朝はもうここまでだ。

夫はまだ決めかねている。だから私に尋ねた。しかし、私とは異なる考え方をしている。妻としての分を弁えなければいけない。

そのように思つて、なぜかすでに次の言葉が出ている。

「陳堯咨様のお母様のことは御存知でありましょうか」。

ちんぎょうし

唐突なその問い掛けに自分でも驚き、

「いかなることでしょうか」。

夫は他所を向いたまま怪訝そうに言う。

——これはいけない。

それでも、この機会を逃すまいとの思いに駆られ、

「父がかつてよく申していたのでございます」。

早口になって、我が父晏殊あんしゆが聞かせてくれた士大夫家庭における逸話の一つを告げる。

それは先帝の時代のこと。澶淵の盟の後、宋と遼の間を交互に友好の使者が行き来するようになり、ある年、先帝は遼の使者を迎えるに当たって、特に儀容鮮やかな武臣を選んで使者の前で矢を射させ、我が朝も武技が盛んであるのを見せ

付けてやろうと目論んだ。ところが、皇帝の意に適うような武臣が見つからず、文臣である陳堯咨が候補として浮上した。陳堯咨は弓に優れ、その技は天下無双とまでいわれていた。

陳堯咨は父よりも少し先輩で、有名な陳三兄弟の三男だ。三兄弟は揃って科挙に合格し、しかも長兄と陳堯咨は状元だった。その母親が極めて厳格であるというのもよく知られ、その母あつてこそその三兄弟の合格とされる。陳堯咨が官職に就いて地方での最初の務めを終えて都に帰ったときに、母は、どのようにして民を治めたのかと息子に尋ねた。「弓の技を見せましたところ、民は新任の私を侮ることなく、言う通りに動くようになりました」と陳堯咨は得意げに答えた。母はいきなり激怒し、罪人を罰する杖じょうで息子を打たせた。「そなたは忠孝をもつて国家たすけを輔たすけるべき者であるのに、いつまでもそのような技にうつつを抜かしておる

のか。亡くなられた汝のお父上の名を汚すものだ」と叱った。

先帝は、陳堯咨を武臣に振り替えて遼の使者の前に出そうとして、それにはどれほどの地位を用意すればよからうかと、我が父に尋ねた。武臣として最高の地位に就けるということで、我が父が皇帝の意向を陳堯咨に伝えるに行った。陳堯咨は「母上の許しがなければ決められません」と答えた。母はこのことを聞くとまた激怒して杖で息子を打ち、「そなたは文臣としてお仕える身であるのに、高禄に目を眩ませるのか。何たる恥知らず」と叱った。それでこの話は流れた。

「武臣よりも文臣を上置き、文によって国を治めるのが我が朝の祖法であるのを、陳堯咨様のお母様はまさしくお示しになったと、我が父は常々申しております」。

父と夫の関係が微妙であることを顧みず、夫が一向に顔をそむけているのにもか

かわらず、例の夫を驚かせようとの癖の為すところであったのか、武による解決は避けるべきだとの思いを夫に伝えた。

夫はぼそりと言う。

「刻限が迫りました。登城せねばなりません」。

でもこれだけは言っておこうと、立ち上がり、

「戦は民を苦しめます。我が朝の民ばかりではなく、向こうの民をも苦しめます」。

夫はすでに歩み出し、

「よくよく考えてみましょう」。

その声の響きの重さに、出かかっていた次の言葉はさすがに呑み込む。

夫は書院を出ながら、

「あなたはどうか陳堯咨様のお母様のようになって下さい」。

私は愕然として、そつと腹を抑える。そこには五人目となる子が宿っている。——この子に何を強いるのか。

夫の背に向かつて、

「しかとそのように努めます」。

自分に言い聞かせるように告げる。

戦は避けたい。それをいま夫に言うのは、死を覚悟せよと言うに等しい。これから生まれるこの子は、父の顔を見られないということになるのか。家の内のことは任せて下さいと言いはしたが、そこまで考えてのことではなかった。

最後に呑み込んで言わなかったのは、亡くなった劉皇太后りゅうこうこうだったらということ。

劉皇太后は、先の皇帝が澶淵の盟を結ぶに至った苦勞をよく知っていた。現在のこの貴重な平和を決して壊すまいとするに違いない。

女子状元の幻想が甦って来る。劉皇太后のもとで宰相になると兄に向かって言い、女だったら何かできることがあるのかと兄に訊かれた。いまなら答えられる。決して戦はしない。土地を巡って争い、それで人が死ぬのは愚かだ。土地というものは人を生かすためにある。

虚しい夢想の中で私の心は深く沈む。

戦を避けるために私自身が命を懸けられるのならよい。自分にはできないことを夫に言った。夫の心がわかるようになったと思ったのは全くの勘違いだったのか。もとより嫁として為すべきことに専念しているべきであった。だから、陳堯咨の母にならなければいけない。

第四の注。

理非を通せば、夏国に対しても、遼国に対しても、断固たる姿勢で臨むべしとの主張になる。

リげんこう

李元昊が夏国の皇帝となった最初のとときに、宰相の張士遜は強硬策を唱えた。

ちようしせん

宋の臣下であった者が勝手に皇帝になるのは許されない。張士遜は理非を明確にしたのだが、その策は掛け声だけで実質を伴わなかった。三川口で苦杯を嘗めさせられると、次の策として幾人かを西辺に派遣した。その人選を富弼は「天下の笑いもの」と痛烈に批判した。

はんよう

張士遜は高まる批判の声に、敵に翻弄されるだけだった范雍を降ろし、代わって若手に人気のある范仲淹と韓琦を西に送った。張士遜にしてみれば、何かと楯突くその二人に困難な仕事を与えてお手並み拝見ということでもあったのだろう。

折しも夏国から二人の首領が逃げて来た。厚賞をもって二人を迎えるならば、

さらなる来降者が続いて夏国に揺さぶりをかけることができると、富弼は宰執も提案した。張士遜はこの一件について何も承知しておらず、話が噛み合わなかった。「宰相たる者が知らずにいいような小事ではありません」と富弼は怒った。その後で、富弼には塩鉄判官の職務が与えられた。塩と鉄という重要な産業に関わる仕事で忙殺させようというのだった。

ある国内問題で張士遜が採った措置を不満とする人々千余人が道に出て直接抗議する騒ぎが起こった。乗る馬が驚いて暴れて張士遜は道に落ち、宰相の権威も地に落ちた。張士遜は老齢を理由に辞めたいと申し出て、皇帝はそれを許した。

代わって宰相になったのが呂夷簡りよいかんだった。いざというときに頼れると皇帝が思うのが呂夷簡だったのだろう。呂夷簡はここで大物ぶり発揮し、かつて朋党批判で追放した范仲淹と直接会い、西辺の事態収拾を全面的に託すと言った。范仲淹

は「国事のために恨みは残しません」と応じて二人は和解した。間を取り持ったのが晏殊あんしゆだった。

范仲淹は西方に行くと言勢をつぶさに分析して専守防衛を唱え、先に破られた金明寨きんめいざくを修復した。李元昊は、范仲淹は手強いと見て、その管轄外である二川寨さんせんざくを襲った。宋軍が反撃に出ると李元昊は逃げた。宋軍が追うと李元昊はさらに逃げた。宋軍が敵地深くに入ったところで李元昊が突如反撃して宋軍は敗れた。しばらくすると李元昊はまた三川寨を攻めた。宋側は先の負けを取り戻そうと撃つて出て、全く同じ負け方をした。宋側は敗北を繰り返し、戦死者が五千人を超えた。この事態に、韓琦は、宋側でただ一人、李元昊に対していくつかの小競り合いで勝利を得ていた任福じんぷくを用いて敵を撃つことを提案した。

ちょうどそのころに、富弼は、遼国への親善使節に選ばれて北に旅立った。慶曆けいれき

元（二〇四二）年の元旦に、富弼は宋の皇帝に代わって遼の皇帝に新年の祝賀を述べた。

朝廷は韓琦の策を採用し、夏国に対して攻勢に出ることを決めた。晏殊は軍事を担当する枢密院の責任者としてその決定に加わった。朝廷は范仲淹にも兵を出すよう命じた。范仲淹は一徹居士だ。専守防衛の主張を譲らず、命令を拒否した。朝廷は特別の使者を出して説得に当たったが、范仲淹は頑として聞かなかった。

そうこうするうちに二月になり、李元昊の方から攻め入って来た。韓琦は任福に命じて李元昊と戦わせた。李元昊は退却し任福は追った。任福は勝利を重ね、好水川こうすいせんのほとりまで追った。そこで俄かに李元昊は反撃に転じ、宋軍は大敗、任福は戦死、死者は六千名を超えた。

范仲淹は軍を全く動かさなかった。その一方で、李元昊と独自の秘密交渉をし

ていたことが知れ、敗戦を招いた韓琦とともに西辺での任を解かれた。新たに二人の者が派遣された。しかし、二人は些細な言い争いをするばかりで何事も進まなかった。朝廷は業を煮やし、一方で范仲淹と韓琦に期待する声はなお大きく、再び二人を用いることになった。韓琦は范仲淹の主張の正しさを認め、ともに防衛に務めることになった。

このような時期にも、晏殊の西園では遊宴が頻繁に催されていた。あるとき宴おうようしゅうに呼ばれた欧陽脩は、このように遊び浮かれていいのかと詩で晏殊に苦言を呈した。晏殊は不興顔であった。

富弼は遼国から帰国すると、その年の九月に、ある事件を巡って宰相の呂夷簡の気を大きく損ねた。宮中の人に関わりがあるその事件には深い入りしないようにと呂夷簡が暗に示唆していた。理非を明確にしなければいけない富弼には、

曖昧なままにしておくという器用なことができなかった。

その後少ししてから、富弼は内密で呂夷簡に呼ばれた。「遼国で一体何を御覧になられましたかな」。遼国では南征の議が起こっているらしく、遼国に行っていないが何も気付かずに帰って来たのははなはだ遺憾であると呂夷簡は富弼を責めた。正月の時点では何の兆候もなかったと弁明したものの、富弼は内心忸怩たるものがあつた。

遼国で南征の議がさかんになったのは、実際には任福が陣没してからで、富弼の帰国後だった。

宋が困っているいま軍を動かせば、澶淵の盟で棚上げにした領土問題を我が方に有利なかたちで解決できるとの声を受けて、遼国皇帝は南征の準備を命じた。小さな夏国に敗れてばかりの宋国などいころだと、遼国内は早くも勝ったも同

然の雰囲気となった。それでも、戦争という手段を行使するのを好ましく思わない者の中にはいて、より安直な方法があると皇帝に提案した。宋国を脅すだけで十分な見返りが得られるとの案に、遼国皇帝はまずはそれを試してみようと、慶曆二（一〇四二）年一月、宋国に恫喝の使者を出した。

遼国からの使者を出迎える接伴使を引き受けようと自ら名乗り出る者は一人もいなかった。接伴使が両国間の交渉の最前線に立つのは間違いない。遼国の領土に要求に屈するわけにはいかない。使者が非礼を働いたら遼国に断然抗議すべきだ。遼国は戦端を開くのにやぶさかではない。接伴使が死を覚悟しなければならぬ。場面が恐らくはあるであろう。

皇帝は、宰相の呂夷簡に接伴使として誰か推薦せよと命じた。呂夷簡は富弼の名を挙げた。欧陽脩は、唐の時代に、がしんけい顏真卿がりきれつ李希烈のもとに派遣されて殺され

た例を引いて反対した。李希烈は安祿山あんろくざんの乱の後に跋扈して唐朝を悩ませるようになった節度使の一人で、唐朝に歯向かう姿勢を露わにしたときに、朝廷は名臣として名高い顔真卿を送って李希烈を改心させようとした。李希烈は顔真卿を拘留し、皇帝を自称した。唐朝は討伐軍を出し、李希烈は官軍に包囲されると、見せしめのために顔真卿を殺害した。欧陽脩は、呂夷簡には隠された意図があると見ていた。

富弼は皇帝に呼ばれ、接伴使の任を授けられた。

「お上がお心を痛めておられますのは、臣にとりましてこの上ない恥辱でありませぬ。臣は死も恐れはしません」。

富弼は理非を通さずにはいられない性分である。しかし、事はさほどには単純でない。富弼の心はなお定まらず、我が心根を告げることしかできなかった。そ

れは自ずと悲壮感に溢れ、皇帝は涙をこぼした。

国難に身を投じた富弼は、その日を境に妻と話をする余裕を失った。

外が騒がしい。

慶曆二（一〇四二）年七月。

子に乳を与えつつ、いつしかまどろんでいた。

目を開けると、部屋の中は薄暗い。人々が何か言い合っている。

子は眠っている。一昨日生まれたばかりの三男だ。この半年の間に、次女を喪いこの子を得た。

三歳の次女の死はあっけなかった。下痢をしたかと思うと、高熱を出してひどく苦しみ、れんみょう蓮妙先生が煎じてくれた薬は喉を通らず、は義母が符水を娘の体に振り

かけたときにはすでに虫の息だった。

悲しみ過ぎると胎内の子にさわると義母に言われた。その通りに違いないと思
い、次女の死をできる限り平静に受け止めようとした。そのことが後になってか
えって悔やまれてならず、三男が生まれたいま素直に喜べずにいる。先生はあれ
これ考えないようにと言うのだが、わかっていても考えてしまう。体が疲れ、気
も疲れる。それに夫のこともある。

ばたばたと足音が近付き、

「よろしゅうございましょうか」。

声と同時に戸が開けられる。先生だ。

「どうかしたのですか」。

「旦那様が都にお帰りになったそうです」。

「旦那様が、どうして。だって、お発ちになったばかりではありませんか」。

夫は十日余り前に遼国から帰り、もう一度遼国に行くために二日前に都を出た。宋遼間の交渉は極めて際どいところにあるらしい。それについて夫は何も言わなかった。国家の機密で妻に言えるようなことではない。

もしやあの手紙で、と思って、すぐに否定する。

——そのようなはずはない。

都に帰っていた間に夫は家にはほとんどいなかった。夫の頭の中には国家の大
事以外はない。三男の誕生を知らせる手紙を見たからといって、急に帰って来る
はずがない。

「何か大変なことが生じたのでございましょう。包十五ほうがいま帰りまして、言
いますには、お手紙を持って追って行きますと、道の向こうから急いで戻って来ら

れる且那様の御一行と行き逢いまして、且那様はそれはもう血相を変えておられ、とても話ができるような雰囲気ではなかったそうです。包十五はそのまま後に従つて都に戻りまして、且那様はいまは皇城に向かわれたそうです。包十五はそれでお手紙は仕方なく孔六こうに託して帰つて来たのでございます」。

「そうなのですか。どうなさったのでしょう」。

手紙は夫に渡されてもいない。

「孔六が包十五に言いましたのは、昨日の夜になつて急に何かあつたらしく、且那様はひどく殺氣立たれ、夜明けとともに馬を走らせ、ひたすら急いで戻つて来られたということで、何があつたのかは孔六も知らないとか」。

夫は一回目には遼国に包十五を連れ、二度も続くのは気の毒と、今回は若い孔六を連れた。

「余程急な異変なのでしょうか」。

「まことに心配でございます」。

私は子の寝顔を見る。

あの手紙でと、あり得るはずのない期待を一瞬でも抱いた自分が恥ずかしく、また悲しくなる。

いまの夫にとって、この子が生まれたことなどを心に入れる余地が一切ないのはわかっていた。それでも手紙を書いたのは、「知らせないわけにはいきませんでしょう」と先生に説得されたからだ。短く記して、包十五に持たせて走らせると、「どうして息子の仕事の邪魔になるようなことばかりをするのかい」と、義母ははは蓮妙先生を詰った。前回と同じ繰り返しだった。

一月に接伴使となった夫は、遼国の使者を迎えに国境にまで行って都に案内し、

四月にその使者とともに遼国に行った。宋国を代表して遼国皇帝と交渉するためだ。夫の不在中に次女が死んだとき、家の内のことで夫を煩わせてはならないと思っていたから、夫に知らせるつもりはなかった。「たとえ読んで下さらなくとも」と先生が強く勧めるので短い手紙を書いた。そのとき義母は先生に嫌味を言い、先生は「いずれ必ず旦那様の御名声を高めることになります」と応じた。その手紙を夫は開かず焼いたと匂十五から聞いた。

帰国した夫に、わずかな時間の隙を見つけて次女の死を報告した。「そうであったか」と一言あっただけだった。それ以上を期待していたわけではなかった。出産が迫っていた胎内の子について問われることはなかった。それもわかっていたのに、寂しさが心の奥底から湧き上がって来るのを止められなかったのは、自分でも意外だった。

夫が都にいる間に生まれてくれればと思っていた。しかし、生まれたのは夫が発った翌日だった。この子は父の顔を見られないとの予感が的中するよう運命が定まっているのかと恐ろしくなった。

夫が都にいた間に、義母は、ひとまず無事に帰還したのを祝う小宴を催した。出産を間近に控えた身で宴に出るには及ばないと義母に言われ、私は蓮妙先生と二人で、宴のさざめきを彼方に聞くだけだった。

「やはり、書かずにいればよかった」。
思わずつぶやく。

手紙を書かなければ、包十五を走らせることもなく、夫が都に帰って来たのを知ることもなく、あらぬ期待を抱くこともなかった。

「それは違います」。

先生は断固とした口調で言う。

「わかっております。わかっているのです。お知らせするのは家を守る者の務めです。旦那様はきつとお手紙をお読みになりません。それが国のために家を顧みない旦那様のお名を高めることになります。それでいいのです。わかっているのです。」

自分の言葉に自分でうなずきつつ、目から涙が落ちて来る。

——どうして。

自分が泣いているのがあまりに意外で驚き、それでも涙は止まらない。

「どうか、気をしっかりとお持ち下さい。旦那様は御立派なお方です。天下第一の婿殿とお父様が見込まれた以上のお方でございます。あなたさまは旦那様の奥様として、これ以上になく御立派になさって来られました。私は常々感心している

のでございませう」。

先生は私を励まそうとしている。しかし、耳を塞ぎたくなる。

子の方に手を伸ばし、

——この子とだけになってしまいたい。

そう思つて、胸の内に痛みを覚える。次女の顔が浮かんで来る。

先生の手が私の手を包む。

「あなたさまはお幸せなお方です。お近くにおいてしみじみそう思います」。

——わかっている。だから。

先生の手を払いのけたく、その感情に慄然とする。

先生は続ける。

「これでもう三十年ほどになりましたでしょうか、あなたさまのお近くにずっといられ

ることができて、この私もしみじみ幸せであると思います。あなたさまのお蔭で、私の人生は幸せなものに変わりました。感謝しています」。

先生は手に力を籠める。

私は努めて冷静になろうと、

「感謝するのは私の方です。先生のお導きがなければ、何一つとしてできなかつたでしょうから」。

——これはその通りのことだ。

先生はさらに言う。

「私のこの身には多数の傷があります。どうして私は傷を受けなくてはならなかつたのだろうかと何度も考えました。考えなくても答えは一つです。人の妻になるのに足りないものが私にあったからです。それでも、何度も何度も考えずにはい

られませんでした。あなたさまと出会って、私にお教えできることの全てをお教えしました。あなたさまは御立派に全てを身に付けられました。私は厳し過ぎたのかも知れません。でも、こうしてあなたさまのいまの御様子を見て、私のして来たことは間違いではなかったと思ってもよろしいのでしょうか。

また涙が頬を伝う。

——先生は本当はわかっている。でも、敢えてこのように言う。だって、そうするしかないのだから。

「何もかも先生のお蔭です」。

私は小さく答える。

「あなたさまはよく務めて来られました。私は多数の傷を受け、自分が悪かったと重々承知していながらも、まことに不遜にも、かつての夫にも問題があったの

ではないかと疑ったりしたことも、正直に申して、なくはなかつたのです。それは抱いてはいけない思いでした。これまでずっと長く旦那様を見てまいりまして、旦那様はまことに特別なお方であります。お父様がお選びになりました通り、天にただお一人のお婿様です。いまこそ、そのことが天下に知られようとしています。旦那様は天下にただお一人にしかできないことをなさろうとしています。

そのような旦那様を支えて来られたあなたさまは天下一お幸せなお方なのです。

私はうなずく。

——でも、もう終わりにしたい。

その思いにぞつとする。

——私はどうかなくなってしまった。

不意に息子が泣き声を上げる。

子を抱き上げ、乳を含ませる。

ちんぎようし

陳堯咨の母のようになる、夫に約束した。私にはもとよりそうする以外になり。不可解な感情は不可解なままに消し去る以外にはないのだろう。

第四の注の続き。

富弼の手下になったのはやはり范仲淹はんちゆうえんだった。

范仲淹は西辺で夏国の李元昊りげんこうと対峙しつつ、独自の姿勢を貫き通した。我が方からは決して戦闘を仕掛けないと決め、朝廷の出兵命令も拒み、李元昊と私的な和平交渉を進めさせた。戦争の継続は夏国のためにもならないと縷々記して李元昊に送った。敵対する相手と私的に交渉するのは明らかに国の定めに違反する。

ある者が「范仲淹斬るべし」と朝廷で叫んだ。そのある者は、りよいかん呂夷簡が依然と

して范仲淹を嫌っていると見ていた。皇帝も范仲淹の独断には呆れているようだった。そのある者は呂夷簡の歡心を買おうとしたのだが、実は罫に落ちてしまった。そのある者がふと気付くと、范仲淹を赦そうとしている皇帝にただ一人真向から逆らっているという構図になっていた。そのある者はいたたまれず、自分から願って地方に出て行つた。かくて呂夷簡は勞せずして気に入らない者を取り除いたのだった。

遼国からの使者は蕭特默しょうとくもく、劉六符りゅうろくふの二人だった。蕭特默は遼国の名族で高位にあり、劉六符は漢人で低い位にあった。富弼は、使者を都に案内するまでの間に、劉六符と何度か話をし、ときに酒を飲みかわした。他国の使節と私的に交わるのは許されない。遼国の人間にも君子と小人の区別があるのなら、劉六符は君子であると富弼には思えた。

遼国は危惧された通り領土の割譲を要求し、蕭特黙は、それを直ちに呑ませようとはなはだ高圧的な態度で都に乗り込んで来た。宋国側には、おうようしゅう歐陽脩のように、要求を突っぱね使者を拘留して帰すなど勇ましく言う者がいる。遼国の使者があくまでも居丈高に我が皇帝に対して非礼をなせば、使者を斬れだの、遼国との関係を断てだの、強硬派が色めき立つのは明らかだった。富弼は劉六符にねばり強く説いて、これまでの友好親善使節と同じ礼儀作法を使者にとつてもらい、最初の危機を脱した。

遼国の要求が正式に告げられると朝廷の議論は沸騰した。強硬派が息巻くなか、かろうじて、富弼が遼国に行つて交渉するという段取りに歩を進めることになったのは、皇帝が戦争に突入するのを望まなかったのが大きかった。

富弼は遼国に行くに向かうの皇帝と幾度も会つて交渉の糸口を探った。獺を好

む遼国皇帝に同行して北の大地を馬で走りもした。遼国皇帝は、歴史的事実に照らして己の要求は正当であると主張した。富弼は、より詳細な事実を挙げて、宋国側にも十分に正当性があると主張した。遼国皇帝は軍事的に遼国が優位にあることを、宋国が興る前からの百年余の歴史を踏まえて解き明かして圧力をかけた。遼国側が軍事力において中国側を凌駕して来たのは事実であつたけれども、ときに遼国にとって都合な出来事もあつたことを告げて、富弼は遼国皇帝を牽制した。

富弼は劉六符としばしば会い、君子の交わりを通じて、遼国内の情勢を分析し、遼国皇帝が懸念するある急所を見抜いた。

「貴国に参りましたより、大王様のために秘かに心配している重大な事柄を今日は申し上げたいと思っております」。

「ほう、そなたが朕のことを思ってくれるのか。それはまことに有難い」。

遼国皇帝は冷笑するように言った。

「端的に申し上げます。大王様に用兵を勧めておりますのはいかなる人々なのでありましょうか。本当に国のためを思っているのか、大王様の御懸念はそこにございましょう。されば、私の見ますところを申し上げますれば、皆己の身のために謀っているだけでございます」。

遼国皇帝の表情は見る見る改まり、

「どういうことだ。詳しく述べてみよ」。

「申すまでもなく、国家というものは君臣が一体でなくてはなりません。しかし、悲しいかな、臣下の中には国家の利益よりも己の利益を先に考える者がいるのも、歴史上の厳然たる事実であることを認めないわけにはいきません。我が国において

も然りでございます。戦争になりましたときに、臣下の中で利を得る者がございます。戦場で立てた功名が利に結び付くというだけではありません。戦争に勝てば、国は土地や財や人を得ます。そのときに、国が得たものを我がものにして利を得る者がいます。勝利の蔭に隠れて国の利を横取りする行為は往々にして見過ごされてしまいます。戦争に勝たなくても利を得る者がいます。戦争を起こすだけでよいのです。戦争をするためには、国はたくさんの人や物を動かさねばなりません。その際に利を得る者がいます。戦争によって、国はたくさんの人や物を費やします。国はそれを補充しなくてはなりません。その際に利を得る者がいます。たとえ国が戦争で負けても、利を得る者がいます。利を得るとわかっている者は戦争をしようと大王様に勧めるのでございます」。

遼国皇帝は顔をしかめ、

「まあ、そういうこともないとは限らぬだろう。だが、そなたも言ったように、勝利すれば、国は土地や財や人を得る。朕はそれで大きな利を得る。そうなる見込みが十二分にあるのなら、臣下の者は朕のために戦をせよと言うはずだ」。

「必勝と信じて確かに勝つのならまことに結構です。しかし、誰もが必勝を疑わなかった戦でも、案に相違して禍となった例は過去にいくらでもございます。たとえ勝つても禍をもたらした例すらございます。かつて晋の石敬瑭は燕雲十六州を差し出すことで貴国の援助を得て皇帝の位に就きました。八年後に石敬瑭が病死して息子が皇帝になりますと、父親の遺言を守らずに急に貴国に逆らいました。そのために貴国の皇帝は怒り、貴国は必勝の戦をものにし、晋を滅ぼし、その支配下にあつた民と土地を全て獲得しました。しかし、その後でどのようになったのでしょうか。貴国に反抗する者が各地に多数現れ、貴国はおびただしい数の壮士、

健馬を失って退却を余儀なくされ、あまつさえ、貴国の皇帝は失意のうちに戦場で亡くなるというまことに不幸な事態となりました。兵を用いて勝利したときに利を得るのは国であり臣下であり、敗れたときに禍を蒙るのもやはり国であり臣下であります。しかしそのときに、臣下の中には自分だけは利を得て、禍はもっぱら国に任せるよう仕向ける者がいるのでございます」。

遼国皇帝は無然と押し黙った。

「ただいま、貴国と我が宋はまことに麗しい友好関係にあつて、貴国は多くの利を年々得ています。その利はもっぱら大王様の手の内にあります。平和が続く限り、大王様は何もなさらずともその利を得られ続けます。いま兵を用いるのを大王様に勧める者は、己が利を得て、禍を陛下に任せようとする者であります。我が国にはいま百万の兵がおります。大王様の御目には弱兵と見えましようが、我

が国は上下心を一つにしております。勝敗は人の和にあると聞きます。戦には時の運もございましょう。貴国がたとえ十倍の兵を用いても必勝を克ち得ましょうか。勝利されても、失うところの士馬は皆無ではありませんまい。失うものは群臣が補充するのでしょうか。大王様が補充されるのでしょうか。勝利された後に、得られた土地を必ず保ち得るのでしょうか。そこより得るものは、通好が絶えなければ貴国に贈られるはずの歳幣を果たして上回るものなのでしょうか。

富弼が語気を強めると、遼国皇帝は嘆息し、

「朕の臣下はかようなことは教えてくれなかった」。

これを境に交渉は次の局面へと進んだ。遼国皇帝は、表面上はこれまでの要求を取り下げはしなかったけれども、明らかに戦争をする気をなくし、宋側から最大限引き出せるものを引き出すことに関心が移った。富弼は足元を見られまいと、

時に強い姿勢に出ながら、双方が合意できる落としどころを探った。

かくて大枠が定まり、富弼はそれを持って帰国した。宋国側の最終方針を短期間でまとめ上げるのは、遼国皇帝との交渉よりも困難だった。是非を通そうとする強硬論は相変わらず根強かった。最終的には皇帝の信頼を克ち得た富弼の考えに基づいて朝廷の議論は一応収束した。

富弼は、皇帝の代理として遼国皇帝に向かって申し述べる言葉を皇帝から授かり、それと同じ内容が記された国書を携えて遼国に向かった。

楽寿がくじゅという町に到着し、夜になってふとあることに富弼は気付いた。あまりの忙しさのため、書き上げられた国書を富弼は見えていなかった。副使に尋ねると、驚いた顔で、

「いえ、私は見ておりません。正使殿が御覧になっているとばかり思っていました

た」。

富弼の背に冷たい汗が下った。

「もしも遼国皇帝の前で私が述べることと国書の内容とが異なっていたならば、事は敗れてしまう」。

富弼は、国書が意図的に富弼にも副使にも見られることなく封印されたのではないかと疑った。朝廷には、もともと富弼のことを快く思っていない者もいれば、強硬論を唱えて敗れた者もいる。富弼が国家のために重要な仕事を成し遂げるのを嫌う者が間違いなくいる。富弼は死を覚悟して封を切った。果して国書の文面は同じでなかった。

楽寿に副使を残して富弼は都に走った。皇城に着いたのは日暮れ時で、直ちに皇帝に会いたいと求めた。取次の者は、皇帝との面会は前日のうちに申し出なけ

ればならないとの規定により、明日まで待てと言った。富弼は急を要すると強く求め、皇帝は富弼を召し入れた。

富弼は、国書の文言が異なっていることを皇帝に告げ、

「このようであるからには、臣は遼国において死ぬよりありません。国書を作られたのは宰執であります。すなわち、宰執は臣を死なせる意図をもつてこの国書を作ったのです。もとより臣は命を惜しむものではありません。しかし、臣が死ねば国事が敗れます。国事を敗るためにかようなことを企んだのであれば断じて許しません」。

皇帝は宰執を呼んで問い糺した。宰相の呂夷簡は驚く様子もなく、

「これは筆写のときの誤りでございましょう。すぐに書き直させます」。

富弼は怒った。

「単なる書き間違いですむ問題ではありません」。

呂夷簡は涼しい顔で笑みさえ浮かべた。富弼は激しく呂夷簡を罵倒した。

皇帝はそこに同席する晏殊に仲裁するよう目配せした。

晏殊は言った。

「息子よ、そなたの気持ちはよくわかる。国ために真剣であればこそ、そのように怒るのであろう。だが、少しばかり冷静になつてはくれまいか。宰相殿がおかしなことをなさるはずがなからう。国のためを皆思っているのだ。それは筆写した際の誤りにすぎない。それを見落としたのはまずかったが、宰相殿の関わりのあることではない。一方的に責めるのは少々筋違いではなからうか」。

晏殊の言葉は富弼をなだめるどころではなかった。舅を指差し、

「この者こそ姦邪です。宰相殿にへつらつて、お上を欺こうとしています」。

媚の罵りに晏殊は顔を真っ赤にした。

皇帝は言った。

「大事なものは遼国との交渉である。朕はそれを富弼に任せた。いま我が国にとって遼国に行き、思う通りに事に臨んでほしい。いかなる結果になろうとも、朕は富弼の為した通りでよろしいとするであろう。富弼よ、何らためらうことなく働いてくるがよい」。

富弼は宮中に泊まって新しい国書が書き上がるの待ち、翌朝早くに再び都を出た。

二人の弟が入って来る。

慶曆二（一〇四二）年十月。

あんしやうゆう

晏承裕がそつなく挨拶し、すっかり大人になったものだと感じる。

そのことが自分で可笑しくなる。数えれば承裕も二十四歳、先年妻を娶ってもいるのだから、大人になっていて当たり前だ。

承裕は、長兄が早くに死んだために晏の家の男兄弟としては一番の年長で、父の後を継ぐことが期待されている。しかし、姉の目からして、承裕にこれまでに何かしら際立ったものを感じたことがない。父のように七歳で人を驚かせるというのは稀有だとわかっている。科挙にまだ合格していないのは二十四歳だから取り立てて遅いわけではないが、姉に向かって挨拶ができただけで感心させられているようではいけない。

一番下の弟の幾道きどうが兄の脇にちんまり立っている。やっつと五歳だ。才能のきら

めきがあるかどうかはまだわからないが、とにかく可愛らしい。それも小憎らしいばかりだ。承裕の挨拶を聞きながらも、目はどうしても幾道の方に行ってしまう。我が子には我が子なりの愛おしさを感じても、可愛らしさは幾道に到底及ばない。

父はこの子に夢中だ。溺愛とっていい。父は、幾道とうちの紹庭しやうていを仲良くさせようと、時折、我が家に寄越す。普段は誰か家の者が付いて来るのだが、今日は珍しく承裕だ。

承裕は挨拶が終わるとほっとしたような顔で弟の肩を軽く押す。

幾道は目をくりつと動かし、ぺこりと頭を下げ、

「今日もまたお邪魔させていただきました。このごろは寒くなつてまいりましたけれど、お姉様はお変わりありませんでしょうか」。

歌い上げるような抑揚を付けて言う。

私は自然と微笑んで立ち上がり、幾道の仕草に似せて、へこりと頭を下げ、

「ありがとうございます。私は見ての通り、元気になっています」。

「でも、お子さんを御出産されてまだ半年にもなりません。くれぐれもお体を大切にして下さい」。

のびやかな声で五歳の子らしからぬことを言ったので、

「まあ、誰に教わって来たのでしょうか。そのように気遣ってくれて、嬉しいような、驚くような」。

「僕はお姉様のことを本当に大切に思っているのです」。

幾道は妙に大人っぽい。

「それはそれありがとうございます。私は、ほら、この通りです」。

幾道の両脇を抱え、高く掲げてみせる。そのまま胸におさめてしまいたくなくなる
気持ちが湧く。

幾道は上から丸い目で私を見て、

「そうなの」。

小首をかしげる。

不意に胸が裂けそうになる。

——もしかして、この子はわかっているの。

思わず知らず、自分の気持ちをこの子に向かって言ってしまうたくなる。

——そんなはずがない。

幾道をゆっくりと床に下ろす。

幾道は床に立つと、腕組みをして私を見上げる。

私の気持ちはいつからか落ち着き場所を得ていない。それを五歳の弟に言つて
どうかなるものではない。

——でも、この子なら。

私はふつと笑う。

「僕は、何かおかしなことをしたでしょうか。笑われるようなことを」。

幾道の小さな口が動き、私の瞼が熱くなる。

——いけない。

笑つたのは私自身に向かつて。

——だって、この子にどうしてもraitaiというの。

妙な気持ちを振り払い、

「御免なさい。違つたのです。急に思い出したことがあつたのです。そうなのです。」

それって、この前のこと、紹庭がおかしなことを言ったのを、なぜかいま急に出してしまつて。それって、あれが、全くとんちんかなことを先生に言ったのです。でも、とんちんかなのは私の方。いまそれをどうして思い出して笑つたりしたのでしょう」。

懸命にごまかそうとする。

汗が噴き出ている。心も体もここのところおかしな具合になっている。汗とともに涙を小巾で拭う。

幾道はじつと私に目を注いでいる。それを避けるようにして承裕の方に顔を向ける。

承裕は怪訝そうな顔で、たぶん何か勘付いてくれたのだろう、

「紹庭君は何を言ったのですか。姉さんが不意に思い出し笑いをするくらいにお

かしなことなのですか」。

話を繋いでくれる。

「いいえ、大したことではないのです。あれはそう、『論語』の覚え違い。皆に話したら紹庭に気の毒だから黙っています」。

もともと根も葉もないことで紹庭を笑い物にしてはいけない。

「紹庭君は幾つでしたか」。

「九歳です」。

「だったら、『論語』の覚え違いくらい何でもありません。私なんか、九歳のころは、姉さんもよく御存知のように、ひどいものでした。いまでもあやふやところがあつたりしますから」。

承裕は正直だ。勉強が不得手で、それをさほど苦にしていなくてところが案外承

裕のよさであるのかも知れない。死んだ兄は勉強に生真面目過ぎた。

「まあ、いまもって『論語』があやふやとは困ったものです」。

「紹庭君はいまどうしているのですか」。

れんまよう

「蓮妙先生にお勉強を習っています。朝のうちはいつもみっちりしぼられています。どうもあなたに似たみたいで、勉強が得意でなくて困っています」。

「私は関係ないでしょう。紹庭君も蓮妙先生に習っているのですか。厳しい先生なのでしよう。僕等は蓮妙先生でなくて助かりました」。

「それはよいこと。紹庭があなたみたいにならないよう、先生にもっと厳しくするようお願いしなければ」。

私は笑いながら言う。

「それでは紹庭君に気の毒です」。

「厳しいのを逃げようとばかりするから、あなたはなかなかお父様のようにならないのです」。

「父上のようになるのは無理でしょう。誰にもできることではありませんから」。
承裕は苦笑いをする。

「晏の家の将来はあなたにかかっているのです」。

「父上のような人は我が宋朝が始まってからただ一人です。私になれるはずがありません」。

「そっくりになりなさいとまでは言いませんけれど、最初からあきらめてはいけません」。

少々姉らしく言ってみる。そうすることで、心の乱れを取り戻そうとする。

「私は生まれつき物覚えがよくないので、仕方ありません。たぶん、父上の

よいところを私は受け継がなかったのでしょう。その点、姉上がうらやましいです。もしも姉上が男だったら、私に無理な期待がかかることもなかったでしょうから。それにこの幾道も違います。幾道は一度聞いたらすぐに憶えてしまうみたいです。同じ父上の子でこうも違うのは母のせいなのでしょうか。

「まあ、御自分の不出来を母上のせいにしてはいけません」。

承裕は見る見る悲しげな顔になり、

「母のせいで私が不出来ならそれでいいのです。母の子であることの証であるのですから」。

「変なことを言うものではありません。お母様は御立派なお方でした。あなたみたいに平気で怠けたりすることなどは一切ありませんでしたから」。

「母はたぶんずっと無理をしていたのだと思います。だから、早くに亡くなって

しまったのです。いまさら言っても詮無いことですが」。

承裕は肩をすぼめる。幾道はそれをそつと見上げる。

「あなたは物覚えがよろしいのですか」。

幾道に尋ねる。

幾道は口をすぼめ、

「どうなのでしょう。よくわかりません」。

承裕は、

「父上の詞をすぐに憶えてしまいます。このごろは旋律に載せてみごとに歌ってみせるほどで、父上はそれをいたく喜びます。姉上は幾道が歌うのを聞いたことがありますか」。

「いえ、ちっとも知りませんでした。もしかして、私に隠していたのですか」。

「そういうわけではないのですが」。

幾道が口ごもるのを見ると、確かに賢いのだろう。我が夫が詞を嫌うとわかっていて、これまで黙っていたのだろう。詞は楽曲に合わせて歌うのだが、その楽曲たるやいずれも妓女達が歌う卑俗なものだ。

「よかつたら、聞かせてもらえませんか」。

膝を曲げて、幾道に顔を近づけて尋ねる。

幾道は顔を輝かせ、しかし、兄の方を見て、

「構わないのですか。叱られるようなことはありませんでしょうか」。

承裕は笑い、

「お母様には内緒にしておくから」。

幾道の頭を軽く叩いて、私に向かい、

「父上は喜ぶのですが、この子のお母様はいい顔をなさらないのです。きちんと学問もしないうちに詞を憶えて人前で歌ったりするなどんでもないと。何しろ、父上は幾道ばかりを可愛がっていますでしょう。この子のお母様は私たちに気兼ねして、幾道に対して厳しくしなければと思っておられるのです」。

「賢いお方ですこと」。

「ええ、才色兼備とはまさにあの方のための言葉のようです」。

「お父様もよいお方を娶られました」。

幾道の前でその母を褒める。

「私らは、父上がいくらこの子を猫可愛がりしたところで、いまさら父上の前で張り合おうなどと思ったりはしませんから、好きにしてくれていいのです。この子のお母様は、姉さんより若いでしょう、だから本当にもうあれこれ気を遣って、

「お気の毒なくらいです」。

「お母様のおっしゃる通りにするのが一番いいと思います。だけど、ここは内緒で、ちよつとでいいですから、聞かせてもらえないでしょうか」。

幾道に微笑みかける。

幾道は歌いたそうな顔でもじもじと迷っている。その背を承裕が押し、

「一番得意のあれをやってみたらいいだろう」。

「本当に歌っていいのですか」。

幾道は胸の前で手を組んで首を軽く回す。

「大丈夫。家に帰つても誰にも言わないから。特にお母様には絶対に言いません」。

「ええ、私も黙っています。頼みます」。

黙っているというのは我が夫に対してもだ。この屋敷で詞が歌われたのを私は

聞いたことがない。

幾道は真剣な顔付きになり、組んだ手と首を同時に右に左に傾けながら、口をぱくぱくさせ、そしておもむろに歌い始める。

一曲新詞酒一盃

一曲の新しい詞に酒が一盃。

去年天気旧亭台

去年と同じ天の気配にもと通りの亭台。

夕陽西下幾時迴

夕日が西に下って、いつめぐり返って来るのか。

無可奈何花落去

どうすることもどうすることもできずに花は落ち

似曾相識燕归来

もとからの知り合いのよう燕が帰って来る。

小園香径独徘徊

小さな園の香りよき径みちを独り徘徊する。

「亭台」は幾道と最初に会った亭の建つ高台で、「小園香径」は西園の小径なのだろう。

幾道が歌ったこの詞は、近ごろ父の傑作として世に喧伝されているものであることくらいは、この家にいる私でも知っている。歲月が逝くのを留め得ぬ哀感をこの詞は歌う。その情趣を「無可奈何」ウーケーナーケの音調に籠めて五歳の小児が何ともやるせなく歌う。

幾道は歌い終わると、私はしばしその余韻にひたって放心状態に陥る。

——無可奈何。

それはたぶん長いことではなかったのだろうけれど、はっと気付くと、二人の視線が私に注がれている。私はどきまぎして、急いで我が心を取り戻そうとする。

「ありがとう。すばらしかった。驚きました」。

幾道の手を取り、

「でも、お母様がおっしゃる通りなのかも知れません」。

「歌ってはいけなかったですか」。

——違う。歌ってくれて嬉しかった。だけど。

「今日もいつものように紹庭のところに来たのでしよう。いま蓮妙先生のところにいますから、あなたも行つて、紹庭が教わっているのを聞くといいでしょう。」

「さあ、お行きなさい」。

幾道の手を引き、返事も待たずに部屋の外へと連れて出る。

「ええ、では行つて参ります」。

幾道は心なしかうなだれて歩いて行く。

その姿を見送りつつ、微妙な心の揺れにおののきを覚える。

幾道ではなく、あたかも父が歌っているかのようだった。父の思いが如実に伝わって来たから、私は我を失ってしまった。

——これはどうということ。

幾道が通路の向こうに消え、少し間を置いてから、ゆっくりと振り返って部屋に戻る。

承裕が眉根を寄せて身を固くしている。

「どうかしましたか」。

それはまさに自分に向けての問いのようでもある。

「いえ」。

承裕はたぶんいろいろ感じていることがあるのだろう。

承裕が遠慮して問わないのをよいことに、逆に私は尋ねる。

「そういえば、珍しくあの子と一緒にここに来たのには、何か訳がおりないのでありませんか」。

承裕は、はっとしたようにうなずき、

「ええ、実はそうなのです。姉上に申し上げなければならぬことがあるのです。

でも、本当のところは、言わずに帰ってしまったらいいと思っています。でも、

それではここに来た意味がありませんし、父上に叱られてしまいます。私として

は、これは無理強いすべきことではないと思っています。だから、言いたく

ないのです。でも、これは言わないといけないのです。仕方ないのです。どうか

嫌な顔をなさらずに聞いていただけませんかでしょうか。父上の言い付けなもので

すから」。

次第に哀願するかのようになる。我が弟ながら、これだから頼りなく思えてしまふのだと寂しくなり、同時に、弟がこうであるのをむしろ好ましく感じてさえもいる。

「嫌な顔などはしません。安心して、おっしゃい」。

およその見当は付く。夫に関わることなのだろう。父は直接には言えないので承裕を代わりに寄越したのだ。

「たぶんもうおわかりでしょう。つまり、姉上から、義兄上あにうえにひと言でいいのです、口添えしていただくわけにはいかないでしょうか。要はそういうことなのです」。

承裕は一人合点したように何度もうなずく。

「何を口添えするのですか」。

ほぼわかっついていて敢えて問う。

「つまり、翰林^{かんりん}学士になられるようになります。父上が、そのように段取りを整えておられまして、じきにお上から御沙汰が有りましたよう。そのときに、これまでのように辞退なさったりせず、どうかお受けいただきたいのです。お上も大層お心を痛めておられると伺っています。お上にお薦めしている父上の面目もあります。今度はかりはどうしてもお受けいただきたいのです。どうか、姉上から義兄上に、よしなにおっしゃってはいただけでないでしょうか。この通り頼みます」。

深々と頭を下げる。

私はわざと可笑しげに、

「あの人が頑固でどうにもならないものだから、私にうまいこと説得してほしいと、父上はおっしゃっているのですね」。

「有り体に言ってしまったえば、そのようなことになりましたか？」

承裕は正直だ。

「他ならぬあなたの頼みですから、そうしたいと思います」。

「本当ですか。ありがとうございます」。

承裕はほっとした顔になる。

しかし、いま夫にものを言えるような状況にはない。それなのに思わせぶりの返事をしたのは、ふと一つのことを思い付いたからだ。

「礼を言うのは早過ぎます。あなたの頼みを聞くには一つの条件があります」。

承裕はまた堅い表情になり、

「何でしょうか」。

「何しろあの人は頑固です。私もとても手に負えません。どのように説得したら

いいのか、その方法をあなたが教えてくれたなら、それに従って試みたいと思います」。

半ば本気で弟に教わりたいと思っている。

「はあ、説得の方法ですか。それを私が考えるのですか」。

「ええ、だって、私に難しいことをさせようというのですから、それくらいはしていただかないと」。

「姉さんが考えろとおっしゃるのなら、何とか考えてみたいとは思いますが、つまりは、義兄上をどのよう説得したらいいのかということでもありますけれども、それを考えるには、まずは、義兄上がどうして昇進をお断りになっているのか、その訳を知っておく必要があります。それがわかれば、どう説得したらいいのかも見えて来るのではないでしょうか。でも、私にはお断りになる理由がわか

りません。昇進は誰もが望むことでありましょう。姉上は理由を御存知でありましようか」。

夫は接伴使になって以来、三度にわたって昇進を辞退した。一度目は遼国皇帝との最初の交渉に行く直前で、朝廷は夫の位を上げて見栄えをよくしようとしたのに対して、まだ何もしていないからと辞退した。二度目は遼国との最初の交渉を終えて帰還したときで、このときはまだ決着していないからと辞退した。三度目は遼国との和議が成立した後だ。今度は辞退する理由がなさそうなのに夫は固辞した。

弟がすぐに問いを返して来たのに対して何かを言おうとして、自分の心の奥底にあるものに気付き、不意打ちを食らったように、

——ああ、そういうことだったのか。

私は呆然としてしまおう。

「姉上、どうかされましたか」。

顔に汗が噴き出ている。

「これは難問です。困りました」。

つぶやきつつ、汗を拭う。

答えを得ようとして得られないのを難問という。私は辞退の理由を承知していない。わからないというよりは、わがらうとして来なかった。いまも知りたいと思っていない。

——どうして。

承裕は心配そうに、

「御免なさい。変なことを言ってしまった。義兄上にはきつとお聞きになり

づらいのでしょう。お家でも怖いお方なのでありましょうから。」

「たぶん、普通の殿方よりは」。

承裕の言葉に乗って、ごく平凡な解釈で留めておこうとする。

いまは考えたくない。

——それはどうということなのか。

もしも父と夫のどちらを選べと言われたなら、夫を選ぶと思ったのはいつであったのか。そのようなかつての日々がなかったようにすら思える。

夫は立派な仕事を成し遂げた。遼国から無事に帰還しただけでも幸運であるのに、戦争を回避することに成功したのだから、私には大きな喜びがあつてしかるべきだ。なぜかそうではない。

「やはり、義兄上を説得するなど初めから無理なのです。姉さんに申し上げるの

は嫌だったのです。でも、父上に言い付けられては従わないわけにはいかななくて。

「せっかく来てくれましたのに」。

「いいのです。帰ったら父上には適当に報告しておきます。父上だって、わかっ
ておられるのですから」。

承裕は微笑む。

突き上げて来る思いに駆られる。

——西園を歩きたい。

私は身を震わす。

——無可奈何。

第四の注の続きの続き。

富弼は、困難な交渉の末に遼国との平和を保ったのを、人に誇ることは生涯において一度もなかった。後年、洛陽らくように引退していたときに、何かの席上で人々がこのことを持ち出して富弼の功績を讃えると、近くにいた富弼は聞かぬふりをし、首まで赤く染めて深くうなだれた。後で息子達が訳を問うと、富弼は言った。

「あのころ、我が朝の用兵に優れた將軍は皆老いるか死ぬかし、戦に習熟しない將軍しかいなかった。非は我が方にはなくても、どのように禍が及ぶかわからなかった。非に屈して歳幣を増やすのは我が意ではなかった。恥を忍ぶよりなかった。あれでよかったのかと、いまもって思い返さずにはいられない」。

富弼は、遼国皇帝との二度目の交渉に臨むに当たって、遼国に送る歳幣を宋国として許せる範囲内で増すことで妥結に導くよう皇帝に託された。歳幣額はそこそこのところに収まり、最後の問題はいかにして宋国の面目を保つかということ

になった。脅しに屈して頭を下げて払うという形には絶対にできない。遼国側は、宋国が歳幣の増加分を遼国に「献じる」と合意文書に記すよう求めた。富弼は強く抵抗し、歳幣の増加額を記すだけにしようとした。遼国皇帝は「献」の字を強く求めて双方譲らず、交渉が決裂しかねない状況に劉六符が知恵を絞り、「献」を「納」にしてはどうかと提案した。富弼は「納」でも難しいと考えたが、「献」「納」の両案を持って本国に帰った。

宋側には、「献」はもちろん「納」でも強い抵抗感があり、富弼はもう一度遼に行って交渉をやり直す覚悟をした。そのときに、「納」でよろしいと、議論を終わらせたのが晏殊だった。皇帝は晏殊の考えでよしとし、宋遼間の和平は成った。

慶曆二（一〇四二）年十月、富弼を翰林学士にするとの命が下った。翰林学士院は中書省に属し、皇帝の発する詔勅を起草するのを主な仕事とし、ここを經由し

て執政、宰相に昇格して行く例が多くあった。皇帝は辞退を重ねる富弼に今度こそは受けさせようと強い姿勢で臨んだが、富弼はまたも固辞した。

「歳幣を増すのは臣のもとからの志ではありませんでした。朝廷は西に李元昊を討たねばならず、北に事をなす余裕がありませんでした。そのために、あえて死をもつて歳幣を増さぬよう争わなかったのであります。私には何の功績もありません。それで賞を頂戴することなどできませんようか。お上におかれましては、ますます武備を修して、国の恥をお忘れになりませんように」。

富弼は「国の恥」とまで言った。

富弼には「国の恥」を為した苦悩があり、このころ妻子を顧みる余裕は一切なかった。一人の娘の死と、一人の子の誕生を知らせる家からの手紙を見もしなかったことは、富弼が強い意志をもつて国事に携わった何よりの証として人々の間

風呂桶に乗って

で
語
ら
れ
た。
。

第五章 さてさて、こうなるしかなかったの？

夫に呼ばれる。

慶曆四（一〇四四）年八月の夕刻。

不可解な感覚にずっと取り付かれている。心と身のそぐわないような、前が塞がれているような、あるいは、自分がここにはいけないような、しかし、冷静に省みるとそのようなものはないと思えるくらいに曖昧である。誰よりも恵まれているはずの私にこのような感覚があるのは罪であるかとも思える。それでも打ち消すことはできない。

この感覚に気付くようになったのは幾道きどうが詞を歌うのを聞いてからだ。たぶんその前からもあったのだろう。見て見ぬふりをしている間に消えて行くだろうと

何となく思っていたのかも知れない。

子供達を連れてたまに西園を訪れるのが何よりも楽しみで、そのときばかりはこの感覚を意識せずにすむのだが、このごろはそれもできなくなっている。女の徳という、もう十分に知り尽しているはずのものと自分を一つにできていたならば恐らくこの感覚はなかっただろう。

書院の入り口で立ち止まる。ほの暗い片隅にぼんやりとした影がある。皇城から帰宅した夫が官服のまま一人立っている。

——このまま戻ってしまいたい。

そう思ってもできるものではない。夫に呼ばれたのだ。妻であるからには従うものだ。

夕方になって強まって来た風が吹き込む窓に向かって夫は立ち、身動き一つし

ない。いつも通り大事な国家のことを考えているに違いない。

——私などを呼ばなくても。

男は外を治め、女は内を治める。これを踏み外すようなことはもうない。

——国に関して思うところは何も無い。

自分に言い聞かせる。

——だから、呼ばないでほしい。

足を止めた場所に留まり、そのうち夜が来て、闇にまぎれてしまえないだろう
かと思う。

夫の影が動き、

「ああ、来て下さいましたか。入ってそこに座って下さい。大切なことを決めなければならなくなりました」。

夫は腕を伸ばし、いつもの場所を示す。低く会釈して中へと進む。いつもの場所とはいえ、こうして夫と向き合うのは近頃では稀だ。

私が腰掛けるのを待って、夫は静かに話し出す。

「私がいま難しい立場にあるのは御存知でありましょう。ここでどうするのかを決めなければなりません。いまのままではどうにもなりません。しかし、決めかねています。これはあなたにも関わることです。あなたの考えを聞かせていただきたいのです」。

その言葉遣いは変わらない。それを以前と同じようには受け止められない。

夫がたとえ何も言わなくても妻はそれに従う。それが世間一般の夫婦というものだ。友人としてという言葉に偽りはなかったのだらうけれど、夫も私も、特に私の方が、その意味するところをより多くはき違えていたのだらう。

——もう尋ねないでほしい。

「なぜこのようになってしまわねばならなかったのか。考えられもしない事態です。全く理解できません。困っているのです。それであなたに来ていただいたのです」。

夫は嘆息し、私は黙っている。

敢えて頑なになっているのではないけれど、いまはこうするしかない。

「どうしてなのかわからなくて、どうしたらいいのかということになったら、なおのことわかりません。このようなことはこれまでにありませんでした。一体どういうことなのか、見当も付きません。私はどうかしてしまっただけです。突如として、愚かしい猿にでもなってしまったかのようです」。

夫にしては珍しい言い方に、それもひどく苦しげであるので、私はそっと視線

を上げる。

夫は唇を噛み、顔を恐ろしいまでに歪めている。これは本当に困っているのだらう。

——だけど、私だって。

夫は小さくうなると、そのまましばし黙り込んでしまう。

——私はせいぜいのところが陳堯咨ちんぎょうしの母。

そつとこの場から抜け出てしまいたくなる。その一方で、夫の弱点を思い起さず。理非が不分明のとき夫は身動きがとれない。

およそのことは知っている。弟の承裕しょうゆうが教えてくれたことからしても、夫は辺境の地に流されてしまうか、悪くすると命の危険さえあるという。厳しい処罰を受けねばならないような罪は夫にはない。政敵は火のないところにも煙を立たせ

る。

夫が我が父晏殊あんしゆを皇帝の面前で「姦邪」と罵ったことは広く知られ、その後も「納」の字を受け入れると父が決めたのを夫が遺憾としたことから、世の人は舅と婿の軋轢は深刻と見て、夫を敵対視する人々は自分達に同調するよう父に働きかけている。父はそれには応じないで、事を円満に収めようと努めてくれている。そのような父の氣遣いに夫は一切応えようとしない。

義母ははは初めから我が父晏殊を嫌っている。「世間の目があるでしょうに」と冷やかに言われ、西園に行くのを自粛しなければならなくなった。弟達も氣兼ねして稀にしか来ない。

夫は不意に荒々しく立ち、窓辺に佇み、それから部屋の内を回ってまた座り、「私には理解できないことだらけです。どうしてなのでしょう。あなたの考え

を聞かせていただけないでしょうか。友としてどうかお聞かせ下さい」。

哀願するように言う。

それがなぜか可笑しいことのように私には思えて来る。

——この人はこのようにしかできない。

夫はたぶん友という言葉の意味を正しく理解しているのだろう。その言葉の意味通りに私達が友として話ができると考えている。本当にそうであるのなら、いまの私はいこうではない。

「それほどまでにお困りなのでしょうか」。

「そうです。それであなたに来ていただいたのです」。

「私の思うところをここで申し上げてよろしいのでしょうか」。

「もちろんですとも。友として、どうか思うままに何でもおっしゃって下さい」。

久しぶりにかつての悪戯心が甦って来る。

すぐにためらいが生じる。

——もう言わないつもりだった。繰り返したくない。

しかし、これは夫を守ることになると思り返す。

夫は国家にとって大切な人だ。終始国家のことばかりを考えているこのような人は稀であろう。妻としてこの人を守るべきだ。遼国との和平を「国の恥」として夫は昇進を辞退したけれど、戦争を回避できたのは国にとって民にとって偉大な功績だ。夫への嫉視が恐るべき敵愾心に拍車をかけているのは間違いない。

夫はこのような人であると私はわかっていなければいけなかった。夫の心が読めると思ったこともあった。思い違いをせずにいればよかったのだ。

努めて何気ない口調を装い、

「では、申し上げます。都をお出になつてはいかがでしょうか」。

夫は睨み付けるような目で、

「あなたはそのようにおっしゃいますか」。

私はすでに覚悟を決めている。夫を守るためだ。

「はんちゆうえん范仲淹様はそうなさいました」。

「私には都を出る理由がありません。都で大事な仕事を続けなければなりません。

我が師には、西方への備えに是非とも行かねばならないということがありました。

私には何もありません」。

「理由でしたらいくらでもございましょう」。

「ことさらに素っ気なく言う」。

「何があるのでしょうか」。

「西方といえば范仲淹様です。同じように、遼国といえばあなたさまなのではございませんでしょうか。遼国に備えるためにと、都をお出になればよろしいのではないのでしょうか」。

「遼国に備えるべきことなどいまはありません。遼国との関係は極めて良好です。国書を交わして国と国とできちんと決めたのですから間違ひありません」。

「よその国でいまこの時に何が起きているのか、誰にもわかりません。あなたが、備えが必要な事態が迫っているとおっしゃれば、誰もがそうかと思うだけです」。

「それでは人を欺くことになりませんか」。

叱り付けるような声にも、私はもう止まらない。口から出してしまったからには、最後まで言うしかない。

「遼国に対する備えを増して、何か害になることがありませんか。だったら、それでいいではありませんか」。

「それはそうかも知れませんが、私からお上に願い出て都を出るのですか。それではお上に嘘を言うようなことになりはしませんか」。

「遼国でいま本当に不穏な動きがあると、あなたさまもお考えになれば、決して嘘ということではありませんでしょう。それでも、あなたさま御自身から申し上げるよりは、他の人からお上に申し上げた方がきつとよろしいでしょう。お上が御心配されて、何か備えをなせとおっしゃったら、そのときにあなたさまが行きますと名乗りを挙げたらよろしいではありませんか」。

夫はじつと私を見詰める。

——この人を守るため。

夫の視線に耐える。夫は目を閉じ、腕組みをして考え込む。

夫が言う通り、要するに嘘について逃げるよう勧めた。理非を通すことを何よりも大切にする夫がそのような考えを喜ぶはずがない。初めからわかっていた。夫を守るにはこれしかない。

——いつもこうだ。

友として大切な助言を求められたときに限って、夫に喜ばれるようなことを言えない。

心と身がばらばらになるような嫌な感覚が広がって来る。

夫の沈黙と自分の感覚に耐え難くなって来て、不意に思いもよらぬ一つの考えが脳裏に浮かぶ。

——女子状元は未来永劫実現しない。

その考えを心の奥底で重く受け止める。

——きつとそつだ。

世の中は次第によくなっていくものと漫然と思っていた。自分はなれなかったけれども、いつしか女子状元も現実のものになろうかとほのかに思い描いていた。しかし、そうではないのだ。

夫は最良の士大夫なのだろう。友として私を見ようとしてくれている。それが夫の本心であるのは疑いようがない。しかし、私はいまここにこうしている。女の徳は不変。それに従ってこそ私は安らかでいられる。だとすれば、女子状元の生まれる日は来ない。

ずっとずっと昔から言われて来たのは、古代の聖天子の時代が最も良くて、それからは世の中は悪くなる一方だということ。それを押し留め、少しでもよい方

に戻すために人は努めなければならぬというのが孔子の教えだ。私はたまたま少しばかりよい方へと向かいつつあった時期に生まれ合わせたので、それがずっと続くかのように思ってしまった。これからは必然の流れのせいで世の中が悪くなってしまうのなら、女子状元などが生まれようがない。

夫は言う。

「明日の朝までにそれ以外の知恵が湧かねば、あなたの言うようにしてみるしかあるまいか。ありがとう、ここに来ていただいてよかったです。どうか友としてこれからもいろいろと教えて下さい」。

暗い物思いから私は出て顔を上げる。夫は小さく微笑み、すっと立ち上がって窓辺に向かう。

「女の浅智恵にございます。どうかこの夕闇に放り棄ててしまってください」。

私は小さくつぶやく。

私にあるのはやはり陳堯咨ちんぎょうしの母であること。そうだとはい初めから十分過ぎるほどにわかり切っていたのに。

第五の注。

宋遼間の和議が成立したとき、夏国かの李元昊りげんこうは、遼国が労せずして漁夫の利をかすめ取ったことに腹を立て、その鬱憤を晴らすかのように宋に攻め入った。李元昊が攻撃したのは、范仲淹はんちゆうえんの号令の及ばない定川寨ていせんざい。宋側が反撃に出ると、李元昊は負けたと見せて逃げた。宋軍は懲りずにいつもの術にはまり、指揮する將軍がことごとく戦死する大敗を喫した。

范仲淹は西辺に有為の人を呼び集めて防衛策を徹底させるとともに、李元昊と

水面下での接触を図った。李元昊は連戦連勝ではあったが、それで土地が増えたわけでも財を得たわけでもなかった。いたずらに戦士を失い国力を消耗した。

遼国は後ろめたさを感じたのか、宋国と夏国の仲介役を買って出て、和平交渉が始まった。西辺の緊張は緩和され、前線に張り付いていた范仲淹と韓琦かんきは中央に呼ばれた。富弼は、二人が同時に西辺を離れると、李元昊がその隙を狙っておかしたことをしかねないと、二人を一年交替で西辺に置くことを提案し、採用された。

范仲淹が朝廷に復帰すると、かつて呂夷簡りよいかんが主導した朋党批判によって都から追い出された人々も続々と中央に呼び戻された。呂夷簡は病気を理由に宰相を退いた。ここに、石介せきかいは新しい時代が到来したと、それを賛美する詩を作った。『慶曆けいれき聖徳詩』という。范仲淹等を「聖徳の人」と賛え、それと対立する人々を「大姦」

と罵った。

呂夷簡の後に宰相になったのは晏殊あんしゆと章得象しょうとくしょうで、執政に賈昌朝かしょうちようが就いた。晏殊はついに念願の宰相になった。この人選は呂夷簡の置き土産のようなもので、章得象と賈昌朝は「大姦」と評される人物で、晏殊は微妙だった。

慶曆二（一〇四二）年八月、范仲淹は執政に昇進した。それによって范仲淹の前の樞密副使が空席となり、そこにおさまるよう富弼は言われた。富弼はこれも受けまいとした。このとき李元昊の使者が都に来ていて、その使者が本国に帰るのを見送る儀式に樞密副使がいないわけにはいかないと、皇帝は富弼を説得した。また宰相の章得象は「今回の昇進は遼国との交渉の功を賞するものではない」と断言した。かくて富弼もついに受けないわけにはいかなかった。

富弼が樞密副使になると、晏殊は、舅と嬪がともに朝廷の大官に並ぶのはさし

さわりがあるとして、宰相の位を降りようとした。それは皇帝によって引き留められた。

九月、范仲淹と富弼は皇帝に呼ばれ、紙と筆を渡されると、「朕ちんが見ているこゝで国政の改革案を書け」と命じられた。二人が改革を志して久しいのを皇帝もよく知っていた。二人は、いったん退席し熟考の上で提出したいと願った。皇帝は面前から下がるのは容赦したものの、時間の遅滞は許さなかった。二人はかつて范仲淹が書いた「万言書」に基づいて十項目からなる改革案を作成して提出した。皇帝は一読すると、直ちに実行せよと命じた。準備の期間はなかった。

十項目は官僚制度に関わるが多かった。政治で最も肝要なのは人であるというのが、范仲淹のみならず同時代を生きる人々の共通の考え方であった。特に二人は、国政改革の根本は士大夫の自己改革にあり、政治の場から小人を締め出

し、君子を用いれば国は必ずよく治まると考えた。

皇帝はすぐに成果を求め、それに応えようと、最初に手がけたのが地方官僚の入れ替えだった。范仲淹は地方官としての経験が長く問題の所在を熟知していた。民衆に近いところにいる地方官が無能力、もしくは我欲を満たすに有能である場合の害ははなはだ大きい。范仲淹は、地方官の成績を査定して不適格者を切り捨てようとした。また、高官の子弟が科挙を受けずとも官員になれる特権、恩蔭の制度を縮小しようとした。科挙は有為の人材を広く集める制度で、そこから優れた士大夫が生まれ出る。恩蔭によって勞せずして能力もない者が官員になれば、その分科挙の合格者が減る。

改革が始まると、地方官と高官、すなわち官僚機構の下と上の両側が一斉に反発した。下は自らの首を切られまいと、上は子孫が不利益を蒙らないようにと、

激しく抵抗した。とはいえ、皇帝が自ら命じた改革そのものには反対できない。そこで持ち出されたのが例によって朋党批判だ。改革の担い手は富弼を始めとしていずれも范仲淹の人脈に連なる者ばかりだ。表面的に見れば、官僚機構から他派を締め出し、我が党をもつて国政を掌握しようとしているとの批判は当たらぬものでもなかった。

朋党批判を耳にした皇帝は大臣に尋ねた。

「昔から小人は朋党をつくると聞くが、君子も党をつくるのか」。

『論語』には「君子は党せず」とあり、徒党を組むこと自体が小人の証と見なされていた。

范仲淹は皇帝の前で取り繕うようなことはせず、改革派が形としては「党」であるのを否定しなかった。

「臣は辺境にあつて兵士達を見ておりますと、戦を好む強い戦士は自ずと集まり、戦を怯える弱い戦士もまた自ずと集まっています。戦士は強弱をもつて党をなします。それと同じように、朝廷においては、正邪をもつて党をなすことがあります。正か邪かは、聖心をもつて御覧になれば、たちどころに明らかとなるであります。朋党と批判されることがありましても、それが正しく善をなすのであれば、国にとつて害となることは全くないのであります」。

范仲淹は、自分達が「正」で結ばれた「党」であると認め、一方で、それを批判する側は「邪」であると決め付けた。この考えをより緻密に展開して、おうようしゅう 歐陽脩は「朋党論」を著した。その論考は火に油を注ぎ朋党批判はよりいっそう燃え上がった。

朝臣を二分する騒ぎに、皇帝の改革熱は俄かに冷めた。

ここに怪しげな陰謀説がささやかれた。反対派にとって石介の『慶曆聖徳詩』はまことに憎むべきものだった。その石介が富弼に頼まれて天子廃立の詔書の草稿を書いたとするものがどこからともなく現れ出て来た。范仲淹と富弼は朋党批判の高まりに焦り、皇帝を取り替えて一気呵成に物事を進めてしまおうと企てているというのだった。

陰謀説が事実として認定されたならば、范仲淹も富弼も死を宣告されかねない。范仲淹は、慶曆四（二〇四）年六月、韓琦と一年交替で西辺に出るといふ先の取り決めに前倒しして、執政の任務に就いたまま都を去った。

富弼は根も葉もない陰謀説を黙殺し、律儀にも改革の続行に努めた。批判は富弼に集中した。

八月、国境を守る者から、遼国皇帝が雲州で天を祀る儀を行い、その際に不穩

な挙に出る恐れがなきにしもあらずとの報告があつた。皇帝は「万一に備えて河
東方面の備えをせよ」と命じた。富弼は、「河東方面は以前から備えができており
ますが、心配なのは河北であります。万一虚を突かれるようなことがあつてはな
りません。河北の防御こそ整えておかねばなりません」と答えた。「その任には誰
がふさわしかろうか」。皇帝の問いに、富弼は自ら事に当たることを願い出た。富
弼は枢密副使の身分を保つたまま、家族を残して都を出た。

富弼が朝廷からいなくなると、歐陽脩が批判に耐え切れなくなつて外に出た。
こうして改革派が次々に都から去つて行く中で、呂夷簡が死んだ。呂夷簡は改
革に反対する側の人間であると同時に古い世代の人間でもあつた。呂夷簡の死に
伴つて世代交代が早められ、改革に対して終始曖昧な立場を取つていた晏殊は宰
相の地位から下ろされた。皇帝の生母の墓誌の一件が蒸し返され、さらにある法

規違反も問われ、えい穎州知事に飛ばされた。

二人の弟が来たという。

慶曆四（一〇四四）年九月。

ほう抱十五の報せに、私は驚き、

「いま二人はどこにいるのですか」。

「お入れしてよろしいものかわかりませんでしたので、外でお待ちいただいでいております」。

「外で。それでは人の目に付くではありませんか」。

叱るような言い方になる。

夫は河北に出दैいて、朋党批判はいまもやかましい。その上、父が左遷となつ

て明日にも都から出て行くこうとしている。このような時期に少しでも疑われる恐れのあることは厳に慎まなくてはならない。門を閉ざしてじっとしているところに、弟の承裕しやうよと幾道きやうだうが来たというのだから、驚きもするし、気が立ちもする。

抱十五はいつも通り落ち着いたもので、

「裏手の木戸でございます。あちらは行き止まりの路地でございますから、人に見られる気遣いはまづございません」。

「そう、裏なら」。

「お二人だけです。大家のお坊ちやまとはとても見えない衣服をお召しになっています。たとえ誰かに見られましても、どこかの使いの者というくらいにしか思われませんかでしょう」。

抱十五はすでに六十に達し、夫のいない都の家を守るのになくはならない存

在だ。

「それなら二人ともそれなりに用心はしているということなのでしょう。でしたら、そつと入れて、こちらに連れて来て下さい」。

「かしこまりました」。

包十五が行きかけると、

「あつ、待つて。私が行きます。木戸のあたりに留めて、すぐに帰らせましょう」。

他人の目もあるが、義母ははの目はがもつと気になる。二人の弟を入れたのが知れたら、何を言われるかわからない。

夫が外に出てから、義母は息子の身を尋常でないほどに案じている。遼国との交渉に行っていたときを上回る心配の仕方だ。そこには、義母の南人嫌いもからんでいる。南人の范仲淹に引っ張り込まれてしまつて息子は要らぬ不幸に見舞わ

れたと義母は受け止めている。事が南人から起こったものであるから、悲惨な結果になりかねないと、悪い方へ悪い方へと考える。しかも、その范仲淹が我が父晏殊に息子を勧めたものだから、私のようなろくでもない嫁が来たのだと、全ての元凶が范仲淹にあると思っている。さらに、父が都から追放となったので、「だから南人というものはどうしようもない」と義母は確信を強めている。

義母から今後息子に学問を教えるはならないと私はきつく言われた。河北に出ている息子にもしものことがあったなら、この家は孫が頼りということになる。しかし、紹庭にはいまひとつぱつとしたところがない。「南人の女が生んだのだから」と、かねてから嫌味を言っていたが、私が陳堯咨ちんぎょうしの母を見習っているというのを耳にしたのだろう、「大事な孫を南人そのものにされてしまう」と激怒した。

陳堯咨せいとは成都出身の南人だ。かつて澶淵せんえんの盟が結ばれる前に遼軍が大挙して南

下して来たときに、南人の王欽若おうきんじやくは金陵への避難を皇帝に勧め、もう一人、成都への避難を勧めた者がいた。それが陳堯咨の兄だった。もしも皇帝がどちらかに避難していたら、宋の都は遼国軍によって蹂躪しよくされていたかも知れない。

紹庭の教育は蓮妙先生れんみょうに委ねられた。義母は先生を婢はしためと同一視し手を上げることも度々であったのだが、河北に行った息子が心配でならない義母は読経に明け暮れ、最も効力のある経は何かと蓮妙先生に尋ね、それからは観音経を先生に習って読むようになった。ふとしたきっかけで先生が実は北人であると知ってがらりと態度が変わった。「だから辛抱強い。他の者とは違うと思っていました」。先生を邪慳よこしまにすることはびたりと止み、日に日に大切にするようになって、紹庭を託すに至った。

夫が不在のこの家で義母の言葉は絶対の重みを持つ。紹庭と切り離されて、陳

堯咨の母になるといふ道は半ば鎖されたのだけれども、義母と蓮妙先生の関係が良好になったのは喜ばしいことだ。

裏に行き、包十五が木戸を開け、周囲を注意しながら二人を中に導く。木戸はすぐに閉ざされ、私は二人を物蔭へと連れる。

「どうされたのです。その格好で。一体何事ですか」。

家の使用人にも借りて来たのだろう、ごく粗末ななりをしている。着慣れない上に体に合っていないから何とも怪しげな風体だ。

承裕は目を泳がせ、口をもごもごさせる。

私は、

「もう間もなくお発ちになるのでしよう。準備で忙しいのではないのですか。お父様の御用というのではないのでしょうか」。

問い詰めるように言う。いま特に慎重でなければならぬのを父以上に知る者はいないだろう。

承裕は上ずった声で、

「父上には内緒で来てしまったのです」。

兄の隣で幾道は真直ぐに私を見ている。

「それはいけません。お父様を困らせることになるやも知れないではありませんか。すぐにお帰りなさい」。

承裕は顔を赤らめ、

「ですから、私は駄目だと言ったのです。来たくなかったのです。でも、この弟が」。

と、幾道の肩に手を置き、

「どうしても言ってきかないのです」。

幾道はこっくりとうなずく。

「それで、仕方なく来てしまったのです。だって、一人でも行くと言い張って、一人で行ってもし何かあったら大変でしょう。一緒に来た方がまだいいかと思ひまして。いけないことだとわかっています。でも、この弟がどうしてもと。お母様を困らせてもいけませんし。だったら、私が叱られてすむのなら、その方がまだいいのではと。それで一緒に来てしまったのです」。

くどくどと、承裕は相変わらずだ。

「まあ、どうしてもって、どうということなのですか」。

幾道に尋ねると、悪びれることなく見上げ、その瞳に私はたじろぐ。

幾道は七歳。普通なら男の子らしきが増して来るのに、男の子とも女の子とも

つかぬ独特の気配を漂わせている。

「だって、お会いしたかったのですもの」。

「会いたって」。

幾道は目をくりくりと動かす。私の胸が高鳴る。

承裕は、

「そうなのです、姉上に会いたいと、その一点張りです。私だって姉上に会いたいと思っただけです。都を出れば、当分の間お会いできなくなってしまうでしょう。でも、いまは我慢すべきときです。だって、尋常ではないのですから。そういうことを言っただけでも、この弟はわかってくれなくて」。

「どうして私に」。

「だって、どうにもたまらなくてならなかったのです」。

幾道は言葉を投げ付けるように言う。

——この子はどういう子なのだろう。

一段と胸が高まるのを抑えようとする。

自分の子に対して愛おしく思う情がある。とくに早世した次女を想うといまも
つて胸を締め付けられる。それとは異なる何かがある。

「しばらくの間は会えないでしょうけれど、そう長いことではないはず。い
まは一時の嵐のようなものです。嵐というものはいくら吹き荒れても必ずおさま
るのです」。

敢えて力強く言う。

幾道の瞳に見る見る涙が溜まって来て、

「僕は嫌なのです。そういうのが」。

吐き捨てるように言う。

急いで聞き返す。

「そういうのって、どういうのですか」。

「だって僕はいま会いたいのです。いつか先のことではないのです」。

「でも、このようなときに、お父様がお困りになるかも知れませんが」。

幾道は目を伏せ、

「だから、僕は嫌なのです。そういうのが」。

同じことを言う。

それが鋭く私の胸を突き刺し、次に言う言葉が見つからずにいると、

「もういいです」。

幾道は小さくつぶやく。

私はあわてる。

——この子は違う。

その思いを急いで覆い隠さなければいけないと感じ、

「あなたも七歳でしょう。あなたもお父様のお子です。七歳というのがどういいう年齢であるのか御存知でしょう。立派な男子にこれからなっていくのです。そのためには耐えて行かなければならないことだっただけでたくさんあるでしょう」。

言っつてすぐに後悔する。

——ああ、何を言っているのだろう。

陳堯咨の母は厳しくなければいけない。だけど、幾道の姉はどうなのか。

幾道は唇を噛み、

「立派な男子とは、お義兄様にいさまのようなお方ですか」。

私の身が震える。

——ああ、もう、よそう。

衝動に駆られ、幾道を引き寄せる。

「御免なさい。あなたはいいのです」。

「お姉様に会いたかったのです。お姉様ならきつとわかって下さると思って」。

——わかるって、何を。

幾道は私の腕の中で肩を震わせる。

「ええ、わかっています。わかっていますとも」。

私は答える。

——だけど、何を。

この子はまだこんなにも小さいのに、何を考えているのだろう。それが私には

わかっているのだろうか。

幾道を身から離し、まじまじとその顔を見る。

——この子はどのような人生を歩むのか。

この瞳は幾道を危うくさせはしないだろうか。陳堯咨の母ならきっとそうならぬようにするはずだ。

——だけど、この子は。

私は言う。

「私がいまのあなたよりも少しだけ年が上だったところに、亡くなった一番上のお兄様に向かって、女子状元になってみせると言いました。そのときの私は世間を知らない少女でしたから、その気になりさえすれば女子状元も夢ではないと思っていました。私が女子状元になれば、お兄様も苦しまなくてすむだろうし、世の

中だつて変えて行けるくらいの氣でいました。それから少し経つと、私が女子状元になるのは難しいとわかりました。それでも、この先も世の中が昔よりもよくなつて行くのなら、いつか必ず女子状元が現れるはずと思つていました。それから少し経つと、女子状元は幻となつて、私から遠ざかりました。

そこで言葉を切り、額を抑える。

——何を言っているのだろう。

幾道は言う。

「僕にも夢があります」。

私は恐れる。

——この子もまた果たせぬ夢を見るのか。

「どのような夢なのか」。

「僕には作りたいたいものがあります。詞です。本物の詞を作りたいたいのです。贋物ではない本物の詞です」。

幾道は叫ぶように言う。

「そう」。

私はいよいよ恐れを強くする。

「いけませんか」。

私は父に詩賦を作るのを禁じられた。その理由は後でわかった。幾道は男であるから、科挙を受けるのに詩賦は必須のものだ。本物の詞と言うからには、科挙の試験のために作る詩賦のようなものとは違うものを思っているのだろう。

再び胸が高まり、

「あなたはいいです、それをなさるので」。

幾道は目を輝かせ、

「お姉様ならきつとわかって下さると思っていました。ここに来てよかったです」。

「あなたはあなたの思うまま。姉としてそれを許します。安心しなさい」。

胸の奥に焦げるような痛みを感じる。

——自分の子には決してこのようには言わない。だけど、この子には。

「ありがとうございます」。

頭を下げる幾道の肩に手を置き、

「さあ、もうお帰りなさい。必ずまた会えます。たとえ会えなくても、私はあなたのことをいつも思っていますから」。

幾道は微笑み、くるりと向きを変える。

——私はこのようにできなかつた。これからもできない。

これ以上、幾道と話をしていると辛くなる。

包十五が小さく木戸を開け、

「外には誰もおりません」。

さっと幾道が出て、承裕がその後に続きながら、

「よろしいのですか、あのようなことを言つて」。

「お父様には内緒にしておいて下さい」。

「父上に申し上げることなどできません。ここに来たことだつて言えないのですから」。

「どうかお父様を大切にして下さい。西園から離れるのはひどく辛いことでしよ
うから」。

「姉上も、くれぐれも」。

承裕も出ると、包十五が木戸を閉ざす。

私は嘆息し、

「どういうことだったのでしょうか。」

半ば独り言のように言う。熱に浮かされるようにしてあのように言ってしまった。

包十五は、奥へ戻りましょうと手で示す。

私はうなずき、

「どうしたもののか、子供のころのおかしな夢の話をしてしまいました。子供というものは変なことを想ったりするものです。あの子もたぶんそうなのでしょう。」

「私なんぞは、子供のころの夢といえは、ただ一つ、お腹いっぱい食べることでいいました」。

「さぞかし苦勞があつたのでしよう」。

「いま伺つておりました、奥様がもしも本当に女子状元になられていたら、世の中は随分と変わりましたでしょうなあ」。

「ただの幻です」。

「幻こそが、本当にあつてほしいものなのではございませんでしょうか」。

第五の注の続き。

改革派への風当たりはますます厳しさを増し、慶曆四（一〇四四）年十月、陰謀説をでっちあげられた石介は身に迫る危険を感じて都を去った。

十一月、反改革派が「一挙網尽」と成果を誇った「奏邸そらつていの獄」が起こり、改革派の中堅どころが一掃された。奏邸とは進奏院という役所の建物で、そこでは神

様を祀る会が毎年決まった時期に開かれていた。この年の主催責任者は蘇舜欽で、范仲淹によって引き上げられた元気のいい若手だった。蘇舜欽は例年よりも会を盛り上げようと大いに張り切り、妓女を呼ぶなどかなりの散財をした。蘇舜欽が会に招いたのはいずれも改革派と目される人々だった。反改革派は、蘇舜欽が宴会費用に公金を流用し、宴の最中に妓女と礼を乱す醜い行為があったと告発した。宴に出席した全員に厳しい処分が下った。

同じ月に、宰執の中でただ一人の改革派として都に留まっていた者もついに地方に転出し、改革は完全に頓挫した。

翌年一月、富弼は河北での仕事が一応終わり、都に帰った。富弼の目の前で都の門が鎖され、皇帝の命令書を渡された。枢密副使の任を解き、鄆州知事に下す^{うん}とあった。富弼は都に一步も入れずに新たな任地に向かった。家族はその後を追

った。

十一月、再び陰謀説が浮上し、都はちよつとした騒ぎになった。石介はこの年の七月にすでに病気で死んだのだが、実は生きていて、遼国において宋国の転覆を企てているというのだ。そこには富弼もからんでいて、石介の手引きで遼国の軍勢が攻め込んで来たならば、それに呼応して挙兵する手筈になっているという。証拠は、孔直温こうちつゑんという者の家にあつたとされる石介の手紙だ。孔直温は妖法をもつて軍士を誘い、異変を起こそうとした罪で誅殺されていた。荒唐無稽な話ではあつたが、万一の場合に富弼が兵を動かしたりできないように、富弼の権限はさらに削られた。

范仲淹も地方官に下され、持病が悪化したことから、政務の少ない小都市の知事になった。その范仲淹に、改革派に属してやはり地方の閑職に追いやられてい

たある人物が、古来名勝として名高い岳陽樓を修復したのでその記念の文章を書いてくれないかと依頼した。慶曆六（一〇四六）年九月、范仲淹は「岳陽樓記」を書いて友人に送った。そこに、范仲淹が理想とする士大夫の姿が表現されていた。

士先天下之憂而憂　士は天下の憂いに先んじて憂い

後天下之樂而樂　天下の楽しみに後おくれて楽しむ。

士大夫は誰よりも先に天下の危機に気付き、それが除かれた後に、誰よりも遅れて楽しむ。

この十五文字は、鄆州において鬱々とした日々を送っていた富弼に一つの希望をもたらした。

慶曆七（一〇四七）年六月、石介の無実が晴れ、富弼は青州せいに移り、京東路けいとうろという広い地域の治安をみることになった。

十一月、貝州ばいで王則おうそくという兵士が反乱を起こした。齊州さいの兵士がそれに応じようとしているらしいとの情報を富弼は得た。たまたま張從訓ちやうじゆうくんという者が朝廷の用で青州に來た。富弼は張從訓は必ず事を為す人物であると見て、策を授けて齊州に行かせた。張從訓は齊州で悪事を企む者を瞬時に捕えた。この一件は元來は富弼の管轄外のことであつたから、越権行為があつたと自らの罪を皇帝に申し出た。皇帝は逆に富弼を褒め、昇階させようとした。富弼は辞退した。

息子に呼ばれる。

慶曆八（一〇四八）年夏。

娘がそつと近寄つて來て、厩舎の脇で紹庭が待っているとさささやく。息子も娘も祖母の目を気にしている。

夫の地方官暮らしが長引き、この家は重苦しい雰囲気に包まれている。義母ははは始終不機嫌で、私が息子と少し話をするだけでも血相を変えて文句を言う。何しろ息子が大功を建てたにもかかわらず朝廷から理不尽な扱いを受けるようになったのは、ひとえに南人である范仲淹はんちゆうえんのせいであると思ひ込んでいて、不満の捌け口が私に向けられている。陳堯咨の母であることは許し難いこととなり、婢はしためと変わらぬ日常を送っている。そこに小さく身を縮めることで、心と身のそぐわぬ不可解な感覚は幾分か軽減されているかのようだ。それはそれでよろしいものではない。

木の根元に紹庭がしゃがんでいる。いまはまともに話す機会がほとんどないからなのか、いつまでも成長していないとより強く感じられる。どう鼻肩目に見ても、祖父にも父にも到底及びそうにない。紹庭が凡庸なのは母親である私のせい

だと義母は見ている。

紹庭は立ち上がり、おどおどあたりを見回しながら、

「母上にこのようなところに来ていただいて申し訳ありません」。

小声で言う。

私は木の蔭にまわり、

「どうかしましたか」。

「こんなことを言ったらきつと笑われてしまうに違いありません。でも、僕だつて何かできないかと考えたりもするのです」。

紹庭は口ごもる。

「何のことですか」。

「もしかして、お父上をお助けすることができないかと」。

「まあ、そなたがお父様を」。

私は思わず微笑む。

「ほら、やはり笑うではありませんか」。

「いえ、笑ってなどいません。感心しているのです」。

私は表情を改める。

この子が父を助けられるとはなかなか思えないけれど、そのように考えるようになっただけ大人になって来たのかと思いたくなる。

「笑われても仕方ありません。何かお助けしたいと思いはしても、それではどのようなしたらよいのかとなると、さっぱりわからないでいるのですから。それで、母上に御相談したくて」。

紹庭はもう一度まわりを見る。

「どういふことなのですか」。

「お父上はここ何日もの間、深く悩んでおられます。母上もお気付きでありましよう」。

夫はいつも苦虫を嚙み潰したような顔でいるのだが、確かにここ何日かは特にひどいようだ。

私が返事をする前に、

「おわかりになりませんか。お父上は困っておられるのです。洪水です。洪水のために家を失った人々が、もうすぐこの町にも押し寄せて来るといふではありませんか」。

「それは聞いています」。

「何千人だか、何万人だか、数え切れない人々が、飢えて殺気立って押し寄せて

来ると言います。それでどうなってしまうのか、町の人達はひどく心配しています。お父上はどのように対処したらいいのか悩んでおられます。ひどく困っておられ、しきりにいろいろな書物を御覧になっています。だけど、何だかぼんやり文字を眺めているだけの御様子で、まるでお父上らしくありません。そうこうしている間にも、町の人達の不安は募る一方です」。

意外にも紹庭が的確にも物を見ているようなので、

「書物を御覧になって、昔の方々がどのように対処したのかを調べておられるのでしょうか」。

夫を擁護するようなことを言ってみる。

「でも、昔にあったこととそっくり同じことがいま起きているわけではありません。さうでしょう」。

「事情は異なっていていまでも、物事に立ち向かう姿勢のようなものは、昔も今も変わりありませんでしょう。お父様はそれを求めておられるのでしょうか。」

「それはわかります。でも事は差し迫っているのです。古い書物を繙いている場合ではないように思うのです。」

「では、どうしたらいいのですか。そなたなりに思うことがあるのですか。」

国が採る施策には、必ず古い經典に依拠するところがなければならぬとされる。なぜなら、良い施策には真理による裏付けがあり、真理は古の聖人によって発見され、それは余すことなく經典に記されているからだ。施策を巡って意見が対立すると、經典の文言を持ち出して相手を論破しようとする。士大夫になろうとする者が、科挙に合格するために經典を一字も誤らずに覚えるまで学習するのはそれ相応の意味がある。

「いえ、僕にはわかりません。お父上のわからないことが僕にわかってはさすがありません。ただ、飢えた人達が来て悪さをされたら困るので、この町に来させないようにしたらいと言う人がいるのですが、それは違うように思うのです」。

「気の毒な方々であるのに、いたずらに危険視するのはいけないことではありません」。

ごく最近、黄河が氾濫した。氾濫は今回に限ったことではない。宋の時代になつてからでも何度もある。氾濫の状況が同じようであっても、国の政治が乱れていると、被害が大きくなり、流民が社会を混乱させもする。今回どうなのか。西辺には依然として大軍が配備され、民衆の重い負担が続いている。王則おうそくの反乱も恐らくはそのようなところから生じたのだろう。

「お父上はいつも君子と小人の違いを言われます。君子になれるというのはよくわ

かります。だけど、どれほど心掛けの立派な君子が目の前に立っていたところで、
飢えた人にとっては、一碗でも粥を恵んでくれるのなら、たとえそれが悪人であ
ってもその方が有難いのではないでしょうか。それだから、町の人達は、流民が
何かを仕出かすのではないかと心配しているのです」。

「まあ」。

この子は存外智恵が付いてきたのかも知れない。だとすれば、れんみょう蓮妙先生の指導
によって賢くなって来たのだろう。

しかし先生はこのところ病床にある。青州に移ってからは伏せていること
がく、一向に回復の兆しが見えて来ない。

夫が都にいて高い地位にあれば、紹庭のためにそろそろ男の教師を雇うという
ことにでもなるのだろうけれどいまは難しい。蓮妙先生がなかなか思わしくない

ので、珍しく夫が二度ばかり紹庭に教えたことがあった。夫の説くことは高尚過ぎて紹庭の頭にはさっぱり入らなかったようだ。優秀な大人が相手なら夫もよい指導ができる。地方のこの町にまでわざわざ訪ねて来て夫の門下生になりたがる者もいる。夫自身も若い日に遠く范仲淹に会いに行っているの、慕い来る者は拒まない。

「このようなことを言ったら叱られてしまうと思うのですけれど、言ってもいいでしょうか」。

「言いたいなら言いなさい。言わない方がいいのだったら黙っていなさい」。
わざと突き放すように言うと、紹庭はまたあたりを見て、

「こんなことはお父上の前では絶対に言えません。でも、ここなら、思い切つて言ってしまうます。お父上はきつと苦手なのだと思うのです、実際に何をす

のかを考え出すのが。何が正しい、何が正しくないと、是非をはっきりさせるのは得意にされています。だけど、一碗の粥を用意するようなことは、それこそ小人でもできることだとして、真剣に考えにくいのではないのでしょうか。そんな気がするのです。

「まあ、そなたはそんな風にお父様を見ておられたのですか」。

「やはりいけないことでしょうか」。

「いいか悪いかは別にして、そなたはいま、一碗の粥を用意するような実際の方策を考えてお父様のお手伝いをしたいと、そのように思っているのですか」。

「ええ、そうです。でも、思いはあつても、何をどうしていいのか僕には見当も付きません。お父上がおわかりにならないことが僕にわかるはずがありません。

僕はこれまで流民というものを見たことがありません。考えようにも何の糸口も

ありません。それで母上に御相談と思つたのです。

「流民を知らない点では私も同じです。これまで何の不自由もなく暮らして来ましたから」。

私は裕福な環境で育つた。それも義母が嫌う文弱な南人家庭で。夫に嫁いでからも、わずかな貧乏をしたことはあつても、真に飢えに迫られた経験はない。

「やはりお父上のお手伝いをするのは僕には無理なのでしょううか」。

せつかく紹庭がこのような思いを抱いたのだから力になってやりたいと思う。

その一方で、どうしても義母が気になる。物蔭でこそこそ話しているのもそのためだ。私が紹庭に余計な智恵を注ぎ込んだと思われては、紹庭のためにも夫のためにもよろしくないだろう。

王則の乱の後で夫がまた昇進を辞退したとき、義母は何かの拍子に「俗にいう

ところの雌鶏つついて雄鶏時を告ぐというのをいまだに恥じているのでしょう」と、聞こえよがしにつぶやいた。私の背を冷たいものが流れ下った。戦争の回避を夫に求めたのを義母はどうかして知ったのか。「腰抜けの南人のせいで、倅はかの寇準こうじゅん様のようになれなかった。かえすがえすも残念だ」とも言った。寇準は誇るべき北人の代表で、澶淵せんえんの盟の際に、皇帝を励まして戦争の最前線へと連れて出て、それが宋国の命運を大きく変えた。

私は一考し、

「ここはどうでしょう、蓮妙先生にお尋ねになってみては」。

「でも、先生は御病気です」。

「そなたがお尋ねになる分には、短い時間ならさしつかえありませんでしょう」。

先生はいろいろな御苦勞をされています。きっと深いお知恵がきましょう。昔

お寺にいらしたときに、洪水に被災した人達のためにお働きになったと聞いたよ
うな気がします」

「でしたら、母上も一緒に行っていただけないでしょうか」。

紹庭にとって蓮妙先生はかつての私以上に怖い教師なのだろう。そうであるの
ならなおのこと、

「一人で行くのがきつとよろしいと思います。その方が先生も一生懸命に考えて
下さるでしょうから」。

「はあ」。

私は息子の背を押す。紹庭は渋りがちに木陰から出て行く。

第五の注の続きの続き。

慶曆八（一〇四八）年六月、黄河が決壊し、数多の農民が土地と家を失った。

富弼はその対応を迫られたのだが、富弼には地方官としての実践が不足していた。制科に合格して比較的短期間で都の高官になったからだ。富弼に理念はあっても、実際の対策を建てるのは得意ではなかった。

蓮妙先生は、仏徒として救済活動をした例を引いて、民の力を活用することを紹庭に教えた。紹庭はそれを自分なりに整理して父に告げた。「そなたに何がわかる」と、富弼は初めは真面目に取り合わなかったが、すぐに検討に値すると認め、有能な官員を呼んで具体化を命じた。

これまでの救済措置は、官製の避難場所を設けて難民を收容し、官が備蓄する食糧を放出して与えるのを通例とした。難民は避難場所に集中し、用意した食糧はすぐに底を尽き、狭い避難場所で疫病が発生して多数の死者が発生するという

ことが往々にしてあった。難民を救おうとして、実のところは殺してしまうということであつたのだ。

富弼は、管轄する五州の富裕な民に、国として弁済することを保証して、穀物の供出を要請した。すぐに十五万斛こくを得た。難民を収容するための避難所の設営も、やはり費用の弁済を約束して、富裕な民に要請した。避難所は公設のものも合わせて十数カ所作られ、難民は各所に分散して収容され、食糧を一カ所に集める手間も省け、疫病の発生も抑えられた。

その他にも幾つかの救済策が打ち出されて五十余万人が救われた。

先生に呼ばれる。

慶曆八（一〇四八）年冬。

もしや容態が急変したのではと急いで行くと、先生は寝台の上で斜めに身を起している。あわてて入って来た私に目を開け、うつすらと微笑む。

ほっと胸を撫で下ろし、

「御気分はいかがでございましたか」。

細くかすれた声で、

「ああ、来て下さいましたか。まことに相すみませんが、お茶を頂戴したくなりまして。あなたさまにいらただけにだるうかと、勝手ながら思ったものですから」。

茶の所望とは珍しく、それが快方に向かうしるしならと、

「かしこまりました。喜んでお支度させていただきます」。

部屋を暖めるために湯は沸いていても、お茶の道具は置いていない。一旦部屋

を出て、娘に手伝わせて、釜や碗などの一式と水を運び込む。

用意を進める間に、先生はやつと聞き取れるような声で、

「床に横たわっていつも観音経を唱えています。先ほども、夢ともうつつともなく唱えておりますと、どうしたのでしょうか、ふつと体が楽になったような気がいたしました。それで、何だかお茶が飲みたくなったのです。それもあなたさまのお茶が。面倒なことをお願いして申し訳ありません」。

「私のお茶でよろしければ、それはもういつでも喜んで。観音経の法力によって、病気や苦難から救われたというお話をよく聞きます。先生のお心が観音様に通じて、きつと御病気が平癒されるのでございましょう。お茶には病を鎮める作用があると思います。たんぞ召し上がって下さい。心を込めていれさせていただきます」。

「病は治らぬものと思っっています。体が楽になったと感じましたのは、あるいは罪障がわずかばかり減じられたからではなからうかと、そのように考えたいと思っっています。お茶も、罪障深いこの身を清めるのに役立つことがあればと願うばかりです」。

「先生に何の罪障がございました。御病気はきつとよくなります」。

「罪深い女です。だから、この傷を受けなければならなかったのです」。

先生は顔の傷に触れる。

「それは、先生のせいではなくて」。

思わず声を強めると、先生は小さく首を振り、

「これは深い深い罪によるものです」。

先生は苦しげに息を継いで、そのまま目を閉じる。

火の上に釜を置き、湯を注ぎ入れる。

眠ったような先生の様子に、湯の状態を見守り、頃合を計って茶葉を投じる。

茶葉が浮き上がって来るのを待つてゆつくり攪拌し、水を少し注ぐ。湯が湧き立って来るとまた水を注ぐ。水を三回注いでから、茶葉を避けて碗に一杯の茶を満たす。さらに、二の碗、三の碗に同様に茶を入れると、先生は目を開き、

「ああ、できましたか。まことにすまないことですが、体を起こすのを手伝っていただけますか」。

「かしこまりました」。

先生の背に軟らかな支えを入れ、

「これでよろしいでしょうか」。

先生はうなづく。

先生の両手はまさに骨と皮ばかりで碗の重みに耐えられそうにない。脇から手を添え、先生が呼吸を整えるのに合わせて碗を口元に近付ける。

口中に含まれたのはごくわずかであるのに、しばらく逡巡してから、ごくりと喉が動き、ふうつと深く息を吐く。

「いかがでしょうか」。

「とてもおいしくいただきました」。

先生はもう一度口を付けようとし、私は碗を支える。先生は二三度呼吸すると、そのままもうよいとばかりに顔を離す。先生の手から力が抜け、私は碗を受け取る。

先生は腕を衾の内に入れ、一段と細い声で、

「しやくんか 積曇輝様を御存知でありましょうか」。

「いいえ、お聞きしたことはないように思います」。

「いまのお茶のお蔭で随分と気分がよくなりました。この機会にお話しておきたいと思います。あなたさまとこうしていられるのも最後となるかも知れませんか」。

「何をおっしゃいます。御気分がよくなりましたのでしたら、それも御回復の確かなしるしでございましょう」。

「横にしていただけですか」。

少しでも楽なようにと先生の身を整えると、目を閉じたまままでゆっくりと話し始める。私は耳を寄せて懸命に聞き取ろうとする。

釈曇輝とは数百年前に成都せいちゅうにいた尼僧だ。七歳のころに、誰かに教わったわけでもなしに坐禅のようなことをするようになって、何か心に感じるところがあつ

た。十一歳のときに、天竺てんたくの禅僧が成都に来て、釈曇輝は道で出会うと、駆け寄って日頃自分がしていることを告げた。禅僧は驚き、その娘を仏弟子にしたいと思つた。娘は何度となく禅僧と会い、いろいろな教えを受けた。両親はそれを嫌ひ、娘がおかしな気になる前にと、かねてから決まっていた相手のところに予定を早めて嫁がせようとした。嫁入りの当日、「求道の志が叶えられないのならこの身を火に投じます」と娘は言つた。両親は娘の決意の固さに狼狽し、とりあえず日延べとなつた。そのことをその地を治める刺史ししが耳にし、娘を呼んで志がどれほどのものであるのかを問い尋ねた。娘は刺史のあらゆる問いにすらすらと答へ、刺史は娘が深く仏の教えを理解していることに感心し、婚約を解消して娘の願いを叶えるよう両親に命じた。娘は後に立派な尼僧となつて多くの女人を救つた。

蓮妙先生は話の終わりに眠りに落ち、私はお茶の道具を片付ける。

しばらくして先生はふっと目を開け、

「お茶はまだございましょうか」。

「すっかり冷たくなつてしまいました。新しいのをおいれたいしましょう」。

「いいえ、冷たいので結構です」。

上体を起こすのを手伝い、先生は茶をわずかにすする。

「私には釈曇輝様にいくから似たようなところがあつたように思います。小さいころ、一人でよく何をするでもなくじっと座っていたものです。それはただのぼんやりでしたから、父や母にはいつも叱られました。釈曇輝様のように禅僧にお会いすることもなく、出家の願いを持つこともなかったのは、そのようにはさせない罪障がきつとあつたからなのでしょう。私は嫁に行き、傷を負い、それでようやく御仏のお教えに出合うことができました。あなたさまのお父様にお救い

ただいたのも御仏のお導きであつたのでありましょう」。

先生は顔を歪め、

「与えられた使命であつたとはいえ、あなたさまを異なる道へとお導きしてしまつたのではないかと、度々一人で思い悩んでおりました」。

私は先生を凝視する。先生は視線を避けるかのように目を閉じる。

——異なる道。

「何をおっしゃいましょうか。先生のお蔭で今日まで私は正しく生きて来ることができました。先生には感謝しても感謝し切れません」。

動揺を押し隠してそのように言う。

先生は目を閉じたまま、

「もしもあなたさまが男の子であつたならと、幾度思いましたことか」。

動揺はますます大きくなり、

「私は女でございます。先生のお導きで、天下第一のお婿様のもとに嫁ぎ、子供達にも恵まれ、まことに幸福であります」。

そう言うよりない。

先生は目をわずかに開き、

「観音経のお蔭で身が楽になったと申しました。罪障が消え、御仏の御導きで彼の浄土に行けるようなことがもしもあるとしましたら、この旦那様のお家にお仕えさせていただいたからに違いないと思います。このたび旦那様は洪水で苦しむ何万人もの人をお救いになりました。そのお手伝いをわずかだけでもさせていただけましたのが、もしかしたら功德になるようなことがあったのではないかと思うのでございます」。

先生の手を握り、

「きつとそうに違いありません。先生のお教えがなければ、旦那様もあれだけのお仕事はできませんでした。先生が人々をお救いになったのです」。

「最後にこのような幸福に恵まれましたのは、それはとりもなおさず、あなたさまのお父様のお蔭に他なりません」。

先生は「異なる道」と言った。その真意はわからない。その一方で、先生がいまのように言うのなら、そのただけに富弼のもとに嫁いで来てもよかったのだらうと思う。

先生は小さく咳をし、

「でも、私が釈曇輝様のようにはなれなかつたのと同じように、あなたさまもさせてしまったのではないかと思えますと、心が痛みます」。

——ああ、それは言わないで。

私は悲しみに襲われる。

先生は小さく咳き込み、それを何度か繰り返して次第に苦しみ出し、背をさすりながら先生を横にする。

「先生のお蔭で私は何にも替えられない幸福を頂戴することができました。どうか御安心下さい」。

そのように言っ、先生のためにも、本当にそうだと思わなければいけないと考える。

先生はかすかにうなずいて、眠りに落ちて行く。

先生に偽りは言いたくない。先生の脇で、涙が溢れて止まらなくなる。

第五の注の続きの続きの続き。

こうゆう

皇祐元（二〇四九）年二月、皇帝は、水害より多数の人々を救った功績をもって、

富弼を昇階させようとした。「単に職務を果たしただけです」と富弼は辞退した。

富弼の救済方法を今後全国で広く用いるよう皇帝は指示した。

はんちゆうえん

師の范仲淹も地方にあつて幾つかの特筆すべき功績を挙げた。杭州知事こうだった

ときに大飢饉があり、周辺では多数の餓死者を出したが、杭州は安泰だった。富

民の協力を仰いで食糧を窮民に配つただけでなく、諸寺に造営を促し、州でも官

舎を建てるなどして大いに土木工事を興し、盛大な遊興も催した。飢饉のときに

何事かと非難する声が多かったのだが、数万人もの者が仕事を不得、救済策とし

おうてん

て極めて有効だった。応天府おうてんの学校での経験を活かして、地方の町に学校を設置

した。また、一族の互助組織である范氏義荘はんしぎそうの基礎を築いた。范仲淹は再婚した

母に従って朱家の子になり、科挙に合格してから范氏に復姓したことから、范一族への思い入れが強かった。一族が助け合って永続的に繁栄する仕組みを考案し、異母兄弟に経営を委ねた。

皇祐四（一〇五二）年六月、范仲淹は新たな任地に向かう道で死んだ。病気のために自力では歩けず、肩輿に乗っての移動中だった。六十四歳だった。

富弼は范仲淹の墓誌を書いた。

「お上に仕えた初めから康済の志があり、用いるところの施策は必ず仁義に基づいて考えられたものだった。剛をもって決断し、人によって曲げられることはなかった。朝廷に立っていよいよ励んだために、批判の声が極度に高まり、それでも権威に畏れることも、憂い患うこともなかった。中央に用いられると必ず外に出されるということが繰り返された。悔いる色はなく、次のように言った。『私の

行く道は自ずと存在し、決して棄てられることはありません。百回用いられ百回出されても悔いはしません』。

至和しわ二（一〇五五）年一月、晏殊あんしゆが死んだ。六十五歳だった。その前の年の六月に、晏殊は病氣療養のために都に帰ることが許され、最後の日々を西園において送ることができた。晏殊がいよいよ危ういと聞いた皇帝は西園に見舞おうとした。晏殊は「病は間もなく癒えます。陛下に御心配いただくようなことはありません」と辞退した。皇帝は最後に晏殊に会う機会を失ったのを後々まで悔やんだ。

晏殊の墓誌を書いたのは、晏殊が総監覈を務めた科挙で合格した欧陽脩おうちゆうだった。先帝の時代から二代にわたって皇帝と深いつながりのある最後の一人が晏殊であったと、欧陽脩は記した。晏殊は先帝に見出されてから国家に仕えること五十年を超えた。

范仲淹と晏殊の死は時代の変わり目を示す象徴的な出来事となった。このときに、富弼が古い時代の人間となってしまうのか、新しい時代の人間になり得るのか、かなり微妙なところであった。

弟に呼ばれる。

至和二（一〇五五）年三月、許州きよのさる逆旅。

この地の墓所に父を葬り、事は今日までにほぼ完了した。

父を喪い、それより七年前に蓮妙先生を喪った。人は順に老いて行くのであるから、頼れるような人がいつまでもいるものではない。年がかさめば頼られる人間になっていかなければならない。とつくにそのような年齢であるのに、自分一人を保つのさえも危うい。

蓮妙先生は教師であると同時に母代りでもあった。先生なしにこれまでの歲月はない。「異なる道」があつたとは考え難い。先生に告げたように自分が幸福であると言いつ切るのは難しい。何の不満があるのかと問われれば困るくらいであつても、心と身のそぐわない感覚はずっと続いている。

先生は最晩年に義母ははに観音経を教えたことから、幸いにも尼僧として手厚く葬られるよう義母が取り計らつてくれた。

父は宋朝の大官であつたから、葬儀は盛大なものになつた。あらかじめ墓所を用意してあつたここ許州に、晏の一族も含めて膨大な数の参会者が集まつた。それらの人々を收容するために、近隣の道観、仏寺、官舎、逆旅等、ありとあらゆるところを借り上げた。そのことだけでも父の葬儀は一大事業で、かかつた費用は莫大で、生前からの備えに加えて、有難いことにお上からの賜わりものもあつ

て、十分に賄えはしたのだけれども、額が大きいだけに出納管理はあだ疎かではなかった。弟の承裕しょうゆうは決断力に欠け、私よりも若い母はおろおろするばかりで、外に嫁した娘としては出しゃばった行為ではあったが、長女である私がかなり仕切らなければならなかった。葬儀全般にわたって、大きなことから細々したことまで揉め事の種になるようなことがたくさんあった。私が富弼の妻であるというのは不思議と力になり、私がきつぱりとした物言いをするると大方の事が定まった。富弼の家では、何事も義母ははの心を付度しなければならず、私が決められるようなことは何もない。嫁というものはそういうものだ。もう二十数年にわたってそれに慣れ切っていたのだが、こうして父の葬儀に関わり、すんで夫の家に戻れば以前と同じになるかと思うと、いささか気が重くなるのをどうすることもできない。葬儀の間は忙しさもあって、例の不可解な感覚は消えていた。

夫は今年になって并州へいしゅうに任地替えとなり、新たな住まいを定めたばかりのときに、父の死を聞いて私は都に走った。実に十年ぶりの西園で私は泣いた。それ以来并州には帰っていない。夫は葬儀に顔を出してくれ、すぐに慌ただしく帰った。私も明日にはここを発つ予定だ。

世間では夫の中央復帰が近いと囁かれている。改革を阻んだ人々による政治が十年続いて行き詰まりを見せている。もしも人心一新ということになれば、きっと夫が宰相になると言う人もいる。

池の畔にある亭ちんへと足を早める。そこで幾道きどうが待っている。幾道の方から声を掛けてくれた。

次から次へとあまりにも多くの事があった。そのため悲しみの感情はどこか別のところに置かれたままであったようだ。

——あの子もたぶん。

父の死をまだきちんとは受け止められていない。ここを発つ前に幾道と二人だけで話をしたいと思っていた。

暮れなずむ中庭を横切って池に出ると、亭の屋根の下で幾道が立ち上がる。

父が都から出されたとき幾道はまだ七歳だった。いまはもう十八歳だ。そのころとは背丈も姿格好もすっかり変わったが、顔は少しも大人びておらず、少年というよりは少女といってもおかしくないのもそのままだ。

「お呼びして御免なさい。姉上にだけは申しておきたいこと、見ていただきたいものがあるのです。他の人には言ってもわかってもらえませんし、見せれば笑われるだけです。いえ、きつと厳しく叱られてしまうでしょう」。

幾道ははにかんだように笑う。

「そう言う自分が笑っているではありませんか。私だってどうだかわかりません。これでも子供達を厳しく躾けている母なのですから」。

わざと厳しい顔をしてみせる。

幾道を目の前にし、この弟がもしも自分の息子だったらかなり悩まされるだろうと感じる。我が家においては、義母のために中途半端にしかできていないけれども、それでも陳堯咨ちんぎょうしの母であろうと努めて来た。

幾道の兄の承裕等しょうよゆうは末弟の行く末を案じている。幾道の母は一段と輪をかけて心配している。幾道が少女といってもおかしくないようなのは外見だけではない。ここしばらくの間、幾道の様子をそれとなく見ていて、軟弱過ぎると私も感じている。私は正真正銘の少女であったけれども幾道のようにでは決してなかった。

「立っておられるのも変ですから、どうぞこちらに」。

幾道の優美な仕草に促されて私は腰を下ろす。幾道は身をねじるようにしてすく横に腰を半分ばかり載せる。両手を膝に置き、視線をすつとそこに落す。つられて幾道の手を見る。白く細い指は私よりもずつと女性らしくある。

幾道は顔を斜めに傾け、

「西園で初めてお会いした日のことを姉上は覚えておられますか」。

「初めの日といいますと」。

「ほら、僕がきらきら輝く錦繡の衣を着せられて、築山の上に立って待っていたあの日です」。

「まあ、あの日のことをあなたは覚えているのですか」。

「忘れるものですか」。

「だって、まだ三歳か四歳だったでしょう」。

「そのときの姉上のお姿は僕の心にはつきりと刻まれて、それつきり離れることはありません」。

「まあ」。

「ええ、目を閉じれば、そのときのお姿がそのままに浮かんで来ます」。

幾道は顔をすつと近づけて来て、そして目を閉じ、

「あのときに僕はどうだったのでしょうか。それはよく覚えていないのですけれど」。

耳元で囁くように言う。

「私だって忘れるものですか。とても愛くるしくて、それはもう、お父様は目の中に入れても痛くないといった御様子でしたから」。

幾道は目を開け、

「あの日、僕と姉上はつながっていると思いました。お父上がその出会いをあの

ように用意して下さったのです」。

「姉と弟ですから、それはもちろんつながっていますでしょう」。

幾道はゆつくりと首を振り、

「他の兄さんや姉さんには感じたことがありません。姉上とだけです」。

「私と会うのが初めてで珍しかったではありませんか」。

「まだほんの子供でしたから、そのときには何もわかっていませんでした。でも、

とにかく姉上は特別だと感じたのです。いま思うと、お父上と最も近くて、だけ

ど最も遠いのが僕と姉上だからなのでしょう」。

———どういふこと。

幾道の瞳を見て、その意味を探ろうとする。

「それは、お父様のお心に近くて、だけど、することは遠いということですか。

もしそのような意味だったら、私はそうではありません。いまはとくに」。

幾道は困ったような顔になり、

「それは姉上のせいではありません。姉上はやむなくそうされているのです」。

——この子はわかつていいるのだろうか。

「やむなくとか、言い訳のようなことは言いたくありません。私もこれで四十二歳です。自分のしていることは自分に責任があると思っっています」。

幾道の前で敢えてそのように言う。実際にはそれとは程遠いものであっても。

「失礼しました。御免なさい」。

幾道は悲しげに頭を下げる。

胸がうずき、

「つまり、私がいけないだけなのです」。

——きつとそうなのだ。

幾道は片手を私の膝の上に置き、

「あのう、僕のことを言ってもいいでしょうか」。

「どうぞそうして下さい」。

「お父上の柩が墓に収められたときに、僕は秘かに自分の決意を告げました。それをわかって下さるのは姉上だけだと思っています」。

「何を言われたのですか」。

「僕は言いました。これからの生涯を詞に捧げますと」。

幾道の横顔を見る。

特に力んでいるような様子はない。

——やはりこの子はそう決めたのか。

幾道がいじらくなってならぬ。

私は努めて穏やかに、

「お父様は詞に新たな生命を吹き込まれました。子であるあなたが引き継ぐのはよいことだと思います」。

「いいえ、引き継ぐのではありません。父上の詞をすばらしいと思います。でも、激しく反発もします」。

幾道は静かに言い、しかし、顔は赤みを帯びる。

私は少し考えて言う。

「お父様の詞には深い情が籠められていて、きっとそれは本物であるのだけれども、お父様の普段の振る舞いはそれとは離れていたと。あなたはそこに反発するというのでしょうか。お父様のお心に最も近くて、だけど、することは最も遠

いということの、それが意味なのでしょいか。

「ああ、やはり姉上はわかって下さいました」。

幾道の瞳がこちらに向くと、私は自分でも思いがけないくらいに大きく嘆息する。

——この子の苦勞はここから始まるのか。

私の膝の上の幾道の手がびくりと動く。

私は言う。

「でも、人が生きるというのは、そういうものなのではないのでしょうか。心に思うこととすることが同じようにはきつといかないのでしょうか」。

「お父上は美しく生きようとしていました。それはすばらしいことだったと僕も思います。官員として美しくあろうとする余り、それを危うくしない範囲でしか

情を出すことができなかつたのでしよう。だから、お父上の詞は品が良くて、たくさんの人に称えられました。僕にはそれがひどく物足りなく感じられてなりません。我が身を危うくするまでに情が発露するのに任せてこそ真正の詞が生まれ出るのではないでしょうか。いまそのように言っていて、その意味がよくわかつているわけではありません。でも、僕はそれをしたいです。つまり、詞などという片々たるものに身を崩そうというのです。晏殊の息子としてそのようなことをしていいものなのでしょうか。そこまで聞いたら、姉上はこの僕をお止めになりますか」。

幾道の手に力が入り、

「姉上も、いけないとおっしゃいますか」。

幾道の手を強く握り、

「誰かがいけないと言っているのですか」。

「いまはまだ誰も。だってこの決心は、お父上に告げただけで、いま初めて姉上に申し上げたのですから」。

私は握る力を緩め、

「私はお父様に特に告げるようなことはありませんでした。感謝の思いがあるばかりでしたから」。

「本当ですか」。

「お父様がいらしたからいまの私があるのですもの」。

「それは僕も同じです」。

「あなたのように告げられるようなことがあったらよかったですけれど」。

「僕はずっと悲しく思っていました。姉上が女子状元を夢見たことが、結局は夢

のままに消えてしまおうしかないのが」。

「子供のはかない空想ですもの当然です」。

「違います。はかなくなんかありません。消えてしまっただけではないのです」。

幾道は勢い込む。

私は重苦しい気分になり、話の流れを変えようと、

「それよりも、見せたいものがあるとか言っていますでしたか」。

幾道は大きくかぶりを振って手を放し、

「決意とかさも大きなことを言っているながら、そもそも詞の才能がなければどうにもなりません。これを御覧になって下さい。僕に詞才があるのかどうか、姉上の目で判断していただけませんか」。

懐より紙片を取り出す。開くと、肉の痩せた字で一遍の詞がしたためてある。

鬪草階前初見

君を初めて見たのは階段の下で草を鬪わせていた五月五日

穿針楼上曾逢

七月七日には楼上で針を刺していた。

羅裙香露玉釵風

君の羅裙スカートに花から露が落ち、玉の釵に風が映っていた。

靚妝眉沁綠

化粧をして眉の間の緑色を置いたのを僕が見たものだから

羞臉粉生紅

白粉おしろいを塗った君の顔は真っ赤になってしまった。

流水便随春遠

流れる水は春と一緒に遠ざかってしまっ

行雲終与誰同

雲はおしまいには誰のところに行ってしまうのか。

酒醒長恨錦屏空

酒が覚めると、錦の屏風の前で僕は悲しく一人だけ。

相尋夢裏路

君のところへは夢の中の路みちでしか行けないのに

飛雨落花中

そこも雨が降りしきり、花は散ってしまっている。

「これがあなたの詞」。

「御覧の通りの出来栄です」。

「お屋敷にいた少女を詠んだのでしうか」。

「ええ、そうです」。

「その子はいまはもういないのでしう。あなたはこの子に恋をしていたのですか」。

「えい穎州にいたところに家で使っていた少女です。恋かどうかはわかりません。地方の町で雇った少女に、晏の家の倅が恋をしていいものなのでしうか」。

「よいのか悪いのか私にはわかりません」。

「僕にもわかりません」。

「これには『臨江仙』りんこうせんと題が記してありますが、『臨江仙』の曲を私は聞いたことがありません。何しろ厳格な家なものですから。『臨江仙』はどのように歌うのですか」。

「ここで歌ってみましょうか」。

「ええ、聞かせみて下さい」。

幾道はすつと立ち、手を前に組み、斜め上を見上げて、静かに歌い出す。

軟らかくて甘い歌声が、池の岸辺から庭全体に広がる。それに誘われるようにして、私の心の奥底からかつてない味わいが湧き出して来る。

——これは。

私は胸を抑える。

幾道に恋なのかと尋ねた。だけど、私は恋なるものを知らない。晏の子が雇われた少女に恋しているものかと幾道は問うたけれど、晏の家の娘には恋なるものは最初から許されていなかった。

湧き出して来たものをそこで抑え、消し去ろうとする。

幾道は言う。

「僕はとにかくこの少女を詞に詠みたかったです。それだけです。少女とはたぶんたった一度だけ目が合ったのでしよう。それだけです。それでその少女の姿をどうしても詞にとどめておきたいと思ったのです」。

「その子は美しかったですか」。

「美しかったですでしょう。でもそれは大したことではありません。少女は婢はしためとしてごく粗末なものを着ていました。何を着てもいいのです。端午の節句の

ときの少女の姿　七夕の節句のときの少女の姿　それが僕の心をひきました。もしも僕がそれをこうして詞にしなかったならば、僕もそのうち忘れてしまつて、少女のそのときの姿はそのまま消えてしまったことでしょう、誰にも知られずに。だから僕は詞にとどめておきたかったです、どうしても」。

幾道が力を籠めたので、私は敢えて尋ねる。

「消えてしまつてはいけないのですか」。

幾道はきよとんとした顔を向け、

「ああ、おっしゃる通りです。なぜいけないのでしょうか。いいえ、消えてしまつて、それでいいのです。世の中のことはおよそはかなく消えるものばかりですから。ああ、どうして消えてしまつてはいけないのでしょうか。僕はそのことを考えていませんでした。詞にとどめたいとの一心しかありませんでした。それはな

ぜなのでしよう」。

幾道はしばし岸辺を歩き、じっと動かずにその様子を見ていた私のところへ戻つて来て隣に腰を下ろす。

その瞬間に私は尋常でない胸の高まりを覚える。

——この子の思いを私はわかつていたい。

幾道は言う。

「もしかすると、このようなことではないでしょうか。姉上は女子状元を夢見られました。僕はそれが消えてしまうのを惜しみます。とても大事なことです。だつてそうでしょう、誰かが夢見ることもなかったなら、女子状元は決して実現したりしないのです。もしも本当に姉上が状元になったら、そのことは史書に特筆され、後世に語り継がれるに違いありません。お父上が宰相になった以上にすば

らしいことでありましょう。お父上は立派な棺に納まり、欧陽脩様が立派な墓誌を書いて下さいました。宋朝の大官として立派な働きをしたと、墓誌以外にも種々の記録が残ることでしょう。お父上が作られた多数の文や詩賦も後世に伝わるでしょう。お義兄様にいさまだつてそうです。遼国との和平を結んだことは、誰もが及ばない輝かしい功績として文字に刻まれました。でも、姉上はどのようなでしょう。

僕にはもうわかつています。お義兄様の墓誌が作られたときに、その末尾に、妻は晏殊の娘で、三男三女があつたと記されるでしょう。皆さんが噂するようにお義兄様が宰相になれば、姉上も国夫人こくみじんとして誰かが墓誌を書いてくれるようになります。賢い娘で、賢い妻で、賢い母であつたと必ず書かれるでしょう。それは嘘ではありません。だけど、姉上が女子状元を夢見たことは書かれませんか。姉上が日々悩ましく思っておられることも

決して書かれません。賢い娘、賢い妻、賢い母である蔭に、深い悲しみ、深い苦しみがあつたなどと書かれることはないのです。だって、賢い娘、賢い妻、賢い母にはそのようなものはあるはずがないからです。だけど、僕は知っています、姉上にはそれがあることを。ああ、いまはつきりとわかつて来ました。僕はここで断言します。姉上の女子状元の夢も、この少女が階前で草を闘わせていたのも、お父上が宰相として仕事をなさつたのも、お義兄様が遼国と和平を結んだのも、全てが同じくらいに取るに足りないことばかりなのです。そう言つたら可笑しいですか。きつと可笑しいでしょう。史書に書くに値する立派な仕事と、階前での少女の仕草と、姉上のはかない夢と、僕は同じだとみなします。片方が大事だと言ふのなら、もう片方も大事なのです。だから、僕は少女を詞に歌いたいのです」。

「あなたは男でありますのに」。

「ああ、それが悲しいところです。少女が自ら歌えれば一番よいのです。でもいまはまだそのような時代になっていません。姉上が女子状元になれば一番よいのです。でもいまはまだそのような時代になっていません。ずっとずっとならないといとしたら悲し過ぎます。いまは僕が歌わなくてはならないのです。でも、僕は男です。男である僕が心に思い描く女性の情しか歌えません。本当の女性の情を知るには、たぶん真剣に女性を愛するしかないでしょう。そのようなことを僕がするのを誰も許しはしないでしょう。宰相となった父上の家に生まれた僕は、父の後を継がなければいけないのですから」。

私は幾道の背に腕を回してその身を引き寄せた。

口から出すのを一瞬ためらい、しかし、きつぱりと言い切る。

「いいです、おやりなさい」。

自分の声に戦慄を覚える。

——この子の運命をこうして決めてしまつてよいのか。

陳堯咨の母は子に向かつて決してこのようなことは言わない。

「姉上は許して下さいるのですか」。

幾道は聞き返して来る。

私は胸の痛みを覚えつつ、しかし幾道を抱き寄せ、

「許すどころから、頼みます。あなたはきつとその決意のためにたいへんな苦勞
することになるでしょう。でも、ここに歌われた少女のために、あなたはおやり
なさい」。

幾道は私に身をあずけ、

「姉上がいて下さって、こんなに嬉しいことはありません」。

私は不意に池の向こう岸に目を向ける。水面に人影が映ったような気がしたからだ。それも父の影が。

——父がこの姉と弟を見たなら何を言うだろうか。

私は決意する。幾道を許した私は、自分にも何かを課し、父に向かってそれを言えるようにならなければいけない。

第六章 いえいえ、だからどうしたらいいの？

義母に呼ばれる。

至和二（二〇五五）年七月。

縮こまつてばかりでは耐え得る限度を超えて潰れてしまう。取り返しのかな
い大きな過ちをしてしまう前に事を起さねばならないところに私はいた。

轎かこに乗って出発するばかりになっている。あるいは呼ばれるだろうとの思いは
あった。そうならなかったでよい。いまさら何を言われたところでどうこうで
きるものではない。すでに決意した。今日が最初の日だ。

幾道きどうと許州きよで別れてから四カ月が経ち、夫が宰相になり、私は国夫人こくふじんの称号を
頂戴する。かつての王実頭おうじつとうのまやかしの予言が凶らずも当たり、行く行くは幾道

が言ったような墓誌が書かれるのかも知れない。いまの世に生きる女として望み得る最高の榮譽であるのは間違いない。

—— だけど、勘弁してほしい。

その思いが強まるのをどうすることもできない。

幾道には好きにしてよいと言った。私はどうするのか。心と身がそぐわない感覚が長く続き、身を縮めた。もうそこから脱しなければいけない。

—— 我が意志を貫く。

改めてその思いを心に確かめ、中堂の前に立つ孔六こうに歩み寄る。

孔六は不安そうな顔で、

「よろしいのですか」。

私が小さくうなずくと、孔六は、私が来たことを、階段の上の扉の内側にいる

義母に告げる。扉が開かれ、私は階下で頭を深く下げる。

義母は椅子に腰掛けて出発の刻限を待っていた。義母と私はいまから轎を運んで皇城に登るのである。

義母は言う。

「案の定、そのようなみつももない格好でしたか。嫌な予感がしていたのです。

これで気が付かないままにそれぞれ轎に乗ってしまったって、向こうに着いてからびつくり仰天、そうになったら後はもう知らないという魂胆だったのですか。この晴れの日に、これ以上にならない晴れがましい日に、わざわざそのようなにして。それは要するに、この私に恥をかかせようというのですか」。

義母の叱責には慣れている。とりわけ今日は覚悟の上だ。それでも、恥をかかせるとは、そのような受け止め方もあるのかと少なからず意表を突かれる。

腰を屈め一段と頭を低くする。何も言わずに終わるのを待つのがよい。

「そなたはどうしていつもこうなのですか。わかっています、どうせ私なんぞは
どうでもいいと思っているのでしょう。よりによって、大事な大事なこの日に、
いくら恥をかかされても、普段ならいつものことだと思えばいいだけですけれど、
今日は格別の日ではありませんか。私なんぞはどれほど恥をかかされたって構い
はしません。ですが、これでは息子があんまり気の毒ではありませんか。お上の
御前で、いきなりとんだ醜態をさらすことになって、一生の不覚というものです。
そうは思いませんか。一体そなたは何を考えているのですか」。

義母は肘掛を叩き、

「いざ出掛けようというこのときに、何もこのようなことなど言いたくありません。
不愉快になるだけです。もう気分がすっかり台無しです。そなたが言わせる

のです。その格好を見て、誰が黙っていられますようか。全くもって何なのか。それでお上の御前に出ようというのですか。何ということでしょう。何の飾りもないではありませんか。いまどきはそこらの街娘だって、その格好よりは余程華やかにしているではありませんか。そなたが用意している様子をほのかに聞いて、まさかとは思っていました。きっと何かきちんとした仕度があるのだろうと思っていたのです。だってそれが当たり前でしょう。お上の御前に出るのですから。一生に一度あるかないかのことです。それなのに、この期に及んでそんな貧乏つたらしいみつももない姿でいるとは。あきれてものが言えません。よくまあそれで。正気の沙汰ですか」。

義母は同じような言葉を連ね、それもそろそろ尽きたと思えるころに、私は静かに口を開く。

「出発の刻限でございます。」

「ええ、刻限でしょう。刻限ですとも。とづくにわかっています。だから、ここでこうして待っていたのです。そなたの魂胆はわかっています。出発の刻限だから、いまさら何を言っても遅いと言いたいのでしょう。いまさら耳を貸す気などさらさらないということでしょう。そうやって巧んでいたのです。わかっていますとも、そなたはいつもそうなのです。私に対してのあてこすりでしょう。自分はこのんなものしか着させてもらっていませんと、それを、お歴々の前で見せたいのでしょうか。お上に訴えたいのでしょうか。どうせ私は意地悪な姑です。ええ、そうですね。はつきり言ってさしあげましょう。私は底意地の悪さで決して人後に落ちない姑婆です。きっとそれは外にも聞こえていましょう。私だけがこうしてまばゆいばかりに全身に飾りを付け、嫁には婢はしため同然のみすばらしい格好をさ

せる、そういう陰険な姑婆です。いいです、いいです、それが真実なのですか、どうぞご勝手になさい。年に似合わない派手な飾りをありつけたけ付けて、醜悪な婆だと笑いたいのならそうなさい。自分だけ、そうやって、質素ななりをして、女だてらに聖人面をしてみせたいのでしょうか。どうぞ、どうぞ、そうしなさい。私はいいのです、どれほど恥をかかされても、どうせすぐに死んでしまうのです。だけど、息子があんまり気の毒です。私達がこんななりでお上の御前に出ると知って、息子が驚き、あるいは赤面してうなだれるのが目に浮かびます。息子はいまは何も知らずに御殿で私達の到着を待っています。息子に内緒で、そなたが一人で勝手にこんなことをして。ああ、腹が立つ。私は前から気になっていたのです。だから、用意はいいのかと、そなたに何度も何度も聞きました。そなたはいつもいい加減な返事でした。息子に尋ねても、そなたに任せてあると言うだけで

した。夫の言うことを聞かない嫁がどこにいますか。そなたは全く何という嫁なのでしょう。とうとう今日はこういうことだったのですね。ひどい企みです。あ、はらわた腸が煮えくり返る。これからお上の御前に出るといふのに、こんな気持ちにさせられて。一生に一度あるかないかのことです。晴れがましい気持ちで皇城に登ろうというときに、もうすっかり台無しです。無性に腹が立つ。いいです、いいです、もうよします。言うだけ私の損です。わかりました。あちらに行きなさい。出発の刻限なのでしよう。いまさらどうすることもできません。決めました、そなたとはいまから一切口をききません。言えば不愉快になるだけです。あちらに着いてからも何も言いません。そなたはいないものと思います。私とは何の縁もない人です。さあ、さっさと行きなさい。呼ぶのではなかった」。

義母は舌打ちし、足を大きく踏み鳴らす。

私は頭を下げた姿勢のまま後ろ向きに退く。

私の身に光り輝くものは一つもない。上下ともにひと色の衣で、縫い取りも刺繡も目に付くようなものはない。義母は華やかな色彩を織り交ぜた衣を着て、冠から履物に至るまで、宝玉や、金やらを無数に散りばめている。聞くところでは、他の御婦人方も贅を凝らした衣裳を用意しているという。女の身でお上の前に出るのは、義母の言う通り、一生に一度あるかないかのこと、格別に着飾らない者などいない。

夫を初めとして新たに大官に昇進した者の母や妻をお上が宮中に招いて下さる。夫は五十二歳で宰相に昇り、その母が八十歳を超えて健在でお上の御前に出るというのは稀なこと、まこと慶賀すべきと評判になっている。それだけに、義母は入念に準備をしてこの日を迎えた。義母はもともと豪奢を好み、今回はそれが一

気に噴き出たのだらう。

私とてこの日が来るのを望んでいなかった訳ではない。夫にとつて栄誉のこと、妻としてそれは素直に喜ばしいと思う。

私がこの身なりを選んだのは、義母に恥をかかせるとか、お上の前で敢えて奇矯な振る舞いをしようとかいうのではない。単にこの地味な衣が私に合っていると思うだけだ。この姿でお上の前に出ることが、幾道には及ばずとも、私なりの新たな生き方を始める覚悟の示し方なのだ。

第六の注。

はんちゆうえん

范仲淹が世を去って二年余り、至和二（一〇五五）年六月、富弼ふじは十一年ぶりに

都に召還され、すぐに宰相に任命された。

富弼以下新たに大官に昇進した者の母や妻が宮中に召された。一同が揃ったところに皇帝が現れ、すぐに「あれが晏殊あんしゅの娘であるか」と尋ねた。「父の風儀をよく受け継ぎ、宰相の夫人としてまことにふさわしい」と、誰よりも富弼の妻を褒め、「朕は晏殊とは最後に会うことができず、まことに残念な思いをした。今日そなたを見て、在りし日の晏殊に再会できたような気がする」と富公晏夫人に言葉を賜った。

このころ天下は無事で、仁宗皇帝じんせうの長い治政の内でも最良の時代といわれた。国内に波風は立たず、西辺も一応のところ和平が保たれていた。それでも大軍は依然として配備され続け、皇帝は改革の意欲を失ったまま国政は停滞していた。

富弼が師と仰ぐ范仲淹は宰相にはならず死んだ。だから、宰相としての振る舞い方を富弼は自分なりに考えなければならなかった。かつての改革の失敗を教

訓に、「天下無事」であることに心掛けた。何事も典故を守り、衆の意見をよく聞き、大勢の赴くところ見定めてから己の考えを示し、是非を明確に整理して皇帝の裁量を仰いだ。事は収まるべきところに収まり、名宰相と讃えられた。「修謹」と評された富弼には「天下無事」の政治を行う素養があつたといえようか。

とはいえ、師とともに志した改革を忘れてしまったのではなかった。同時に要職に就いた欧陽脩おうえうしゅうも改革を志向し、機が熟すのを窺っていたし、若手官僚は富弼が立ち上がるのをいまかと待ち構えていた。ところが、皇帝の健康問題とそれに伴う後継者問題が朝廷の最大の懸案事項として浮かび上がり、改革は二の次、三の次となつてしまった。

嘉祐元かゆう年（一〇五六）元旦、天に祈りを捧げる儀式のために皇帝は素足で地に降り立った。前日の夕方に雪が降り、未明に晴れ上がって冷え込みが厳しかった。

皇帝の体がゆっくりと斜めに傾き、口から涎が垂れ、気を失いかけた様子に、右の者がとびついて体を支えた。しばらくすると、皇帝は意識を取り戻し、ぎこちない動きながらも儀式が続けられた。当時の言葉で風眩ふうげん、恐らくは脳梗塞であろう。

それから数日後、遼国りょうこくの使者を迎えた宴席において、皇帝は途中からろれつがまわらなくなり退席した。その翌日に、またしても皇帝の体が動かなくなった。二度続いた発作に宮中は動揺した。皇帝はまだ皇太子を決めておらず、もしもの場合にどうなるのか誰もわからなかった。宮中を支配した異様な雰囲気にも、もう一人の宰相である文彦博ぶんげんはくが「騒ぎをなす者は直ちに斬る」と、厳戒態勢を敷いた。ひと月ほどで皇帝は少し回復し、人々の前に出られるようになった。言葉を発することはできず、うなずいて意思を示した。

仁宗皇帝は多くの女性を愛し、子はそれなりに生まれたものの、どういうわけか男児に限ってはいずれも幼くして死んでいた。皇帝は、自分の子を得て皇太子とすることをあきらめず、いつまでも後継者を決めずについて、この件に触れられるのを極度に嫌った。

五月、はんちん范鎮が勇気を奮って、国のために皇太子を定めるべきだと上疏した。続いてしばこう司馬光等も同様の意見を提出した。皇帝は無視した。

七月、富弼等宰執が首を突き合わせて後継者問題を検討した。打開策は見出せなかった。宰執が動かずにいるのを見て、おうようしゅう歐陽脩を初めとして幾人かが意見を提出した。皇帝はこれも無視した。

皇帝は徐々に口がきけるまでに回復し、その間に、范鎮は同じ趣旨の上疏を繰り返して、実に十九回に及んだ。范鎮はそのたびに罪を蒙る覚悟をし、髪が真白

になった。

十一月、皇帝は後継者問題に関してようやく朝臣に向かって返答した。「皆が言うのは正しい。ただもう二、三年を待つように」。この一言で、全ては先送りとなり、「天下無事」は一段と極まった。

ここに、国政改革が急務であるとする「万言書」を王安石が提出した。嘉祐三

まんげんしょ

おうあんせき

(一〇五六)年十月である。かつて范仲淹が国政改革を論じた「万言書」を書いてから約三十年が経っていた。王安石の「万言書」は范仲淹の「万言書」よりも鋭い分析と明快な論理と力強い文章とでたちまち評判になり、単に「万言書」といえば王安石のものを指すようになった。「万言書」は王安石の名を高めたものの、「天下無事」を専らとする朝廷が改革に乗り出す気配は全くなかった。

王安石は、天下の財力が日に日に困窮し、天下の風俗が日に日に衰壊している

現状を明らかにし、改革に早急に取り組まなければならないと主張した。改革の第一歩は、無能力で害を垂れ流しているだけの者を官界から締め出し、替わって有能な者を用いることとした。そして、改革を不断に継続して行くには、人材育成、人材登用の仕組みを根本的に改めなければならぬとした。科挙は広く有為の人間を集める優れた制度で、それによって士大夫層が勃興したのだが、科挙で試されるのは、儒学の古典の知識であったり、詩賦を作成する能力であったりして、必ずしも実際の政治に必要な能力をみるものとはなっていない。教育機関としての学校は存在していても、ごく少数の者に科挙を目指すための教育を施しているだけだ。国家のために役立つ能力を養う学校を作り、優秀な卒業生を官員として採用し、いずれは科挙を廃止するという大きな展望を王安石は描いた。

嘉祐四（一〇五七）年春、蘇軾そしやくと弟の蘇轍そてつが科挙に合格した。このときの科挙の

総監督は欧陽脩で、欧陽脩は文学の刷新運動を進めていて、科挙の答案も修辭の技を競うようなものではなく、平明で内容に優れた文章で書かれることを求めた。まさにその期待に応えるようにして蘇軾が登場し、宋代を代表する詩文の名手となった。

このころまでに科挙は極めて厳格に実施されるようになっていた。答案は全て筆写し直され、試験官は誰の答案であるのか一切知ることなく採点した。欧陽脩はある受験生の答案が極めて優れていると感心し、それを一番にしようとした。しかし、答案があまりにも素晴らしいので、これは自分のよく知る門下生であろうと推測し、それを首席にしたら身量肩をしたと批判されかねないと、第二位の者と順番を入れ替えた。名が明らかになると、欧陽脩の門下生が第一位で、蘇軾が第二位であった。

蘇軾はこのとき二十二歳で、かつて范仲淹と富弼が国政の改革に乗り出したときにはまだ八歳だった。そのときに石介せきかいが作った『慶曆聖徳詩』けいれきせいとくしを先生が読んでいるのを蘇軾少年は脇からのぞき込み、「その詩にはどのような人々が詠まれているのでしょうか」と尋ねた。先生は、范仲淹、歐陽脩、韓琦かんき、富弼の四人の名を挙げ、これがいまの世に特に優れた人であると言った。蘇軾は四人に強い憧れを抱き、自分もいつか仲間に入りたいと勉学に励んだ。范仲淹、富弼が求める理想の士大夫像はこのようにして後進の者に引き継がれて行った。

後進を育てるということに関連していえば、当時の士大夫は、優れた人物を選んで娘婿にすることに非常に熱心だった。舅あんしゆの晏殊あんしゆがその手本を示したのに習い、富弼も最高と思える人物を選んで長女の婿とした。その名を馮京ほうけいという。

馮京は勉強一筋の品行方正なやわな秀才ではなかった。若いときに父を喪って

苦学したのは范仲淹に似ていたが、薄い粥を啜り身を削って勉強したのではなかった。人から銭を借りて妓楼に入りびたりとなり、使ってしまった銭は返せるあてがないので平然と踏み倒し、その他にも不届きな振る舞いが多々あつて、危うく獄に入れられかねなくなると、詩を書いて我が志を示し、それによつて免れるということを繰り返した。詩を書くのは特別な行為であると当時は見なされていて、馮京の詩は実際に人を感じさせるに足る立派なものであつた。馮京がいざ科挙を受けると、驚くことに地方試験を首席で通過し、都の二次試験も首席、さらには最終の皇帝による試験も状元と、三連続首位という快挙を成し遂げ、一躍その名が天下に鳴り響いた。

こうなると、婿にしたいと誰もが思うわけで、最初に張堯佐ちやうぎやうさが獲得に乗り出した。このころ宮中に皇帝の寵愛を一身に受ける張貴人がいた。張堯佐はその伯父

だ。張堯佐は立派に進士及第を果たした人物で、その上、張貴人の応援もあって異例の速さで出世し、一家の繁栄をより盤石にしようとして馮京に目を付けた。何とんでもものにすべく、あたかも皇帝の意向であるかのように、宮中からの品に見せかけて馮京に贈り物をした。馮京は受け取らず、張堯佐からの申し出を拒んだ。

次に話を持って行ったのが富弼で、馮京はそれを受けた。富弼の長女が馮京に嫁ぐと、不幸にして数年ならずして死んでしまった。富弼も馮京とともに姻戚関係を保ちたいとの気持ちが強く、三女が馮京の後添いとなった。

息子に呼ばれる。

嘉祐四（一〇五九）年八月。

「あちらでお待ちでございます。それは誰か他の女を呼んでやらせましょうから、どうかそのままでお越しになって下さい。」

孔六こうろくが言うのを背に聞きつつ、洗い場から動かずに、

「あともう少しです。これがすんだら行きますから。」

水から引き上げ、

「ほら、まだここに汚れが残っていますでしょう。すっかり落としませんとお義母かあ様は満足なさらないのです」。

おしめを広げて孔六に見せ、無患子むくろじの皮を入れた袋を手取る。

「でしたら、そこを入念に洗うよう、よく注意して誰か他の女にやらせますので、どうかそのままです」。

孔六は手を伸ばして来る。

私は斜めに少しばかり睨む。孔六は手を引つ込める。

「すんだら行きます。そなたも忙しい身でありましょう。ここはいいからあちらにお行きなさい」。

「しかし、お坊ちやまもそのようなことは他の者にとおっしゃっておられますし、どうかいらして下さい」。

孔六は引き下がらない。

私が嫁いで来たときにはまだ少年だった孔六も、先に包十五ほうごが死んで、いまでは宰相の屋敷に数十人からいる使用人を束ねる頭かしらになっている。

「これは私の仕事です。それをあの子は、何も私がやらなくてもいい、お義母様の手前があるのなら、やったふりをしていればいいではないかと言うのです。とんでもない言い草だとは思いませんか」。

ひよんな拍子で腰を痛めてから義母は伏せついている。時折粗相をし、その始末を私がしている。

紹庭が呼んでいるというのは、たぶんこのことであるだろう。それとも、幾道きどうのことか。昨日、幾道が来て私とだけ会って紹庭とは話さずに帰った。気になつているのかも知れない。

「大奥様のためとはいえ、さすがにそこまでは大家の奥様がなさるようなことではないように思うのですが」。

ひよいと振り返り、もう一度睨むように見て、

「そうなのですか。これは大家の奥様がすることではないと。では、大家の奥様はどのようなことをするのでですか」。

孔六は口先を尖らせ、

「それはまあ、いろいろとごさいますよ。」

「いろいろですか。余所のお家ならいろいろとあるのかもわかりませんが、
この家ではこれをするのが私の仕事なのです。いけないのですか。」

軽く叱るような口調で言う。

「いけないということはないのですが、でも、そこまでなさいませんで
も」。

「そこまでも、ここまでも、どこまでということはないではありませんか。だ
って、嫁に来た最初のころは、何から何までしていたではありませんか。」

孔六とはこれでもう三十年近い馴染みだ。とはいえ、このように言い合いみた
いなことができるようになったのは、包十五がいなくなった後、とくに夫が宰相
になって以降のほんのここ二、三年だ。包十五はごく真面目な男であったから、

孔六の父親代わりとしても、使用人の頭としても、孔六が主人とこのような口の利き方をするのを許しはしなかつただろう。

「でございしても、あのころとはまるで違います」。

「どこが違いますか」。

「だって、あのころは他に誰もいませんでした」。

「ええそうですね、昔は、そなたと包十五と蓮妙先生れんみょうと私しかいませんでした。

だから何でもしていました。いまではたくさんの方がいるから、私がしなくてもいいと、そなたは言いたいのですか」。

「ええ、そうです、その通りです」。

「それでもって、私から仕事を取り上げてしまうのですか」。

「いえ、取り上げるとか、そういうことではございませんで」。

「人が増えようがどうしようが、私は私の仕事をするのです。それでどうしていいのですか」。

「これはどうも困りましたな。奥様は一途でいらして、それこそ昔からお変わりがありません」。

「二途と言えば聞こえがいいようですけれど、本当は意地っ張りだと言いたいのではありませんか。でも、このことは決して意地を張っているわけではありません」。

「はあ、そうなのですか」。

孔六はわざと驚いたような顔をする。

「ほら御覧なさい。意地っ張りだと、やはりそなたは思っているのでしょうか」。

「いえいえ、とんでもございません」。

「意地っ張りでも何でも構いません。でも、本当を言えば、とにかくこうしてい

るのが好きというだけなのでしょう。」

「はあ、好きなのでございますか。」

「そうです。変ですか。」

私は孔六に向かって微笑む。

かつて義母のために、陳堯咨の母たることにさえも制限され、これでは婢と

変わらないと嘆いたこともあった。それがいまでは婢と変わらぬのをむしろよし

としている。蓮妙先生に仕込まれたいわゆる女の仕事を、自分が思うがままに存

分に行えるのは喜びでさえある。

孔六は不思議そうな顔で、

「大奥様のことでは昔から大変な御苦労をされて、それをずっと拝見しておりますので、お好きとおっしゃいまして、どうもそのようには思えませんで」

「そなたには昔からずっと助けてもらってばかりで、感謝しています」。

「いえ、あつしは何もしておりません。お屋敷に置いていただけるに足るだけのことも、ろくろくできておりませんのです」。

孔六は孔六なりに私を支えてくれた。この洗い場にしても、少しでも楽になるようにと、屋根を架け、隣に干し場も作ってくれた。

義母は「^は国夫人とかいわれるような女に、下の世話までさせているのは、天下^は広しといえども私だけでしよう」と言ったりする。それに反発して意地を張っているのではない。義母に何を言われても気にすることはない。皇帝に招かれたあの日にすっかり吹っ切れた。私としてはおしめを洗うこの仕事も気に入っているからしているだけだ。

思えば、いまのこの気持ちに至るまでに三十年の歳月を要したことになる。孔

六はその過程をずっと見ていたのだ。

「本当だったら、そなたには科挙を受けるような勉強をさせてやりたかった。そうすれば、いつまでも使用人ではなしに、そなたはそなたの家を再び興すことができたでしょうに」。

「とんでもございません。あつしには科挙など無理も無理。それはもう最初からわかっておりました。いつでしたか、旦那様から学問をやってみないかと有難いお話を頂戴しましたときに、あつしからお頼みして、勘弁していただいたのでございます。それに家を興すと申ししても、実際にどういう家に生まれたのか、はつきりとはわかっていないのでございます」。

孔六は一代で没落した士大夫の子であるらしい。父が若くに亡くなり、不幸が重なって一家は離散、幼い孔六は洛陽の道端に倒れていたところを天宮寺の僧に

拾われたという。夫が制科に合格した際に、寺にいるよりは家を興すよすがもあるうかと、宝月大師ほうげつのはからいで夫のもとに來た。

「そなたがいてくれると助かるので、とうとうそのままいまに至ってしまいました。申し訳ないと思っております」。

「ここに置いていただけて本当に有難い限りでございます。養父ちちに仕込まれて、どうにか半人前くらいにはしていただきました。その恩返しをこれからして行かなければと思っております」。

養父とは包十五。包十五は借金のかたに土地を取り上げられた農家の子だった。人に売られ、あちらこちらでこき使われ、夫の父のところに来てようやく落ち着き、最後に夫に仕えた。包十五、孔六に限らず、使用人一人一人にそれぞれの辛い物語がある。このようにしておしめを洗っているときなどに何気なく聞くと話

してくれたりする。

「そなたは半人前どころから、五人分くらいも働いてくれているではありませんか」。

「いいえ、半人前でも多く言い過ぎました。昔はめそめそ泣いてばかりで、何の役にも立たなくて、あれでよく追い出されずにすんだものです」。

「あのころ、そなたは泣いていましたか」。

「まだほんの子供でしたから、それこそよく泣いていました。それでも、奥様ほどではありませんでした」。

孔六は笑う。

「私が泣いていましたか」。

「ええ。そのようにお洗濯されながらも、お背中がいつも震えておられました」。

から。泣いておられたのでございましょう。それを見て、あつしも悲しくなつて
ついつい泣いてしまったものです」。

孔六の言葉に忽然と思ひ出す。嫁に来て当座のこと、一人になると自然と涙が
出て止まらなかつた。そのころのことを、私は意識して忘れていたようだ。

「あつしには姉がいました。顔も覚えていません。それでも、奥様のお姿を見て、
姉もきつとどこかで苦勞しているに違いないと思つて、もう切なくて切なくて」。

「お姉さんがいたのですか。それはちつとも知りませんでした。あのころは何も
話してくれませんでしたから」。

「奥様に申し上げるなどできません。奥様が泣きながらも懸命に頑張つておられ
のを見て、自分の悲しみくらいは我慢しなければいけないと、そんな思いであつ
しはいたようです。ずっとずっと昔のことでもございしますが」。

私はおしめを絞り、

「そなたもよく耐えていたのですね。いまになってこうして話をしてくれて、嬉しく思います」。

「このようなことを言っただけはなはだ失礼ではありますが、いまごろになって、何やら奥様が、それこそ姉のように思えるときがございます」。

「まあ、ますます嬉しいことを言ってくれます」。

孔六は顔を赤らめて退き、

「ああ、いけません。とんでもないこと申してしまいました。宰相様の奥様をあつみみたいな者の姉と一緒にしましては」。

「そうしてくれた方がいいのです」。

「何だかとても不思議な気がします。正直申して、旦那様は宰相様になられてか

らは遠く雲の上のお方のようになられましたのに、奥様の方はそうではなくて、かえって以前よりもお近くなったように感じるのをごさいます」。

「それは何よりです。今日は嬉しいことをばかりを言つて下さるので、誰にも言つていかなかった内緒の話をしてしまいましたでしょうか」。

「はあ、何でございましょうか。あつしなんぞが伺つてよろしいのでしょうか」。

「ええ、聞いて下さい。旦那様が宰相になられたときに、私はあることを考えました。このままではきつと大きな間違いをしてしまいかねないと。それが何だかわかりますか」。

「間違いでございましょうか。いえ、何のことか見当も付きません」。

「私は嫁としてこの家に来るまで何の苦勞もなしに育ちましたでしょう。そなたもよく知るように蓮妙先生は大変に厳しいお方でしたから、先生に教わるのは辛

いと感じたこともありません。でも、そなたが幼いころに経験した生きるとか死ぬとかの辛さに比べたら、全くどうということのないものでした。嫁いで来て、泣くようなことも多々ありましたけれど、それだったかが知れたものです。そして、旦那様が宰相になられ、屋敷はこの通り大きく立派になり、この家で働いてくれる人も大勢になりました。これでもしも私が自分のことしか見えていないのだったら、全てが思いのままによくなって行くのが当たり前、楽しんで贅沢するのが当たり前と思いをしてしまいかねません。世の中には苦勞している人がたくさんいるのに、私の目の前にだっているというのに、そんなことは知らん顔ということになってしまいかねません。私の父はいつだったか、こんなことを言っていました。『かつて、お上の行列に加わって都大路を歩いたときに、己を世間に美しく見せようと、そのことだけを考えていて、一人の従者が命じた通りにし

なかったのに腹を立て、その者を笏で強く撃つて齒を折ってしまった。それがもとで皇太后様のお叱りを受け、都の外に出された。このとき、わしはひどく思いが上っていたと気付いた。屋敷にいる者達はわしが雇って使ってやっているのだから、命じた通りにするのが当たり前、それができなければ罰を与えて当たり前と思っていた。しかし、少し考えたらわかるように、屋敷にいる者達がいてくれなかったら我々の暮らしは成り立たない。屋敷に置いて生かしてやっているなど考えるのは大間違いで、逆に皆のお蔭で我々は生かされていると思わなければいけない。父はそのように話していました。とても大切なことを教えてくれました。聞いたときの私はまだ父の家でのほほんと暮らしていただけでしたから、右から左ですぐに忘れてしまったのです。私は父以上に思い上がっていたのでしよう、そなたたちのお蔭で生かされているという考えをまるつきり持たず

にずっと過ごしてしまいました。このごろになつてようやく思い出し、この屋敷の内ではできる限りそなたたちと同じようにしたいと考えるようになりまして。そのようなことを口にする、かえつてそなたたちを困らせることになりはしないかと、これまで黙っていましたが、そなたが嬉しくなるようなことをいろいろ言ってくれたのでついつい話してしまいました」。

私は立ち上がつて、おしめを干す。

「有難いお話でございます」。

「いいえ、私の好きにしているだけのことです」。

「あつしも、養父ちちに教わったことがあります。使用人の頭だからと言って、下の者を何でも言い付け通りに従わせようとしてはいけない。人には得手不得手がある、同じ仕事でも、やすやすとできる者と、苦勞してもなかなかできない者と

がいる。それを見極められずに、仕事がうまく進まないのは言い付け通りに従わないからだと怒るのは、全くもって筋違いもはなはだしい、上に立つ者が悪いのだと。これは養父でなければ言えないことでして、あつしはまだ全くもって及びません」。

「それはいいことを聞かせて下さいました。私も心に刻んでおきたいと思えます」。包十五からこのことを直接聞けなかったのを残念に思う。ひとえに私に聞く用意がなかったからだ。

そこに紹庭が現れる。いつの間にか長話となり、待っていられなくなったのだろう。

孔六は額を叩き、

「これはいけません、無駄口を叩いていたと叱られてしまいます」。

「そなたのせいではない、私がぐずぐずしただけと言ってあげます」。

小走りでやって来た紹庭に向かつて孔六の弁護をするよりも前に、

「お父上がお帰りになり、母上を呼んでおられます。早くお越し下さい」。

「まあ、もうそんな時刻でしたか」。

日の位置を見上げる。

「突然のお帰りなのです。門からお庭の方へと歩いて行かれました。すぐにあちらにお願いします」。

「そうですか、わかりました」。

刻限よりも早くに皇城を下がるなどこれまでにない。何事であろうかと思いつつ巡らせながら、足早に奥と表を区切る門をくぐって庭へと回る。

夫は官服のまま無患子の木を見上げて立っている。

「お呼びでございましたか」。

数歩離れた場所で足を止める。

雲の上のような人になったと孔六は言っていた。私も夫との距離が遠くなったと感じている。朝廷において宰相は別格で、他の官員は宰相に対して特別の礼法を用いなければならない。私も自ずと体を固くする。

夫は木を見上げたまま、私の気配に気付いたのだろう、低くうなると、

「つらつら考えまして、これは大事なことですから、まずはあなたに言わなければと、それで急いで帰って来ました」。

夫が大事と言うようなことにすぐに思い当たるものがない。かつてなら、遼国からの使者の接伴使になったときにも、都から外に出ることになったときにも、私にはあらかじめ知るところがあった。

——それだけこの人と離れてしまっていたのか。

夫は振り返り、周囲に誰もいないのを確かめてから、小さな声で言う。

「宰相を辞めると決めました」。

耳を疑うひと言に、私は動揺する。

宰相を辞めるということ自体が大変なことであり、それほどのことを夫が考えているのを全く知らずにいた。

夫は静かに続ける。

「先ほど皇城で決めただけです。誰にも告げていません。最初にあなたに言わなければと帰って来ました。あなたはどうかお考えになるのか、それを聞かせていただけませんか」。

——この人は変わっていない。遠くなったと感じたのは私のせいなのか。

恥ずかしさからしどろもどろになり、

「あのう、それは、お辞めになるとは、どういふことなのでございましょうか」。

「そのように驚かれるのも無理はありません。宰相を辞めて、地方の町に出るか、退隠するか、いずれにしてもあなたにも大いに関わりが出てまいりましょう」。

夫は口を結び、しばらく間を置き、

「あなたには苦勞ばかりをかけて来ました。あなた一人に任せておくわけにはいかないと思っています」。

夫はふつと表情を緩めて私を見る。

「何のことでしょうか」。

「いままも母上のために洗濯をしておられたのでありましょう。あなたに辛い思いをさせて申し訳ないと思っています」。

いよいよ驚きは増す。夫からそのように言われたことは一度もない。

「嫁として普通のことをさせていただいているだけです」。

夫に最初に孝を説かれて以来、当然のこととして努めて来た。

「宰相を辞めることが許されたならば、これからはあなたに代わって私がいたしまししょう」。

「私に代わって何をでしょうか」。

「例えばお下のお世話です」。

さらに思いもよらぬひと言に、

「まあ、あなたさまが」。

驚きに息が詰まるばかりだ。

「ええ、やらせていただきます。親孝行はあらゆる徳目に優先し、人として一番

大切なことです。親孝行のためとあらば、宰相の職を辞めるのも許されましょう。

私は夫の顔を探り、

「今日、何かあったのですか」。

「いえいえ、何もありません」。

夫は顔を横に向ける。

——この人はこういう人なのだ。

少しばかり得心が行く。

夫は理非をはつきりさせずにはいられない。それで悩み、親孝行はあらゆる徳目に優先するところどころに道筋を見出したのだろう。いじらしいような気持ちになる。

夫はまた無患子の木を見上げ、長くゆっくりと息を吐き、

「やはり、そなたには隠せません。いずれはわかってしまうことです。今日ある者からの手紙が届きました。厳しく私を批判する言葉が連ねてありました。実に不躑な手紙です。こういうことをするのは一体何者なのかと、私は人に尋ねました。すると、その人は、私が何も知らないことに驚き、手紙の主は随分と前から声を大にして私を批判していたと教えてくれました。私には全く聞こえていませんでした。思えば、宰相という地位にあると、ともするとそのようなことになってしまうでしょう。いくら批判しても私が知らん顔をしているので、業を煮やして直接手紙を送って来たのでした。批判を知ったからには反論しなければならぬと私は考えました。手紙を読み返して、文面ははなはだ不躑でありましたけれど、内容をよく吟味して反論のしようがないと知れました」。

夫は木の幹に手を当ててうなだれる。

「どのようなことが書いてあったのでしょいか」。

「煎じ詰めると、宰相になってから何もしていない、あるがままに流しているだけではないかと。要するにそういうことです。そのようなことは断じてない、これこれのようなことをしたと、手紙の主に向かって数え上げようとなりました。すると、我が師のお顔が浮かんで参りました。『何もしていない』とは、まさに我が師のお声で、私は愕然としました」。

夫は額を木の幹に押し付け、

「実に無能な宰相です」。

呻くように言つて幹を強く叩き、私の方に向き直り、

「それはそれとして、母上のことが第一です。お上のお許しがいただければ、これからは母上に孝養を尽したいと思つています。母上も御高齢です。そなたに教

わって、洗濯でも何でもします。どうか頼みます」。

夫は高い背を折って私に頭を下げる。

夫がおしめを洗う姿を想像できない。実際にそのようなことにはなるまいと思う。女は内を治め、男は外を治める。政治から退いて夫に一体何が残るのだろう。

——そこまでこの人は悩んでいるのか。それを知らずにいた。

顔を上げた夫に、

「お話はよくわかりました」。

「そうですか。わかって下さいましたか。それは有難い。では、早速に、母上にこのことを御報告いたさねば」。

すぐにも行こうとする夫に、

「いまはお休みなっておられます」。

「そうですか。お休みなっておられますか。では、後にした方がよろしいのでしょうか」。

「ええ、そのように思います」。

夫は無患子の木の下で行きつ戻りつし、その振る舞いが自分でも不自然であると気付いたようで、

「奇妙でしょうか」。

「いえいえ」。

「思えば、ずっとお上の仕事ばかりで、母上には何一つして来ませんでした。何十年もの御不孝を詫びねばなりません」。

「あなたさまが御立派なお仕事をなさるのが何よりの親孝行でございますよう」。

お義母様も常日頃そのようにおっしゃっています」。

「立派な仕事ができているのならいいのです。いまの体たらくではまさしく大不孝者です。そうは思いませんか」。

夫は小さく笑う。

「お見受けするところ、今日はお疲れでございましょう。お義母様も休んでおられます。ともかく一度中にお入り下さい。お茶の御用意でもいたしましょう」。

「ああ、お茶ですか。そういえば、今日はお茶どころか水もなしでした。喉を通りそうになかったのです。お茶を戴くのはよろしいのかも知れません」。

「そうなさいませ」。

夫は歩み出す。

このごろ夫は右足を引きずっている。始終足が痛むらしい。それもあるいは心痛に発しているのだろうか。たぶん休息が必要なだろう。それを孝という形で

しか見出すことができないのだ。

夫の後ろに従って庭を出る。

「そういえば、昨日、幾道君が来たと聞きました。親不孝のこの私が言うのも何ですが、幾道君は心配です。お義父上のお顔ちちに泥を塗るようなことになりはしないかと」。

「あなたさまにまで御心配をおかけして申し訳ありません」。

「あちらのお家の御子息は皆様揃って素直で品もよいと上々の評判です。私も嬉しく思っています。ただ幾道君だけがどうも。あなたからも機会を見て、少しは厳しく言った方がよくはないでしょうか。差し出がましいようですが」。

そのように言うのは夫にしては極めて珍しい。幾道のよくない評判が夫にも随分と聞こえているのだろう。

「昨日も、姉として言うべきことは言いました。幾道一人に限らず、心もとない弟達ばかりで心配です。あの様子では、誰一人として父上の足元にも及びませんでしょう」。

「もつとも、お義父上のようにと言われたら、いささか気の毒であるのかも知れません。十四歳で進士出身を賜るなど、お義父上お一人限りですから」。

「翻つてうちの子供達はどのようなのでしょうか。やはりどうにも心もとなくて心配です。もつと厳しくしておかなければいけなかったのでしょうか。このままでは、あなたさまに遠く及ばない不肖の子ということになりそうで、困ったものです。幾道から徐々に話をずらそうとする。

実のところは、幾道には何も厳しいことを言っていない。むしろ全く逆だ。

「息子達にはこのような私ではなく、望むらくは、我が師のようになってもらい

たいものです。我が師はまこと特別なお方で、いまの私は全く顔向けなりません。もう退いて、後は若い人に託すのがきつといいのでしょう。しかし、若い人では誰がいいかと見回すと、やはり我が師は特別との感をさらに強くします。これぞと思えるのは、御次男の純仁さんじゅんじんばかりでしょう。純仁さんは先に科挙に合格し、お父様の喪が明けて初めて仕官し、早くも立派なお仕事をなさっています。お父様を彷彿とさせるところがあります。うちの倅どもなどは逆立ちしても及びません」。

范仲淹をしきりに想う夫を書院に送り、茶の仕度に取り掛かる。

幸いも、幾道についてはあれですみ、何のために来たのかという話にはならなかった。

幾道は暇乞いに来た。長安に行くと言っていた。それもある女性を追ってのこ

とだ。

我が父晏殊あんしゆの喪が明けると、承裕しょうゆうから順に幾道まで弟達全員に官職が授けられた。宰相にまでなった父のお蔭だ。もしも范仲淹と夫が手掛けた改革が計画通りに実行されていたならば、科挙を受けずに官員になれる恩蔭の制度は大幅に縮小され、弟達全員が官員になれたりはしなかつただろう。

承裕等の評判は夫の言う通りまずまずであるようだが、幾道とは言えば、頻繁に妓楼に通い、特に親密になった西楼の女性に贈った詞が遊里の女達の間でさかんに歌われるようになって、世間一般では、晏殊の息子の中で幾道がもつとも有名になってしまった。このようなことでは幾道のためにならないと思つたのか、西楼の女性は自ら願つて長安の妓楼に移つた。

幾道は任期が満ちたのを機に、次の職は求めず、長安に行くと私に言った。母

にも兄にも内緒だと言う。私は止めなかった。

幾道は、長安に行った西楼の女性を想う詞を私に示した。

西楼月下当時見 歌楼で月を見たあるとき

涙粉偷勻 君の涙が化粧の香りを流した。

歌罷還顰 歌が終わるとまた眉を顰めた。

恨隔爐煙看未真 爐から上る煙に隔てられて君の真情は知れなかった。

別来楼外垂楊縷 楼の外に垂れる柳の枝は、別れてから

幾換青春 幾たび青い葉を換えただろうか。

倦客紅塵 人の世の塵に倦んだ私ではあるけれど

長記楼中粉涙人
楼中で涙を流した君を忘れはしない。

その女性は没落した士大夫の娘だと幾道は言った。妓女が必ずしも眞実を告げるとは限らない。それでも不幸の身の上であるのは間違いないのだろう。

幾道を止めず、今回も「好きにしてよい」と言った。幾道がその女性を一途に想っていることに打たれたからではない。本物の詞を作りたいと幾道がかつて言っていたからだ。長安に行かなければ、西楼の女性はそのまま淡く美しい思い出となっていくことだろう。長安に行けば、恐らくは恋は破綻し、そのことが幾道の詞をより深いものにするであろう。詞のためにそのように判断したのは間違いない。

しかし、後になって思うと、それだけではなかったようだ。ぞつとするような

ことだが、単に幾道の恋の破局を願っているだけなのかも知れない。西楼の女性への嫉妬なのか。西楼の女性が自ら長安に移ったと聞かなければ何でもなかったであろう。その女が、もしかしたら、私以上に幾道のことをわかつているのかも知れないと思えて、破局を願ったのか。

許州で幾道と話してから、幾道が詞に生きるのなら、私には何があるのかと真剣に探し求め、いわゆる女の仕事とされているものを一つ一つ丁寧にする事で自分が変わって行けるのではないかと考えるようになった。孔六があのように接してくれるのは、確かに自分のありようが違って来ている証であると思いたい。しかし、これで十分であるとは思えない。手近なところにちんまり収まり、それでよしとしようとしているのではないかと思えてならない。

いまの私には幾道を支えているとの思いが必要なだろう。幾道が好きにして

いるのは、私がそうしてよいと言ったからだ。幾道をここまで思うのは、自分でもいささか穏当ではないと感じる。そうであるから大切でならないのだ。

第六の注の続き。

嘉祐四（二〇五九）年八月、富弼への批判は、全くの八つ当たりから始まった。職務上の怠慢を問われたある者が、「この俺様がいけないのなら、あの宰相はどうなのだ」とぶち上げた。名宰相との評判は高くともその実態は何もしていない、職務怠慢の極みではないかと激しく息巻いた。

富弼はそれを深刻に受け止め、老いた母に孝養を尽すことを理由に宰相職を辞したいと願い出た。皇帝から授かった職を自分から辞めると言い出すのは基本的であり得ない。健康に余程問題があるか、あるいは不行跡で咎めを受けるより前

に退くか、その二つにほぼ限られる。皇帝は富弼の申し出を許さなかった。富弼はもう一度願い、また却下された。富弼は病気を理由に家に閉じ籠った。辞めると一度決めた富弼はそれ以外の振る舞い方を知らなかった。皇帝は富弼の病状を検分する使者を派遣した。足が痛むとはいっても生死に関わるような重病ではなく、富弼は仕方なく朝廷に復帰した。

嘉祐六（一〇六二）年三月、その母が死に、喪に服すことを理由に、富弼はついに宰相職を退いた。

富弼が喪に入ってすぐに宮中では春の大宴が予定されていた。「君臣は哀樂を同じくするものです」と、晏承裕が皇帝に申し上げ、それを受けて皇帝は大宴を取り止めた。承裕は義兄の名誉になるだろうとそのようにしたのだが、義兄に過度に媚びているとの批判の声も聞かれた。

富弼は屋敷に籠ると、若き日の修学時代に道教の寺院で気を運めらせる健康法を習ったのを思い出し、足の病は悪い気が滞っているせいではないかと考え、食後に一定時間歩くことを始めた。初めのうちは足をひきずりながら歩くのはかなり辛かったが、続けるうちに徐々に楽になった。喪中であるから、屋敷の内に留まって隅から隅までぐるぐると何回も歩き回る。長身で厳めしい顔をした主人が始終歩いていたら、屋敷内はどうしても肅然とならざるを得ない。

歩く時間の他は経典や史書を読んで過ごし、興に乗ると、息子や妻を書院に呼んで、聖賢の言葉を講義したり、史上名高い人物の批評を聞かせたりした。独自の見解を力を籠めて話しても、息子達が妻ほどには熱心に聴いてくれないのを齒がゆく感じた。富公晏夫人は、かつて蓮妙先生に教わったのと比べ夫の理解が非常に深いことに感銘を受けた。詩賦について語ることはなかった。

富弼は政界からの完全な引退も思い描き、父祖伝来の地である洛陽に息子や孔六を行かせ、将来の退隱場所を探し始めた。その一方で、聖賢の書を読み返したことで若いころの思いが甦り、また、師と仰ぐ范仲淹が死ぬまで現役であり続けたことを思つて、国政の改革にもう一度取り組みたいと考えもした。

朝廷では後継者問題が最大の懸案で、それが決まらないために他の全てが停滞するという状況が続いていた。嘉祐六（一〇六二）年閏八月、司馬光しばこうが意を決して

皇太子を立てることを強く皇帝に要望した。皇帝は一進一退する病のために首を振るかうなずくだけであったのだが、このときばかりは前向きと聞こえる言葉を司馬光に返した。それを受けて、十月、宰相の韓琦かんきは皇太子を定める詔の草稿を用意して皇帝に示した。皇帝は同意し、ようやく皇太子が指名された。皇帝の従兄弟の趙允讓ちやういんじやう（濮安懿王）の子の趙宗美ちやうそうじつだ。後に趙曙ちやうしよと改名した。

それから一年余り経った嘉祐八（二〇六三）年三月、仁宗皇帝は死んだ。五十四歳で、在位は四十二年及んだ。皇后の曹氏（そう）はすぐに皇太子を即位させようと趙曙を呼んだ。趙曙は走って逃げた。趙曙は皇太子に立てられたとき辞退しようとし、それは謙讓の美德を發揮したものとみられていた。このときは趙曙は走りながら「絶対にならないぞ」と絶叫した。周囲の者が飛びかかって抑え付け、無理やり服を着替えさせて皇后の前に連れ、即位の儀が行われた。

新皇帝（英宗皇帝（えいそう））はそのまま百官が待つ御殿に行かされ、皇帝として初めて百官の拝礼を受けた。退出すると、「これから三年の喪に服すから、万事は君に任せろ」と宰相の韓琦に言った。新皇帝の考え出した最後の逃げ場だった。大臣達が皆であれやこれや説得してどうにか思いとどまらせた。皇帝は間もなく病気になる、誰とも会わなくなった。

皇帝が宮中の奥に籠っていては国政に遅滞が生じる。皇太后となった曹氏が臨時に皇帝役となった。曹皇太后を支えたのが司馬光だ。曹皇太后は自分の姉の子の高氏こうしを皇后に選んだ。高氏の祖父は建国の勲臣で申し分のない家柄だ。こうして皇帝と皇后が揃い、国家の体裁は整ったのだが、皇帝が表に出ない異常な事態が続いた。

富弼は仁宗皇帝の死を深く悼んだ。皇帝が制科を実施してくれなかったらまず官員になれなかったであろう。皇帝の強力な支持があつて遼国との和平を維持することができた。皇帝の深い恩を思えば、改革に失敗し、そして最晩年に何らの成果を挙げることがなかったのが返す返すも悔やまれてならなかった。それだけに、英宗皇帝に代替わりしてからの宮中の様子を耳にすると、国のためにもうひと働きしなければいけないと強く思うのだった。

嘉祐八（一〇六三）年五月、母の喪が明けた富弼を枢密使として召すとの詔が下り、富弼は朝廷に復帰した。しかしながら、富弼の意欲とは裏腹に、先帝時代の重臣がいた方が新皇帝の朝廷に重みが付くという理由で呼ばれただけで、富弼にはそれ以上のことは期待されていなかった。朝廷が直面する最大の問題は、皇帝と曹皇太后の不和という事態になっていて、そのことに関して富弼は全くの無力で、蚊帳の外に置かれた。

病と称する皇帝は、大臣が勧める治療法を拒絶し、自分が皇帝になっているという不都合な事実から徹底して逃げようとした。曹皇太后が皇帝の母の立場から嚴重に注意すると、皇帝は暴言を吐き、曹皇太后は激怒した。大臣連中は、いまさらながら皇帝に孝とは何かを説いてみたり、皇太后に母の慈愛なるものを説いてみたりと、何とか二人を融和させようと試みた。その一方で、宮中内には両者

の不和に乗じてうまいこととしてやろうと企む輩もいて、二人の関係は複雑にもつれた。

富弼は朝廷に出たのを悔やみ、足疾は悪化した。

弟に呼ばれる。

治平元じへい年（一〇六四）年二月。

承裕に招かれて西園を訪れる。義母ははの喪ははに服していたこともあつて西園は数年ぶりだ。

轎かこより降りると、承裕が飛んで来る。満面の笑みだ。

「さあさあ、こちらへ、こちらへ。今日は本当によく来て下さいました」。すぐに庭の方へ導こうとする。

続けて息子達も到着したのを見て承裕は、

「姉上にとつては勝手知つたる西園でありますから、どうぞそのままお進み下さい。私は皆さんを御案内しに参ります」。

いいのか悪いのか、承裕はこのところ随分と変わった。身を軽くしての気配りがすつかり板に付いた。

轎から降り立つ息子達を、承裕は飛び切り愛想よく順に迎える。息子達からすれば承裕は叔父に当たり、しかもれつきとした官員なのだから、辞儀低くしなければならぬはずなのに、如才なく振る舞う承裕にうかうかと乗せられている。

父は西園に迎えた客をいかに楽しませるか心を砕いていたから、この振る舞いは父譲りといえるのだろう。承裕にしてみれば、官界で生きるにはこれしかないのかも知れない。皇城において承裕がまめまめしく義兄に仕える有様はいささか

評判になつてゐる。足をひきずる義兄を見掛けると、どれほど遠くからでも飛んで行つて手を取つて支えようとする。

承裕はひと通り息子達に声を掛けてまわると、すぐにまた駆けるようにして戻つて来て、

「皆様方はお会いするたびにますますご立派になられますなあ」。

我が息子達を褒めちぎる。

「何だかとても張り切つておいでですけれど、あなたは今日も本当はお仕事なのではないのですか」。

少々嫌味のように言う。我が夫は気の進まないことがありながらも今日も皇城に登つてゐる。

「何をおっしゃいますか。こうして姉上に来ていただいて、私がここにいないと

いうことはあり得ませんでしょう。あらかじめこの日のためにお休みを頂戴しております。ずっと前から準備して来たのです。弟達も皆同じです」。

「兄弟が揃ってそのようであつてよろしいのですか」。

「何の問題もありません。今日は特別な日として前から備えていたのですから。いつものことではありません。姉上をここにお迎えするのは、もう二年ぶりとか四年ぶりとか、あるいはもつとになるのではありませんか」。

「ええ、とても久しぶりです。ここに来ると、何だか心の底からほっとします」。

私は正直に言う。

同じ春でありながら、この屋敷と夫の屋敷とでは随分と違う。西園はよいとしてみじみと感じる。

義母の小言が聞こえなくなつて特段安堵したというようなことはない。以前か

らすでに気にならなくなっていた。おしめを洗うにしても、義母のための仕事は苦になるどころか、そこに喜びを見出せるまでになっていた。女というものは、生まれたときには父に、嫁いでは夫に、そしてその後は息子によって、どうしても左右される。義母が宰相の母として皇帝の前に出るといふ稀有な幸福に恵まれた生涯を送れたのをまことによかったと思うだけだ。

ここに違って夫の屋敷では春を春らしく感じるものが難しいのは、夫の苦しい思いの一部が伝わって来て、それが私自身の思いと重なり合うところがあるからなのだろう。日々の小さな仕事に心を籠めることで、長く苦しんで来た不可解な感覚はほぼ消え去った。しかし、これでいいのだろうかとの思いが大きくなりつつある。国夫人こくふじんという称号までも頂戴し、いまの世で最も恵まれている女の部類に入るの間違いない。そのような身でありながら、私一人の満足に浸っていて

いいのかと思わずにはいられない。

そのようなことは、「今日は特別」と言う弟に習って、西園にいる間ばかりは忘れるのがよいのだろう。

承裕は手を打ち、

「そうでしょうとも、ここはいいでしょう。こう言っただけですけれど、いまは何とも難しい状況でありますから、こうしてここで春の麗らかな陽を浴びて、何もかも忘れて、日がな呑気にしているのが一番いいのです」。

弟は顔を少ししかめ、にやりと笑う。

弟には弟なりの苦勞もあるのだろう。

「呑気に休んでお上から俸祿を頂戴したのではばちが当たりましょう」。

自分への少しばかりの戒めも込めてそのように言う。

「まあそうおっしゃらずに。今日だけのことなので。私だって、官署に行けばちゃんと真面目に仕事をしております。地位の低い私なんぞは毎日がそれこそ書類との格闘です。たった一日休んだだけでも、これで明日行けば、もう書類が山積みになっているでしょう。どうしてお上の仕事はああも書類が多いのでしょうか。朝から晩まで、書類、書類、書類です。書類を読んで書く以外のことは何もできやしません。もつとも、いまは変に頭を働かせて下手なことでもしたら具合が悪いので、目の前に積まれた書類をひたすらいじっているのがいいのです。うけれど」。

「まあ、困ったものです。お上の御用を務める人がそれでよろしいのですか」。

「よいではありませんか。今日は七面倒なことは忘れて、姉弟同士、従兄弟同士、春の宴を楽しもうではありませんか。さあさあ、こちらへ、こちらへ」。

承裕は先立って庭の方へと導く。

私はまわりを見て、

「今日は、何かい、幾道はいないのでですか」。

何気ない風に尋ねる。

承裕はさもありなんと顔をして、

「弟は全員揃っています。わかっています、お目当ての幾道も今日はいますから。

さつきまでこのあたりにいたのですが」。

承裕は左右を見まわし、声を少し潜め、

「あいつのことだから、もしかしたら、察するところがあって逃げ出したのかも知れませんな」。

「察して逃げるって、どうかしたのですか」。

承裕は苦り切った表情をし、

「何と言いましようか、姉上にはまことに申し訳ないことながら、今日はできたらお願いしたいと思っっていることがあります。機会を見て御相談と思っておりますが、いまさら後回しというのも何です。幾道にも勘付かれてしまったようですし」。

「私には、何ですか、あれに何か小言の一つも言えと」。

「さすが姉上です。姉上の方からそのようにおっしゃっていただけると心強い限りです。有り体に申し上げます。姉上に来ていただいたのは、西園の春を満喫していただき、姉弟楽しくというのが何と言っても一番でありまして、それでもう十分なのですけれど、できれば姉上からも説得してもらえないかと。もう姉上だけが頼りなのです」。

「このところ幾道の評判はさんざんである。姉として小言の一つも言ってやらねばならないのだろうが、しばらく振りに会って説教じみたことを言う気はない。

振り返って息子達を先に行かせ、承裕と二人、木立の下に残る。

「で、私に何を言わせようというのですか」。

「それはもちろんあれに最もためになることでありまして。姉上も御存知であります。幾道ときたら、何しろもう好き放題が過ぎて、本当に困っているのです。ことに母上がお気の毒でなりません。普段は家にいなくせに、たまに帰って来ると母上に金の無心です。母上としては、私どもへの気兼ねもあって、それはそれは苦慮されておられます。恥ずかしながら、この家だって昔のようにいくらでもお金があり余っているというのではないのです。あれは姉上のおっしゃることなら素直に聞く子ですから、今日もそれだと思っっているのです」。

「これまでに私が幾道に何か言い聞かせたりしたことがあったでしょうか」。

「ああしろこうしろと姉上が直接おっしゃったことはないのかも知れませんが、あれは姉上のことを特別に思っています。私等にはもうはなから聞く耳持たずで手に負えません」。

「あの子に会うのは、ここに来るのが久し振りなのと同じくらいに久し振りです。たまに会って説得するなどできましようか」。

承裕はうつむいて少し考え、

「あれも警戒して姿をくらましてしまったようですし、どうも今日は具合がよろしくない気がして来ました。せっかくの春の宴が台無しになってもつまりません。よい折があればと虫のいいことを考えていました。でも、やめておきましょう。今日は楽しむだけにしておきましょう。ええ、それがいいです」。

私は笑い、

「本当にそれでいいのですか。簡単に引っ返めてしまつて」。

「仕方ありません。姉上に西園の春を存分に楽しんでいただかなければ、何のために来ていただいたのかわからなくなつてしまいます。あれのためには、言いたくないことも言わなければならぬのですけれど」。

「わかつています、あなたも兄として辛いものがありましたよ。いいです、できるかどうかわかりませんが、あの子に言えるようなことがあつたら、何かしら言つてみましょうか」。

「本当ですか、いいんですか」。

承裕はたちまち顔を明るくする。

とはいうものの、承裕の困っている様子にかく言つてみたまでで、承裕が期待

しているような説得を真面目にするつもりではないので、少し気がとがめ、

「何をどう言えばいいのか、あなたの考えをちよつと聞いておきましょうか」。

「たぶん父上に始まって、我々がよつてたかつて可愛がり過ぎたのがいけなかったのでしょう。好き勝手を許したのだから、妙なことになってしまつて。あれも二十七歳です。もう遅いのかも知れませんが、ここらでまともになつてもらいませんか。つまり、あれをまともにしたいです。これがもう最後というくらいに思ふべきでしょう。このままで行つたら、母上は御心労でどうにかなつてしまふでしょうし、父上のお名を汚すことになりかねませんし、我々だって迷惑を蒙つてしまいます」。

「まともと言うのは、要するに、結婚させて身を落ち着かせるとか、科挙を受けさせるとか、どうせそのようなことなのでしょう」。

「その通りです」。

「しかし、歌妓やら舞姫やらを次から次へと追いかけて回している身持ちの悪いあれとの結婚を許すようなお家があるでしょうか。まともなお家なら、いくらあれが晏の家の倅でも難しいのではないですか」。

「全くその通りです。だから、科挙を受ける勉強に専念させるのが先だと思っています。身を改めたということが知れるようになれば世間の目も変わって来ましよう。もしもいい塩梅に科挙に受かりでもしたら、それこそこの家のお嬢様もすぐにうんと言って下さいましょう」。

「そんなふうにはうまく行きますか」。

「いやあ、幾道は遊んでばかりいますけれど、あれで才能はあるのです。父上に最も似ているのが幾道だと、兄としてそこところは保証します」。

「まあ、何だかんだ言いながら、あなたもあれには甘いではないですか。あの子にそれほどの才能がありますか。もしあるとしても、あれが身を改めて勉強に励むようになる姿が私には想像できませんけれど」。

「姉上にそのように言われたら、幾道だって立つ瀬がありません。我々が諦めたら、あれは一生あのままになってしまいます」。

「あれはあのように仕方がないのではありませんか」。

わざと突き放したように言ってみる。

「何度も言いますが、姉上が頼りなのです。どうかそのようにおっしゃらないで下さい。弟のことを真剣に考えて下さい。あれはあれでいいとかつて、あれに好きにさせて、姉上は少々ずるくはありませんか」。

承裕は棘のある言い方をする。

「ずるいですって、この私がですか。ずるいとは、姉弟の間でもあまり聞きたくない言葉です」。

自分でも思いがけず、強く反発する。

それは、幾道がこうなった責任の一半は明らかに私にあると知るからだ。歌妓を追って長安に行くのを止めていれば少しは違っていたのかも知れない。私自身のために幾道を長安に行かせたのなら罪は重い。

「まあまあ、怒らないで下さい」。

私は引け目を感じつつ、

「品のないことを言われたら、それは怒ります」。

「でも、幾道に一番甘いのが、結局のところ姉上ではないでしょうか。我々は兄としてどうしたって幾道に厳しく言わなければなりません。それで嫌われて、も

う何を言っても聞いてくれません。母上もいろいろと言っておられるようです。

姉上はたまにしか会わないで、あれにいい顔ばかりして、それであれに気に入られていてのです。姉上だって、御自分のお家では厳しくされているではないですか。今日来られたお三人ともしっかりしているし、娘さんだってそれぞれいい家に嫁がれたではないですか」。

「我が家では、夫がああいう人ですから、どうしたって厳しくしなければならぬのです」。

夫を持ち出して言い訳をする。

「それこそ馮京様ふうけいというよいお手本があるではありませんか。お若いころには評判のよろしくないこともありましたけれど、お義兄様おにいさまがこれぞ我が婿にとお選びになったのでしよう。幾直なほだってここで発奮すれば、馮京様のようになれないと

は限りませんでしょう。御自分のところではよいお婿様を得て、幾道には好きにさせて高みの見物というのでは、ずるいと言われても仕方ないではありませんか」。

「おやまあ、今日は、私が叱られに来る日だったのですか」。

承裕は急所を突いて来る。「高みの見物」とは、感情を害されつつも、その指摘は当たっているとところがある。自分にはできない生き方をする幾道を眺めていたのだろう、支えているとの自己満足とともに。

承裕は口を抑え、

「これはどうもとんでもないことを言ってしまったようです。姉上を頼りと思っただけなのに、つい言い過ぎてしまいました。申し訳ありません」。

「いいのです。わかりました。あの子のことをもう一度よく考えて、よい折を見

つけて、あれと話をしてみましよう。確かにあの子もこれが潮時、それも最後であるのかも知れませんから。」

「どうかお願いします。」

承裕は安堵した顔になり、

「さて、難しいことはこれくらいにして、まずは春の宴をどうかお楽しみ下さい。」

それが第一です。あれがこのまま逃げ回って話ができないようでしたら、それはそれで仕方ありません、また次のことを考えます。さあ、参りましよう。」

幾道のことはしばらく置き、期待とともに少しばかりの不安も伴って西園の小門をくぐる。父は常に西園に何かしら手を加え、訪れるたびに驚かされた。今回はそのようなことはあるべくもなく、以前通りに保たれていればそれで十分以上であるのだろう。

早くも最初の小径でいささかがっかりさせられる。角を曲がるごとに印象が大きく変わる驚きがない。大方の木はかつてのままに立ってはいいても、ただ並んでいるだけで、父が求めていたものの真髓が失われている。寂しい思いを隠し、弟には西園の春を褒める。弟達にはこの広大な庭園は明らかに荷が勝ち過ぎている。手放さずにいるだけでも大変であるに違いない。

池の畔に至って失望はさらに強まる。奥行がすっかり失われ、まるで小さな水溜りのようだ。弟は池で宴を催そうと、よい場所を選んで三カ所に席を設け、そのために何本かの木が取り払われた。印象ががらりと変わったのはそれだけではあるまい。父の美意識を理解していないから種々の変化が積もって全てを台無しにしたのだろう。

池全体を見渡す最上の席に、母と私と承裕が並ぶ。よい趣向であると承裕を褒

める。後ろに楽人が控え、華やかな曲を演奏してくれる。父の生前には、都の第一級の楽人を揃えたものだが、今日はかなり技量が劣るようだ。

母とは父の思い出話になる。母が語るのを聞くと、父は人間を超えた神々しいばかりの存在であったかのようだ。母にはそのように映ったのだろう。その父が愛してやまなかつた幾道の行く末を案じて母は涙を流す。それを聞いて、幾道に必ずものを言わなければならぬと思う。幾道に好きにさせるのは確かに罪だ。

他の二カ所の席に、弟や息子達、それに妹達が顔を揃え、承裕が頻繁に三カ所を往き来して宴を盛り上げる。幾道はいつまで経つてもどこにも現れない。

私は母に断つて他の二カ所の席を順に回り、そのまま元には戻らずに、池の畔から離れて坂を上る。もしやあそこにいるのではなからうか。

坂は土が崩れて荒れている。上に建つ亭は、屋根の瓦が乱れ、柱の塗りが剥げ、

全体にくすんでしまった。案に違わず、その下に幾道がいる。手に顎を乗せて長椅子に腰掛けている。

音楽はここにもよく響いていて、それを幸いに、足音を忍ばせて幾道の後ろに立ち、不意に声をかける。

「どうしました。こんなところにいて」。

叱り付けるように言う。

幾道の背中がわずかに動く。しかし、それだけで終わってしまい、私は拍子抜けし、

「今日はそなたに会えると思って、それを楽しみにしていましたのに。どうしたのですか」。

少し悲しげな声を出す。

幾道は背を向けたまま、

「ああ、御免なさい。でも、一人でここにいたくて。いえ、いたいというよりは、一人でここにいるしかないのです。僕は駄目なのです。皆といると身の置き所がなくて」。

「皆といるといけないって、それはつまり、この私も駄目ということ」。

今度はわざと拗ねたように言う。

「ああ、姉上」。

幾道は小さく嘆息し、

「どうかそのようにおっしゃらないで下さい」。

幾道はゆっくりと振り返り、

「姉さんは別です」。

——ああ、どこも変わらない。

幾道の顔を見ると、ものを言おうとする気が薄れる。しかし、今日はそれではいけないと思り返し、拗ねたままの声で、

「別というのは、つまり私が女だからかしら」。

幾道は小さく笑い、

「姉さんも、女性に目がないどうしようもない男だと、僕のことを思っているの
でしょう」。

「どうしようもないかどうかは別にして、女性には目がないのでしょうか。それは
本当なのでしょう」。

「どうなのでしょう。僕にはわかりません。とにかく、姉さんは特別なのです」。
「どの女性にもそのように言っているではありませんか」。

「違います。僕は人に思われているような男ではありません。」

「人が思うのと、自分が思うのとでは、どうしたって違いがあります。お隣りに座ってもいいかしら。あなたのお好きな若い歌妓でもないのに。」

幾道は立ち、

「どうかそのようにおっしゃるのはやめて下さい。ええ、どうぞ、こちらに。」

幾道は椅子を手巾で軽く払って私に勧める。座ってから、その横に十分に余地があるのを手で示す。

「僕なんぞがよろしいのでしょうか。国夫人様こくふじんのお隣りを汚して。」

「嫌なことをおっしゃいますこと。それはお返しですか。姉と弟です。国夫人な
どごうでもいいことです。」

「御免なさい。もう言いませんから。」

幾道の横顔を改めて見て、

「もう二十七歳なのでしょう。でも、とてもそんなふうには見えません」。

「いつまでも子供っぽいですか」。

「まあ、そうね」。

実際には少女のようだ。

「僕としては、二十七歳よりも、十も二十も年を取ったと見られたら嬉しいのですけれど」。

「どうして」。

「すっかり恋にやつれたと」。

「まあ、臆面もなく。あなたをやつれさせるのはいまはどこの人のですか」。

長安に追いかけて行った西楼の女性は、幾道が着く前にどこか他の町に消えた。

そしてそのまま長安で別の女性と恋に落ちると、幾道には数々の噂とそれにまつわる詞が巷間多数伝えられている。

「どこと言われても、答えるのが難しいです。たくさんいるものですから。」
幾道は笑いながら言う。

「じゃあ、誰もいないってこと。」

幾道は顔をぐいと向け、

「そう思いますか。」

「だって、本当にやつれるような恋なら、そのような相手はこの世に一人いるかどうかだってわからないのではありませんか。」

そう言うてすぐに、

「でも、私には恋の経験などはありませんけれど。」

早口で付け加える。他の人には決して言えないようなことも幾道には言ってみたくなる。

幾道はじつと私を見る。私は目を伏せる。

——いけない。どうしてこんなことを言ったのか。

幾道を教え諭す気でここに来たのがそもそもいけないかったのだろうか。

幾道はすつと立ち上がり、

「姉さん。聞いて下さい」。

幾道は両腕を前に組んで歌い出す。それは初めて詞を聞かせてくれたときと同じ仕事だ。

千花百草

千の花、百の草

送得春帰了

それを送ると、春は帰ってしまふ。

拾蕊人稀紅漸少

花を摘む人が稀になると、紅も少なくなる。

葉底杏青梅小

葉の中の杏子はまだ青く梅はまだ小さい。

小瓊間抱琵琶

しょうけい 小瓊はそぞろに琵琶を奏でる。

雪香微透輕紗

軽い紗の衣に香る雪の肌が透いて見える。

正好一枝嬌艷

これこそまさしくよろしき艷やかな一枝、

当筵独占韶華

筵にあつて春の陽光を独り占めしている。

両手で胸を押さえて歌いおさめる。知らず知らず、私も幾道と同じように腕を動かして、そして胸が高鳴っている。

幾道は椅子に戻っては来ないで前に進んで池を見下ろす。

その背に言う。

「聞いてもいいですか」。

「ええ」。

幾道は振り返らない。

「その小瓊というのは女の人の名ですか」。

「そうです。歌妓です」。

「その小瓊に恋をしているのですか」。

「それはわかりません」。

「だって、『雪香、微かに輕紗を透く』とか、穏やかならぬ句なのではありませんか」。

「小瓊が琵琶を奏でつつ歌う姿を見て、どうしても詞に詠みたくなりました。詞はすぐにはできなくて、いまもここで案じていました。姉さんがちようどいらしたときに、ようやくこの詞のようになりました。僕が恋をしているのか、詞を聞いて姉さんはどう思われますか」。

幾道は振り返る。

「あなたは前にも同じようなことを言っていました、家にいた少女に対して。私にはわかりようがありません。だって、恋の経験などないのですから」。

もう一度挑むように言う。

——こうなったからには行き着くところまで行くしかない。

幾道の顔が曇り、

「これまで僕は一体何をして来たのでしょうか。恋に身を焦がし、その挙句にどう

にかなってしまふのなら、それはそれでいいです。本物の恋であるのなら、小瓊と一緒に、小瓊を幸せにしたいと考えるべきでしょう。僕にはその考えがありません。小瓊は身を縛られています。僕はそれをほくことができませぬ。それだけではありません。こうして詞ができたなら、僕は正直言つてそれで満足です。

それって何なのでしょう。僕のこの詞は小瓊にとって一体どのような意味があるのでしょうか。僕にはわかりませぬ。本当の詞を作ると姉さんに言いました。本当の詞って何なのでしょう。本当に恋をして、それで作るのが本当の詞なのでしょう。僕はそのように思っていました。でも、小瓊に恋をしているのかどうかさえ僕にはわかりませぬ。詞を作りたいだけで恋は賈物なら、詞も賈物ということになってしまふのでしょうか。僕は父上に反発して、本物の詞を作りたいと言いました。でも、この詞はどうなのでしょう。僕は一生懸命に作りました。でき

てみれば父上の詞と少しも変わったところがありません。『雪香』という語だつて父上の詞から借りたものです」。

幾道は腕を振り上げ、

「ああ、詰まるどころ、僕は一体何をしているのでしょ。世間に悪い評判を流しているだけです。世間の評判などどうだつていいです。詞を作りたいばかりに、たくさんの女性を傷付けました。ひどい男です。一体どういうことなのでしょう。兄さんたちを見ると、この人たちはまともに生きているのだと、胸が苦しくてどうすることもできません。僕は嫌で嫌でたまりません」。

幾道の震える声に、

「あなたは好きに生きているものだとはかり思っていましたのに」。

「ええ、そうです、その通りです。僕は好きに生きています。好き放題です。つ

まり、結局のところ、僕が悪いというだけのことです」。

「本当にそう思っているのですか」。

「ええ、本当です」。

その返事を聞いて判断する。

——ここで言わなければ。

自己満足を棄て、幾道を救う。

——恋というものを語るのはこれで終わりだ。

「だったら、私は姉としてあなたに言いたいことがあります」。

「何でしょうか」。

その顔を見て、にわかのためらいが生じる。

——この子ばかりは。

そのように思うのが私自身の身勝手であるに違いない。

「くどいようですが、あなたも二十七歳です。どうなのでしょう。ここで落ち着かれたら」。

幾道は顔を横に向ける。

猛烈な後悔が襲って来る。しかし、幾道のためには言わなければならないと思り返す。それでも息苦しさに言い出しかねていると、幾道は、

「わかっています。姉さんもそのように言うよりないことは。でも、姉さんは本当は全く逆のことを言いたいのではないのでしょうか。僕の背中を押ししたいのではありませんか。それで僕がどうなるのか見たいのではありませんか」。

私は言葉にならないうめき声を漏らす。

——ああ、まさにこの子の言う通りであるのか。

幾道は背を向け、

「さあ、僕の背を押して下さい。僕は父上の詞を超えたいと思っていました。僕
は不遜にも、それができると思っていました。だけど、ここで身を落ち着けて、
科挙を受けて、楽々状元合格するくらいでなかったら、父上の詞を超えることな
ど絶対にできません。父上はそういう人だったのです。僕はどうして父上を超え
ようなどと思ったのでしょうか。この西園を見れば父上の偉大さがわかります。い
ま西園が残念ながらこの有様であるのはあたかも僕のようにです。どうしようもな
い息子です」。

私は声を絞り出し、

「御免なさい、あなたの苦しみを私は十分にわかることができなくて」。

「いえ、姉さんが誰よりもわかってくれています。ああ、いまでも父上がここに

いて、姉さんと同じように言ったら、僕はきつと素直に従うことでしょう。」

「そうなのですか」。

「だって、姉さんもそうしたのでしょ。女子状元を夢見ていたのに」。

「私はあなたとは違います。女ですもの。父上の言う通りにするしかなかったのです。女子状元はただの幻です」。

「本物の詞というのもただの幻です」。

「ここにもしも父上がいらしたなら、あなたの好きなようにさせるのではないでしょう。そう思います」。

「それが一番いけないのです。僕は初めからこうなってはいけなかったのです。

絶対」。

「それはどうしようもない」。

「我が晏の家で僕だけが勝手にしています。どうしてか僕だけにそれが許されていました。僕はそれをよいことに、詞を作ることに一生をかけようと考えました。だから、父上の詞を超えようという僕こそは本当は最もきちんとしていなければいけなかったのです。このようなことをしては断じてよろしくないのです」。詞のためにはと、幾道が長安に行くのを止めなかった。それがいけなかったのか。

幾道は亭の柱に寄りかかり、

「僕は、越国えつこく長公主ちやうこしゅ様の御不幸がずっと気になっています。姉さんはどう思われますか」。

唐突に話を変える。

幾道のことばかりを考えていた私は、

「急に訊かれましても」。

口ごもると、

「長公主様は、先の帝が最もよいとお決めになった御結婚をされ、考えられる限り最も不幸な結果となってしまうわれました。どうしてもあのようなことが起こってしまったのかといったら、女性は親の言う通りに従うしかないからというよりないのではありませんか。それでは不幸は絶えません。姉さんの場合には、お義兄様にいがたまたますばらしいお方でしたからよかったですでしょうけれど」。

西園という場でそのように言われ、我が父より富弼の名を初めて聞かされたときのことか思い出され、

「私だって、なかなか大変だったのです」。

「そうだったのですか。何かあったのですか」。

「いえ、長公主様と比べたら大したことではありませんけど。」

幾道はふわっと近づいて来て隣に座り、

「姉さんにどのような御苦勞があつたのですか。」

「いまは私の話をしているのではなくて。」

「どうか聞かせて下さい。」

幾道に迫られると、言いたくもなり、

「あの人は、何と言ったらいいのか、いわばあなたとは正反対のような人でしょう。とにかく厳格なお人です。そうであることは最初から聞いていましたのでそれなりの覚悟はありました。でも、この私には無理だったのです。実際に嫁いで、すぐにわかりましたもの。」

「大変なことがあつたのですか。」

「いえ、取り立てて何があったというのでもありません。それに、いまは私のことではなくて」。

思えば、言わずにはいられないような酷いことは特にない。
幾道は身を寄せて来て、

「いいではありませんか。どうかお聞かせ下さい。頼みます」。

「本当に大したことではないのです。例えば、最初の日に、あの人は私を前に座らせて、嫁というものはこうあるべしと延々と語って聞かせました。『礼記』らいいきにあるそもそも婚姻とは何ぞやという有名な文言から始まって、夜が更けるまでずっと。ああ、よしましろう、こんな昔むかしのことは」。

「どうか続けて下さい」。

「あの人は、正しいと思うことを全て言い尽さねば気のすまないお方です。我が

嫁はこうあるべきだと、あれもこれもと並べて、全部そっくりそのまま守るようにとおっしゃったのです」。

「あれもこれもって、どのようなことですか」。

「一つだけ言いますよ。あなたはきつと笑うでしょう。陸参様のお話です。

りくさん

聞いたことないですか。陸参様は母一人、子一人で、それはもうとてもすばらしい孝行息子だったそうです。貧乏で苦勞して勉強していたころのこと、夜中に隣の家から火が出まして、先にお母様が異変に気付き、『外で何か騒いでいるようだけれど、様子を見てくれないかい』と、隣の寝台で寝ている陸参様に声を掛けました。返事がないので、声を大きくして呼びました。それでも返事がないので、この騒ぎにまだ眠っていると、お母様はお怒りになって、『どうしていつまでも起きないのだ』と、闇の中で寝台を思い切り蹴りました。すると、どたりと息

子の落ちる音がして、それでも返事がありません。しばらく何やらごそごそしている気配があつて、やや経つてから、燭台に灯りがつき、陸参様はうやうやしくも、『母上。何事でございませうか。』ですから、さつきから外の様子を見ておくれと言っているではありませんか。何をぐずぐずしていたのですか。『いまだ束帯をしておりませんでしたので、母上に失礼があつてはと、返事はいたさずにおりました』。

幾道は小さく笑う。

「これって、笑い話のようなものでしょう。陸参様という人は、真面目すぎて滑稽なことをしてしまう人として有名ですもの。ところが、あの人は『母上の前に出るときには、陸参様以上にきちんとしなければならぬ』と大真面目におつしやつたのです。万事がその調子です」。

「お義兄様のお人柄が滲み出ていて、いい話に聞こえますが」。

「あなたは気楽にそう言いますけれど、当時の私はもう必死でした。あの人に言われたことはこんなことも含めて残らず守らなければと毎日毎日もう本当に大変だったのです。それに、長公主様と比べたら何でもないと言いましたけれど、そのことについては私なりの言い分もあります。私は父上の娘だからといって、それを鼻にかけるようなことは金輪際しませんでした。これはきっぱり言い切ることでできます」。

「それはつまり、姉さんも、長公主様が皇帝の娘として威張ったのがいけなかったとお考えなのですか」。

「ええ、そのように聞いていますけれど」。

「それは違うと思います。あの御不幸の一番の原因は、長公主様が夫ではなくて、

りようかいきつ

梁懷吉に恋をしていたことだったのです。

「まさか。それはあり得ないでしょう。だって、梁懷吉は宦官ではありませんか」。

「相手が宦官だろうが、恋は恋です。そうでなくて、長公主様がどうして命を断とうしたり、火を放ったりするでしょうか。それこそが本当の恋であるのです。だから、僕は残念でならないのです、長公主様が恋を全うできなかったのが」。

「そういう見方もあり得るのでしょうか」。

「それで、僕はきちんとしていなければいけないと思うのです。わかりませんか。僕は父の詞を超えたいと思っています。どういうことかと煎じ詰めて言えば、真実の自分の思いを詞に詠みたいということになるでしょう。最も切なる真実の思いと恋であるでしょう。だから、僕は本物の恋をしなければならぬのです。ところが、そのような恋の先に、長公主様のような破局しかないのなら、やはり

恋はいけないものということになってしまおうではありませんか。本物の恋とは何かを僕は依然として知りません。しかし、僕はすでに大勢の女性を傷付けました。

それはつまりどういうことなのでしょう。本物の詞を求めることがそもそも間違っているのでしょうか。だから、僕は最初からきちんとしていなければならなかったのです。姉さん、僕の言っていることがわかりますか。

「わかるような気もします。ただ、何度も言う通り、私には恋というものの経験が全くありません」。

「ああ、姉さんだつて恋をすればよろしいではありませんか」。

「何を言い出すのですか」。

幾道はいきなり私の手を取る。幾道の指は少女のように細い。その指に力が入る。

幾道は立ち、私は手を引かれて一緒に立つ。幾道はそのまま私を抱き寄せる。次の瞬間、激しく突き放され、

「姉さんはずるい人です」。

私はよろける。

幾道は低い声で、

「僕がどうなつて行くのかを、姉さんは見て楽しんでるのです。違いますか」。

「何を言うのです。あなたのことを本当に思っているのです」。

私は体を支え直して、幾道の手を取り、

「あなたの手と私の手と比べてみなさい。私の指は太く、がさがさで、ひび割れています。私は女の仕事を一日も休むことがありません。国夫人とかいわれていても、私は精一杯のことをしているのです。そのような私が、あなたのことを見

て楽しんだりするものですか」。

「真実を幾道に告げていない。幾道が自由に振る舞ってくれているのが私にとつて救いになっている。

幾道は私の手を一瞥すると、それを振り払い、

「姉さんは立派です。でも、姉さんに歌妓や舞姫の苦しみがおわかりになるでしょうか。あの女たちは表向きは華やかな暮らしをしています。でも、最も恵まれない一生を余儀なくされているのです。だからこそ、僕は詞に歌いたいと思うのです」。

「歌妓や舞姫のことは私にはわかりません。あなたにはおわかりになるのですか」。
「わかろうと努めています」。

「わかったら詞に書いて、それで終わりですか。女たちの苦しみを取り除こうと

は考えないのですか。

「ですから、それはできないと言ったではありませんか」。

「あなたはやろうとしていないだけです」。

私にはわかに熱くなって来る。

「どうしたらいいのですか。気の毒な女を見たら、次々に私が引き取るのですか」。

「二人でも幸せにしようとやってみたらいいではないですか。一人だけではないいけないと思ったら、大勢の女たちが悲しい境涯に陥るのを防ごうと努めたらいいはないのですか。聞けば、近ごろは苦界に身を落とす者が以前よりも多くなっているとか。都や大きな町にはもとより大勢の官妓がいる上に、私娼も増える一方とか。それは、片方には遊ぶためのお金をたくさん持った人が大勢いて、片方には身を売らなければならない女が大勢いるということであるのでしょうか。その一方

を見れば世の中は繁栄し、もう一方を見れば世の中は悪くなっています。我が大宋の世はこれでいいのでしょうか。

——ああ、何を口走っているのだろう。

幾道は鋭い視線を向けて、

「大宋の世がよくないとしたらどうするのです」。

「もちろん正すのです」。

「どうやって正すのですか」。

「その方策を考え出すために学問があるのではありませんか。考えた策を実際に行うには朝廷にしかるべき地位を得なければなりません。そのために科挙を受けて官に就くという道があるのではありませんか。范仲淹はんちゆうえん様がなさったように」。

「姉さんは怒っているのですか」。

「ああ、御免なさい。あなたに対してではないのです」。

確かに私にはある種の怒りがある。これこそは元来最も大切なことだ。しかし、天下国家のことはもう言わぬとあのとときに決めた。自分のできないことを口で言うだけなのは、まさにずるいと評するしかない。まして、これは幾道に言うことではない。幾道だけは違っていい。

幾道は悲しげな顔になり、

「僕は心の底から残念に思います。姉上に女子状元になっていただきたかった。姉上ならばできるのでしよう。だって、父上だって、お義兄様だって、とりわけ立派な人であるのに、それで何をなさったというのですか。こう言つては不遜の極みではありませんけれど」。

「女子状元は幻です」。

「いつの日か黄河の水が澄むことがあっても女子状元は生まれません。それだつたら、僕にできるのは、せめて本物の詞を作ろうとすることだけです。それだつて僕にはできそうにないのです」。

幾道の顔にある決意が現れる。

私はそれに怯え、

「わかりました。もう言いません。あなたはあなたの好きにしてください」。

幾道は首を振り、

「姉さんだけはわかって下さるとずっと思っていました。だけど、僕と姉さんはもう今日までです。僕は知っています、互いに思いが深まれば傷付け合うよりないのです。姉さんとはこれでお別れです。さようなら」。

言葉の終わらないうちに幾道は走り出し、私の前から消える。

——待って。

私は言おうとして、声が出ない。

そのことをむしろ幸いであると思う。

——ああ、これはずる過ぎる。

私は亭の下に留まり、幾道は行ってしまおう。

第五の注の続きの続きの続きの続き。

越国長公主えつこくちやうこうしゅは先の皇帝（仁宗）の娘で、当時は兗国公主えんこくこうしゅと呼ばれていた。

これより七年前に、公主は李瑋りゐのもとに降嫁した。李用和りようわの二男で、李用和は仁宗の生母の弟だ。

仁宗は、生母が生きている間に母であるのを知らずにいたのを悲しみ、叔父の

李用和にはできる限りのことをしようとした。李用和を官員として重く用い、自分の娘と李用和の子を結婚させることで、皇室と李家との絆を強めようとし、莫大な支度金を付けて公主を李瑋のもとに嫁がせた。

結婚して三年ほど経ったある夜、公主は皇城の門を叩いて、すぐに父に逢わせしてくれと叫んだ。何事かと、皇帝が娘を内に入れると、公主は、もう我慢がならない、李瑋のところには決して戻らないと言った。翌朝、李瑋は血相を変えて登城し、我が身を罰して下さいと皇帝に陳謝した。

皇帝は外聞のよろしくないこの件を穩便にすませようとした。ある者が、李瑋に全面的に落ち度があるとして、他の罪状を引いて罰を与えようとした。一時代前ならそのようなことで一件落着であったのだろうが、そもそも冤罪というものはあつてはならぬと、李瑋を守ろうとする者がいた。その代表が司馬光しばこうだった。

李瑋に罪があるとする派とないとする派が争い、皇帝の思惑とは裏腹に公主の一件は世の注目を浴びてしまった。

李瑋があまりにも野卑で公主がそれに耐えられなかったと一方は言い、公主が皇帝の娘であることをもって威張り散らしたために李瑋とその母が耐えられなかったと一方は言った。公主は姑に苛められ一人苦痛に耐えかねていたところに、

宮中から宦官の梁懷吉が様子を見に来たので、初めて思いのほどを訴えることが

できたと一方は言い、公主は梁懷吉を宮中から呼び寄せ、これ見よがしに派手な酒宴を催したと一方は言った。公主と梁懷吉が話をしているときに、恥知らずにも姑がこつそり覗き見をしたと一方は言い、公主と梁懷吉はふしだらな行為に及び、それを目の当たりにして姑が驚いたのを、公主が殴ったと一方は言った。李瑋はもともと職務上に種々の落ち度があったと一方は言い、李瑋は模範的な官員

であると一方は言った。

皇帝は、父として娘の教育が不十分であったのがいけなかったので、全ての責任は自分にあるとして事の收拾を図った。公主を教え諭し、李瑋のもとに再び送り出した。梁懷吉は誤解を招くような行為があつたとして遠く流された。

これですめばよかつたのだが、何の罪もない梁懷吉を都に呼び戻すと、公主は皇帝に訴えた。皇帝は聞き入れなかつた。公主はあろうことか、自殺を図つた。家に火を付けたりした。これでは李瑋の家に置いておくわけにはいかないと、皇帝は二人を離縁させ、公主を宮中に引き取つた。亡き母を想う皇帝の心から始まつた婚姻は、こうしてまことに不幸な終わり方をしたのだった。

第七章 そうそう、こういうことなのですか？

息子に呼ばれる。

治平二じへい（一〇六五）年七月の朝。

あの日に絶縁を言い渡された打撃は、その直後よりもむしろ後になってより大きくなって行った。

紹庭じょうていの声に私は気付かず^しにいたようだ。

「母上、母上」。

大きな響きに立ち止まる。ようやく後ろからの声だと認識する。

「母上、どうかありませんでしたか。何度もお声をお掛けしましたのに」。

紹庭が前に回って来る。

「おやまあ、そうでしたか」。

「どこかお具合でもお悪いのではありませんか」。

——そうであるのかも知れない。

紹庭には目を向けずに、

「別に悪いところは何もありません」。

つぶやくように言う。

「だったらよろしいのですが」。

「ええ」。

いまに限らず、妙にぼんやりとしてしまうことがある。大概はほんのひと時で、いまも皇城に登る夫を見送って家の内に戻る途中の数歩ばかりの間のことだ。

以前に、心と体がそぐわない感覚にしばらく悩まされた。それに似て、それよ

りも厄介な感じがする。幾道と別れてから一年半、日常はほとんど変わらずに進んでいられるけれども、このぼんやりがまとわり付く。

「母上、お話したいことがあるのです」。

今度は息子の声ははっきりと聞こえているが、そのまま素通りしたい気分だ。

ぼんやりは困ったものであっても、それはそれなりに心地のよさもある。ぼんやりから抜け出ると、次には決まっておある一つの気分に襲われる。焦燥感と言ったらいいのだろう。そちらの方が性質が悪い。いままさに襲われる予感がして、息子の前から立ち去ってしまおうとする。

「どうかお待ち下さい。大切なお話なのです」。

紹庭はまた前に回って来る。

——それはいいから。

紹庭に初めて目を向ける。こちらは哀願するくらいの思いでいるのだが、息子は険しい表情で、

「母上、どうか聞いて下さい。大変なことになりました。信じられなくて」。

出発前に夫が紹庭を書院に呼び入れていたのを思い起こす。母としてこれは聞かなければなるまい。

「何かおっしゃっておられたのですか」。

「それが」。

と、紹庭は眉根を寄せ、

「私の聞き間違いだったらいのですが、でもはつきりとお父上のお言葉を伺ったのです。驚かないで下さい、お父上はお辞めになるとおっしゃいました。枢密院のお仕事をお辞めになって、都をお出になると」。

「そうでしたか」。

「母上は驚かれないのですか」。

「いえ、驚いています」。

とは言うものの、そういうこともあるうかと思う程度だ。

「で、この屋敷を引き払う用意をすぐにせよとの仰せでした。本当に急な仰せで、うろたえます」。

「ここ引き払って洛陽わかくやうに行かれるのですか」。

「そうではないようです。地方官として転出されるお心積りのようです。まだお上の御用を致さねばと思っておられるのでしょう。だったらどうしてお辞めになるのか、私には何だかわかりません。でも、お父上がそうお決めになったのですから、それはそれとして、私はお父上の言い付けを果たさなければなりません」。

この屋敷を引き払えと言われましても、何をどうしたらいいものやら。」

紹庭は思案顔をする。

「はあ、そうですね。」

紹庭は私をじっとのぞき込み、

「母上、やはりどこかお具合がよろしくないのですか。」

「いいえ、別にどこも。」

「でも、こう申しては何ですけれど、まるでお心がそこにならないような御様子なのですが。」

——ああ、その通りであるのだろう。

私は嘆息し、

「いいえ、ちゃんと聞いています。そなたは困っているのでしょう。それで、こ

の私にどうかしてほしいと、そういうことなのでしょう。

「私もこれですでに三十歳を超えておりますから、いつまでも母上に頼らずに、自分で何でもできなければいけないと思っはいます。父上もそのようなことをおっしゃっていました。でも、このようなことはこれまではいつも母上がなさっていましたので、それで私には経験というものがありません。どうにも困りまして」。

「経験ですか」。

「経験のないことを目の前にしたら、誰だつて困りますでしょう」。

私はにわかにはぼんやりから飛び出し、

「いま三十歳を超えたと言われましたが、あなたのお父様は、その年のころにはすでにお上の大切な御用をなさっておられました。新しいお役目を次々に仰せつ

かり、それはいつだって経験なしに致さねばならないものでした。それに比べて、たかがこの家のことくらい、そなたもできなくては」。

「そのように私も思っています。私も長男でありますから、この家のことくらいはできなければいけません。それはわかっているのです」。

「だったら、なさればいいではありませんか」。

「私だつてしようと考えてみています。いまやこれだけの大きな家ですから、あれやこれやといろいろなものがたくさんあります。人間も大勢います。経験のない私があわてて下手なこととして粗相があつてもいけません。それで思いましたのは、ここは当面はこのままにしておいて、取りあえず必要なものだけを携えて父上と私と何人かが地方の町に同行するというのはどうなのかなと。それならさほど難しいこともないでしょう。そういうことでどうなのでしょうか」。

「お父様はここを引き払うようおっしゃったのでしよう。」

「ええ、まあそうなのですけれど。でも、細かいことは何もおっしゃっていません。こここの始末と移動とを同時に行うよりは、無用な混乱を避けて、まずは移動の方を片付けようと。それなら、私も落ち着いて失敗なしにできるように思うのです。」

「面倒なことは脇に置いて楽をしようという魂胆ですか。」

「違います。楽をしたいのではなくて、慎重を期したいと思うだけです。それに、ひよっとしたら、この先お父上がすぐにまた都にお戻りになるようなことだってあるかもわかりませんでしょう。だって、お父上ほどの人が地方の町にいていいはずがありませんから。そのときに、改めてまたこれだけの屋敷を整えるのは大変でしょう。だったら、ここは例えば弟の誰かに守らせておくというのもあり得

るものではありませんか」。

「そのときはそのときでよいではありませんか、いまからいろいろ考えなくても」。

「何であれあらかじめよく考えておくのは大事でありましょう。お父上に御不自由をかけないようにと、それを第一に考えておきたいと思います。お父上は御病氣です。それでお辞めになるのだと思います。家の些細なことで御不自由をおかけしてはいけません。息子としてそのようなことはできません」。

「わかりました。結構なお考えです。どうぞそなたの思うようにやりなさい」。

私は歩きかける。

紹庭はあわてて、

「もしかして、母上は御立腹でしょうか」。

「いいえ。そなたがお父様に任されたのです。その邪魔をしないようにと思うだ

けです」。

「すみません、どうかお待ち下さい。いま申したことは全て取り消します。どうか教えて下さい。正直に申します。私にはできそうにないです。全くわからないのです。母上のおっしゃる通りに致します」。

「わからないはずがないでしょう。全てお教えしてありますから」。

紹庭はきよとんとした顔で、

「このようなきにどうしたらいいのか、教わった記憶はありませんが」。

私は小さく笑い、

「そなたは何ですか、あれはこうするものだ、これはああするものだ、一から十まで全て教えてもらわないと何もできないのですか」。

「いえ、一から十ということでもないのですが、私はこれまでどちらかというと

学問ばかりを教わって参りましたものですから、こういったことはわかりかねるのです」。

「ではお尋ねします。学問は一体何のためにあると思っておいでなのですか。科挙に合格するために何でもかんでも覚えるのが学問だと思っているではありませんか」。

「いいえ、そのようには思っていないません」。

「では、学問とは何なのですか。そなたの考えを言ってみなさい」。

かつて陳堯咨ちんぎょうしの母であろうとしたころに戻ったかのように問う。

紹庭は少し考え、

「学問というのは、つまり、人を鍛えるためのものだと思います。学問をする」とで人は己を君子に近付けて行くことができます。君子になれば、事に臨んで理

非を正しく判断し、己の信じることを決然と行えるようになります」。

「立派なお答えでしょう」。

「しかし、この屋敷を始末するような下世話なことに、学問が役立つのでしょうか」。

「ほう、下世話ですか。下世話なことなんぞは女である私とか、孔六こうとかにやらせておけばいいと、そういうお考えなのですか」。

「いいえ、そういうつもりで申したわけではありません」。

「そなたに聞きます。河北の洪水で大勢の流民が生じたときにお父様はたくさんの人々を救いました。後から後から押し寄せて来る流民に居場所を与え、食べ物を与え、着る物を与える。そのどれもが要するに下世話な事ばかりだったのでありませんか。民衆を救う仕事とは元来下世話なものでしょう。民衆というもの

は要するに下世話な暮らしをしているのですから。そこに目を向けることこそがお上に仕える人間のすることなのではありませんか。そのために学問があるのでありませんか」。

いつの間にか、ぼんやりどころか、私は熱を帯びている。そのことに自分で気付くと、次の瞬間に足元からすっと冷気が上って来る。

——ああ、何を言っているのだろう。

同じことの繰り返しだ。

——いつも言うだけ。

朝廷でいま何がなされているのか。いま言ったのとはまるで逆のことばかりのようだ。それに対する思いがないわけではない。しかし、口先だけで言って何になるのか。夫は夫で苦勞し、朝廷での居場所を失い、辞める決意をしたのだろう。

ここで息子を相手に息巻くのは、要するにずるいと言われても仕方がない。

紹庭は逆に開き直ったのか、

「そのように言われればその通りだと思います。ですが、こう言つては何ですけれど、お父上も下世話なことは苦手なわけではありませんか。洪水のときに確かにお父上は立派なお仕事をされて、お上からお褒めのお言葉も頂戴しましたけれど、最初は手が付けようがなくて困つておられたではないですか。蓮妙先生れんみょうに教えていただき、それが元となってよい方法が考えられたのではなかったでしょうか。家のことだつて母上に任せっ切りではありませんか。父上でさえなさったことがないのに、この私が初めてで少々とまどつたくらいで、学問とは何かというのま
で持ち出されてお小言を頂戴するというのは何だかおかしくはありませんでし
うか」。

「まあ、よくも好きなことを言い放ったものです」。

「いえ、申し訳ありません。やはり私がいけないのです。勘弁して下さい」。

「この母にいつまでも甘えないで下さい。私だってもう五十を過ぎて、いつまでも皆の面倒をみているわけにはいけませんから」。

「お父上は六十を超えて、お国のことになお身を捧げようとなさっています。母上にもまだまだ頑張っていただきませんと」。

私は話をしているのが億劫になり、

「いつまでこうやっついていても埒が明きません。この屋敷をすぐにも引き払わなければいけないでしょう。そなた一人に任せたらどうなるかわかったものではありません。仕方ありません、大まかなところは手伝って差し上げます。孔六を呼んで段取りを相談しましょう。次からはお一人でするのですよ。わかりましたか」。

「はい、仰せのままにいたします。」

紹庭はほっとした顔で微笑む。

こうした日々を私は送って行くよりないのであろう。

第七の注。

枢密使として英宗皇帝に召されて以来、富弼は大切な仕事を何一つできずにいた。

朝廷の最大の懸案である皇帝と皇太后の不和に決着を付けたのは宰相の韓琦かんきだった。英宗を皇太子に立てた功績のある韓琦は、それが自信のもとになっていたのだろう、時機を見てかなり強引に事を進めた。群臣を引き連れて皇太后の前に出ると、大政を皇帝に還すよう強い調子で迫った。韓琦が言うのは正論で、その

勢いに押されて皇太后は大筋において同意した。群臣が下がり、韓琦は一人残って還政の具体的な段取りについて皇太后に尋ねた。次々に畳み掛けて来る韓琦に皇太后はたじたじとなり、韓琦が提示する一つ一つの手順に対してその通りでよいと返事する以外になかった。最後に、御簾を撤みすするのはいつであるかと韓琦は尋ねた。皇太后や皇后が政治をみるとときには臣下に直接顔をさらすのを避けて間に御簾が下げられる。それで皇太后や皇后による政治を垂簾聴政すいれんちゆうせいという。皇太后はうんざりし、最後の問いには答えずに席を立った。韓琦は大声で、御簾を落とせと命じた。床に御簾が落ちたとき、皇太后の衣の裾がまだ見えていた。垂簾聴政はこの瞬間に終了となった。

この件を、富弼ははなはだ不快に感じた。かつて范仲淹はんちゆうえんは劉皇太后に還政を強く求めながらも、皇太后を敬う姿勢を最後まで貫いた。范仲淹が示した規範と明

らかに異なることを韓琦がしたのを、富弼は許容できなかつた。このときから韓琦と富弼の不仲説が囁かれ、韓琦はそれを否定したが、富弼は韓琦に対して冷淡な態度を取った。

英宗皇帝が直接に政治をみるようになり、手始めに重臣に向かつて、「我が朝には積弊がはなはだ多く、いかに裁救したらよからうか」と尋ねた。宰相、執政はそれぞれに思うところを述べ、富弼は、改めるべきことがあればじっくりと少しずつ改めるべきとの主旨の返答をした。かつての改革が急ぎ過ぎたために頓挫した反省からこのように述べたのだが、富弼の姿勢は消極的であると受け止められた。

このとき朝廷には、富弼、韓琦、おうようしゅう歐陽脩等のかつての改革派が顔を揃え、新たにしばこう司馬光等の若い世代も加わって、国政刷新の絶好機と見られていた。ところが、

幾つかの不運な要因が重なって改革は着手されなかった。

一つは富弼の態度で、消極的と見られたのと、韓琦との不仲説も加わって、重臣が一体となって改革に取り組むという機運が生まれて来なかった。もう一つは皇帝の資質だ。皇帝はもともと皇位に就くことすら逃げ腰で、国政の改革に断固取り組むとの意欲は初めから持ち合せていなかった。自分の心情を理解してくれるような側近に皇帝は重い役を与え、そのため朝廷の足並みは余計に乱れた。さらに、思いもよらぬことが、改革を遙か彼方に吹き飛ばしてしまった。それを濮議ぼくぎという。

皇帝は先帝の従兄弟である濮安懿王ぼくあんいおうの子だ。旧い中国では先祖を祀るのは極めて重要なことであり、皇帝は民に範を垂るべき存在であるから、皇帝として実父の濮安懿王をどのように祀るのかということは極めて重大であると当時の人々は

考えた。一つの考えとしては、皇帝は先帝に選ばれて皇太子になったときに先帝の子になったのだから、皇帝が父として祀るのは先帝だけで、濮安懿王は別の仕方ではいけないとするものだ。もう一つは、実父を父として祀れないのはおかしいではないかとするものだ。煎じ詰めると、皇帝は実父を父と呼んでいいのか、それとも別の呼称を用いなければいけないのかということ、どちらであってもよさそうではあるのだが、二つに一つの議論となると、自説を主張して断じて曲げないのが当時の士大夫気質だ。すこぶる頭脳明晰の士大夫は、自説を補強する理屈をいくらでも作り出すことができた。対立は先鋭化し、それを終結させる有効な手段はなく、議論は果てしなく続いた。

このとき韓琦は議論の渦の中心にいて一方の主張を代表し、もう一方を代表したのが司馬光だったので、議論は宰執と若手官僚の対立という様相を呈するよう

になった。富弼は議論に加わらなかつた。そのために富弼は一人浮いた存在となつた。

富弼の足の病は杖なしでは歩けないまでに悪化し、それを理由に朝廷を去ることを申し出た。誰も引き留める者はおらず、洛陽に近い黄河北岸の町の河陽かように転出した。かつて范仲淹は病を押して地方の任地を転々とし、移動中に死んだ。富弼はそれを手本とし、官界に残つてなお一身を役立てようとし、河陽に来てからは実地に民情を見て回ることに務めた。富が集中してともすると奢侈に傾くまでになった都にいたのでは見えないことが地方には多々あつた。最も大きな変化は、かつてはどの農村にも大勢いた自営農家がいつしか稀な存在になつてしまつたことだつた。

それには西辺の事情が絡んでいた。夏国と宋国との間には一応の和平が成立し、

元凶であった李元昊りげんこうが死んで息子の代になり、緊張はかなりの程度は緩和された。それでも夏国は時折不規則的な動き見せ、西辺に多数の兵士を貼り付けておかなければならなかった。人民の負担は重いまままで固定化され、一時のことならどうにか耐えられても、長くなるとそうはいかない。苦しくなった農民は、お上の厳しい取り立てに、急場しのぎで錢を借りる。返済は収穫時で、利息は一年で二倍にも二倍にもなるのが普通で、借錢に手を出せば早晚破綻は免れない。農民は土地を手放し、大地主の小作人に転落するか、生きる場を求めて都市に流れて行くかする。富裕層はより富裕に、貧困層はより貧困になって行く状況が地方では如実に現れ出ていた。

濮議による混乱は一年ほど続いた。若手は重鎮を突き上げ、それに耐えられずに朝廷を去る大臣が続出した。逆に、力づくで若手を都の外に追い出そうとする

大臣もいた。病気で死ぬ間際に至っても自説を主張してやまないという執念の者もいた。皆が疲労困憊したところで、どうにかこうにか落としどころを見つけて濮議は終った。

息子に呼ばれる。

治平三（一〇六六）年五月。

書院に来てくれというので、嫁達に指示を残して厨を出る。嫁はすでに三人になった。一人ひとりに細かく言ったのは、我ながらうるさ過ぎたかと思う。というのも、呼ばれたとき、竈の前で例のぼんやりの中にあつて、嫁達に促されてやつと気づき、何ともばつの悪い思いから、つい小言めいたことを並べてしまったからだ。

とはいえ、嫁達はどう思っていたか知らないが、宰相も務めたような大官の屋敷に来れば、細々したことは使用人にやらせればいいということにはこの家では決してならない。自分の手で何でもやってもらおう。それができないようなら、この先ろくなことにならない。私はそうして来たし、かの陳堯咨ちんぎょうしの母は嫁に対しても厳しかった。

陳堯咨の兄がある大官の娘を娶ったとき、その大官は皇城で娘の舅の姿を見かけると急いで歩み寄り、娘は厨の仕事には慣れていないのでどうか大目に見てほしいと囁いた。大官は、姑がはなはだ嚴格であると聞いていたから娘のために手加減を頼んだのだ。舅は微笑み、「御安心召されよ。お嬢様はまだ厨には降りておられぬようなので、早速愚妻に言い付けて、何事も易々とできるよう今日からお導きいたしましょう」と答えた。

書院に行くと、紹庭と弟が額を突き合わせて思案顔だ。

二人はさつと立ち上がり、私を奥の椅子へと導く。そこはいつも夫が座っている席だ。夫と三男はいま官署に行っている。夫に遠慮してごく浅く座る。

「お食事の支度をしておりましたのに、何事でしょうか」。

紹庭は腰掛けながら、

「再三申し上げておりますように、そのようなことは、どうかすつかり嫁達に任せてしまって下さい。三人もいて、手は十分にあるのですから」。

「ええ、わかっています。三人とも十分にしっかりしていますから、もう任せて何の心配もいららないと思っています。ただ、そうしたのでは、この私のすることがなくなってしまうです」。

私は小さく笑う。

それは本心であり、逃げ口上でもある。

「お食事の仕度以外にも、他にいくらでもなさることがありますでしょう」。

「何を言われます。食事は生きる上で大切です。疎かにできません。お父様のお体のためにも」。

少々気色ばむのは、これも本心であり、逃げ口上でもある。

河陽に移ったのを機に、夫の食事を改めた。地位が上がるにつれ、夫は義母ははの好みに合わせて、食事がいささか贅沢になった。宰相になってからは、特に肉や魚をふんだんに食するようになった。そのころから私は使用人と同じような日常を送ることを心がけ、父の家ではそうであったように、自分の食事は質素なものにした。その方が身体によいとの実感があり、河陽に来て夫にも勧めた。

「お父上の足は前ほどには痛まない御様子で、お食事の大切さは重々承知してお

ります。そのあたりのことも嫁達も随分とわかっておりますから、何も毎日毎日厨にお立ちにならずともいいように思うのです」。

「何かい、それを言いたくて、ここに呼んだのですか」。

むっとして怒ったように言ったのだが、腹を立てたのは息子に対してというよりはむしろ自分に対してだ。いつまでもぼんやりが残り、焦燥感も消えていない。

厨に立つことを除いたら私に何があるのか。我が為すべきことが食事の一事だと真に考えているのなら他に何もなくていいはずだ。そうではないと思いつつそこにしがみついているしかないのなら、そもそも食事の一事にどれほどの心を込めているといえるのか。

紹庭は頭を下げ、

「つい言わずもがなのことを申してしまいました。母上にお越しいただいたのは

そのようなことではありませんで、お父上がお帰りになる前に、一つ大事なことを教えていただけないかと思つてのことです。実は、今朝、お父上に叱られてしまいました」。

紹庭はばつの悪そうな顔をして弟と互いに見合わせる。

私もいささかばつの悪い思いがあり、

「そういえば、お出掛けのときに何かあつたようでしたけれど、どうなつたのですか」。

「かなりの御立腹です。滅多にないことなので、私どもも驚きまして」。

「何だったのですか」。

紹庭は一つの冊子を私の前に押し出し、

「事の起こりはこれです」。

弟ももう一つの冊子を押し出し、

「これらをきちんと読んでいないのがお父上にわかってしまいました。突然のことだったものですから。あらかじめわかっていたら対処の法もあつたのですけれど」。

冊子を手にとると、一つは范仲淹の、もう一つが王安石の「万言書」だ。

「これを読んでいなかったのですか、二人とも」。

「いえ、そうではなくて、私も弟も読んではいたのです。ただ、お父上に急に問われて即答できるほどには十分に理解していなかったというだけのことなのです。ちよつと答えに詰まったら、何も読んでいないかのようにお父上には受け止められてしまいました、どうにも困ったことになってしまいました」。

「理解していなかったのなら、読んでいないのと同じではありませんか。どうせ

いつものように文字面をざっと眺めただけで、読んだ気になっていたのでしょうか。

「いつものようにということはないのですけれど」。

「それでお父様に何を訊かれたのですか」。

「二つの方言書のどちらが優れているかと」。

「随分と大雑把な問い掛けですこと」。

二男は顔を上げ、

「母上もそう思われますでしょう。どちらであるかとお父上がお尋ねになるのなら、答えはもちろん師の方であるに違いありませんでしょう。それで僕はすぐ答えようとしたのです。そしたら兄上が袖を引いたものですから、僕は口を閉じたのです」。

夫は息子達にも范仲淹を師と呼ばせている。

紹庭は、

「それでは単純過ぎます。わざわざどちらが優れているかとお尋ねになるからには、何か深いお考えがあるはずでしょう。単純に師の方だと言ったのではまずいのではないかとすぐに思ったのです。それに、答えれば、なぜそうなのかとお父上はお尋ねになるに決まっています。そうなってから返事に窮するよりも、しばらく思案した上で、お父上御自身のお考えをお尋ねするような具合に話を持って行ったらよかろうと思ひまして、弟を止めたのです」。

「まあ、知恵を働かせましたこと。でもかえって駄目だったのでしよう」。

「そうなのです。私はしばらく考えるふりをしまして、『どちらも優れていて、書かれた時期も違いますから、優劣は付け難いと思います』と答えました」。

「それはつまりは、何の答えもしなかったということでしょう」。

「お父上もそのようにお感じになつたらしくて、怖い顔で『どういう意味だ』と、とおっしゃいました。それで何も言えなくなつてしまったのです。お父上に睨まれると身も心も縮んでしまいます。お父上はもう大変な劍幕で、『帰つて来るまでによく読んでおけ』と。まあそのようなわけなのです」。

「自分の考えがはつきりしないのをお父様が何よりもお嫌いになるのを、いまだにわかつていなかつたのですか。困つたものです。それで、急遽一人してこれを読んでいたのですか」。

「朝から何度も読みました。でもよくわからないのです。今朝のあの劍幕を思いますと、よほど上手に答えないといけないと思つたのです。それで、もしかしたら、母上ならおわかりになるところがあるのではと」。

「叱られずにすむ答え方を教えてくれというのですか」。

二男は、

「まあ、有り体に言ってしまうえば、そのようなところでしようか」。

「呆れました。それだから二人とも叱られてしまうのです。いま言ったばかりではありませんか。自分の考えがはっきりしないのをお嫌いになると。お父様の前で上手に答えられたらいいと、二人揃ってそういう考えなのですか。そういうことならこの私だって叱り付けます」。

二人は首をすくめる。

私は冊子を繰ってひと通り眺め、

「二人とも何を感じたのですか。まず、それからお尋ねしましょう。何でもいから言ってみなさい」。

「もちろんいろいろなことを感じました。例えば、どちらが優れているかという

ことで言えば、全体の印象としては、王安石様の方が、何と云いますか勢いがあつて、明快なような気がしました」。

二男も、

「王安石様は大した文章家だと思ひます。畳み込むようにして、ぐいぐい迫つて来ます」。

「でも、文章に対するこのような印象を申しただけでは、お父上はきつとよしとはおつしやらないと思つたのです」。

「まだそのように。お父様がよしと言つてくれるような答え方を私に教えてもらいたいと思つているのなら、もう話をしません」。

紹庭をあわてて、

「違います。母上に教わつてそのまま父上にお答えしようというのではありませ

ん。何といいますが、私が思いますのに、父上がどうしてこの二つの『万言書』をいま気に掛けておられるのか、そこがたぶん重要であるのでしよう。今朝になって急にお尋ねになったのはなぜなのか。そのあたりのことになりますと、やはり母上の方がよりおわかりになるのではないかと思うのです。母上は師ともお会いになったことがありますし」。

「あれこれ取って付けたようなことを言うのはおよしなさい。とにかく、二人ともこの二つの『万言書』を読んだのでしよう。それで何かしら考えたことはないのですか。それをそのままお父様に申し上げればいいではありませんか。お父様のお心を探ってそれに合うよう答えようなどとせず、たとえお父様とは違っていても、自分の考えをぶつけてみようと、という気はないのですか」。

紹庭は、

「それは無理でしょう」。

「どうしてですか」。

「だってお父上はいつだって、こうあるべきだとお考えを大変厳しくおっしゃいます。お父上がおっしゃることはいつだって正しいのですから、従わないということはありません」。

弟も、

「そうです、そうです。母上だってそれはよくわかっているではありませんか」。
「それに、お父上は宰相までお務めになった遥か雲の上の御立派なお方でありま
すし」

二人の言い草に苦笑しつつ、

「それはまあそうであるのかも知れませんが、お父様がいつも正しいことを

おっしゃるからといって、自分の考えを持つのを忘れてはいけません」。

「その通りだとは思いますが。でも、正直言って、私達はそれが不得手のようです。

たぶんお父上が立派過ぎるので、私達は少々萎縮してしまっているのだと思います」。

紹庭が言うのに二男も大きくうなずく。

「呆れました。自分の不出来をお父様のせいにするのですか」。

「いえ、そういうつもりで言ったのではないのです。母上も私達をあまり苛めないで下さい。お父上に叱られて、二人でしよげ返っているのですから」。

二人が大袈裟にうなだれるのを見て、私は嘆息し、

「仕方ありません。あなたたちのために、答え方を考えてみましょうか」。

「本当ですか。どうかお願いします」。

二人は揃って顔を上げる。

——これではいつまでも陳堯咨の母。やはりそれしかないということなのか。

「あなたたちもちやんと知恵を絞り出しなさい。いいですか」。

「はい。努力します」。

「それで、お父様は二つの『万言書』のどちらが優れているかとお尋ねになったのでしょうか。ここはまず初めに、二つの『万言書』に共通するのは何であるかと、考えてみたらどうなのでしょうか」。

「それなら難しくありません。国政の改革への強い意欲でしょう。二つともそれが文章に滲み出ています。心に強く響きました」。

二男が即答する。

「お父様が二つの『万言書』をいま気に掛けておられるのは、まさにそれだから

なのではありませんか」。

「とすると、お父上は改革への意欲を持っておられるということなのですか」。

と、紹庭。

「改革の要は何であると書いてありましたか。一言で言い表せませんか」。

紹庭は自信なげに、

「一言でとなりますと、もしかして人でありましょうか」。

「いい答えです。国を駄目にするのも人、国をよくするのも人です。どのような人をどのように用いるのか、二つの『万言書』ともそれを一番の要としているのではありませんか」。

二つの『万言書』の詳細を私は記憶していない。かつて読んだ印象が強く残っているだけだ。師と仰ぐ范仲淹は当然としても、王安石にも夫が志向するのと通

底するところがあるようだ。

「そうだと思います」。

「では、この共通点で見比べて、二つのどちらが優れているでしょうか」。

紹庭は、

「文章の巧拙は若干あるとしても、意欲の強さは同じでありましょう。人については、お父上は、日頃から、小人に政治を任せてはならない、君子が政治に当たる世でなければならぬと、おっしゃっておられます。師もそのようにおっしゃっていました。それでいくと、師の『万言書』の方が優れているとお父上はお考えであると思います」。

「御自分の考えをお言いなさい」。

「いえ、私が自分でそう思います。師は、士大夫はいかにあるべきかを御自身の

生き方で示されました。士大夫は最高度に優れた人間であるべきだというのが師の掲げた理念であったと思います。王安石様はそれとは異なるようです。政治に必要な知識や技量を持ち合せた人間が国をよりよくして行くという考えだと思えます。それも一理あるようではありますが、必ずしも人間として優れていなくてもよろしくて、極端に言えば、知識と技量があれば小人でも構わないということになってしまいかねません。それはよい考えとはいえませんがしょう」。

「そなたもそう思いますか」。

二男に尋ねる。

「僕が思いますに、濮議はまことに残念な出来事でありました。君子と小人に分けて、君子の側に入るとお父上が日頃からお認めになっていた方々が揃って濮議に熱中されました。泥沼状態の議論に国政は停滞しました。それを見ますと、師

が思い描いた君子による政治は、現実のものとしてはなかなかうまくいかないところもあるということにはならないでしょうか。とんでもない考えなのかも知れませんが。

「そういう疑問を持ったそなたに尋ねます。かつてお父様は范仲淹様とともに改革に取り組まれました。しかし、すぐに頓挫してしまいました。どうしてそうなってしまったのでしょうか。」

「朋党批判ほうとうのせいでしょう。」

「朋党批判はいわば外側の原因。内側にもっと大きなものがあつたように思います。わかりますか。」

「僕がいま言ったように、優れた人、君子がいるだけでは足りない何かがあるということでしょうか。」

紹庭は、

「もしかしたら、それは、つまり、母上がよくおっしゃる下世話なことをする仕組みが用意されていなかったということでしょうか」。

「たぶん、いま振り返るとそのようなことであったと言えると思うのですが、当時はわかっていませんでした。そのようなことも思い合わせつつ、お父様は二つの『万言書』を読み返しておられるのではないのでしょうか。これでもうおわかりでしょう」。

二人は口を揃えて、

「優れているのは王安石様の方でしょうか」。

ここに至って、息子達を教え諭しているような自分自身の口調に嫌気がさし、

「これ以上は言いません。もっとよく二つの『万言書』を読んで、お父様に御自

分の考えをぶつけてみる事です」。

話を切り上げようとする。

——どうしていつもこうなるのか。

家の内にいるだけの身であるのに、このようにものを言ってしまう。

二つの冊子を息子達の方に押し出すと、二男が、

「いっそ母上が朝廷におられたらいいのに」。

「馬鹿なことを言ってはなりません」。

あどときに幾道に向かって世の中を変えるよう努めたらどうかと言った。幾道は、それは自分のできるのではなく、すべきことでもないと深く認識しているからこそ、人の謗りを受けても詞に打ち込んでいるのだろう。

——この私は何をしているのか。

それを探し求め、しかし、手近なところを逃げ場にして安住しているだけだ。

私が立とうすると、紹庭は、

「お父上は、都に戻ってもう一度改革に挑みたいと思っておられるのでしょうか。」

二男は、

「王安石様とともにお父上がなさるといふのはあり得るのでしょうか。王安石様はどのようなお方だと思われれます。」

浮かしかけた腰を戻し、

「二つ思い出したことがあります。この機会に話しておきましょう。もう二十年以上も前になりましたようか、王安石様が科擧に合格された直後のことです。あなた方のお祖父様じいさまが王安石様にお会いになり、ある言葉を贈られました。」

我が父あんしゅ晏殊の『能く物いに容るるは、物また容らるる』について話す。私はこれを

父からではなく幾道から聞いた。

「いま思いますに、この言葉は王安石様お一人ではなく、多くの人に聞いてもらいたい気がします。特に濮議に熱中された方々に」。

「濮議は残念なことでありましたから。それを思うと、成程、深い意味があるお言葉です」。

「そなたたちは、もしかすると、お祖父様は西園に人を招いて遊んでばかりいた人だったと思っっているではありませんか。あの遊宴も実は大切なことであつたのでしょうか。朝廷において互いに鋭く意見を闘わせ合つても、遊宴の場では心を通わせ合うということを実践されていたのでしょうか。それこそ『能く物に容るは、物また容らるる』です。王安石様がもしもこの言葉を覚えておられるのなら、世の中はよい方向に変わって行くことでしょう」。

今度こそはと立ち上がり、

「もうこれでいいでしょう。私が申したことにとらわれず、御自分でよく考えて、お父様とお話しなさい」。

二人がまだ何か言うのをもう耳には入れずに書院を後にする。

また同じことをしてしまつたと、後味はよいものではないにしても、息子達に言うべきことは言い終えたようでもある。

厨に戻ると、嫁達がさつと立ち上がる。すぐに私の目は嫁達がどれだけのことをしたかを見て取り、不足を口にしかけ、ぞつとする。

——能く物に容るは、物また容らるる。

「ここはもうあなた方に任せます。三人で仲良くおやりなさい」。

そう言い置いて、咄然とする三人を後に厨を出る。

——ここを逃げ場にはもうしない。

嫁も娘も、言うまでもなく、女の徳に従っている。そうしなければ生きる場がなく、私もまた皆にそうするよう教えた。蓮妙先生は最後のころに「異なる道」ということを言った。私がそちらを選ばなかったと先生は謝っていた。私もまた、嫁にも娘にも誰にも「異なる道」を選ばせようとはしなかった。そもそも「異なる道」があるのかわからない。

庭の片隅に立ち、西園からの日々を様々に思い起こす。

女子状元の夢に限らず全てが幻のようだ。あれから遙か遠くに来てしまったのか、それともどこにも行けなかったのか。

逃げ場を閉ざし、これから何をしたらいいのだろうか。探し求めるだけの時間がまだあるのだろうか。あるいは「異なる道」など初めからどこにもないのだから

うか。

第七の注の続き。

濮議ぼくぎが終了して間もなく、英宗皇帝は病気になり、半年余りで死んだ。在位は四年に満たなかった。皇太子になるのも、皇帝になるのも嫌がった英宗は、実父に関わる論争に神経を擦り減らしてしまったのか。

新たに皇帝になったのは子の趙頊ちやうぎよく（神宗しんせう）だった。このとき二十歳。決断力に富み、父皇帝が着手すらできなかった改革を必ず実行するとの強い意志を持って皇位に就いた。

新皇帝は、濮議論争で国政を空転させた重臣連中に不信の念を抱き、それと無関係であった王安石おうあんせきを用いようと考えた。皇帝は国政の現状について広く人々に

意見を求め、その一環として王安石を都に呼んだ。皇帝は王安石と熱心に語り、改革への意欲をさらに燃やした。その様子が韓琦等かんきは王安石批判を始めた。皇帝は重臣連中は全く力にならないと受け止めた。

富弼は河陽から一つの意見書を提出した。新皇帝に期待するとともに、まだ若いだけに軽々に事を起してしまうのを恐れ、小人を退け君子を用いるようにといういつも通りの主張を記した。

皇帝は富弼の意見書を読むと、韓琦と不仲が噂された富弼が重臣を抑えて、中央政界での実績に不足する王安石の助けになるかも知れないと考えた。熙寧元きねい年（一〇六八）年四月、皇帝は富弼の任地を汝州じょに移し、その辞令を受け取らせるために上京させた。皇帝は富弼の病を慮つて輿に乗ったままを宮中に入るのを許した。

富弼は長男の紹庭の手を借りて皇帝の前に進み出た。皇帝は日が傾くまで富弼と

話し続けた。富弼は、即位の初めは何事も慎重にすべきだという主旨のことを言った。皇帝は辺事について尋ねた。このころ夏国かには心配な動きがあり、何事も積極的な皇帝には夏国に対して強く出ようとの心があった。富弼は、即位の初めは国内に恩沢を布くのが先で、願うことなら二十年は戦争を口にしないようにと言った。皇帝は王安石について尋ねた。富弼はその見識の高さを讃えた。皇帝は富弼を都に留めようとしたが、富弼は辞令に忠実に従い汝州に向かった。

皇帝は熟慮の末に改革に踏み切った。十二月に富弼を都に呼び、翌年の二月に宰相に据え、その下で王安石に存分に腕を揮わせようとした。王安石は改革を實施するための新たな法を作成し、法案を審査する機関を設けて不備がないかを検討させた。かつての改革とはまるで違う緻密な進め方だった。

法案を多数の目にさらして修正すべき点を修正するというのは非常に優れたや

り方であった。しかし、異なる意見が出たときにいかに收拾するか、の仕組みがないという欠陥がここでまた露呈した。新法批判の声が一度湧き上がると、議論が議論を呼んで、一気に沸騰して王安石に対する全面批判へと発展した。

このようなときに上手に裁くのが宰相の富弼の役回りであった。富弼は前回の失敗の教訓に縛られ、何よりも慎重さが求められると考えていた。若い皇帝が暴走して取り返しが付かない事態になってしまわないよう、天を畏るべきことを皇帝に説いた。皇帝は地上の最高権力者である。天をも恐れぬ皇帝は人民を虐使しかねない。皇帝は、富弼も改革に後ろ向きであると、はなはだ失望した。

夫に呼ばれる。

熙寧二（一〇六九）年十月の早朝。

夫がいつもより随分と早く、まだ真夜中のうちに登城の支度を終えて書院に籠ったのを見て、今朝は何かあると感じてはいた。このようなとき、夫は誰かを呼ぶであろうが、それはきつと紹庭であろうと思っていた。だから、孔六が来て、すぐに書院にと言われて少なからず動揺し、糸車を回す手の動きが狂って紡ぎつづつあった糸が絡んでしまった。

——何かを言わなければならなくなるのか。

私は恐れ、仕事を続けていたいと思った。

糸を紡ぐ仕事でも、布を織る仕事でも、縫う仕事でも、一つ一つの仕事に無心で取り組むということに、いままで探していた答えを見出せるような気によりやくなりつつある。いわゆる女の仕事のひと通りを蓮妙先生に教わったのは遠い昔だ。そこにこそ実は最も深いものがありそうだと思いはじめている。女の仕事は嫁

に来てからずっと行い続け来たことであるし、そこに喜びを見出そうと努めても来た。しかし、そこには課せられた労苦を果たそうとするような思いがあり、成し遂げようとする行為を通して自分が変わっていくことを期待した。そうではなくて、仕事そのものに奥深いものがありそうだと、いまようやく気づき始めたばかりだ。もしかするとその奥行きの中に「異なる道」があるのかも知れない。

とはいえ、夫に呼ばれただけで乱れてしまうようでは、無心とは程遠く、まだ何もわかっていないのだろう。それに、自分一人の満足であつてはいけないとの思いが依然として強くある。だから、夫に呼ばれて何かを言うようになったならば、またいつものようにものを言ってしまうのを早くも恐れる。それこそが実は言うだけで終わってしまう自分一人の満足でしかないのだ。

書院の口に立つと、夫は奥に座している。一本の細い灯が揺れている。

「どうぞそこに座って下さい」。

夫は顔を上げずに言う。私は静かに会釈し、灯の脇の椅子に腰掛ける。

夫はそのまま皇帝の前に出てもいい立派な服を着ている。斜めに射す弱い光のせいなのだろう、顔の陰影が際立ち、ことさらに病み疲れているように見える。

夫は病を理由に秋の間はひと月ほど家に籠っていた。ここ何日かは皇城に登るようにはなったものの、やはり病を理由に宰相の部屋に居て、政務を見ることもお上のお召しに応じることもないという。

夫もすでに六十六歳。持病を抱え衰えは隠せない。夫の身を思えば、すでに潮時であろう。天下を思えば、また別なのだろうが、それは私の言うべきことではない。

夫は静かに話し始める。

「いまここで、我が身を省みて、しきりにあなたのお父上を想っていました。お父上が亡くなって十五年、お父上に申し上げることができませんので、あなたに来ていただきました。今さら悔やみ、言葉を尽しても、遅すぎます。あなたをお父上と思つて、このように頭を下げます」。

夫はゆつくりと、冠を載せた頭を深く下げる。

予想外のその行為を、身じろぎもせずを受け止める。夫は我が父にと言つた。だから、我が父になろうとする。

上体を起こすと、

「かつてお上の御前で大変な非礼を働きました。そのときのお父上の深謀遠慮がいまようやくわかつて参りました。お父上には到底及ばぬこの身を恥じます。お父上はまことに度量の大きなお方でした。この私ではなくて、いまこそお父上が

宰相でいらしたならばと考えずにはいられません。お父上ならいまどのようになさるでしょうか。あなたの思われるところをお聞かせいただけませんか。あなたをお父上とってお伺いします」。

「この私でよろしいのでしょうか」。

「お父上に最も近いのがあなたです」。

私が私自身であるのならここは避けたい。しかし、父であるのなら言うことがある。今後はいかなることがあってももう言うまいとの決意をしてから、

「父であるならば、王安石様に『能く物に容るるは、物また容らるる』の言葉を再び贈り、そして同じ言葉を他の皆様にも贈るでありますよう」。

「それはお父上のお言葉でありますようか」。

夫に話すのはこれが初めて。幾道から聞いたことは伏せておく。

夫は深く嘆息し、

「あたかも今日かくあることを予見しておられたかのようです。濮議に続いてこの新法論争。議論ばかりが先鋭化して留まるところを知りません。お父上のお言葉を聞くのが遅過ぎました。いや、以前に聞いても、全く耳に入らなかつたであります。王安石殿も覚えておりますまい。お父上には誰もが到底及びませぬ。いま宰相であるのはお父上でなければなりません。従つて、私は宰相を辞めます。お父上のお言葉を聞かせていただいて、その気持ちは揺るがぬものとなりました」。

父から私に戻つて無言でうなづく。

——それでいいのだろう。

夫は官員になる前から国政の改革を志し、すでに数十年になる。いまかつてな

い規模で改革が始まろうとしているまさにそのときに、改革の担い手になれないでいることに夫は苦悩している。

朝廷の重鎮は王安石の新法に真つ先に反対して皇帝の信頼を失った。新法論争が激化する流れの中で、夫と近い関係にある中堅官僚も続々と新法を批判する側に回った。皇帝は、王安石が新たに推薦した人物を改革の実働部隊として朝廷の要所に配置した。改革派と批判派は、主張も異なれば行動様式も異なり、水と油のように混じり合うのが不可能な関係になりつつある。宰相である夫には朝廷を一つにまとめ上げる責務がある。批判派は、夫がともに新法に反対して皇帝を思い止まらせることを期待している。改革派と夫は肌合いが全く合わない。しかし、改革が必要であることは誰よりも夫が強く認識しているのである。

夫はほっとしたように笑みを浮かべ、

「あなたと話して、心がいささか軽くなりました」。

「それはよろしゅうございました」。

病んだ夫にはこれでよい。しかし、私の心の片隅に、夫には朝廷に残ってもらいたいとの気持ちがあるのは否めない。

驚くことに、

「これで私はすんでも、改革はどうなるのかと、あなたはきつといま思っておられましょう。それとも、もっと手厳しく、改革から逃げるのかと問い糺したいのではありませんか」。

「とんでもありません。そのような大それたことは、私は決して」。

「わかっております。あなたの日常を拝見していれば、あなたが天下の民に寄り添おうとしているのがよくわかります。我が師は言いました。『士は天下の憂いに

先んじて憂い、天下の楽しみに後おくれて楽しむ』師はつとに改革を訴えておられました。天下の憂いに遙かに先んじて憂いておられたのです。天下の楽しみは来ていません。それなのに、私は宰相を退き、我が身一つの楽しみを、これからの退隠生活に見出そうとしています。かつて、龐ほうとくこう徳公のように身を山中に隠すこともあろうとあなたに申しました。そのときの私はまだ官員になったばかりで、いまとは立場がまるで違います。最も責任ある地位にありながら、退いてしまうのは師の教えに完全に反します。王安石殿が主張されている通りなら、新法は必ず民のためになりましょう。しかし、そうでないと言う人がたくさんいます。王安石殿は立派な人です。しかし、王安石殿が用いる人達はそうではありません。私が信頼する人々のほとんどが新法に反対しています。どちらが正しいのか、正直に言って、私には判断が付きません。この老いた頭では、多岐にわたる新法の細々

とした規定を逐一理解するのが難しいのです。お上には、慎重な御判断をされるよう、天を畏れるようにと繰り返し申し上げて来ました。先ごろ天に現れたある異変をもつて、新法が天の意に反している証だと主張する者がいます。本当にそうであるのか、私には判断できません。王安石殿は、人間界のことは人間が責任を持たねばならない、天は畏れるに足らずとお上に申し上げたと聞きます。人間界をよりよくするのは人間の責務です。その点は王安石殿の言われる通りです。しかし、皇帝はこの天下で最も尊く、皇帝に上にあるのは天だけです。天をも恐れぬ皇帝であつてはならないのです」。

夫は息を継いで、語気を和らげ、

「ああ、私は何をしているのでしょうか。あなたに向かつて言い分けをしているのです。この前、はんじゅんじん 范純仁君に手紙をいただきました。純仁君はお父上である我が師

にそっくりです。宰相に対して何の遠慮もせず、厳しく私を批判します。天下のためになるよう衆論をまとめ、お上をお支えするのが宰相の努め、それを全く果たしていないと純仁君は言います。全くその通りです。私は宰相でいてはならないのです。このような巡り合わせとなったのは、あるいは天の定めるところであったのでしうか」。

夫は深く嘆息し、

「かつて師とともに改革に取り組み、成果を挙げぬうちに頓挫しました。真先に反対したのは、改革で失うものがある人達でした。口では朋党批判を言いつつも、実際には損をしたくなかっただけなのです。今回の新法批判にそれと似たようなところがあるのか、私は判断しかねています。民のためになるかどうかではなくて、自分が損しないようにとものを言っているのか、私にはわからないのです。

まこと愚かになったものです。愚かな私は身を引いて、改革が民ののためになるのを祈るしかないのです」。

夫は寂しげに笑って立ち上がり、

「では、そろそろ登城いたします。お上の御前に出るのもこれが最後となりましょう」。

一人では歩くのが難しい夫の腕を支えつつ、私は小さくつぶやく。

「あなたさまはやはり天下第一のお婿様でありました」。

それが聞こえたかどうか、夫は無言で歩む。

第七の注の続きの続き。

新法による改革がいよいよ実行に移されようとしていたところに、一日の閑を得

た王安石は晏殊あんしゅの詞を読んだ。晏殊は同郷の先輩であり、王安石は近く晏殊と同じく宰相になることが見込まれていた。

王安石は読み終えた詞を弟に示し、「宰相たる者がこのような手すさびをして」と小さく嗤った。王安石は詩を得意とするが、主として男女間の情愛を歌う詞には価値を認めていなかった。「自分の楽しみとして、情の趣くままにお作りになっておられたのでしょうか。それはそれで心が豊かであったと言えるのではないのでしょうか」と弟は言った。そこにもう一人呂惠卿りょけいけいが同席していた。呂惠卿は王安石が大抜擢して改革の実働部隊の中心に据えた切れ者だ。呂惠卿は「政まつりごとをするに当たってはまず鄭声ていせいを放てと申します。それなのに鄭声を自分から歌ってしまいませんか」と、晏殊を嘲笑するように言った。「鄭声を放つ」とは『論語』にある言葉で、鄭国の音楽は淫らなものとされ、君子たるべき者はそのようなものを

聞いてはならないと孔子は弟子を戒めたのだった。呂惠卿は晏殊の詞を鄭声と同視した。王安石の弟は呂惠卿を睨み、「確か『論語』にはその後がありましたな。『佞人を遠ざけよ』と。佞人は鄭声より遙かに性質が悪いからでありますな」。王安石の弟は、兄が登用した人達が必ずしも兄のためにならないのではないかと危惧していた。

富弼が宰相を辞めたいと申し出ると、皇帝は慰留せず、次の宰相には誰がよいかと尋ねた。富弼は文彦博ぶんげんはくを薦めた。皇帝は不満顔で、「王安石はどうか」と尋ねた。富弼はそれには明確な答えをせずに退席した。富弼は亳州ほくに転出した。

王安石は次の宰相にはならずちんしょうしに陳升之を推薦した。陳升之が宰相になってしばらくしてから、皇帝はその評判を司馬光に尋ねた。司馬光は「閩人は狡険きょうけん」と答えた。陳升之は南方の閩の出身者で、悪知恵が働くと言ったのだった。司馬光は

洛陽出身の典型的な北人で、南人への偏見もかなりの程度あったのだが、その評は当たっている面もあった。改革派は王安石自身も含めほとんどが南人で、呂恵卿も南人だった。呂恵卿について司馬光は「儉巧」と評し、王安石の評価を落とす者がいるとしたら呂恵卿であろうとも言った。儉巧も狡険も似たような意味だ。新法は狭い地域に限定してまず実施され、その効果を見てから全土に広げられた。実に合理的な進め方であったが、批判の声は止むどころかますます大きくなるばかりだった。官吏が新法に不慣れであることから運用上の不手際が多発し、それが批判派を勢い付けた。皇帝と王安石は改革を前進させるために一切耳を貸さず、批判派に圧力をかけた。批判派は地方に出るか、官職を離れるかした。晏殊の「能く物に容るは、物また容らるる」からは遠ざかるばかりだった。

熙寧三（一〇七〇）年十二月、王安石が宰相になり、宋朝は改革に邁進した。

弟に呼ばれる。

熙寧四（一〇七二）年四月の黄昏時。

孔六こうがそつとやって来て驚くべきことを耳に囁いた。幾道と街で会い、連れて来た。私に告げたいことがあるという。

「裏の木戸にいらしています」。

漉いていた紙を途中で放り出し、手を拭う間も惜しんで、まだ薄明かりが残る庭を裏木戸へと急ぐ。

似たようなことが随分と前にもあった。あのときは義母ははの目を気にした。今回は家の者の全ての目を忍ばなければならない。夫に知られるのは極めてよろしくないだろう。

夫が幾道のような人間を最も嫌うと、改めて思い知らされたことが二年前にあった。夫は宰相に復帰する前の一時期に汝州に赴任したのだが、そのときこうていけん黄庭堅も同時に汝州に来て夫の下で働くことになっていた。黄庭堅は何かの事情で期日に遅れて汝州に着いた。夫は一切の弁明を許さず、官員としての資格を一定期間停止して吏人に落すという厳しい処分を言い渡した。科挙に合格して官員になった者が吏人に落されるといふのはまことに不名誉なことだった。もしも黄庭堅でなければ、夫はこれほど厳しくはしなかったであろう。

詩文にいま最も優れるのは蘇軾そしやくであるとされる。蘇軾は幼いころに『慶曆聖徳詩』けいれきせいとくを聞いて范仲淹や夫に強い憧れを抱き、官員になってからも尊敬の眼差しを夫に向けている。ところが夫は蘇軾に対して極めて素っ気ない。詩文の才はあっても人物として軽いのを嫌うのだ。その蘇軾が絶賛する後輩が黄庭堅で、黄庭堅

はさらに軽いと夫は見ている。

夫の目からすれば幾道などは論外も論外だ。賢夫人であるのなら会わずに帰すというのが最もよい選択ではあるのだろう。そのようなことがどうしてできようか。「絶縁」を言い渡され、もう会えないかと思っていたところに自ら現れたのだ。

心ははやるが、それでも周囲に気を配り、孔六もさりげなく注意を払ってくれる。

「あちらでござります」。

「木戸の外ではないのですか」。

「人目に付いてもいけませんので」。

孔六は裏木戸の脇の小暗い樹叢の内へと導く。その先に、ほのかに人の影がある。

——あれが幾道。

胸が高鳴る。

——どうして来たのか。

それはどうでもいい。幾道に会えるのならそれだけでいい。

孔六は立ち止まり、

「あつしはここにおりましょう。ここには誰も来ないように見ております」。

左右を見て、あたりに人気がないのをもう一度確かめて進む。

幾道は扉にもたれ、体をくの字に折ってうなだれている。その姿がいかに幾道らしい。歩み寄っても、もの思いにふけているのか、幾道は動かない。

繁みの中の暗さに目が馴れ、幾道の様子がよく見えるようになって、私は息を呑む。輝くばかりであった昔とはまるで違う。衣はよれよれで、いかにも世間の

冷たさにやつれたといった風情だ。

幾道はゆつくりと頭を上げ、

「ああ、姉さん」。

これまで聞いたことのない低い声を出す。

——これが幾道なのか。

「どうなさったのですか。まさかここにあなたが」。

幾道はほのかに笑い、

「姉さんにどうしてもお会いしたかったのです」。

その言葉と、以前よりも随分と痩せた顔に、何やらぞつとさせるものを感じる。

——まさにこれは幾道だ。

絶縁を言い渡されたあの瞬間に戻って、今度は自分から抱き寄せたくなるのを

いらえて、

「私もずっとずっとお会いしたかったのです」。

幾道は扉から身を離し、

「姉さんにお知らせしておきたいことがあるのです」。

不可解な寂しさに襲われる。

——そうなの、だから来たの。

幾道は目を動かさず、しばらく物を言わない。

幾道は乱れた襟をゆっくりと直し、思いもよらぬ問いを発する。

「新法について、姉さんはどのようにお考えでしょうか」。

およそ幾道に全く似つかわしくなく、こと言う。

——まさかこれを言いに来たの。

とまどいつつも、幾道に絶縁を言い渡される前に、世の中をよくすることを話していたのを思い起こし、それとつながっているのだろうかと一応のところは考え、

「大事なことであろうと思っております」。

いかにも気持ちの入っていない声と感じたのだろう、幾道は額に手をやり、

「御免なさい。お知らせしたいことがあつて来ました。それは新法に関わります。

だけど、本当を言えば、そんなのは単なる口実です。違うのです。だって、僕は、ずっとずっと気にしていたのです。あれで喧嘩別れのようになってしまうて、いつか必ず謝らなければと思っていたのです、それで」。

幾道は言葉を詰まらせ、私は身の震えを覚える。

——ああ、やはりこの子だ。

「いいえ、謝るだなんて。私がいけなかったのです」。

「姉さんの心を知らずにいた僕の身勝手です。姉さんこそ苦しんでいたのです。この通りです」。

幾道は地に膝をついて頭を下げる。

私は幾道の肩に触れ、

「あなたのことをわかっていなかった私がいけないのです」。

幾道は首を振り、

「僕はあれからずっと姉さんのことを思っていました。いろいろと経験するたびに、姉さんの苦しみがだんだんとわかって来ました」。

「苦しみなんで私には何もありません。いまでもこうして不自由なく暮らしていますから」。

幾道は立ち、

「いえ、姉さんは」。

その眼差しに吸い込まれるような気がし、敢えて心を鎮めようと、半歩下がって幾道を見る。

「あなたのそのお姿、この歳月に、さぞかし苦しみがあったのでしよう」。

「このなりはひどいものです。でも、これは苦しみを表わしているわけではありません。いつのことだったかはつきりと覚えてない以前に、ある女に詞を書いてやったら、気前よくくれたのがこの衣です。夏も冬もこればかりを着ているので、何時の間にかこのようになっただけのことです。言うも愚か、ただただ遊んでばかりの日々ですから、どうしたってこうなるのです」。

「うちにあるもので、あなたに合いそうなものを」。

「今日は無心に来たものではありません。着物がぼろぼろになればそれだけ詞も上達するような気がして、僕はこれに気が入っています」。

「あなたの詞の評判はいつも気にして、あの孔六に集めさせています」。

「有難いことに、世間の人は僕の詞を口から口へと広めてくれています。まだまだろくな詞は作れていません。それでも街の女たちが口ずさんでくれているということは、真の詞に近付きつつあるのかも知れないと思ったりもしています。ひどい自惚れですけど」。

「どうしてそこまで詞に打ち込めるのでしょうか。本当に感心します」。

「僕にはそれしかありません。父の子として生まれ、大きな屋敷で皆に可愛がられて育った僕が真の詞に至るには、まだまだこうしたことを続けて行かなければなりません。きちんと生きることを放棄したのですから、あくまでもその逆でな

「ければならないのです」。

「同じ父上の子であっても、私にはできないことです」。

「姉さんは女性でありながら女性であることに納得できておらず、そして、僕はたぶんその逆です。僕は科挙を受けずにこのようになりました。姉さんは科挙を受けられもしなかったのですから、僕のようになることはできなかったのです」。

その言葉に私の胸は塞がれる。

——もしも女でなかったならば何をしたかったのだろうか。

それは考えても仕方がないことだ。

「どうして私のことをそのように」。

「姉さんは特別です」。

「あなたこそ特別です」。

「不肖の息子とはまさに僕です。姉さんは父上の名をより高め、僕はただ泥を塗っているだけです」。

「そのようなことは決してありません」。

「どうして姉さんは僕のことを。ああ、だから、あのとき僕は姉さんの前から姿を消さなければならなかったのです」。

「それは、どういうこと」。

訊いてすぐに後悔する。

——互いにわかっている。訊いてはいけないのだ。

幾道は後ろ手に扉を軽く叩き、

「いけない、姉さんにお知らせしなければいけないことがあるのです。だからここに来たのです。それで、新法についてどのようにお考えかと訊いたのです」。

幾道は、一つの心遣いで話を戻したのだろう。わかっけていて少々味気なく感じ
る。

「私は女ですから、特にこれといった考えはありません」。

「僕にはわかっていきます。姉さんは新法についてよくよく考えを巡らせているに
違いありません。姉さんはそういうお方です」。

「改革が民のためになるのを願っています」。

「姉さんは僕に言いました。悲しい境遇にある女たちを救うように努めなさいと。
僕にはできません。詞を作るのさえまだまだです。僕は旅をしながら、改革の実
際を見て来ました。新法によって救われる人が間違いないたくさんいます。新法
が十分に浸透すればこの国はきつとよくなります。悲しい境遇に陥る女たちも減
ることでしょう。僕は改革に寄与するようなことは一つもしていませんし、これ

からもしないでしよう。僕は詞を作るだけです。それが檻樓をまとう僕の自負です。世の中には、新法の意味もわからず、民衆の苦しみをわかつともしないで、単に時流に便乗しようとする輩がいます。新法に反対する人達が大勢朝廷を去りました。それによって空いた席に座ろうと、その一心だけで改革に加わろうとする薄汚い連中が、蛆虫のようにわんさと湧いて来ることでしよう」。

「そのような小人はいつの世にもたくさんいるのでしよう」。

「ある小人がお義兄様を狙っています。お義兄様はいま新法に背を向けていらつしゃいます。そこに小人が付け込もうとしているのです」。

「あの人は新法に背を向けているわけではありません。改革が必要なことは、王安石様よりもずっとずっと前からあの人が言っていたのです」。

「お義兄様のようなお方がもしも新法に熱心に取り組まれたなら改革は大きく前

進するでしょう。つまらぬ小人どもが朝廷に入り込むのも防げるでしょう。ですから、姉さんからお義兄様におっしゃっていただけないでしょうか、ここ亳州でも新法をきちんと履行するようにと」。

私は苦いものを嚙みしめる。

民のためを思えば幾道の言うことは理に適っている。しかし、夫をこれ以上苦しめることはできない。まして私から仕向けるなど。天下のことはもう言わぬと決めたのだ。

「内を治めるのが女の役目です」。

抑揚なしに言う。幾道は小さくうめき、

「御免なさい、僕はいけないこと言ってしまった。だけど、お義兄様をお救いしたいのです。お義兄様のようなお方が小人に足を掬われるなどあってはなら

ないのです」。

腹の底が焼けるばかりに熱くなる。

「もしも女子状元の私なら、王安石様とともに、そして、できればもつともつと大きな改革を思い描くことでしょう。しかし、それは遙か昔に消えた夢なのです」。

「姉さんの思いはよくわかります。言うべきことは言い終わりました。ここに来てよかったです。姉さんは思っていた通りの人でした。この世に姉さんがいると思えば、どのようなことも辛いと感ぜずにすむように思えます」。

幾道はすつと私の手を取る。それを握り返し、

「あなたはこれから詞を作り続けるのですか」。

「だって僕にはそれしかありませんから」。

——それなら私は。

それを幾道に尋ねたいと思い、しかし、言葉を吞む。

「常にあなたのことを思っています」。

幾道は手を放し、

「ではお達者で」。

木立の下をすばやく歩んで、孔六が細く開けた潜り戸からさっと抜け出る。

私は追い、孔六が閉ざしたばかりの潜り戸に手をかける。

——私も走ったらどうなるのか。

幾道の足音が遠ざかる。

潜り戸から手を放し、

「あれに何か着る物でも渡してやればよかった」。

「御用意してございます」。

孔六は包みを見せる。

「そう。行ってくれますか」。

孔六が潜り戸から出て行く。

——もう会えないのか。

頬を涙が伝う。

第七の注の続きの続きの続き。

宰相を辞してはく亭州に退いてからの富弼は世間との関わりを薄くし官署に行くのも稀であった。長年の付き合いとなった足疾に対し、吐納とのうちようせい養生の法を用いてみると効果があると感じられた。若い時分に道観に寄宿して勉強していたころに道士から教わった養生の法の一つだ。

熙寧四（二〇七二）年四月、富弼は職務放棄の罪で告発された。地方官としては新法を正しく運用しなければならぬのに、官署にも行かず怠慢を決め込んでいると指弾された。告発は事実に基づくと富弼は大筋で認めた。「老いて新しい法に習熟する力がもはやありません」。富弼は病を理由に政界からの完全な引退を願った。皇帝はそれを許し、それ以上に咎められることはなかった。

富弼を告発したのは、富弼の門下生の息子の趙濟ちやうせいだった。理想とする士大夫像から現実はずれ離れて行くのだった。

孔六に呼ばれる。

熙寧四（二〇七二）年の晩夏、頭上より蝉の声が降り注ぐ。

「いいではいかがでございませうか」。

孔六が手招きするところへと上る。坂道というほどのものではないが、小高いその場所に通じる小道を、草を払って孔六があらかじめ作っておいてくれた。

上に立ってぐるりを見回す。木々の間に周囲の景色が見え隠れする。ほんのりにじみ出た汗に風が心地よい。

「ああ、まことに、ここはよさそうに思います」。

「でございますよう。奥様よりお話を伺いまして、すぐにここだと思ひましてでございます」。

孔六は胸を張る。

「奥にこのようなところがあるとは知りませんでした」。

「こちらにお越しになってまだ日が浅うございますからな。ここは敷地の北のはずれでございます。ここから裏手の方は木が密に繁っておりますので見えません

けれど、しばらく先の方に川が流れております」。

夫がかねてから洛陽に用意していたこの土地に来て間がない私に向かって、孔六はあたりの地理を説明してくれる。

夫は政界からの引退を決めると、すぐに孔六を洛陽に行かせた。土地は以前に手に入れていたけれど、建物は先の住人の古びた物が残っているだけだった。急場しのぎで、若干の修繕を施して当面の仮住まいとし、順次新たに建て替えることになった。

私は木の枝をくぐり、

「臥雲堂を築くとか申ししていたのは、あちらのあのあたりでしょうか」。

低い草むらを隔てた向こうにこんもりとした高まりがある。

「その通りでございます。この近辺ではたぶんあそこが最も高い場所ということ

になりましょう。旦那様がいたくお気に召されまして、すぐに臥雲堂と名を定められたのです」。

「あそこに高殿を築けば結構な眺望が得られましょう。ということは、あちらからここがよく見えてしまうということになりましょうか」。

「その点に付きましてはもう考えてございます。このあたりにちよつとした倉のようなものを設け、その周りに木を増やせば十分に目隠しになりましょう。念誦堂を覗かれる心配はまずございませぬまい」。

「それなら結構です」。

「臥雲堂の左右には高山を模した築山を配することになっておりまして、そこに高い木を何本か植えるつもりです。そうしておきますと、臥雲堂に立ちましたときに、正面の南側だけでもつぱら視界が開けることになって、わざわざこちらを

見るような人はおりますまい。臥雲堂の真下には形よく池を穿ち、向かいの岸辺に瀟洒な建物を置きます。その名も決まっております、四景堂と申します。四景堂と臥雲堂とは南北一對、あるいは上下一對となつて美しさを競うよう意匠を凝らす考えです。四景堂から池の中央へと橋を渡します。臥雲堂から見ますと、眼下の景色が面白いばかりでなく、目を上げれば、四景堂の尖った屋根のせり上がりが遠くの間々と張り合うかのようで、それもまた大層面白く感じられることでありましょう」。

「遠くの山も庭の景色の一部のようにして取り込んでしまおうということですか」。

「そうです。あちらの西園でそのようにするのを教わってまいりましたので、是非どこでも同じようにしてみたいと思っております」。

洛陽のこの土地はかなり広い。夫には庭園を築くような趣味はなかったのだが、同じことなら義父の西園に習おうということになって、三男が孔六とともに洛陽の職人を連れて西園を訪れた。経済的に苦しくなって来ている晏の家のために、三男には様々の品を持たせた。

孔六が都から洛陽に帰るのに合わせて私達もここに来た。夫は孔六とともに屋敷と庭園を造る計画を練り始め、その中に、ごく小さいもので構わないから私の住いとして念誦堂を加えてもらえないかと夫に頼んだ。好きにしてよいと言ってくれたので、孔六に場所選びをしてもらい、今日ここに案内された。

眼前の荒蕪地に西園のかつての風光を重ねる。

「西園はかなり変わっていましたでしょう」。

「奥様より昔の御様子を詳しく伺っておりましたので、もともとはこうであった

のかと推し量ることができました。一緒に行つた職人に説明してやりますと、できることなら普通の姿に戻してみたいと、そんなことを言っていました」。

「そういうことができたらいいのでしょうか、あそこはいずれは人手に渡つてしまうことでしょう。都にあれだけの屋敷を構えているのは弟達にとって大層な負担となっているようですから」。

いまはまだかろうじて西園は保たれてはいる。しかし、単に二代目であるという理由で俸禄を得ている者が立派な庭園を所有していられるようでは民のためにならない。改革が晏の家に打撃を与えるのは仕方のないことだ。

「お気の毒にございます」。

「せめて西園の真髓をここでの庭造りに活かしてくれたらと思います」。

夫に庭園造りは似合わぬことのように初めは思えた。范仲淹の「士は天下の憂

いに先んじて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ」に反して、「天下の楽しみに先んじて楽しむ」ということになってしまいかねないような気もした。夫も退隱後の役回りについてかなり悩み、洛陽特有の文化風土を継承発展させて行くことに新たな使命を見出そうとしているようだ。夫は七歳のときに呂蒙正りょうもうせいに認められて以来、洛陽の様々な人の援助を受けて勉学を続け、ついには制科に合格するに至った。その恩を洛陽に返したいということであるのだろう。洛陽には名園と讃えられるところが数多くあり、そこに新しいものを一つ足すのは元の宰相として大切な仕事であるということもできるのだろう。

「これまで長くお仕えして参りまして、あつしにとって今度のこれが最も大きな仕事、それも最後の仕事であろうと思っております。心血注いで取り組む決意でございます」。

「最後というわけではないでしょうけれど、せいぜい励んでおくれ」。

「御覧のように、あちらの高台とこことの間は草で一面覆われています。とくに夏の盛りのいまは丈高く草が伸びております。草の下はじめじめとした荒れた土地です。何の使いようもなく放置されていたので、これだけ広い場所をお屋敷の土地とすることができました。あそこを池にすれば、荒れた土地がみごとな景觀として生まれ変わります。お庭ができた暁には、洛陽の民が自由に歩ける機会を多く設けたいと旦那様はおっしゃっておられます。御立派なお考えだと思います。大勢の人にいい庭だと言ってもらえるよう、努力したいと思っています」。

「西園では頻繁にお客様をお招きしましたけれど、それは限られた方々でありましたから、たくさんの人に来ていただくというのはまことに結構なことだと思います」。

孔六は一歩進み出て、

「彼方の川から引いて来ております水は、いまはお屋敷の方でお使いになっていますが、水量が十分にございますので、その半分ばかりを回せば池を潤すことができますでしょう。工夫次第では、滝のようなものも作れると思っております。ただ問題が一つありまして、水はけの悪さです。周囲より低いあの場所に池を作るのはたやすくても、水が淀んでしまわないようにするには、上手に水を落とす工夫をしなければなりません。長い水路を穿ってかなり下流まで水を導かなければならなくなるかも知れません。そうなると存外大きな工事になりはせぬかと頭を悩ませております」。

「その水路は、作り方次第では、我が家だけではなく、この界隈の家の役に立つようなものになりはしませんか」。

「古くからこの土地の住む者に聞きますと、昔々はこのあたり一帯がよく水浸しになったそうです。一度水をかぶると水がなかなかはけなくて、湖のようになっていたこともあるといいます。宋の御代になって水が出るのが稀となり、いまは草地となっておりますが、万一また水が出ましたときに、いま申したような水路があればきつと役に立ちましょう」。

「この前こゝらで水が出たのはいつごろなのですか」。

「六十年ほど前だそうです。干支がひと巡りすることに水が出るという者もおります」。

「とすると、そろそろ次が来るかも知れぬということになりますか」。

「洛陽はじきに大洪水に襲われると不吉なことを言う者もございまして、旦那様は、あちらに築く臥雲堂を万一のときの備えとなるようにしたいとおっしゃって

います。ここらで一番高いあの場所に頑健な建物を造れば避難するのに大いに役立ちましょう」。

夫が「天を畏れよ」とお上に申し上げていたのを思い起こす。世の中がよく治まっているときは洪水はなく、その逆のときには洪水があるという。改革に反対する人達が天の災いをしきりに警告している。天の災いが起こったときに、反対派はそら見たことかと言うのかも知れないが、災難に遭遇する民こそ不幸だ。

「ついでに申せば、ここはあちらほどには高くはありませんが、これだけの高さがあれば水につかることはまずないとあつしは見込んでおります。そうでなければ、奥様にここをお勧めすることはございません」。

「いろいろと考えて下さっているのですね」。

「実を申しますと」。

孔六は急に声を低くし、

「ここだけの話で、どうか内緒にしてくださいなのですが、ここには旦那様の書院を建てる心積もりであつしはいたのです。このようにいい場所でございますから。ところが、奥様が念誦堂をお作りになりたいと伺いまして、それならここをと。」

「まあ、旦那様のための場所を横取りしてしまうのですか。」

「いえいえ、単にあつしの心積もりとしてそうであつたというだけでして。旦那様にはすでに別のところを御用意して、そこでいいとおっしゃっていただいております。横取りとか、そういうことではないのでございます。」

孔六は首を振り、にやりと笑う。

「それならば、まあよろしいでしょう。」

私も小さく笑う。

「では、ここで決まりということでもよろしいでしょうか。」

「ええ、そなたの心遣いに感謝します。後はすっかり任せます。」

「必ず気に入っていたただけるよう、力を尽くします。」

孔六は胸を叩く。

念誦堂が建つと決まった場所に立ち、これからの日々を想う。

念誦堂は、かつて西園の傍らにあった蓮妙先生の庵を範として建てる。先生と同じように一人で暮らすつもりだ。幾道と別れて以来、いつしか幾道の無事を祈って観音経を読むようになった。先生に似て義母にも似る。一心に観音経を読むのは、日常坐臥の一つ一つに心を籠めるのと変わらない。

夏空を見上げる。

——天はいかなる命運を人に与えているのか。

改革と天災。世はそのせめぎ合いのうちにあるのか。

かつて蓮妙先生に、新しい時代の新しい女の徳のあり方を示す使命を私は負っていると言われた。結局のところ、それを果たすことはできなかつた。いまの世に生きる女として最も恵まれた境遇にある私ではあるのだが。

幾道は本物の詞を求めて放浪を続けている。幾道の無事を祈るのは本物の詞が生まれ出るのを祈ることである。幾道は女性の真の思いを詠みたいと言っていた。ならば、幾道のために観音経を読むのは、世の女性のために観音経を読むということでもあるのだろうか。自分が何をして生きるのか、そこに答えを見出そうとするのは、どう考えても安易過ぎる。

第七の注の続きの続きの続きの続き。

富弼は六十八歳で政界から退き、長年の持病のため洛陽での暮らしは長くは続くまいと思っていたが、吐納長生とのうちようせいの法が効いたのか、洛陽の文化風土がよかったのか、八十歳という当時としては稀な長寿を全うした。

朝早くに起きるとまず吐納長生の法を用い、衣冠を正してから家廟に詣でた。子や孫が従った。子や孫は富弼の前に出るときには必ず冠帯した。日中は還政堂と名付けた書院に籠り、書物を友として過ごした。病気を理由に人とは会わず、宝月大師と邵雍しょうようだけを例外とした。

富公晏夫人は念誦堂に住まい、朝夕に還政堂に赴いた。夫婦は互いに賓客に対するかのように礼儀正しく挨拶を交わした。

洛陽での暮らしが十年を超えた元豊五げんぽう（一〇八二）年正月に、耆英会きえいかいなるものを

催した。七十歳以上であることを条件として洛陽の名士十三人が富弼の邸宅に集まった。最年長が七十九歳の富弼で、最年少がただ一人年齢制限の枠外で参加を許された六十四歳の司馬光しばこうだった。客は新法による改革を批判して政界を去った者ばかりだった。十三人の前に富公晏夫人が姿を見せると、真先に富弼が立っていつも通り挨拶をした。十二人の客はそれに習って晏殊の娘に礼を尽くした。耆英会はその後も回を重ねた。

このころ西辺では夏国か相手の厳しい戦いが続いていた。二十年戦争を言わぬようにと富弼は皇帝に願ったのだが、皇帝は即位から数年で夏国に対して攻勢に出るよう命じ、その結果、自らが苦しむことになってしまった。

王安石は、最初の耆英会が開かれたときには都を離れて金陵郊外きんりょうに隠棲する身となっていた。飼い犬に手を噛まれるようにして宰相から降ろされたのだった。

その最初のきっかけとなったのが、耆英会よりも八年前の熙寧七（一〇七四）年春の旱魃に始まった一連の動きだった。

新法に反対する人々は、旱魃は天の戒めであると言った。改革による混乱は実際に生じていた。ここを乗り越えれば改革は必ず実を結ぶと、王安石は皇帝を強く励ました。しかし、夏になっても雨が降らず、都より東北の地は広く飢饉の様相を呈し、多数の飢民が食を求めて都に向かって流れ出した。都の安上門を守る鄭俠は、日に日に増える流民の悲惨なありさまに心を痛め、この実態をありのままに皇帝に知らせようと、絵に描いて上呈した。

鄭俠はもともと王安石を尊敬し、王安石もその気持ちを知っていたので、鄭俠が地方での勤めを終えて上京した際に呼んで地方の状況を尋ねた。鄭俠は新法の弊害と思えるところを率直に述べ、改革を修正する仕事を希望した。王安石は取

りあえず鄭俠に都の門を守る役目を与えた。

皇帝は鄭俠が差し出した絵に強い衝撃を受けた。悩んだ末に、新法を一時的に停止することを大臣達に諮った。その日、にわか天より雨が降った。まさにこれぞ天の意志であると、初めから改革に反対であった皇帝の身内の者が皇帝に向かって新法批判を口にした。

皇帝の心は大きく揺れ、そこに、司馬光が「儉巧」と評した呂惠卿りょけいけいが付け入った。王安石を宰相から降ろすことで天の咎めと人々の批判をかわし、改革は修正しつつ続行することを提案した。改革は続けたいものの、王安石に引きまわされているとの感覚があった皇帝はそれに乗った。

王安石は宰相を辞め、呂惠卿が執政になった。呂惠卿は王安石に抜擢されたにもかかわらず、かねてから王安石の追い落としを狙っていた。そのよい機会を与

えてくれた鄭俠をよい地位に就けてやろうとした。鄭俠は、呂惠卿のやり方は醜悪だと批判し、呂惠卿を辞めさせて代わりに馮京を執政に用いるべきだと主張した。呂惠卿は怒り、言いがかりの罪状を作つて鄭俠を獄に繋いだ。熙寧八（一〇七五）年一月のことだ。

馮京は富弼の娘婿で、皇帝の信頼が厚く、改革に批判的ながらも朝廷の要職にあつた。呂惠卿の仲間は、鄭俠と馮京が裏で結託しているということにして、そこに多数の者を連座させて、自分達にとって都合な連中を一掃してしまおうと目論んだ。皇帝は馮京を呼び、鄭俠との関係を問い糺した。馮京は鄭俠とは一面識もないと証言した。

呂惠卿の意を受けた捜査陣は鄭俠の家を徹底的に調べ、そこに晏幾道の手紙や詞を発見した。鄭俠は放浪の旅を続ける幾道の支援者の一人だった。捜査陣は色

めき立った。幾道は富弼の妻の弟、馮京とは姻戚関係がある。身持ちの悪い幾道のこと、叩けばいくらでも埃が出るだろう。幾道を捕えよとの指令が全土に発せられた。

その通達が洛陽にも届き、富弼の屋敷に知らされた。富公晏夫人は、弟が馮京や場合によつては夫にも迷惑をかける恐れがあることを謝った。富弼は、自分も馮京も困るようなことは何もないと一笑に付した。

幾道は南の地で捕まり獄に繋がれた。

夢から起こされる。

熙寧八（一〇七五）年春の明け方。

「奥様、奥様、お目覚め下さい」。

孔六の声だ。それを奇異に感じる。

——どうしてここに孔六が。

身を動かさそうとする。金縛りに遭ったかのように手足が硬直している。

——孔六がここにいるはずがない。だって、ここは獄の中。

体がびくんと震え、夢だったと知る。

孔六が外で叫ぶ。

「大変なことになってございます。早く、早く、早くお出になって下さい」。

ようやく手足が動き出し、我が身を夢から引き離す。

「はい。いま参ります」。

小さく答える。

——大変なこと。

夢の内こそが大変だった。

獄で幾道と会っていた。手も足も顔も傷だらけ。血を流しながら、細い声で救いを求めている。

ぞっと身が竦む。

牀よりすべり降りる。はっとする寒さに上掛けをひっかける。

——まさかいまのこの御代に残虐な拷問などは。

夢に見たものを払い捨てようとする。

孔六がさらに声を張り上げ、

「川が破れたようです。もしものことがありますては」。

念誦堂の戸を開ける。闇の中に松明が燃える。

「川が破れたとは。だって雨はとつくに止んだではありませんか」。

炎の上を見れば星が輝いている。

去年の春の旱魃とはまるで違い、今年になってからは雨ばかり。ここ十日ほどはとくにひどい降りで、長くこの土地に住む人もこれほどの雨は経験がないと言っていた。異様なこの雨は天が新法を喜ばないからだと言われ、洛陽の人々は囁き合っている。念誦堂も雨の激しさに雨漏りが生じた。幸いにも、夕べのうちに雨は上がり、久し振りに雨音のない夜となった。その静けさがあるいは妙な夢を誘ったのか。

——まさかあれは正夢。

「聞こえませんか。普段にはない水の音がしております」。

耳を澄ますと、何やら音がするようでもあるが、微かな耳鳴りのようでもある。むしろ、耳の底には幾道の声が残っている。

——何を訴えているのか。

ぞつとする寒さに、努めて現実に戻ろうと、

「あれは水なのですか」。

「時折、遠くで叫ぶ声も聞こえます。若い者に様子を見に行かせましたが、恐らく水が出たのだと思います」。

「この闇夜に行かせて、危なくありませんか」。

「よくよく注意するよう申し付けてございます」。

「他の者はどうしました。あいにくと旦那様がお留守のときに、間違いがあつてはいけません」。

夫は長雨を憂い、三日前から息子達を連れて道観に籠って天に祈りを捧げている。宰相まで務めた者として、天下の民のために身を役立てたいとの思いからだ。政界を退いた夫には祈るしかできない。その祈りがあるいは天に届いて雨が止ん

だのか。

「かねてからの心積もりの通りに、臥雲堂に避難するよう皆に申しましてごめい
ます」。

「そちらにもう向かっているですか」。

「そのはずです。ここには、あつしの考えでは水は来ないとは思っているのです
が、念のため、奥様もあちらにお移りになった方がより安心かと思ひまして」。

「そうですか。わかりました。そのようにいたしますよう」。

夢の名残になお怯える心でここにいるよりは、大勢がいる臥雲堂に行った方が
よいであろう。

松明の後ろに付いて、物置小屋の脇へと回る。きちんとした道はないが、斜面
を下れば真直ぐ臥雲堂に行ける。

闇の向こうに小さな火の列がある。家の者が池のあたりを巡っているのだろう。「本当に水は出ているのですか。ここ数十年、洛陽は洪水に襲われたことはない」と聞いていましたのに。

先ほどよりも音がはつきりして来たような気がする。心を落ち着けたくて、音は風とか何か他のものではないかと疑い、そもそも洛陽に洪水はないはずだと思おうとする。

——幾道もきつと何でもない。ただの夢なのだから。

「昨日までの雨は、人が申すようにやはり尋常ではなかったのでございましょう。遠くの山に降り注いだ雨が、いまになって押し出て来たのではないかと思えます」。

孔六の声がひどく冷淡に聞こえる。

夢の恐ろしさが甦り、

——あれは尋常ではない。幾道のあの様子は。

上掛けを左右から引き寄せて胸の前で合わせる。

不意に地面がぶるつと揺れる。

「あつ」。

孔六が小さく叫ぶ。

「いまのは、何ですか」。

「これはいけません」。

異様な音がする。絹を裂くような、つむじ風が抜けるような、それとも獣が叫ぶような、これまでに聞いたことのない音だ。

——あれは幾道なのか。

明らかに人の叫び声がし、

——違う。あの子ではない。

強く否定する。

闇の中の彼方の火の動きがにわかにあわただしくなる。

「奥様もあちらにと思ったのですが、これはどうやらもう間に合わないようです」。

「皆は大丈夫なのですか」。

「あちらではあのように急いでいます。臥雲堂まであと一歩でしょう。それよりもここです。この高さには水が達しないと願うよりありません」。

また地面が揺れ、地鳴りのようなものが人を駆り立てるように迫って来る。

——あの子を助けなければ。

「ああ、もういけません」。

孔六が叫ぶ。

冷たい風が衣を吹き上げ、ばりばりと雷のような音。獄中の幾道の姿が闇に鮮明に浮かぶ。

目を閉ざしてしゃがむ。

「来てしまいました」。

孔六は声を落とす。

見えていなくても、木々を押し倒しつつ奔流が庭園に流れ込んで来たのがわかる。

——これで終わりか。

強い痛みを胸に感じる。

——あのときに追って行けばよかった。

飛び跳ねるようにして立ち上がる。

孔六は松明を天にかざして洪水の様子を探っている。

「こうなりましては、もはや運を天に任せるしかございません」。

——あの子は救えないのか。

異様な生臭さが鼻を衝く。

——これは死者のものか。

「何もかも押し流されて行きます。いえ、ここはきつと大丈夫でございます」。

孔六は力を籠める。

——でも、私だけが助かっても。

孔六が左右に揺らす松明の光に、真黒い濁流が見えるような気がする。

「とにかく少しでも高いところに移りましょう」。

孔六に促されても足が思うように動かない。私はどうかなってしまったようだ。

我が身を地面の上に置いてある気がしない。

もがくようにして数歩ばかり進んだだけで息が切れる。

ふつとあたりが明るくなる。

「ああ、月が出たようでごさいます」。

「このようなときにどうして月が」。

そう言つて、妙に可笑しくなる。

空は晴れているのだから、地上でいくら水が逆巻こうが、その時刻が来れば月は上る。

見返ると東の山の端に三日月がある。そこからの光の及ぶところに、白く揺れる長い帯のようなものがそこかしこに幾筋もある。波頭、それとも荒れ狂う竜。

いずれあれに全て呑み込まれてしまうのか。

——あの子が死ぬのなら、私も。

いつもの観音経を唱えかけ、何かに突き動かされて叫ぶ。

「そうだ。風呂桶」。

「何とおっしゃいました」。

「こうしてはいられません」。

足に力を入れ、物置小屋へと戻る。

「どうなさいました」。

孔六が追って来る。

「風呂桶があります。風呂桶なら水に浮かびましょう」。

——あの子を助けなければ。

「風呂桶って。あのようなものが何の役に立ちますか」。

「早く出すのです」。

体ごと物置小屋の扉にぶつける。

「お待ち下さい。あつしが開けます」。

「早く」。

孔六の手から松明を取る。

孔六が扉を開け、松明を中に向け、

「あれです。あれを出すのです」。

孔六は古い大きな風呂桶をずると引きずり出す。

「よもやこれを舟の代わりに」。

「いえ、これなら」。

風呂桶の縁を叩き、

——あの子を救う。

松明を投げ捨て、風呂桶を押す。

月が明るさを増し、滔々と流れる濁流が眼前にはつきり浮かび出る。

——でも、どうやって。

風呂桶で幾道を救うというあまりにも愚かな考えを自分で笑う。

「一体どうなさったのでしょうか」。

「孔六が怯えたように言う」。

——だけど、何としてでも救わなくては。

「これで向こうに渡ります」。

奔流の音に負けない声で言う。

「それは無茶です」。

「水に降ろすのです。これに乗るのです」。

——ああ、あのときに。裏木戸から出て追って行けば。

幾本かの松明の燃える臥雲堂が渦巻く流れの向こうにある。

——あそこに行く。あの子のところへ。

突如として私は知る。

——救うのはあの子ではない。この私だ。獄にいたのはあの子ではない。この私。

「姉さん、お困りですか」。

幾道の声がある。

——じい。

幾道は臥雲堂の屋根の上に立って笑っている。

「どうして笑うのですか」。

「さつさと乗ったらいいのに。何をぐずぐずしているのですか」。

「乗っていいのですか」。

「いいも悪いも、ほら、だってもう溺れているではありませんか」。

幾道は腕を伸ばして波間を指差す。そこに浮き沈みするのは女子状元の私。

「ああ、救わなくては。異なる道を求めに」。

風呂桶を流れに突き落とす、そこに向かってひらりと飛び出す。私は獄を出る。

それは女という獄。

最後の注。

富弼が屋敷に戻ったのは、水があらかた引いた後だった。建物の一部が流され、池が泥で埋まりはしたものの、妻も含めて家の者は全員無事だった。富公晏夫人

がどうして風呂桶に乗ったのか、渦巻く流れに動転したからであろうと孔六は富弼に説明した。

それから八年後の元豊六（一〇八三）年閏六月に富弼は死んだ。還政堂には、邪佞を退け忠直の臣を用いて天下を治めるようにと記した皇帝宛ての書簡が遺されていた。長男の紹庭が上京してそれを皇帝に差し出した。

四年後に富公晏夫人は死んだ。息子達は、元の宰相にふさわしい立派な夫婦の墓を作り、父母亡き後も生前の習慣を長く守り続けた。

晏幾道は獄から解放された。政治向きなことでは疑うべきようなことは何もなかった。その後も、友人や女達に助けられながら、都と地方の間を行き来しつつ詞を作り続けた。

世の中は大きく揺れ動いた。王安石は呂惠卿りよけいけいのために宰相職を追われた後にも

復活を遂げたりはしたものの、最後は退隱を余儀なくされた。元豊八（一〇八五年）三月、神宗皇帝が死に、息子の哲宗（趙煦）が皇帝になった。哲宗はこのときわずかに十歳で、祖母に当たる高皇太后が政治をみた。高皇太后は新法に初めから反対で、洛陽から司馬光しばこうを呼び寄せて宰相に据えると、一切の新法を停止して改革をそっくり元に戻した。八年後に高皇太后が死ぬと、哲宗は亡き父の遺志を継いで新法を復活させた。そして哲宗が二十四歳で死ぬと新法はまた停止となった。新法党と旧法党が交互に政權を握るということが繰り返され、そのたびに両派の抗争は激しさを増した。

富公晏夫人が死んだのは高皇太后の治政下で、そのころ、幾道は五十歳で、次のような詞を作った。

東野亡来無麗句

一人の友が死んでからはよい句はもう生まれず

于君去後少交親

一人の友が去ってからは親しく交わる者はいない。

追思往事好沾巾

かつてを追思すると手巾が濡れる。

白頭王建在

頭の白くなった私がここにいて

猶見詠詩人

なおも詩を詠んでいる。

学道深山空自老

深山に道を学んで空しく老いることも

留名千載不干身

歴史に名を留めることも私には関わりがない。

酒筵歌席莫辞頻

酒の宴、歌の席なら遠慮はしない。

争如南陌上

町の南の道へといそいそと出かけ

占取一年春

今年の春を独り占めしてやろう。

この詞には幾道自身の手による句は一つもない。先人の詩や詞から言葉を取って並べたいわば切り張りの詞だ。「酒筵歌席莫辞頻」は父晏殊の詞からそのまま。己を理解してくれる人が消えた喪失感を、父をも含む先人が築いて来た伝統の中に身を置くことで、和らげようとしたのだろうか。

幾道は、大観四（二二〇）年に七十歳で死んだ。

それから七年後、宋国は、北方に新たに勃興して来た金国きんに対して、遼国を挟み撃ちにしようではないかと持ちかけた。富弼が命を懸けて守った宋遼間の友好関係は崩壊し、遼国は金国によって滅ぼされた。新興金国の勢いはそれで留まらず、宋は国都開封かいほうも古都洛陽も含めた国土の北半分を奪い取られた。それ以降の宋を南宋といい、南宋は後にモンゴルに滅ぼされ、モンゴルが建てた元王朝げんは明王みん

朝に倒され、そして明は清しんに取って代わられた。そうした王朝の興亡の間にも、

はんちゆうえん

范仲淹はんちゆうえんが創始した范氏義荘は共同体としての生命力を保ち続けた。

范仲淹や富弼を代表とする宋代士大夫を生み出した科挙は清朝に至ってもほぼ同様に続けられ、科挙はいずれは学校制度によって替わられるべきだとの王安石の構想は、西洋の学校制度が導入される清末まで顧みられることはなかった。最後の科挙は一九〇四年に行われ、女子状元はついに現れなかった。